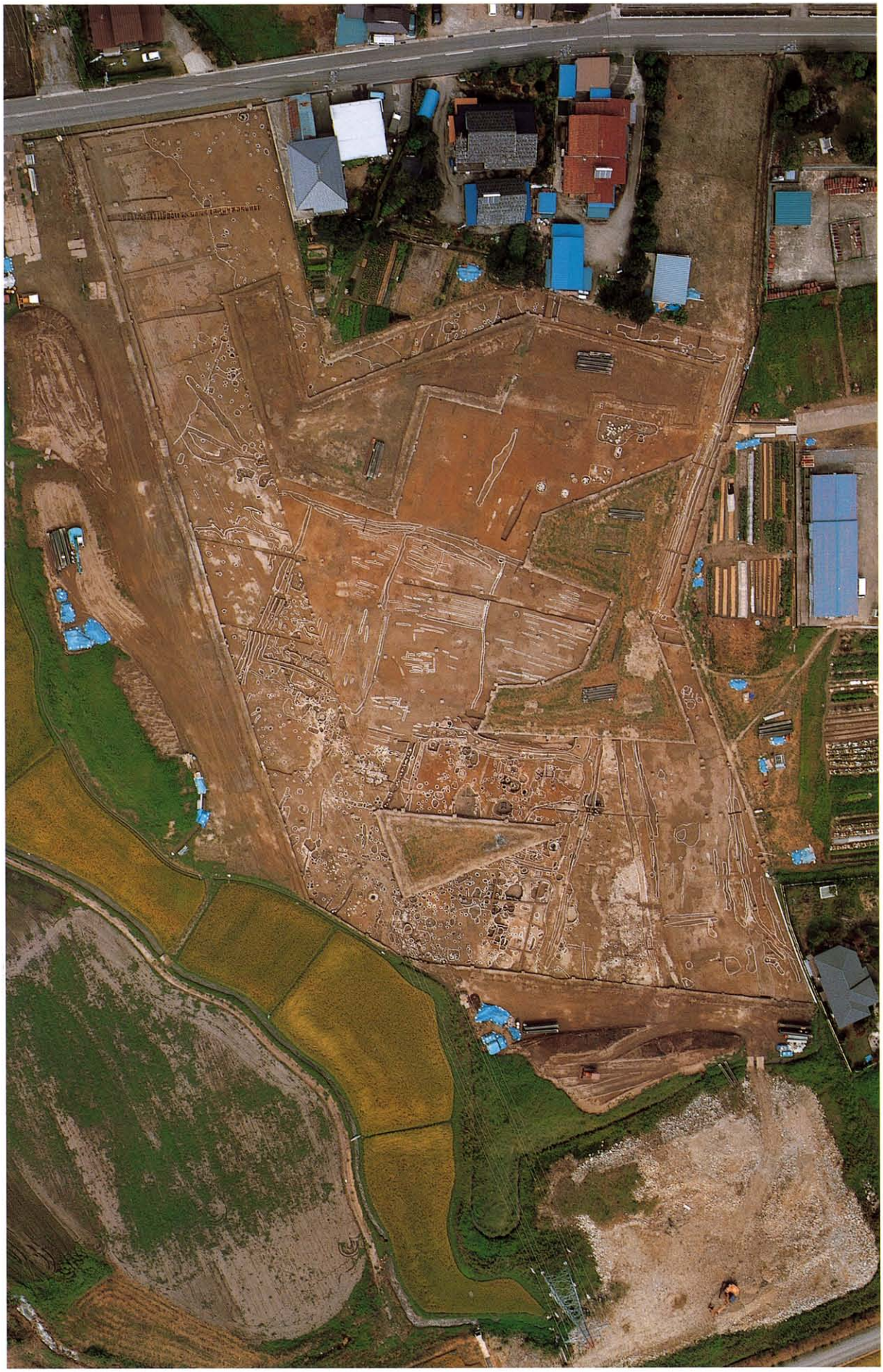
富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第18集

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告

── 公害防除特別土地改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ ──

2003年

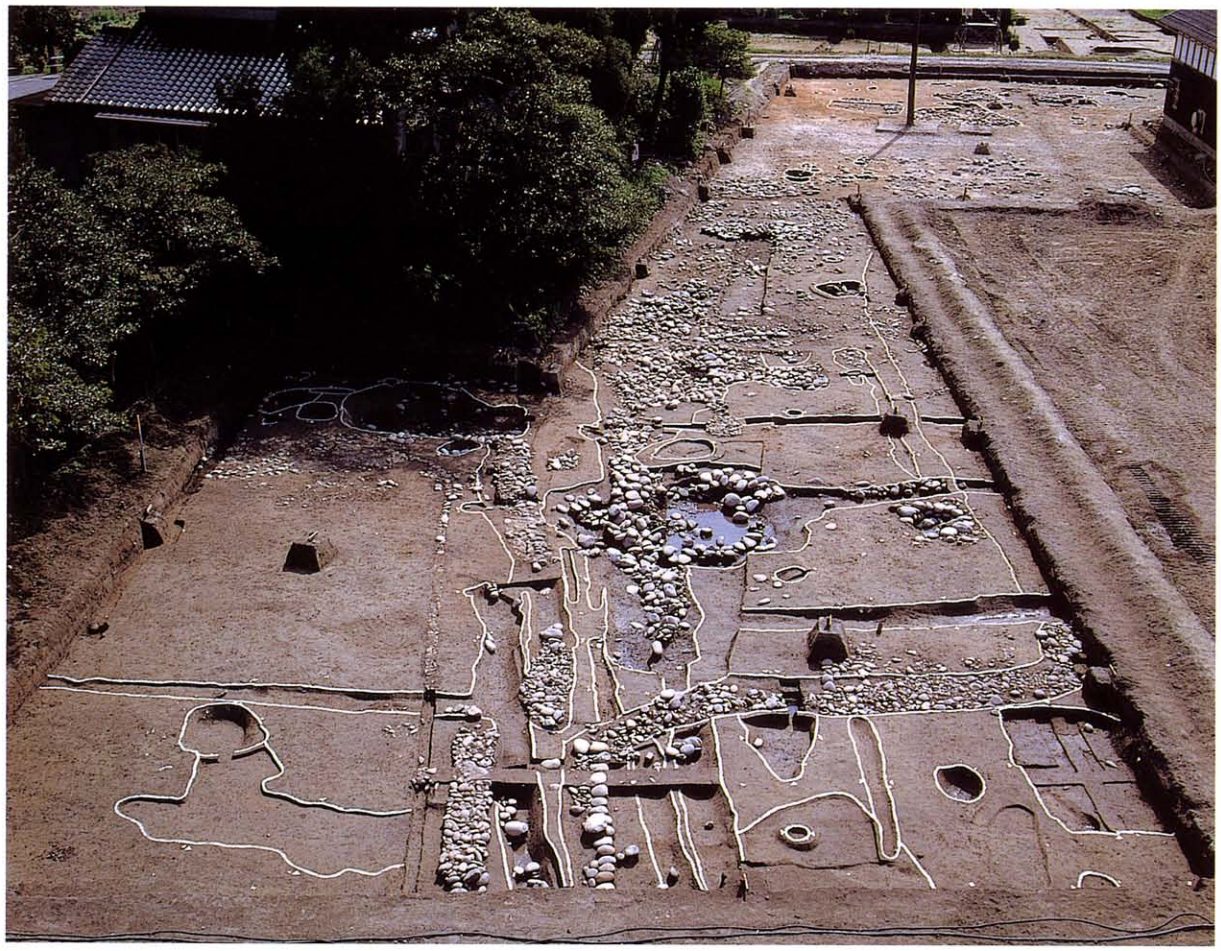
財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

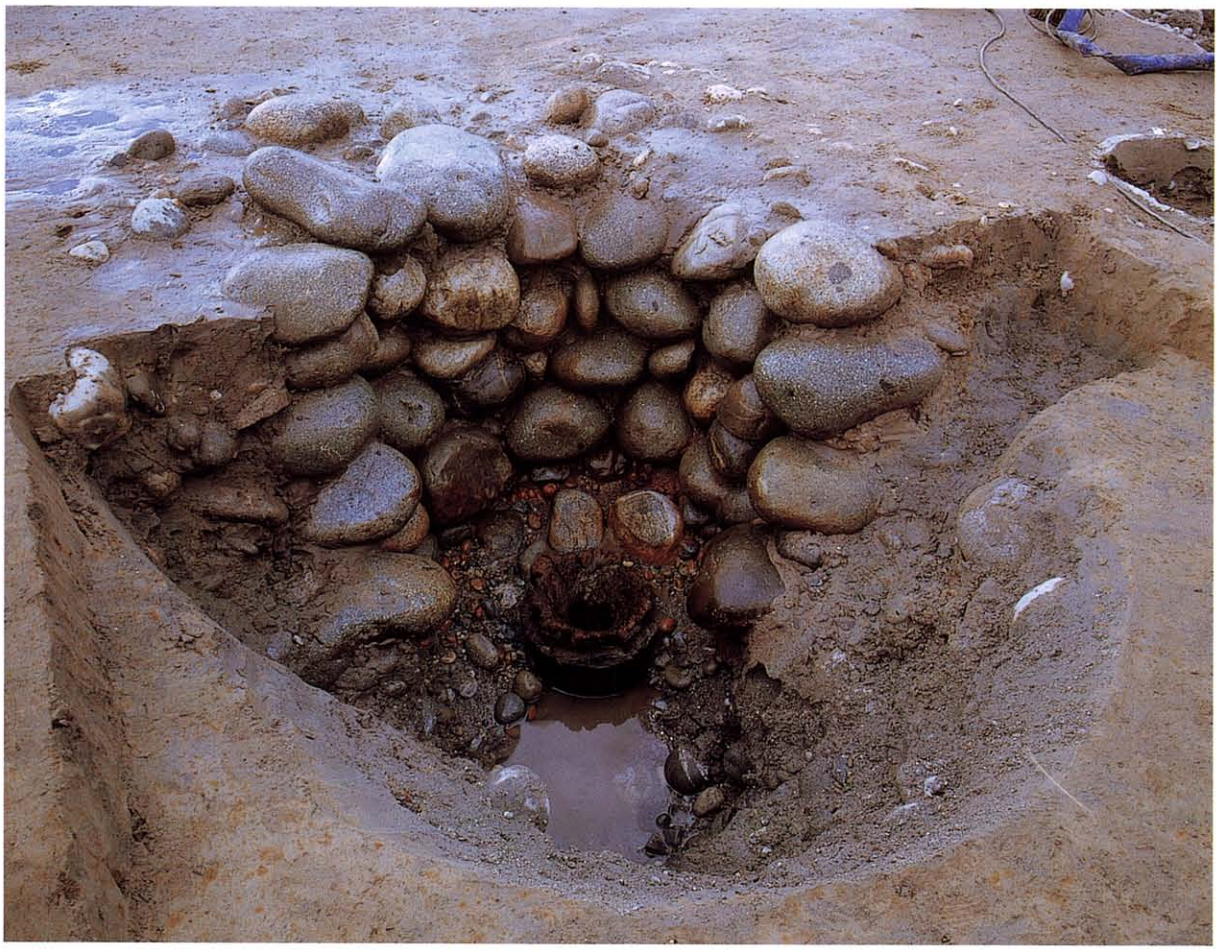


中名Ⅰ・Ⅴ遺跡B1・2・3・4地区全景

上　B4地区　SI05（南から）　下　B3地区　SB10（北から）

上　B4地区　SB22（南西から）　下　B3地区　SE1269（南から）





上　C2地区全景（西から）　下　C2地区　SE5101（東から）

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告

── 公害防除特別土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ ──

2003年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

当事務所では、平成７年度から公害防除関連特別土地改良事業に伴う遺跡の発掘調査を行ってきました。

本書は平成８年度から10年度にかけての三カ年に渡って調査を実施した婦負郡婦中町中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の発掘調査報告書です。

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡からは古代・中世～近世の集落が見つかりました。古代では竪穴建物・掘立柱建物が見つかり、墨書土器を含めた多くの遺物が出土しています。中世では県内でも最古級の礎石建物をはじめとして、掘立柱建物や井戸も多数確認されています。また、廃棄や祭祀が行われた大型の土坑や、方形区画の内側に建てられた仏堂と思われる施設なども見つかっています。さらに、中世末～近世にかけての集落とともに畠も広範囲に見つかりました。

この様に、古代や中近世の人々が暮らしていた当時の様子を垣間見ることができました。こうして得られた発掘調査の成果が、今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめるにあたり、関係機関や団体、また諸氏のご指導をいただき厚く感謝いたします。

平成15年３月

富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　桃野　真晃

例　　言

1　本書は富山県婦負郡婦中町阿弥大地地内、蔵屋敷地内に所在する中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は富山農地林務事務所からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団が行った。
3　本調査の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記の通りである。
　　調査期間　　平成８（1996）年11月11日～12月17日
　　平成９（1997）年５月16日～12月12日
　　平成10（1998）年５月10日～10月16日
　　整理期間　　平成11（1999）年４月１日～平成15（2003）年３月31日
4　本書の編集・執筆は、酒井重洋、森　隆、武田健次郎、青山　晃、青山裕子、内田亜紀子、野口雅美が担当し、執筆分担は文末に記した。
5　遺物の写真撮影は、いろは写房（稲野彰子）、写房　楠華堂（代表　内田真紀子）に委託した。
6　発掘調査中、木組井戸１基の取り上げを㈱近畿ウレタン工事に委託した。
7　自然科学的な分析は、以下の諸機関に委託し、その成果について報文を得た。
　　金属製品等分析　　川鉄テクノリサーチ
　　漆塗膜分析　　漆器文化財科学研究所　（代表　四柳嘉章）
　　自然科学分析　　（株）パリノ・サーヴェイ
　　樹種同定　　（財）元興寺文化財研究所
8　発掘調査中から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略・五十音順）
　　宇野隆夫、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、婦中町教育委員会

凡　　例

1　本書には本文、表及び挿図、自然科学的分析、写真図版を掲載する。
2　時期別に検出した主な遺構・出土遺物の内容については、章末に一覧を掲載している。
3　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の時代区分は古代・中世・中世末～近世と分けた。但し、調査地区によって遺構確認面が分けられる場合があるため、中世下層・中世上層として提示している地区もある。
4　本書で示す方位は全て真北である。
5　挿図の縮尺は次の率を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。なお、遺物の写真図版の縮尺は統一していない。
　　遺構　建物：1/60・1/80・1/100　溝：1/40・1/200　井戸：1/40　土坑：1/40
　　遺物　土器・陶磁器：1/4　木製品：1/4～1/12　石製品：1/3～1/8　金属製品：1/1～1/3
6　遺構の略号は以下の通りである。
　　ＳＡ：柵　ＳＢ：建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＩ：竪穴建物　ＳＫ：土坑　ＳＰ：柱穴　ＳＺ：土壙墓
　　ＳＸ：その他
7　遺構番号は、調査時に地区毎に付した番号にある一定の数を加えて遺構番号とした。番号は遺構の種類にかかわらず連番号とするが、竪穴建物・建物・柵には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は以下の通りである。
　　Ｂ１地区：加算せず　Ｂ２地区：＋500　Ｂ３地区：＋1000　Ｂ４地区：＋2000　Ｂ４Ｓ地区：＋3500
　　Ｂ６地区：＋4000　　Ａ２地区：＋4500　Ｃ地区：＋5000
8　遺物は種類毎に連番を付すが、それぞれ開始番号を以下のように設定した。遺物番号は遺物観察表及び写真図版中の遺物番号と一致する。
　　土器・陶磁器：１～　　金属製品：2001～　　木製品：3001～　　石製品：4001～
9　施釉陶器などの釉が掛かる範囲は一点破線で示した。二種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。
10　遺構図中の地山及び炭化物層、石製品の煤付着範囲などはスクリーントーンで示す。土器・陶磁器類の赤彩、黒色、煤等については、文・遺物一覧を参照されたい。

11　遺構の略号は、中名Ⅰ遺跡が「19ＮＭ１」、中名Ⅴ遺跡が「19ＮＭ５」となる。調査・遺物注記の際には、「19ＮＭ５－地区名」を統一の略号として用いた。

12　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語・数値等は以下の通りとする。

掘立柱建物：用語は「平城京発掘調査報告Ⅶ」を参考とし、以下のように定義づける。

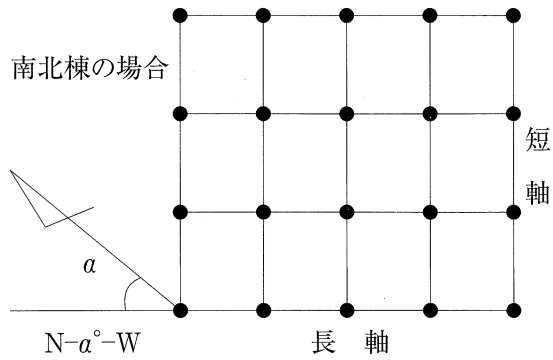
①柱間や棟方向に関わらず建物の平面図の長軸を「桁行」、短軸を「梁行」とし、桁行（間）×「梁行」（間）の順に表記する。

②建物の棟方位は、真北から長軸の方位を測る。

③建物面積は長軸に短軸をかけたものである。

④「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称とする。

⑤「柱堀方」とは、掘立柱を据え付けるための穴のことで、「堀方埋土」とは柱を固定するために柱堀方にいれた土のことである。



⑥「柱根」とは、遺存している柱自体のことであり、「柱痕跡」とは柱堀方の中の柱が立ったまま腐り消えて、そこに土が流れ込んだもので、ここでは柱根が抜き取られたものも含む。

⑦柱穴の規模は遺構検出面から測った数値である。

井戸：井戸の部分名称及び型式分類については、宇野隆夫氏の「井戸の分類」[注1]を採用している。

①各部の名称は、地上の施設を「井桁」、地下壁面の施設を「井戸側」、底の施設を「水溜め」とする。

②型式分類は井戸側の部位の構造で分類する。

③井戸の断ち割り図において、地山の変化がわかるものは、スクリーントーンで示した。

遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下の通りである。

①遺構一覧には検出された遺構の内、文章に記載した遺構や遺物の提示があった遺構を掲載している。遺物一覧には、文章中に記載のある遺物を掲載している。

②遺構の覆土に切り合い関係がある場合は、備考欄に「新＞古」のように記号で示す。

③遺構法量はｍ単位、遺物法量は㎝単位で示す。

④重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

⑤胎土・色調・釉調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帳」を使用した。

⑥特記事項：陶磁器については窯名・窯詰め技術・墨書・ヘラ記号等を、珠洲・瓦器・中世土師器は胎土中の含有物を示す。木製品のうち漆器は漆の色を示すが、記載がない場合は黒色漆であることを示す。

注１　宇野隆夫　1982　「井戸考」　『史林第65巻第５号』

目　　次

第Ⅰ章　調査経緯 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

A　調査の契機 …… 1　　B　分布調査 …… 1

C　試掘調査 …… 2　　D　本調査 …… 2

2　調査経過 …… 2

A　調査方法 …… 2　　B　調査経過 …… 3

C　調査体制 …… 3　　D　現地説明会 …… 4

E　整理の経過 …… 4　　F　整理体制 …… 5

第Ⅱ章　立地と歴史的環境 …… 6

1　立地 …… 6

2　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　遺構・遺物 …… 10

1　遺跡の概要 …… 10

A　概要 …… 10

B　基本層序 …… 10

2　遺構 …… 13

A　古代 …… 13

B　中世 …… 43

C　中世末～近世 …… 169

3　遺物 …… 234

A　土器・陶磁器 …… 234

B　金属製品 …… 257

C　木製品 …… 260

D　石製品 …… 265

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 344

1　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡出土鉄滓等の分析・調査 …… 345

川鉄テクノリサーチ株式会社

2　富山県中名Ⅰ・Ⅴ遺跡出土漆器の科学分析 …… 385

四柳　嘉章　（漆器文化財科学研究所）

3　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡出土遺物同定業務報告 …… 403

パリノ・サーヴェイ株式会社

4　樹種鑑定報告書 …… 431

財団法人　元興寺文化財研究所

第Ⅴ章　結語 …… 455

巻首図版目次

巻首図版一　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡B1・2・3・4地区全景　中世
巻首図版二　B4地区ＳＩ05　古代　B3地区ＳＢ10　中世
巻首図版三　B4地区ＳＢ22　中世　B3地区ＳＥ1269　中世
巻首図版四　C2地区全景　C2地区ＳＥ5101　中世末～近世

挿図目次

第１図　周辺遺跡位置図
第２図　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡基本層序模式図
第３図　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡調査区区割図及び基本層序柱状図
第４図　遺構実測図　ＳＩ01・ＳＩ02・ＳＩ03・ＳＩ04・ＳＫ3201・ＳＫ3202・ＳＰ3357
第５図　遺構実測図　ＳＩ05・ＳＩ06・ＳＩ07・ＳＩ08・ＳＩ09・ＳＩ10
第６図　遺構実測図　ＳＢ01・ＳＢ02
第７図　遺構実測図　ＳＢ03
第８図　遺構実測図　ＳＢ04・ＳＡ04
第９図　遺構実測図　ＳＢ05・ＳＢ06
第10図　遺構実測図　ＳＡ01・ＳＡ02・ＳＡ03・ＳＡ05
第11図　遺構実測図　ＳＫ221・ＳＫ225・ＳＫ232・ＳＫ234・ＳＫ235・ＳＫ256・ＳＫ261・ＳＫ272・ＳＫ800・ＳＫ810・ＳＫ815・ＳＫ828・ＳＫ2056・ＳＫ2070
第12図　遺構実測図　ＳＫ2076・ＳＫ2591・ＳＫ3053・ＳＫ3055・ＳＫ3072・ＳＫ3075・ＳＫ3080・ＳＫ3109・ＳＫ3110・ＳＫ3117
第13図　遺構実測図　ＳＫ3140・ＳＫ3145・ＳＫ3163・ＳＫ3166・ＳＫ3169・ＳＫ3187・ＳＫ3261・ＳＫ3283・ＳＫ3253・ＳＫ3285・ＳＫ3326・ＳＫ3346
第14図　遺構実測図　ＳＤ230・ＳＤ240・ＳＤ243・ＳＤ263・ＳＤ284・ＳＤ2960・ＳＤ3195・ＳＤ3196・ＳＤ3200・ＳＤ3206・ＳＤ3209・ＳＤ3347
第15図　遺構実測図　ＳＤ801・ＳＤ802・ＳＤ803・ＳＤ304・ＳＤ4412・ＳＤ4414・ＳＤ4418・ＳＤ4421・ＳＤ4422・ＳＤ4433・ＳＤ4435・ＳＤ4435a・ＳＤ4440
第16図　遺構実測図　ＳＸ3348・ＳＸ3349・ＳＸ3353
第17図　遺構実測図　ＳＸ3348・ＳＸ3349
第18図　古代遺構全体図割付図
第19図　古代遺構全体図（１）
第20図　古代遺構全体図（２）
第21図　古代遺構全体図（３）
第22図　古代遺構全体図（４）
第23図　古代遺構全体図（５）
第24図　遺構実測図　ＳＢ07・ＳＢ08
第25図　遺構実測図　ＳＢ09・ＳＡ06・ＳＥ115・ＳＫ59
第26図　遺構実測図　ＳＤ81・ＳＤ112・ＳＤ113・ＳＤ119
第27図　遺構実測図　ＳＥ731・ＳＥ734・ＳＥ738・ＳＥ740
第28図　遺構実測図　ＳＫ707・ＳＫ728
第29図　遺構実測図　ＳＤ675・ＳＤ701・ＳＤ703・ＳＤ727・ＳＫ751
第30図　遺構実測図　ＳＢ10・ＳＡ07
第31図　遺構実測図　ＳＢ11
第32図　遺構実測図　ＳＫ1915・ＳＫ1918
第33図　遺構実測図　ＳＫ1924・ＳＫ1931・ＳＫ1935・ＳＫ1936
第34図　遺構実測図　ＳＤ1900・ＳＤ1901・ＳＤ1902・ＳＤ1903・ＳＤ1912・ＳＤ1921・ＳＤ1922
第35図　遺構実測図　ＳＢ12・ＳＢ13
第36図　遺構実測図　ＳＢ14・ＳＡ08
第37図　遺構実測図　ＳＢ15
第38図　遺構実測図　ＳＢ16・ＳＡ09
第39図　遺構実測図　ＳＢ17・ＳＢ18
第40図　遺構実測図　ＳＢ19・ＳＢ20
第41図　遺構実測図　ＳＡ10・ＳＡ11・ＳＡ12・ＳＡ13
第42図　遺構実測図　ＳＥ1208・ＳＥ1256・ＳＥ1686・ＳＫ1729
第43図　遺構実測図　ＳＥ1269・ＳＫ1101・ＳＫ1270
第44図　遺構実測図　ＳＥ1304・ＳＥ1305・ＳＥ1308・ＳＫ1168・ＳＫ1171
第45図　遺構実測図　ＳＫ1104・ＳＤ1709・ＳＤ1710
第46図　遺構実測図　ＳＫ1116・ＳＫ1168・ＳＫ1171・ＳＫ1180・ＳＫ1186・ＳＫ1197・ＳＫ1210・ＳＫ1215・ＳＫ1216・ＳＫ1217
第47図　遺構実測図　ＳＫ1211・ＳＫ1220・ＳＫ1221・ＳＫ1222・ＳＫ1223・ＳＫ1233・ＳＫ1337・ＳＫ1813・ＳＤ1809
第48図　遺構実測図　ＳＫ1164・ＳＫ1241・ＳＫ1244・ＳＫ1253・ＳＫ1254・ＳＫ1255・ＳＫ1271・ＳＫ1276・ＳＫ1277・ＳＫ1330
第49図　遺構実測図　ＳＫ1281・ＳＫ1282・ＳＫ1295・ＳＫ1296・ＳＫ1322
第50図　遺構実測図　ＳＫ1323・ＳＫ1350・ＳＫ1355・ＳＤ1102・ＳＤ1824
第51図　遺構実測図　ＳＫ1411・ＳＫ1418・ＳＫ1419・ＳＫ1438・ＳＫ1446
第52図　遺構実測図　ＳＫ1443・ＳＫ1448・ＳＫ1449
第53図　遺構実測図　ＳＫ1490・ＳＫ1491・ＳＫ1492・ＳＫ1495・ＳＫ1496・ＳＫ1500・ＳＫ1502・ＳＫ

1508・ＳＫ1509
第54図　遺構実測図　ＳＫ1460・ＳＫ1517・ＳＫ1538・ＳＫ1539
第55図　遺構実測図　ＳＫ1520・ＳＫ1522・ＳＫ1523・ＳＫ1545・ＳＫ1546・ＳＫ1547・ＳＫ1559・ＳＫ1561・ＳＫ1562・ＳＫ1563・ＳＫ1564
第56図　遺構実測図　ＳＫ1580・ＳＫ1585・ＳＫ1588・ＳＤ1589・ＳＫ1590・ＳＫ1593・ＳＫ1625・ＳＫ1629・ＳＫ1636
第57図　遺構実測図　ＳＫ1572・ＳＫ1573・ＳＫ1598・ＳＫ1613・ＳＫ1616・ＳＫ1791
第58図　遺構実測図　ＳＫ1631・ＳＫ1685・ＳＫ1689・ＳＫ1694・ＳＫ1695・ＳＫ1698・ＳＤ1696
第59図　遺構実測図　ＳＫ1635・ＳＫ1829
第60図　遺構実測図　ＳＫ1700・ＳＫ1708・ＳＫ1722・ＳＫ1743
第61図　遺構実測図　ＳＤ1102・ＳＤ1199・ＳＤ1219・ＳＤ1228・ＳＤ1229・ＳＤ1312・ＳＤ1401・ＳＤ1402・ＳＤ1403・ＳＤ1405・ＳＤ1420・ＳＤ1421・ＳＤ1422・ＳＤ1423・ＳＤ1709・ＳＤ1710・ＳＤ1712・ＳＤ1809
第62図　遺構実測図　ＳＤ1057・ＳＫ1058
第63図　遺構実測図　ＳＺ1683・ＳＺ1684
第64図　遺構実測図　ＳＢ21
第65図　遺構実測図　ＳＢ22
第66図　遺構実測図　ＳＢ22
第67図　遺構実測図　ＳＢ23
第68図　遺構実測図　ＳＢ24
第69図　遺構実測図　ＳＢ25
第70図　遺構実測図　ＳＢ26・ＳＢ27
第71図　遺構実測図　ＳＢ28
第72図　遺構実測図　ＳＢ28・ＳＢ29・ＳＢ30
第73図　遺構実測図　ＳＢ31
第74図　遺構実測図　ＳＢ32
第75図　遺構実測図　ＳＢ33
第76図　遺構実測図　ＳＢ34
第77図　遺構実測図　ＳＡ14・ＳＡ15
第78図　遺構実測図　ＳＡ16・ＳＡ17・ＳＡ18
第79図　遺構実測図　ＳＥ2090・ＳＫ2505・ＳＫ2922
第80図　遺構実測図　ＳＥ2348・ＳＫ2349
第81図　遺構実測図　Ｂ6地区中世下層遺構全体図
第82図　遺構実測図　Ｂ6地区中世上層遺構全体図
第83図　遺構実測図　ＳＢ35・ＳＢ36
第84図　遺構実測図　ＳＢ37・ＳＢ38・ＳＢ39
第85図　遺構実測図　ＳＢ40・ＳＢ41
第86図　遺構実測図　ＳＢ42・ＳＢ43
第87図　遺構実測図　ＳＥ4027・ＳＥ4097・ＳＥ4113・ＳＥ4120
第88図　遺構実測図　ＳＥ4132・ＳＥ4288・ＳＫ4108
第89図　遺構実測図　ＳＫ4149・ＳＫ4158・ＳＫ4262
第90図　遺構実測図　ＳＫ4333・ＳＫ4361
第91図　遺構実測図　ＳＫ4031・ＳＫ4091・ＳＫ4092・ＳＫ4280・ＳＫ4289・ＳＸ4059
第92図　遺構実測図　ＳＫ4048・ＳＫ4073・ＳＫ4095・ＳＫ4216・ＳＫ4138・ＳＫ4141・ＳＫ4264・ＳＫ4362・ＳＫ4452
第93図　遺構実測図　ＳＫ4014・ＳＫ4015・ＳＫ4016・ＳＫ4017・ＳＫ4019・ＳＫ4022・ＳＫ4023・ＳＫ4025・ＳＫ4028・ＳＫ4030・ＳＫ4031・ＳＫ4039・ＳＫ4040・ＳＫ4041・ＳＫ4049・ＳＰ4057・ＳＸ4058・ＳＰ4074・ＳＰ4081・ＳＫ4083・ＳＫ4084
第94図　遺構実測図　ＳＫ4085・ＳＫ4087・ＳＫ4088・ＳＫ4090・ＳＫ4091・ＳＫ4092・ＳＫ4094・ＳＫ4096・ＳＫ4098・ＳＫ4107・ＳＤ4106・ＳＤ4163・ＳＸ4117・ＳＰ4109・ＳＰ4110・ＳＰ4111・ＳＰ4112・ＳＥ4113・ＳＤ4103・ＳＫ4124・ＳＫ4130
第95図　遺構実測図　ＳＫ4134・ＳＫ4135・ＳＫ4137・ＳＫ4142・ＳＫ4143・ＳＫ4144・ＳＫ4156・ＳＫ4200・ＳＫ4211・ＳＰ4219・ＳＫ4226・ＳＫ4228・ＳＫ4233・ＳＫ4234・ＳＫ4235・ＳＫ4249・ＳＫ4254・ＳＫ4256・ＳＫ4261・ＳＫ4263・ＳＰ4265・ＳＫ4266・ＳＫ4269
第96図　遺構実測図　ＳＫ4270・ＳＫ4271・ＳＫ4272・ＳＫ4280・ＳＫ4281・ＳＫ4285・ＳＫ4286・ＳＫ4289・ＳＫ4301・ＳＫ4302・ＳＫ4303・ＳＫ4304・ＳＫ4340・ＳＫ4332・ＳＫ4339・ＳＫ4345・ＳＫ4452
第97図　遺構実測図　ＳＤ4012・ＳＤ4013・ＳＤ4020・ＳＤ4080・ＳＤ4038・ＳＰ4052・ＳＸ4058・ＳＸ4059・ＳＤ4066・ＳＤ4093・ＳＤ4080・ＳＤ4103・ＳＤ4106・ＳＰ4121・ＳＤ4116・ＳＤ4215・ＳＤ4217
第98図　遺構実測図　ＳＤ4501・ＳＤ4568・ＳＤ4601・ＳＤ4606・ＳＤ4607・ＳＤ4608・ＳＤ4609・ＳＸ4602・ＳＸ4615
第99図　遺構実測図　ＳＸ4615・ＳＸ4616・ＳＸ4617・ＳＤ4601
第100図　遺構実測図　ＳＸ5469
第101図　中世遺構全体図割付図
第102図　中世遺構全体図（1）
第103図　中世遺構全体図（2）
第104図　中世遺構全体図（3）
第105図　中世遺構全体図（4）
第106図　中世遺構全体図（5）
第107図　中世遺構全体図（6）
第108図　中世遺構全体図（7）
第109図　中世遺構全体図（8）

第110図　中世遺構全体図（９）
第111図　中世遺構全体図（10）
第112図　中世遺構全体図（11）
第113図　Ｂ２･3･4･4Ｓ･6地区中世末～近世遺構全体図
第114図　遺構実測図　ＳＢ44・ＳＫ667
第115図　遺構実測図　ＳＫ657・ＳＫ658・ＳＫ661
第116図　遺構実測図　ＳＤ2011・ＳＤ2012・ＳＤ2013・ＳＤ2014・ＳＤ2015・ＳＤ2016・ＳＤ2017・ＳＤ2018・ＳＤ2019・ＳＤ2020・ＳＤ2021・ＳＤ2022・ＳＤ2023・ＳＤ2029・ＳＤ2030・ＳＤ2171・ＳＫ2128
第117図　遺構実測図　ＳＤ637・ＳＤ638・ＳＤ649・ＳＤ651・ＳＤ652・ＳＤ653・ＳＤ654・ＳＤ725・ＳＤ726・ＳＤ727・ＳＤ728・ＳＤ731・ＳＤ732・ＳＤ733・ＳＤ734・ＳＤ737
第118図　遺構実測図　ＳＤ555・ＳＤ645・ＳＤ646・ＳＤ669・ＳＤ671・ＳＤ672・ＳＤ673・ＳＤ1028・ＳＤ1036・ＳＤ1040・ＳＤ1041・ＳＤ1042・ＳＤ1043・ＳＤ1050・ＳＤ1063・ＳＤ1703・ＳＤ1704・ＳＤ2001・ＳＤ2002・ＳＤ2003・ＳＤ2008・ＳＤ2032・ＳＤ2054・ＳＤ4099・ＳＤ4100
第119図　遺構実測図　ＳＸ4502・ＳＤ4568
第120図　遺構実測図　ＳＥ4503・ＳＥ4547・ＳＫ4504・ＳＫ4505・ＳＫ4518・ＳＫ4520・ＳＫ4525・ＳＫ4538
第121図　遺構実測図　ＳＫ4545・ＳＫ4546・ＳＫ4549・ＳＫ4555・ＳＤ4501・ＳＤ4573・ＳＤ4577・ＳＸ4562・ＳＸ4563
第122図　遺構実測図　ＳＸ4509
第123図　遺構実測図　ＳＢ45・ＳＡ19
第124図　遺構実測図　ＳＢ45・ＳＫ5104・ＳＫ5117・ＳＫ5120・ＳＫ5124・ＳＫ5251
第125図　遺構実測図　ＳＢ46・ＳＢ47
第126図　遺構実測図　ＳＢ48
第127図　遺構実測図　ＳＢ49・ＳＫ5134・ＳＫ5165・ＳＫ5166・ＳＫ5378
第128図　遺構実測図　ＳＢ50・ＳＢ51・ＳＡ20
第129図　遺構実測図　ＳＢ51・ＳＢ52・ＳＫ5026
第130図　遺構実測図　ＳＥ5101・ＳＥ5212・ＳＥ5213
第131図　遺構実測図　ＳＥ5217・ＳＥ5221・ＳＥ5222・ＳＥ5223・ＳＥ5470
第132図　遺構実測図　ＳＥ5244・ＳＥ5272・ＳＥ5301・ＳＰ5056
第133図　遺構実測図　ＳＥ5414・ＳＥ5423・ＳＥ5471・ＳＥ5472
第134図　遺構実測図　ＳＫ5041・ＳＫ5075・ＳＫ5092・ＳＫ5093
第135図　遺構実測図　ＳＫ5109・ＳＫ5148・ＳＫ5150・ＳＫ5151・ＳＫ5155
第136図　遺構実測図　ＳＫ5156・ＳＫ5157・ＳＫ5171・ＳＫ5174・ＳＫ5176・ＳＫ5247・ＳＫ5278・ＳＫ5311
第137図　遺構実測図　ＳＤ5205・ＳＫ5206・ＳＥ5223・ＳＫ5224・ＳＫ5467・ＳＫ5475
第138図　遺構実測図　ＳＫ5002・ＳＤ5003・ＳＤ5004・ＳＤ5005・ＳＤ5007・ＳＤ5013・ＳＤ5014・ＳＤ5015・ＳＤ5016・ＳＤ5017・ＳＤ5018・ＳＤ5019・ＳＤ5021・ＳＤ5028・ＳＤ5031・ＳＤ5035・ＳＤ5126・ＳＤ5302・ＳＤ5357・ＳＤ5358・ＳＤ5373
第139図　遺構実測図　ＳＤ5045・ＳＫ5048・ＳＤ5049・ＳＤ5050・ＳＤ5051・ＳＤ5052・ＳＤ5053・ＳＤ5054・ＳＤ5055・ＳＤ5060・ＳＤ5064・ＳＤ5065・ＳＤ5067・ＳＤ5205
第140図　遺構実測図　ＳＸ5252
第141図　中世末～近世遺構全体図割付図
第142図　中世末～近世遺構全体図（１）
第143図　中世末～近世遺構全体図（２）
第144図　中世末～近世遺構全体図（３）
第145図　遺物実測図
第146図　遺物実測図
第147図　遺物実測図
第148図　遺物実測図
第149図　遺物実測図
第150図　遺物実測図
第151図　遺物実測図
第152図　遺物実測図
第153図　遺物実測図
第154図　遺物実測図
第155図　遺物実測図
第156図　遺物実測図
第157図　遺物実測図
第158図　遺物実測図
第159図　遺物実測図
第160図　遺物実測図
第161図　遺物実測図
第162図　遺物実測図
第163図　遺物実測図
第164図　遺物実測図
第165図　遺物実測図
第166図　遺物実測図
第167図　遺物実測図
第168図　遺物実測図
第169図　遺物実測図
第170図　遺物実測図

第171図　遺物実測図
第172図　遺物実測図
第173図　遺物実測図
第174図　遺物実測図
第175図　遺物実測図
第176図　遺物実測図
第177図　遺物実測図
第178図　遺物実測図
第179図　遺物実測図
第180図　遺物実測図
第181図　遺物実測図
第182図　遺物実測図
第183図　遺物実測図
第184図　遺物実測図
第185図　遺物実測図
第186図　遺物実測図
第187図　遺物実測図
第188図　遺物実測図
第189図　遺物実測図
第190図　遺物実測図
第191図　遺物実測図
第192図　遺物実測図
第193図　遺物実測図
第194図　遺物実測図
第195図　遺物実測図
第196図　古代遺構変遷図
第197図　中世～近世遺構変遷図（１）
第198図　中世～近世遺構変遷図（２）

図版目次

図版１　航空写真
図版２　航空写真
図版３　全景（古代）
図版４　竪穴建物（古代）　ＳＩ01・ＳＩ02・ＳＩ03・ＳＩ04・ＳＩ05・ＳＩ06
図版５　竪穴建物・掘立柱建物（古代）　ＳＩ07・ＳＩ08・ＳＩ09・ＳＢ01・ＳＢ03・ＳＢ04
図版６　柱穴（古代）　ＳＰ3054・ＳＰ3276・ＳＰ3278・ＳＰ3280・ＳＰ3309・ＳＰ3313・ＳＰ3334・ＳＰ3345
図版７　柵列・土坑（古代）　ＳＰ3249・ＳＰ3259・ＳＰ3233・ＳＰ3258・ＳＫ3201・ＳＫ3202・ＳＫ3283・ＳＫ3346
図版８　溝（古代）　Ｂ１地区北側溝群・ＳＤ284・ＳＤ3347
図版９　畠・集石遺構（古代）　Ｂ６地区・ＳＸ3348・ＳＸ3349・ＳＸ3353
図版10　Ｂ１地区　全景（中世）
図版11　Ｂ１地区　掘立柱建物・土坑・井戸（中世）　ＳＢ07・ＳＢ08・ＳＢ09・ＳＫ59・ＳＥ115
図版12　Ｂ２地区　全景（中世）
図版13　Ｂ２地区　全景（中世）
図版14　Ｂ２地区　井戸・土坑（中世）　ＳＥ731・ＳＥ734・ＳＥ738・ＳＥ740・ＳＫ728
図版15　Ｂ３地区　全景・礎石建物（中世下層）　ＳＢ10
図版16　Ｂ３地区　全景・掘立柱建物（中世上層）　ＳＢ12
図版17　Ｂ３地区　掘立柱建物（中世上層）　ＳＢ15・ＳＢ16～18
図版18　Ｂ３地区　井戸・土壙墓（中世上層）　ＳＥ1208・ＳＥ1256・ＳＥ1269・ＳＥ1304・ＳＥ1305・ＳＥ1308・ＳＥ1686・ＳＺ1684
図版19　Ｂ３地区　土坑（中世上層）　ＳＫ1104
図版20　Ｂ４地区　掘立柱建物（中世）　ＳＢ22・ＳＢ23・ＳＢ26・ＳＢ27・ＳＢ31・ＳＢ32・ＳＢ34・ＳＤ2371
図版21　Ｂ４地区　全景・井戸（中世）　ＳＥ2090・ＳＥ2348
図版22　Ｂ４地区　全景・土坑（中世）　ＳＫ2502・ＳＫ2505・ＳＫ2349
図版23　Ｂ４地区　全景・溝（中世）　ＳＤ2119・ＳＤ2704・ＳＤ2850・ＳＤ2853・ＳＤ2948
図版24　Ｂ４地区　全景・溝（中世）　ＳＤ2172
図版25　Ｂ４Ｓ地区　全景・土坑（古代・中世・近世）　ＳＫ3532
図版26　Ｂ６地区　全景
図版27　Ｂ６地区　全景（中世上層・中世下層）
図版28　Ｂ６地区　全景（中世上層・中世下層）
図版29　Ｂ６地区　全景（中世上層）
図版30　Ｂ６地区　全景（中世上層）
図版31　Ｂ６地区　全景（中世上層）
図版32　Ｂ６地区　全景（中世上層）
図版33　Ｂ６地区　全景（中世下層）
図版34　Ｂ６地区　全景（中世下層）
図版35　Ｂ６地区　全景（中世下層）
図版36　Ｂ６地区　全景（中世下層）

図版37	Ｂ６地区　井戸・土坑（中世）	ＳＥ4097・ＳＥ4120・ＳＫ4108・ＳＫ4149・ＳＫ4158
図版38	Ｂ６地区　井戸（中世）	ＳＥ4027・ＳＥ4097・ＳＥ4113・ＳＥ4132
図版39	Ｂ６地区　井戸・土坑・その他（中世）	ＳＥ4228・ＳＥ4351・ＳＫ4031・ＳＫ4048・ＳＫ4073・ＳＫ4108・ＳＸ4058・ＳＸ4059
図版40	Ｂ６地区　土坑（中世）	ＳＫ4149・ＳＫ4158・ＳＫ4233・ＳＫ4262・ＳＫ4264・ＳＫ4280・ＳＫ4289・ＳＫ4290・ＳＫ4452
図版41	Ｂ６地区　全景・溝（近世以降）	
図版42	Ａ２地区　全景・集石（中世）	ＳＸ4602
図版43	Ｂ２・３地区　畠（中世末～近世）	Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版44	Ｂ２地区　土坑・出土状況（中世末～近世）	ＳＫ656・ＳＫ658・ＳＫ661・ＳＫ667
図版45	Ａ２地区　全景・排水施設（中世末～近世）	ＳＸ4509・ＳＸ4563・ＳＥ4547
図版46	Ａ２地区　井戸・溝・土台建物（中世末～近世）	ＳＥ4503・ＳＤ4501・ＳＸ4502
図版47	Ｃ地区　全景（中世末～近世）	Ｃ１地区・Ｃ２地区
図版48	Ｃ地区　全景（中世・中世末～近世）	Ｃ３地区
図版49	Ｃ地区　掘立柱建物・柱穴（中世末～近世）	ＳＢ45・ＳＢ47・ＳＢ48・ＳＰ5110・ＳＰ5253
図版50	Ｃ地区　柱穴（中世末～近世）	ＳＰ5255・ＳＰ5256・ＳＰ5257・ＳＰ5263・ＳＰ5214・ＳＰ5218・ＳＰ5245・ＳＰ5478
図版51	Ｃ地区　井戸（中世末～近世）	ＳＥ5101・ＳＥ5212・ＳＥ5213・ＳＥ5217
図版52	Ｃ地区　井戸（中世末～近世）	ＳＥ5221・ＳＥ5222・ＳＥ5223・ＳＥ5244・ＳＥ5272・ＳＥ5414
図版53	Ｃ地区　井戸（中世末～近世）	ＳＥ5301・ＳＥ5423・ＳＥ5470・ＳＥ5471・ＳＥ5472
図版54	Ｃ地区　土坑（中世末～近世）	ＳＫ5075・ＳＫ5092・ＳＫ5109・ＳＫ5104・ＳＫ5120・ＳＫ5124・ＳＫ5134・ＳＫ5156
図版55	Ｃ地区　土坑（中世末～近世）	ＳＫ5150・ＳＫ5206
図版56	Ｃ地区　土坑（中世末～近世）	ＳＫ5224・ＳＫ5467
図版57	Ｃ地区　溝・集石遺構（中世末～近世）	ＳＤ5302・ＳＸ5252
図版58	出土遺物　土器・陶磁器（中近世）	Ａ２地区
図版59	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ａ２地区・Ｂ１地区
図版60	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中世）	Ｂ１地区
図版61	出土遺物　土器（古代）	Ｂ２地区
図版62	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ２地区
図版63	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版64	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版65	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中世）	Ｂ３地区
図版66	出土遺物　土器・陶磁器（中世）	Ｂ３地区
図版67	出土遺物　土器・陶磁器（中世）	Ｂ３地区
図版68	出土遺物　土器（古代・中世）	Ｂ３地区・Ｂ４地区
図版69	出土遺物　土器（古代・中世）	Ｂ３地区・Ｂ４地区
図版70	出土遺物　土器（古代・中世）	Ｂ３地区・Ｂ４地区
図版71	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中世）	Ｂ４地区
図版72	出土遺物　土器（古代・中世）	Ｂ４地区
図版73	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版74	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版75	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版76	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版77	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版78	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版79	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版80	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版81	出土遺物　土器（古代）	Ｂ４地区
図版82	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ４地区・Ｂ４Ｓ地区
図版83	出土遺物　土器（古代・中世）	Ｂ４地区・Ｂ４Ｓ地区・Ｂ６地区
図版84	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ４地区・Ｂ４Ｓ地区・Ｂ６地区
図版85	出土遺物　土器・陶磁器（古代・中近世）	Ｂ６地区・Ｃ地区
図版86	出土遺物　土器・陶磁器（中近世）	Ｂ６地区・Ｃ地区
図版87	出土遺物　土器・陶磁器（中近世）	Ｃ地区
図版88	出土遺物　土器・陶磁器（中近世）	Ｃ地区
図版89	出土遺物　土器・陶磁器（中近世）	Ｃ地区
図版90	出土遺物　金属製品	Ｂ１地区・Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版91	出土遺物　金属製品	Ｂ３地区・Ｂ４地区・Ｂ４Ｓ地区・Ｃ地区
図版92	出土遺物　木製品	Ａ２地区
図版93	出土遺物　木製品	Ａ２地区・Ｂ１地区・Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版94	出土遺物　木製品	Ａ２地区・Ｂ１地区
図版95	出土遺物　木製品	Ａ２地区・Ｂ１地区・Ｂ３地区
図版96	出土遺物　木製品	Ｂ３地区・Ｂ４地区
図版97	出土遺物　木製品	Ｂ３地区・Ｂ４地区・Ｂ６地区
図版98	出土遺物　木製品	Ｂ４地区・Ｂ６地区・Ｃ地区
図版99	出土遺物　木製品	Ｃ地区
図版100	出土遺物　木製品	Ｃ地区
図版101	出土遺物　木製品	Ｃ地区
図版102	出土遺物　木製品	Ｃ地区
図版103	出土遺物　石製品	Ａ２地区・Ｂ２地区・Ｂ３地区
図版104	出土遺物　石製品	Ｂ６地区・Ｃ地区
図版105	出土遺物　石製品	Ｃ地区

表目次

第１表　試掘調査一覧 …… 1
第２表　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡調査一覧 …… 4
第３表　遺跡地名一覧 …… 9
第４表　竪穴建物一覧 …… 219
第５表　掘立柱建物一覧 …… 219
第６表　柱穴・柵列一覧 …… 220
第７表　井戸一覧 …… 226
第８表　土坑一覧 …… 227
第９表　溝・自然流路一覧 …… 232
第10表　墓壙一覧 …… 233
第11表　土器・陶磁器一覧 …… 321
第12表　金属製品一覧 …… 338
第13表　木製品一覧 …… 339
第14表　石製品一覧 …… 342

第Ⅰ章　調査経緯

1　調査に至る経緯

A　調査の契機

岐阜県神岡鉱山から神通川に排出されたカドミウムを含む汚泥は、水だけでなくその水で灌漑されている下流の田も汚染した。昭和45年農用地の土壌汚染防止法が公布され、翌年から土壌汚染調査が行われた結果、約1500haが汚染土壌地域に指定された。昭和55年から本格的な土壌復元が始まり、県営公害防除特別土地改良事業神通川流域地区と名付けられた。この事業は大型圃場による区画整理で、汚染対策地域と指定された農地に隣接する地域を併せて行われることとなった。復元工法は上乗せ客土工法と埋込客土工法の二工法が採用された。上乗せ客土工法は計画耕区ごとに均平化し山土砂により耕盤を造成し、その上に客土をする工法。埋込客土工法は計画耕区ごとに深い溝を掘り、表土から約30㎝の汚染土をはぎ取り溝に埋め込んだ後、基盤を均平化して埋め込み溝を掘削した時の土砂（非汚染土）で耕盤を造成し、その上に耕土を15㎝客土をする工法である。婦中町の第一次地区は12haで昭和55年に始まり昭和58年に完了。第二次地区は165haで昭和59年に始まり平成４年に完了。そして平成４年から平成16年までの計画で第三次地区の工事が始められた。第三次地区は対策地域の残りすべての復元工事で、329haが対象地域となった。

B　分布調査

婦中町内の第一次地区の分布調査は昭和53年に行われ、遺物は確認されなかった。第二次地区の分布調査は昭和57年に行われたがやはり遺物は確認されなかった。第三次地区は平成２・３年度に実施された分布調査では遺物は確認されなかったが、平成５年11月の分布調査で８カ所、12月には６ヶ所、平成６年４月には10ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。平成９年まで行われた分布調査で合計33カ所が確認されている。

包蔵地名	所在地	面積（㎡）	調査期間	遺構	遺物	時代	面積（㎡）
清水島Ⅰ	清水島字四反鏡1214外	試掘調査　38	H6.3.1～3.24		珠洲、瓦質土器		
清水島Ⅱ	清水島字奥ヶ口1214外	試掘調査　780	H6.3.1～3.24	溝、穴	土師器、珠洲		
		試掘調査　255	H6.5.25～5.27		土師器、珠洲、瓦器、近世陶磁器	中世、近世	11,850
堀Ⅰ	堀字寺町317外	試掘調査　545	H6.3.1～3.24	墓、塚状遺構	土師器、越中瀬戸、近世陶磁器		330
		試掘調査　61	H7.5.11～6.9	墓	珠洲、八尾（蔵骨器）、瀬戸美濃、硯、近世陶磁器	中世	100
		本調査　83	H7.7.17～10.12	墓	珠洲、八尾（蔵骨器）、近世陶磁器	中世	
中名Ⅰ	中名字阿弥大地1937外	試掘調査　501	H6.3.1～3.24	溝、穴	土師器、須恵器、青磁、珠洲、越中瀬戸		2,500
中名Ⅱ	中名字大百苅516－6外	試掘調査　100	H6.3.1～3.24	溝、穴			
		試掘調査　549	H6.5.25～5.27	溝、穴	中世土師器、珠洲、越中瀬戸	平安、中世	30,400
		本調査　4,450	H6.8.1～10.27	掘立柱建物、土坑、溝、井戸	中世土師器、珠洲、越前、八尾、瀬戸美濃、輸入陶磁器	平安、中世	
中名Ⅴ	中名字北浦1475外	試掘調査　1,620	H6.11.21～12.12	土坑、溝、石組井戸	中世土師器、珠洲	平安、中世、近世	79,087
	中名字北浦228－3外	試掘調査　47	H8.11.14	溝	中世土師器、近世陶磁器、硯	中世、近世	453
持田Ⅰ	持田230外	試掘調査　353	H7.11.24～11.29	柱穴、土坑、溝	土師器、中世土師器、瀬戸美濃、青磁、近世陶器	平安、中世、近世	14,900
	持田190	試掘調査　26	H8.4.23	柱穴、土坑、溝	中世土師器	中世	200
持田Ⅱ	持田240外	試掘調査　261	H7.11.30～12.4		中世土師器、瀬戸美濃、白磁、近世陶器、砥石	平安	
道場Ⅰ	道場江戸田202－1外	試掘調査　981	H6.11.21～12.7	井戸、土坑	中世土師器、珠洲、近世陶磁器	中世、近世	52,653
	道場229－1外	試掘調査　50	H8.2.27	土坑		中世、近世	4,000
道場Ⅱ	道場江戸田202－1外	試掘調査　316	H6.12.8～12.12		中世土師器	中世、近世	11,845

第1表　試掘調査一覧

C　試掘調査

試掘調査は婦中町教育委員会と富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）によって行われた。平成６年３月に11カ所の遺跡に、幅約１ｍの試掘溝が111ヶ所設定され、重機（バックホウ）・人力により地表面から15～130㎝下にある地山まで掘り下げ、遺構・遺物の遺存状況が調査された。その結果、清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅰ遺跡・中名Ⅱ遺跡・堀Ⅰ遺跡の４遺跡で遺構が確認された。清水島Ⅱ遺跡と中名Ⅱ遺跡はこの調査で遺跡範囲が確定できず、平成６年５月に再度試掘調査が行われた。平成６年11・12月には３ヶ所の包蔵地で162ヶ所の試掘溝が設定され調査されたところ、中名Ⅴ遺跡・道場Ⅰ遺跡・中名Ⅰ遺跡・中名Ⅵ遺跡が確認された。試掘調査の結果、熊野地区は古代から中世の遺跡の密集地であることが判明した。また、遺跡と確認できない地区は16カ所見られた。

D　本調査

試掘調査の結果から県耕地課・県農地林務事務所・婦中町農地課と婦中町教育委員会・県文化課（現文化財課）・県埋蔵文化財センターの六者による協議で試掘調査結果と計画田面高の調整がされ、遺跡を最大限保存し、調査面積をできるだけ少なくする努力がなされた。その結果、中名Ⅱ遺跡の本調査（4,450㎡）が平成６年８月から10月に婦中町教育委員会・県埋蔵文化財センターによって行われた。文化振興財団では平成７年度に新規事業として調査を富山農地林務事務所から受託し、平成７年度は婦中町の清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡、平成８年度は中名Ⅱ遺跡・中名Ⅴ遺跡・持田Ⅰ遺跡と二年間で４遺跡、平成８年度から10年度にかけては、中名Ⅰ・Ⅴ遺跡、道場Ⅰ遺跡の本調査を行った。

2　調査経過

A　調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定は国家座標を用い、遺跡ごとに起点を設定した。中名Ⅰ・Ⅴ遺跡は＋70,67.00、00,00.00、をＸ０Ｙ０とし、南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とした。グリッドは２×２ｍとし、各グリッド名は北東角のＸ軸とＹ軸の座標とした。中名Ⅰ・Ⅴ遺跡は婦中町教育委員会・県埋蔵文化財センターによって平成６年度から平成９年度にかけて範囲確認調査が行われた。その結果、中世が１～２面、その下層に間層を持って古代の遺構検出面が確認されており工事で影響を受ける中世面を主に調査の対象とした。平成８年度の調査地区はＡ１・２地区、平成９年度の調査地区はＢ１～Ｂ５地区、平成10年度はＢ４Ｓ・Ｂ６・Ｃ１～Ｃ３地区で調査を行った。また、排水路・町道計画地については古代面まで完掘した。調査は表土・耕作土・無遺物層の除去、包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構の検出、遺構の発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、補足作業の順で行った。表土・耕作土・無遺物層の除去は、人力掘削による調査の事前準備として、調査員立ち会いのもと、試掘調査の結果をふまえ基本層序を確認しながら、事業者が重機（バックホウ）により掘削した。包含層の発掘はスコップ等を用い、人力で掘削した。排土はベルトコンベアーを使用し、調査区隣接地に集積した。遺構確認面の精査・遺構の検出は、ジョレンやねじり鎌を用い、検出した遺構は石灰等でマーキングを行い、平板等で位置を測り遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付した。遺構番号は各地区ごとに遺構の種類にかかわらず通し番号とした。遺構の発掘は移植ごてで小さい土坑・柱穴などは長軸に沿って半截、大きい土坑は十字、またはそれ以上に、溝は適宜間隔をあけて土層観察用のセクションベルトを残して発掘し、記録をとった後、完掘した。遺構の記録は土層断面図を１/20で実測し、遺構によっては１/10の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面は35㎜カメラで撮り、出土状況や個別の完掘写真・ブロック写真は適宜ブローニー判もあわせて撮影

した。調査区の全景写真は35㎜・ブローニー判・４×５インチ判カメラで可能な限り２方向以上から撮影するようにした。フィルムは35㎜はカラーと白黒、ブローニー判・４×５インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用した。井戸は完掘後重機（バックホウ）で断ち割り、最終レベルの確認、遺物の採取、写真撮影、図面作成を行った。

B　調査の経過

調査は富山農地林務事務所と協議のもと、調査員２名１班体制で行った。平成８年度の調査期間は10月14日～12月17日。総調査面積は2,434㎡である。平成９年度の調査期間は５月12日～12月12日。総調査面積は24,872㎡。平成10年度の調査期間は５月10日～10月16日。総調査面積は7,238㎡。なおＡ１地区、Ｂ５地区については、県道館本郷・添島線の北側にあたるため今回の報告から除いた。北側部分の報告書は後日刊行の予定である。

C　調査体制

平成８年度（1997年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　谷井　保男　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成　真幸　埋蔵文化財調査事務所主事　　岩崎　証意　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　山本　正敏　埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調 査 員　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所主任
　　吉田　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成９年度（1998年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　谷井　保男　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成　真幸　埋蔵文化財調査事務所主事　　蒲田　和志　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　山本　正敏　埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調 査 員　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所主任
　　武田健次郎　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　青山　　晃　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　吉田　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　内田亜紀子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　藤原　　哲　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成10年度（1999年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　谷井　保男　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成　真幸　埋蔵文化財調査事務所主事　　江本　裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調 査 員　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第一課係長
　　森　　隆　埋蔵文化財調査事務所主任
　　武田健次郎　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　青山　　晃　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

吉田　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
内田亜紀子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
戸谷　邦隆　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

地区	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
A2 中世上層	H8.11.11～12.9	15日間	372㎡	酒井重洋・吉田裕子	掘立柱建物、井戸、溝、土坑、石積、暗渠溝	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、八尾、伊万里、唐津、越中瀬戸、石製品、金属製品、木製品
中世下層	H8.12.10～12.17	10日間	372㎡			
B1 中世下層	H9.6.5～9.5	33日間	821㎡	武田健次郎・吉田裕子	掘立柱建物、井戸、溝、土坑	土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、石製品、金属製品、木製品、土錘、炉壁、羽口
古代上層	H9.9.9～11.6	20日間	778㎡			
古代下層	H9.11.10～11.28	7日間	444㎡		掘立柱建物、溝、土坑	土師器、須恵器、土錘
B2 中世上層	H9.5.27～9.5	44日間	3,354㎡	武田健次郎・吉田裕子	掘立柱建物、井戸、溝、土坑、畠	中世土師器、珠洲、青磁、白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、石製品、金属製品、木製品、銭、土錘
中世下層	H9.9.9～11.6	31日間	450㎡			
古代上層	H9.11.10～11.28	12日間	450㎡		竪穴建物、谷	須恵器、土師器、製塩土器
B3 中近世層	H9.5.16～6.19	23日間	3,821㎡	酒井重洋・野口雅美・藤原哲	掘立柱建物、土台建物、礎石建物、土坑、井戸、溝、土坑、畠	中世土師器、珠洲、瀬戸、白磁、青磁、青白磁、八尾、越中瀬戸、唐津、石製品、金属製品、銭、木製品
中世上層	H9.6.23～9.9	42日間	3,512㎡			
中世下層	H9.9.9～11.23	23日間	2,146㎡			
B4 中世上層	H9.5.19～9.6	52日間	2,947㎡	青山　晃・内田亜紀子	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、谷	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、八尾、伊万里、唐津、越中瀬戸、石製品、金属製品、木製品
中世下層	H9.9.9～11.7	38日間	2,780㎡			
古代上層	H9.11.10～12.12	21日間	2,780㎡		竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、集石	須恵器、土師器、緑釉、土錘、鉄製品、墨書土器
B4S中世上層	H10.5.12～6.2	13日間	414㎡	武田健次郎・内田亜紀子	溝、土坑、柱穴、畑、旧川道	中世土師器、瀬戸美濃、八尾、青磁、白磁、須恵器、土錘、須恵器、木製品
中世下層	H10.6.2～6.29	18日間	414㎡			
B6 近世層	H10.5.10～6.11	21日間	1,044㎡	森　隆・戸谷邦隆	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	土錘、中世土師器、珠洲、八尾、瀬戸美濃、青磁、越中瀬戸、伊万里、土錘、石製品
中世層	H10.6.12～7.7	25日間	1,044㎡			
古代層	H10.7.8～8.27	15日間	587㎡		掘立柱建物、土坑、畠	須恵器、土師器、緑釉
C 中近世層	H10.5.19～9.10	64日間	2,269㎡	青山　晃・野口雅美	掘立柱建物、土台建物、井戸、溝、土坑、塀	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、伊万里、唐津、越中瀬戸、金属製品、木製品、石製品
中世層	H10.8.20～10.16	21日間	1,467㎡			

第2表　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡調査一覧

D　現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために、年に1回調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。平成9年度は中名Ⅰ・Ⅴ遺跡B地区で行った。遺構全体の概要について概略図で説明した後、順路に従った自由見学とし、主要な遺構には分かりやすく説明した看板を設置するとともに調査員を配置し、参加者の質問等に対応した。又、展示コーナーを設け、出土した遺物や遺構の写真を展示した。

平成9（1998）年9月7日（日）午前10時から12時まで　参加者数約130人

E　整理の経過

出土遺物は可能な限り各年度内に洗浄・注記・分類を行った。木製品・金属製品・石製品については、計測し、それに加えてメモ写真を撮影して整理台帳を作成した。木製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし、仮保管している。調査概要については『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』『埋蔵文化財調査概要－平成9年度－』『埋蔵文化財調査概要－平成10年度－』として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成11年4月に開始した。遺物の実測は土器・陶磁器を調査員及び整理作業員が行った。木製品・金属製品・石製品については業者委託により写真実測で行った。調査員及び整理作業員の描いた実測図は種類別の遺物カードに直接描いて整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれの台帳を作成して整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物については入力したデータを観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し、整理作業員が補足した。遺物の写真撮影は業者委託

し、4×5インチ判及び5×7インチ判を基本として、白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼き付けまたは引き伸ばしたものを使用した。自然科学的分析は平成11年に専門機関等に委託し、その結果報告を掲載した。平成9年には木組井戸の井戸側の取上げと保存処理を近畿ウレタン工事に委託した。木製品・金属製品のうち重要なものは、平成12年度から13年度にかけて元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

F　整理体制

平成11（1999）年度

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　谷井　保男　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成　真幸　埋蔵文化財調査事務所主任　　江本　裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括　狩野　　睦　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
　　吉田　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成12（2000）年度

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　肥田　啓章　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中　慎一　埋蔵文化財調査事務所課長補佐　江本　裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括　狩野　　睦　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
　　吉田　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成13（2001）年度

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　肥田　啓章　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中　慎一　埋蔵文化財調査事務所課長補佐　江本　裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当　青山　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
　　野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成14（2002）年度

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
　　肥田　啓章　埋蔵文化財調査事務所副所長　　上野　　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　竹中　慎一　埋蔵文化財調査事務所課長補佐　広田　英貴　埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括　酒井　重洋　埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当　森　　隆　埋蔵文化財調査事務所主事主任
　　青山　裕子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

（酒井　重洋）

第Ⅱ章　立地と歴史的環境

1　立地

富山県は、北は富山湾に面し、東・南・西はそれぞれ海抜3,000m級の立山連峰、飛騨山地、医王山・宝達山に囲まれている。中名Ⅰ・Ⅴ遺跡が位置する婦負郡婦中町は、富山県のほぼ中央に位置し、北・東部は富山市、南部は八尾町・山田村、西部は砺波市、北西部は小杉町に接している。

婦中町は、西半部が射水丘陵・呉羽丘陵、東半部は神通川・井田川・山田川によって形成された複合扇状地である。丘陵は、高さ30～50mで南北に続いており、井田川流域、山田川流域、辺呂川流域、下条川流域、坪野川・和田川流域の５つに分けられる。また、山田川沿いには河岸段丘が見られる。扇状地は幾筋もの谷地形と微高地が南北に連なっている。遺跡の多くは河岸段丘上や微高地に立地する。

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡は神通川とその支流の井田川に挟まれた微高地に位置する。周辺には中名Ⅱ遺跡（２）、中名Ⅵ遺跡（３）、持田Ⅰ遺跡（４）、堀Ⅰ遺跡（５）、清水島Ⅱ遺跡（６）、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡（７・８）など古代から中世・近世にかけての遺跡がある。

2　歴史的環境

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の周辺では、先土器時代から近世までの各時代の遺跡が見られるが、ここでは時代を追って主な遺跡について述べる。

先土器時代では婦中町千坊山遺跡（25）、野下遺跡（19）、新開遺跡（21）、八尾町天ノ平遺跡（42）、富山市御坊山遺跡（58）、向野池遺跡（55）、池多東遺跡（57）などがある。

縄文時代の遺跡では、婦中町と富山市にまたがる平岡遺跡（20）が挙げられる。前期中葉の土器が出土しており、多数の石鏃・石槍・石錘・石匙・磨製石斧・凹石・玦状耳飾りなどもみられる。ほかに、婦中町では滝谷遺跡、小滝谷遺跡、牛滑遺跡、鏡坂Ⅰ遺跡（32）、道島遺跡、八尾町滅鬼遺跡（45）、前山Ⅰ遺跡（41）、長山遺跡（44）、大杉遺跡（46）があり、富山市では北押川Ｃ遺跡（56）、開ケ丘狐谷遺跡Ⅰ～Ⅲ遺跡（59～61）、向野池遺跡（55）などがある。

弥生時代の遺跡では、婦中町南部Ⅰ遺跡（40）、鍛冶町遺跡（31）がある。また、墓では婦中町六治古塚（30）や富山市杉谷４号（18）が四隅突出墓であるが、この墳形は出雲などとの日本海を通じての交流が想像できる。そのほか婦中町向野塚（29）では前方後方形墳丘墓がみられる。

古墳時代の遺跡は、婦中町では千坊山遺跡（25）、下邑東遺跡（24）、砂子田Ⅰ遺跡（９）、南部Ⅰ遺跡（40）、上吉川Ⅰ遺跡（39）、富山市任海宮田遺跡（52）がある。墓では婦中町と富山市にまたがる杉谷Ａ遺跡（54）、婦中町五つ塚古墳（28）、富崎千里古墳群（35）、富山市押上古墳（48）、伊豆宮古墳などがあり、特に婦中町西部の丘陵上には王塚古墳（26）、勅使塚古墳（27）という二つの前期の大型前方後方墳が築かれている。

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡が立地する神通川・井田川扇状地では、縄文～古墳時代の遺跡は少ない。しかし、古代から中世にかけて遺跡数は増える。婦中町では中名Ⅵ遺跡（３）、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡（７・８）、友坂遺跡（15）、新開遺跡（21）、新町Ⅱ遺跡（22）、下邑東遺跡（24）、富山市では吉倉Ｂ遺跡（50）、任海宮田遺跡（52）、友杉遺跡（53）などで７世紀から10世紀の遺物がみられる。特に任海宮田遺跡からは、土師器・須恵器・製塩土器・緑釉土器・瓦塔・土錘・金属製品・木製品・瑪瑙製の石帯など、

様々な遺物が見つかっている。また、「城長」・「観音寺」・「墾田」・「廣女」といった文字が書かれた墨書土器が多数出土しており、竪穴住居・溝などの遺構も見つかっている。

遺跡内にある熊野神社は『延喜式』の神名帳に記載された式内社と推定される神社の一つである。伝承によると、もともとは佐伯有頼が立山を開いて祭神を熊野大権現とし、それ以後熊野神社と称して来迎寺の僧が奉仕していた。久寿二年（1155年）、光明坊林海が萩島に神社を移し、為成郷十七ヶ村の惣社にしたという。その後、文亀二年（1502年）、乗誉大山の時に富山市古寺町に移り、さらに寛文元年（1661年）、現在の場所に移った。『文政十年（1827年）社号調帳』にこの社が輪番で稚児舞の神事に稚児をだしていたとあり、現在も毎年八月に行われる稚児舞は少なくとも文政10年まで遡ることができる。

中世になると富山平野には荘園が発達し、国衙領だけでなく京都下鴨社領寒江荘、山城醍醐寺三宝院領御服（五福・呉服）荘、徳大寺領宮河荘、伊勢神宮領鵜坂御厨といった寺社の領地が古文書にも登場する。この内、徳大寺領宮河荘は文和三年（1354年）十二月二十三日の足利義詮御判御教書案（徳大寺文書）に「宮河庄」と有るのが早い。また上杉謙信が越中に乱入した折、七社明神（現小矢部市長岡神社）から奪われた、新潟県小千谷市の魚沼神社所蔵の大般若経には至徳二年（1385年）十月六日付奥書として「婦負郡宮河荘押上」、同四年五月二十二日付には「宮河荘新保」、嘉慶二年（1388年）五月付には「婦負郡宮河荘鵜坂社」などとある。これらの地名から、宮河荘は現婦中町の神通川左岸と対岸の富山市の熊野川に挟まれた一帯と推定されている。

この宮河荘推定地にある中世遺跡は、婦中町清水島Ⅱ遺跡（６）、中名Ⅱ遺跡（２）、中名Ⅵ遺跡（３）、持田Ⅰ遺跡（４）、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡（７・８）、富山市吉倉Ｂ遺跡（50）、南中田Ｄ遺跡（49）任海宮田遺跡（52）、友杉遺跡（53）などである。持田Ⅰ遺跡では中世前期は数棟の掘立柱建物と共同で使う井戸があり、周囲には田畑が広がる散村の形態である。中世後期は、溝で四角く区画された内側に掘立柱建物が建てられ、建物の近くに井戸がある。中世集落遺跡の出土遺物には、在地でつくられた中世土師器や石川県で焼かれた珠洲が多く見られる。陶磁器では瀬戸・八尾や中国製の青磁・白磁、木製品の漆器や箸・曲物、刀子・銭などの金属製品、石臼・石鉢・五輪塔といった石製品など様々な生活用品が出土する。また、茶道に使われる天目茶碗や将棋の駒、独楽といった娯楽に関係するような遺物も登場する。

墓・寺院跡では婦中町堀Ⅰ遺跡（５）、ゴダイ塚（36）、蓮花寺遺跡（33）、鵜坂寺跡（13）、八尾町長者塚（47）などが挙げられる。堀Ⅰ遺跡は中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の南西に位置する中世の墓で、蔵骨器が出土している。鵜坂寺は、式内社である鵜坂神社の別当寺であったが、明治の神仏分離令で廃寺となったものである。現社地の北側に位置し、石仏・五輪塔・無縫塔が出土している。

また、城も築かれた。豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際陣営とした、呉羽丘陵上の富山市白鳥城と婦中町安田城跡（17）、そのほか富崎城跡（34）などがある。当時の有力者の居館であったと考えられる八尾町井田館跡（43）、田中館跡（62）、富山市蜷川館跡などの遺跡も見られる。

近世の集落も中世と同じようなところに位置する。婦中町中名Ⅵ遺跡（３）、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡（７・８）、富山市任海宮田遺跡（52）、友杉遺跡（53）などでは、近世の遺構・遺物も見つかっている。近世以降も、農村として発達し、現在では一帯に水田が広がる。

（青山　裕子）

第1図　周辺遺跡位置図（1:50,000）

番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	中名Ⅰ・Ⅴ遺跡	婦負郡婦中町中名字阿弥大地	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
2	中名Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町中名字大百苅	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
3	中名Ⅵ遺跡	婦負郡婦中町中名	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
4	持田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町持田	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
5	堀Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町堀字立寺町	塚状遺構・墓	中世（室町）・近世
6	清水島Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町清水島字奥ケ口	集落	中世（室町）・近世
7	道場Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町道場字江戸田	集落	中世（室町）・近世
8	道場Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町道場字粕塚	集落	中世（室町）・近世
9	砂子田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町砂子田	集落	古代・中世（鎌倉・室町）・近世
10	袋遺跡	婦負郡婦中町袋字宿免	散布地	古代（奈良・平安？）
11	下轡田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町下轡田	散布地	中世・近世
12	宮ヶ島Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町宮ケ島	散布地	中世・近世
13	鵜坂寺跡	婦負郡婦中町鵜坂	社寺	中世（鎌倉・室町）
14	鵜坂Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町鵜坂	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
15	友坂遺跡	婦負郡婦中町友坂・下条・安田・小泉	集落・城館	縄文・古代（平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
16	友坂天神遺跡	婦負郡婦中町友坂字天神	集落	縄文・古代
17	安田城跡	婦負郡婦中町安田川原他	城館	中世（鎌倉・室町）・近世
18	杉谷古墳群	婦負郡婦中町友坂、富山市	古墳	縄文・弥生末・古墳
19	野下遺跡	婦負郡婦中町小長沢、富山市	集落	先土器・縄文（中・晩）・古代（奈良）
20	平岡遺跡	婦負郡婦中町小長沢字大畑・字宮ノ高・字大山、富山市	散布地	縄文
21	新開遺跡	婦負郡婦中町小長沢字新開、富山市	集落	先土器・縄文・古代（奈良・平安）
22	新町Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町新町	集落	縄文・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
23	下邑遺跡	婦負郡婦中町下邑・小長沢	散布地	縄文・古代（奈良・平安）・中世・近世
24	下邑東遺跡	婦負郡婦中町羽根	集落	古墳（飛鳥）・古代（奈良・平安）・中世・近世
25	千坊山遺跡	婦負郡婦中町羽根字千坊・長沢字天王	古墳	先土器・縄文・古墳
26	王塚古墳	婦負郡婦中町羽根字上平	古墳	古墳（初）
27	勅使塚古墳	婦負郡婦中町羽根字上平	古墳	古墳（初）
28	五つ塚	婦負郡婦中町勅使塚	古墳	古墳
29	向野塚	婦負郡婦中町長沢字向野	弥生終墓（前方後方形墳丘墓）	弥生終
30	六治古塚	婦負郡婦中町長沢字向野	弥生終（四隅突出型墳丘墓）	弥生終
31	鍛冶町遺跡	婦負郡婦中町長沢字鍛冶町・笹川・中江	集落	弥生終・古代（奈良）・中世・近世
32	鏡坂Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町外輪野字鏡坂	集落	縄文（中）
33	蓮花寺遺跡	婦負郡婦中町長沢字寺屋敷	社寺（寺院）	中世（室町）
34	富崎城遺跡	婦負郡婦中町富崎	散布地・城館（山城）	縄文・弥生・中世（鎌倉・室町）
35	富崎千里古墳群	婦負郡婦中町富崎	古墳	古墳
36	ゴダイ塚	婦負郡婦中町富崎	塚	中世（鎌倉・室町）
37	富崎遺跡	婦負郡婦中町富崎字二俣川他	散布地	近世
38	千里Ｄ遺跡	婦負郡婦中町千里	散布地	古墳・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
39	上吉川Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町上吉川	集落	縄文（晩）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
40	南部Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町熊野道・上井沢・島田・高日附、八尾町	集落	弥生（終）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
41	前山Ⅰ遺跡	婦負郡八尾町福島字前山	集落	縄文
42	天ノ平遺跡	婦負郡八尾町福島	散布地	先土器・縄文
43	井田館跡	婦負郡八尾町井田	城館	中世（室町）
44	長山遺跡	婦負郡八尾町深谷長山	集落	縄文
45	滅鬼遺跡	婦負郡八尾町滅鬼	集落	縄文
46	大杉遺跡	婦負郡八尾町大杉	集落	縄文（中）
47	長者塚	婦負郡八尾町深谷	墓	中世（鎌倉・室町）
48	押上古墳	富山市押上	古墳？	古墳？
49	南中田Ｄ遺跡	富山市南中田	集落	縄文（晩）・古墳（古墳・白鳳）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
50	吉倉Ｂ遺跡	富山市字柿ノ木又割・押上字藤地割・南中田字土居野割・任海・新保	集落	古代（奈良・平安）・中世
51	任海遺跡	富山市任海	集落	古代（奈良・平安）・中世
52	任海宮田遺跡	富山市任海字宮田割・字大塚割・字桜町割・字前田割・字沼割・字仙田割・字株原割・字三十刈割・友杉字堤田割・字大鴨割	集落	縄文（晩）・古墳（古墳・白鳳）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
53	友杉遺跡	富山市友杉字北条田割・字辻ノ内割・字田割・字堤田割・任海字桜町割	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
54	杉谷Ａ遺跡	富山市杉谷字上野山畑	墓	弥生（末）・古墳（初）
55	向野池遺跡	富山市境野新	集落	先土器・縄文（早・前）・古代（奈良・平安）・中世・近世
56	北押川Ｃ遺跡	富山市北押川	集落	縄文（前）
57	池多東遺跡	富山市池多	散布地	先土器・縄文（前）・古代（奈良・平安）・中世・近世
58	御坊山遺跡	富山市池多	集落・生産（製鉄）	先土器・古代（奈良・平安）
59	開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（中）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）
60	開ヶ丘狐谷遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（前・中）・古代（奈良・平安）
61	開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（中）・古代（奈良・平安）
62	田中館跡	婦負郡八尾町田中	城館	中世（鎌倉・室町）

第3表　遺跡地名一覧

第Ⅲ章　遺構・遺物

1　遺跡の概要

A　概　　要

中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の発掘調査は３カ年に分けて行われた。平成８年度はＡ２地区、平成９年度はＢ１～４地区、平成10年度はＢ４Ｓ地区・Ｂ６地区・Ｃ地区が該当する。遺跡は神通川・井田川・山田川によって形成された複合扇状地上に位置する。そのため、周辺の地形は南東から北西に向かって緩やかに低くなる。調査区域での現況の標高を見ると、Ｂ３地区が標高約23.0mと高く、隣接する他の地区は約22.5m前後となり、0.5mの比高差が生じている。調査区域北側のＢ１地区では約22.0mで、およそ１mの比高差となる。さらに西に位置するＡ２地区やＣ地区では、標高が約21.5～21.0mと低く、調査区域内では最大で約２m程の高低差があることになる。また、神通川と井田川との間の当該地域は、幾筋もの谷状地形が形成されている。そうした、谷と谷との間が微高地となり、その上に遺跡が確認されている。当遺跡でも、Ｂ地区の東側と西側に谷状の旧地形が確認されている。西側の谷を隔てて、Ａ２・Ｃ地区がある。今回報告する調査区域では二つの微高地上に、それぞれＢ地区とＡ２・Ｃ地区の遺構群が形成されていたと言える。また、Ｂ地区東側の谷は中世以前のものであり、中世の遺構群が形成される段階では、かなり埋没していたと思われるが、その範囲に遺構の形成は少ない。この旧谷範囲を隔てて、すでに報告されている中名Ⅱ遺跡が位置している。

遺構の時期は、古代・中世・中世末～近世の大きく３時期に分かれる。古代の遺構は復元工事の影響深度の関係から、Ｂ１・２・４・４Ｓ・６地区において当該期の遺構検出面までの掘削を行い、調査をすることとなった。その結果、竪穴建物10棟、掘立柱建物６棟、柵列５条の他、土坑、溝、集石遺構などが検出された。特に遺構分布が集中するのがＢ４地区の北側で、竪穴建物９棟、掘立柱建物４棟が確認された。遺物出土も竪穴建物内やその周辺の遺構内、包含層中に多く認められる。古代の遺物は須恵器と土師器がほとんどを占める。他に緑釉陶器や土錘、刀子等が出土している。遺物の年代は８世紀～10世紀前半頃までの時期幅があり、遺構もそうした時期幅の中で形成されていったと考えられる。中世の遺構はＢ１・２・３・４・４Ｓ・６地区、Ａ２地区、Ｃ地区で検出された。但し、Ｂ２地区は復元工事の影響深度の関係から、用水路部分を中世の遺構検出面まで掘削した。検出された遺構は、掘立柱建物36棟、礎石建物１棟、柵列13条、木組井戸４基、石組井戸17基の他、土坑、溝、土壙墓などである。遺構の分布はＢ３地区西半からＢ４地区南半にかけての一帯と、Ｂ６地区で密度が比較的高い。Ａ２地区では溝を中心に集石遺構や墓壙が検出され、Ｃ地区では石列のみが確認されている。中世末～近世の遺構はＢ２・３・４・４Ｓ・６地区、Ａ２地区、Ｃ地区で検出された。掘立柱建物９棟、土台建物１棟、柵列２条、石組井戸16基、素掘井戸１基の他、土壙、溝、畠などが検出されている。Ｂ地区では主に畠と区画溝が検出されている。Ａ２地区とＣ地区では遺構の分布は密で、掘立柱建物、土台建物、井戸、区画溝が検出されている。中近世の出土遺物は土器・陶磁器がほとんどを占める。その種類は中世土師器・珠洲・八尾・越前・瀬戸美濃・中国製陶磁器・瓦質土器・越中瀬戸・肥前陶磁器と多岐にわたる。この他、銅銭・花瓶等の金属製品、五輪塔・板碑等の石製品、漆器・曲物等の木製品が出土する。遺物の年代は12世紀代～17世紀代までと幅広い。

B　基本層序

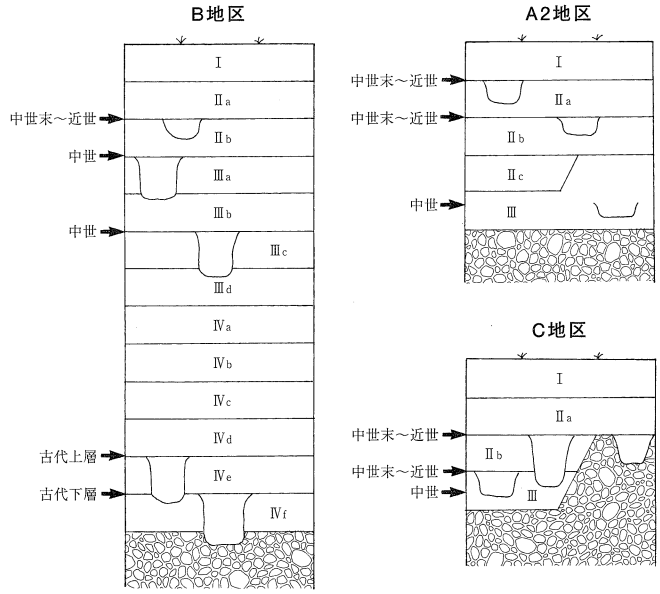
調査区域が東西約260m、南北180mの広範囲で、先に示したように比高差もある。そのため、調査

区により基本層序に相違が認められる。ここでは、大きく３つに分けて基本層序を解説しておきたい。今回の調査区では東側となるＢ地区、加えて西側にあるＡ２地区とＣ地区である。各地区とも、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：中世末～近世、Ⅲ層：中世、Ⅳ層：古代、と基本的に設定し、Ⅱ層以下を各層の中でさらに細分した。

Ｂ地区ではⅡ～Ⅳ層を確認した。Ⅳ層以下は礫層となる。Ⅱ層はⅡａ・ｂ層に分層され、両層とも黄褐色砂質シルトで、色調や土質に明瞭な差はない。中世～近世の遺物を含む包含層で、Ⅱｂ層上面では中世末～近世の遺構を検出している。Ⅲ層は、Ⅲａ層：褐色砂質シルト、Ⅲｂ層：灰黄色粗砂、Ⅲｃ層：黄褐色砂、Ⅲｄ層：粗砂となる。中世の遺構検出面は、遺構の掘り込みから見て、Ⅲａ層上面とⅢｃ層上面の２面があると考えられる。しかし、Ⅲ層の堆積状況が調査区内で一様ではなく、全地区でこれらの層での遺構検出がなされた訳ではない。そのため、多くの地区で２面の遺構検出面で確認された遺構を、中世面として合わせて報告している。但し、検出面が明瞭に異なる場合や、覆土や遺物などにより層を分離できる場合は、上層と下層に分けて提示している地区もある。具体的にはＢ３地区とＢ６地区であるが、それぞれで設定した中世上・下層が同一の遺構検出面や年代観ではないことを断っておきたい。Ⅳ層は、Ⅳａ層：灰黄褐色砂質シルト、Ⅳｂ層：褐灰色細砂、Ⅳｃ：層褐灰色、Ⅳｄ：暗灰黄色粘質シルト、Ⅳｅ層：明褐色砂、Ⅳｆ層：暗灰黄色砂に分層された。Ⅳａ～ｃ層は無遺物層、Ⅳｄ層以下はいずれも古代の遺物を包含する。古代の遺構検出面はⅣｅ・ｆ層上面もしくは、礫層上面にて行った。Ⅳｅ・ｆ層の形成が一様でないこともあり、２つ検出面で遺構検出を行った範囲は限られている。こうした検出面の違いは、ある程度時期差を反映していると思われるが、明確に分離できない遺構も多くあるため、同一の古代面として提示している。

Ａ２地区ではⅡ～Ⅲ層に分層され、Ⅲ層より下は礫層になる。Ⅱ層は、Ⅱａ層：灰色シルト、Ⅱｂ層：灰色粘質シルト、Ⅱｃ層：灰色粘土質シルトとなり、Ⅱｃ層は部分的に存在する。Ⅱａ層とⅡｂ層の上面で中世末～近世の遺構を検出したが、それぞれの遺構覆土はほぼ同じで、出土遺物からも時期の峻別が難しかった。そのため、報告では中世末～近世の遺構面として提示している。Ⅲ層は灰色砂質シルトの単層で、約15cm程下げた段階で中世の遺構を検出している。

Ｃ地区ではⅡ～Ⅲ層に分層され、Ⅲ層の下は礫層となる。Ⅱａ層：黒褐色砂質土、Ⅱｂ層：暗灰黄色砂質土となる。Ⅱ層中に中世末～近世の遺物が含まれ、遺構はⅡｂ層とⅢ層の上面、礫層が高い範囲ではその上面にて遺構検出を行った。二つの面で遺構を検出しているが、覆土に明確な違いのない遺構も多く存在するため、それぞれで検出された遺構を、中世末～近世の遺構面としてあわせて提示している。Ⅲ層はにぶい黄色砂層の単層で、Ⅲ層中から中世の遺構を検出した。



第2図　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡基本層序模式図

第3図　中名Ⅰ・Ⅴ遺跡調査区区割図（1：2,000）及び基本層序柱状図

2　遺構

A　古代

復元工事に関わる影響深度の関係で、古代の遺構確認面まで掘削し、調査することになったのはＢ１・２・４・４Ｓ・６地区である。竪穴建物10棟、掘立柱建物６棟、柵５条、多数の土坑と溝、その他に自然流路、集石遺構を検出した。遺構の分布は各地区に認められたが、竪穴建物はＢ２・４地区、掘立柱建物はＢ１・４・６地区で検出された。特にＢ４地区のＸ85～Ｘ100の範囲においては、他の区域に比べ、遺構の分布密度が高い。古代では、自然流路であるＢ１地区ＳＤ284、Ｂ４地区3347やＢ２・Ｂ４Ｓ地区では谷状地形が確認されている。そのため、流路や谷状地形で分断された微高地上を居住域としていたと考えられる。出土した遺物からは８世紀～10世紀前半までの時期幅が認められる。また、Ｂ３地区では、中世の遺構を掘削している段階で、古代の遺物が出土しており、古代の遺構群がＢ３地区にも展開していた可能性がある。これに対し、Ａ２地区とＣ地区では、中世・中世末～近世の遺構を検出していた段階で地山礫層が露出していた範囲もあり、古代の遺物の出土も少ない。これらの地区は、古代の居住域として利用されていた可能性は低いと思われる。

以下では、各遺構ごとについて示していく。竪穴建物・掘立柱建物などの主要な遺構については、検出されたもの全てを提示している。また、土坑・溝といった多数検出された遺構に関しては、遺物が出土しているものや、規模・形態などが特徴的なものを選別し提示している。

竪穴建物

ＳＩ01（第４図、図版４）：Ｂ２地区Ｘ71Ｙ177に位置する。竪穴建物の東側には谷状の地形が確認されているが、建物はその埋没後に構築されている。竪穴建物は調査区外に広がるため、全体の規模・平面形態は不明である。調査区内では、東壁全体と南・北壁の一部が確認されている。東壁2.7ｍ、北壁1.1ｍ、南壁1.0ｍを測る。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持っている。特に北壁は傾斜が強く、壁面の崩落があったと思われる。床面は貼り床で、黄灰色粘土の第２層を充填し床面としている。貼り床までの深さは0.32ｍとなり、床面は南に向かって低くなっている。ただし、第２層の下から炭化物層が検出されており、建て替えの可能性もある。その場合、深さは0.4m程となる。覆土は単層で、黄灰色シルト質粘土になる。竈は東壁のほぼ中央に構築される。竈主軸方位はＮ－76°－Ｗとなる。規模は幅0.85ｍで、竪穴内に0.44ｍ突出する。燃焼部での袖間の幅は0.4ｍになる。主軸長は1.39ｍ、竪穴外へ0.74ｍ突出し、煙道部となる。煙道部の幅は0.4ｍとなる。煙道部底面はほぼ平坦で、先端での立ち上がりは傾斜を持つ。袖部には最大で長径28㎝程の扁平な自然礫が左袖で４点、右袖には３点が残存する。袖構築のための補強材で、被熱痕が認められる。土層断面では、袖部の構築土は判別できなかった。焚口の上部構造の補強材である礫が竈前面に崩落した状態で出土した。竈の高さは袖補強材の高さと、焚口天井部補強材の厚みを合わせて、0.4ｍ程であったと思われる。竈内の覆土は暗灰黄色砂質シルト・砂質土を基調とし、炭化物粒がわずかに混入する。また、燃焼部から竈前面にかけて焼土・炭化物層が広がる。出土遺物には 須恵器杯蓋（67・72）・須恵器杯（68～71・73・74）・須恵器皿（75）・土師器甕（76～78）がある。73は「九」と墨書される。遺物の出土はほとんどが覆土の上層からであった。竪穴建物廃絶後、ある程度埋没した段階で、廃棄もしくは流入したと思われる。

ＳＩ02（第４図、図版４）：Ｂ４地区Ｘ86Ｙ138に位置する。ＳＢ03・05の範囲と重複する。ＳＢ03のＳＰ3311・3352に切られる。北壁3.05ｍ、南壁3.0ｍ、東壁2.7ｍ、西壁2.44ｍを測る。東西がわずかに長い方形を呈する。主軸方位はＮ－83°－Ｗとなる。深さは0.14ｍで、壁面はやや傾斜を持ち、

特に西壁の立ち上がりは不明瞭である。床面はわずかに東側が低く、西側では地山礫層が露出する。貼り床や硬化面は検出されていない。覆土は５層に分層された。灰褐色から褐灰色を呈する砂質土を基調とする。竈やその他の付属施設は確認されなかった。出土遺物には覆土中から須恵器杯（163）がある。また、竪穴中央付近の床面上から、土師器小型甕（164）・須恵器瓶（165）が出土する。鉄製品では、刀子（2084）が竪穴北東部の覆土中から、棒状鉄製品（2089）が北壁中央付近の床面から出土している。

ＳＩ03（第４図、図版４）：Ｂ４地区Ｘ94Ｙ135に位置する。ＳＩ07の南側、ＳＩ05・06の東側に近接する。ＳＫ3167・3295に切られる。また、底面を検出した段階で、ＳＢ04のＳＰ3357が確認されており、ＳＩ03が後出することとなる。北壁2.54ｍ、南壁2.42ｍ、東壁・西壁はそれぞれ2.46ｍを測り、ほぼ方形の形態となる。主軸方位はＮ－24°－Ｅとなる。深さは0.14ｍで、壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。床面はほぼ平坦となり、貼り床・硬化面は検出されていない。竪穴の覆土は５層に分層された。大きくは上下に２分され、上層は灰黄褐色シルト、下層は暗褐色シルトとなる。竈や柱穴などの付属施設は確認されなかった。出土遺物は全て覆土中から出土している。須恵器蓋（166）・須恵器杯（167～169）・土師器椀（170・171）・土師器小形甕（172～174）・土師器甕（175）・土錘（176）がある。この内、166～168は竪穴北西隅の覆土中でまとまって出土した。また、174は覆土の上層からの出土である。173は出土位置から見て、ＳＰ3357に帰属する可能性が高い。

ＳＩ04（第４図、図版４・７）：Ｂ４地区Ｘ91Ｙ141に位置する。ＳＩ08の北側に近接する。平面形態は不整形で、2.56ｍ×1.7ｍの規模となる。主軸方位はＮ－４°－Ｅとなる。深さは0.1ｍで、床面はほぼ平坦となる。竪穴の北側には炭化物を多く含んだ覆土であるＳＫ3201・3202が検出されている。不整な平面形態であり、掘り込みも浅く、建物であるか明確でない。竪穴北側に近接するＳＫ3201・3202が竈の痕跡である可能性があり、これらの遺構を一連のものと考え、ここでは竪穴建物として提示している。竪穴建物である場合、削平など後世の影響により、その痕跡を残すにとどまったものと思われる。竪穴北東部から須恵器杯蓋（161）が出土している。その他、出土遺物には須恵器杯（162）・土師器片がある。

ＳＩ05（第５図、図版４）：Ｂ４地区Ｘ92Ｙ133に位置する。ＳＢ04・ＳＩ03の西側に近接する。北壁部分がＳＩ06を切る。東壁の南側でＳＫ3080に切られる。南西隅が調査区外となるが、北壁・東壁は全体が検出されている。それぞれ2.62ｍ・2.87ｍとやや南北が長い形態となる。確認できた西壁・南壁の状態から、平面形は南壁が僅かに広い台形状になると思われる。主軸方位はＮ－11°－Ｅとなる。床面は貼り床で、深さは0.18ｍを測る。床面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴掘方までの深さは0.26ｍであった。掘方部分の立ち上がりは垂直に近い。覆土は９層に分層された。第９層は貼り床の充填土となる。竈は北壁の西側へ偏った位置に構築されている。主軸方位は竪穴と同様となる。竈の規模は幅0.88ｍで、竪穴内に0.45ｍ突出している。燃焼部での袖間の幅は0.39ｍである。主軸長は0.66ｍ、竪穴外へは0.19ｍ突出する。左袖に２個、右袖には１個の長径28㎝程の扁平な自然礫を袖補強材としている。袖の構築には主に灰黄褐色砂質シルトを用いている。また、袖構築土の下に炭化物・灰層が確認されていることから、少なくとも１度は竈の造り替えがあったと思われる。竈前面には炭化物層が広がり、燃焼部内・竈周辺から土師器甕（177・178）と土師器鍋（180）が破砕した状態で出土している。竪穴中央部の覆土中から須恵器杯蓋（181・182）が出土した。

ＳＩ06（第５図、図版４）：Ｂ４地区Ｘ93Ｙ133に位置する。ＳＩ05に南壁部分を切られているた

め、全体の規模・形態は不明である。この他、重複するＳＫ3115・3125・3126・3127は、いずれもＳＩ06を切る。北壁3.0m、東壁2.0mとなり、おそらく東西方向が長軸となる長方形を呈する。 主軸方位はＮ－87°－Ｗとなる。深さは0.22mで、壁面の立ち上がりはやや傾斜がある。床面はほぼ平坦となる。覆土は６層に分層された。床面中央部から円形のピットが２基検出されている。Ｐ１は直径0.26m、深さ0.31mとなり、Ｐ２は直径0.3m、深さ0.3mとなる。覆土はいずれも、にぶい黄褐色シルトとなる。掘り込みも深く、柱穴であったと思われる。竪穴中央部から土師器鍋（179）が出土している。他に刀子（2083）・土師器・須恵器の破片の出土が認められる。

ＳＩ07（第５図、図版５）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ136に位置する。ＳＩ1308の西に近接する。平面形態は不整な方形を呈し、北壁3.44m、南壁3.42m、東壁2.69m、西壁3.52mを測る。北西隅に約0.6m×0.3mの突出部分がある。主軸方位はＮ－２°－Ｅとなる。深さは0.18mで、床面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりは傾斜を持ち、特に東壁は緩やかである。竈は東壁の南側に寄った位置で確認された。遺存状況は不良で、焼土・炭化物の広がりや遺物が確認されたのみであり、規模・方位などは不明である。覆土は６層に分層された。第２・４層はＳＩ07を切るＳＢ02のＳＰ3360となる。また、ＳＰ3176・ＳＫ3199が重複するが、切り合い関係は不明である。床面を検出した段階で、中央付近でＳＫ3350を確認した。1.2m×0.86m、深さ0.12mの不整な方形土坑となる。竪穴建物に伴うか明らかでないが、長軸方向は異なり、その配置からも柱穴や貯蔵穴といった屋内施設の可能性は低いと思われる。出土遺物には須恵器杯蓋（185）・須恵器杯（186・187）・須恵器鉢（190）・土師器甕（188・189・191～194）・土師器鍋（195）がある。この内185・187・190は竪穴北部の覆土中から、193・195・189は竈周辺から出土している。この他、棒状鉄製品（2085）が竪穴中央部の覆土中から出土する。

ＳＩ08（第５図、図版５）：Ｂ４地区Ｘ89Ｙ141に位置する。ＳＩ04の南側に近接し、北西隅でＳＫ3342に切られる。調査区外に続くため、全体の規模は不明である。西壁は2.32mを測り、北壁・南壁はぞれぞれ1.32m・1.29mまで確認された。方形を基調とする形態となろう。深さは0.15mで、床面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。覆土は４層に分層された。竈等の付属施設は、調査区内にかかる範囲においては検出されなかった。須恵器杯（183・184）が出土している。183は竪穴南西部の覆土中からの出土である。

ＳＩ09（第５図、図版５）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ138に位置する。ＳＩ07の東から約１m離れる。検出面と竪穴覆土との色調・土質の差が明瞭でなく、遺物や炭化物粒の混入を参考にしつつ竪穴部分を確認していった。そのため、本来確認できたであろう北壁部分などは検出できなかったため、全体の規模は不明である。確認できた範囲では東壁2.68m、西壁1.83m、南壁1.73mを測る。深さは0.18mで、床面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。覆土は12層に分層された。土層断面からはＳＩ10との重複関係を判別する事は出来なかった。ＳＢ02の柱穴ＳＰ3150・3318、およびＳＫ3149に切られる。竈は東壁南側で検出された。遺存状況は不良で、右袖のみ確認された。主軸方位はＮ－82°－Ｗとなる。袖部分は竪穴内へ0.47m突出する。煙道部は確認されていない。燃焼部や竈前面には炭化物層が広がり、遺物の出土も多く認められた。床面にてＳＫ3317・3319を検出した。竪穴建物の柱穴であるかは明らかでない。出土遺物には須恵器杯蓋（196）・須恵器杯（197・198）・土師器甕（199～206）が出土している。遺物は竈周辺の床面上を中心に出土している。ただし、203は竪穴南西隅、204は北東隅からの出土である。また、202は明確に検出できなかった竪穴北部から出土したもので、竪穴外の基本層中に包含されていた遺物である可能性が高い。

ＳＩ10（第５図）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ138に位置する。ＳＩ09・ＳＫ3316と重複するが切り合いは不

明である。確認できた範囲は南壁2.49m、東壁1.44m、西壁1.3mである。深さは0.07mと浅い。検出当初は、ＳＩ09と一連のものと思われたが、調査を進めたところ、床面の高さが明らかに違うことから別々の遺構として扱うこととした。

掘立柱建物

ＳＢ01（第６図、図版５）：Ｂ1地区Ｘ100Ｙ158付近に位置する。調査区外に続くと思われ、全体の規模は不明である。確認されたのは２間×１間の部分である。建物の向きはＮ－80°－Ｗとなる。ＳＰ301から墨書された須恵器杯（５）が出土している。建物が検出されたのはＳＤ284の西側となる。また、建物から西へ約３ｍの地点から、さらに西側では谷状の地形となることが確認されている。このことから、ＳＢ01は東側と西側の低地に挟まれた微高地上に構築されたこととなる。

ＳＢ02（第６図）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ137付近に位置する。桁行４間×梁行２間の東西棟側柱建物となる。桁行8.36m×梁行4.66m、面積38.96㎡となる。ＳＩ07・09とＳＡ03 を切っている。建物の向きはＮ－85°－Ｗとなる。ＳＰ3103・3150・3175から土師器の破片が出土している。

ＳＢ03（第７図、図版５）：Ｂ４地区Ｘ88Ｙ135付近に位置する。南西隅が調査区外に出るため、全体の規模は明らかでない。５間×４間の東側に、２間×２間分の空間が付く。桁行14.74m×梁行5.6mを測り、面積は82.54㎡となる。建物の向きはＮ－82°－Ｗの東西棟となる。２間×２間分の部分は庇部分か、もしくは間仕切りされ区分された空間であったと考えられる。柱穴の規模は、礫層を掘り込んでいるものは比較的大きく、長軸が0.6m以上となる。特に５間×４間分と２間×２間分とを仕切る柱穴は最大で1.4mを測る。ＳＰ3352・3311がＳＩ02を切る。ＳＰ3351がＳＸ3349に切られる。ＳＢ05と建物範囲が重複するが、遺構の直接的な切り合いは確認されていない。ＳＰ3047・3059・3068・3301から土師器が出土しているが、破片である。

ＳＢ04（第８図、図版５）：Ｂ４地区Ｘ93Ｙ135付近に位置する。南北棟で桁行は西側で３間、東側で２間ある。梁行は北側で２間、南側で３間を確認した。桁行6.4m×梁行3.7mを測り、面積24.7㎡となる。建物の向きはＮ－４°－Ｅとなる。西側の桁行にあたる柱穴は規模が大きく、長軸1.2～1.5mに及ぶ。建物から５ｍ東にＳＡ04が確認されており、建物に伴うものと考えられる。ＳＰ3101がＳＫ3283を切る。また、ＳＰ3357がＳＩ03の底面から検出されていることから、ＳＢ04の方が古いことが分かる。出土遺物には、ＳＰ3101から土錘（350）、ＳＰ3168から土師器甕（352）がある。

ＳＢ05（第９図）：Ｂ４地区Ｘ87Ｙ138付近に位置する。２間×２間の南北棟側柱建物となるが、東側は１間であった。建物向きはＮ－９°－Ｅとなる。規模は桁行6.16m×梁行4.5m、面積27.72㎡となる。北東のＳＰ3186以外は礫層を掘り込んで柱穴が作られている。ＳＰ3043・3044・3049から土師器は出土している。

ＳＢ06（第９図）：Ｂ２・６地区にまたがって検出された。Ｘ96Ｙ188付近に位置する。調査区外に続く可能性もあり、全体の規模は不明である。確認できたのは２間×１間の部分で、それぞれは、5.04m、4.88mを測る。柱穴からの遺物の出土はなかった。ＳＢ06の北西側には畠と考えられる溝群が検出されている。建物と溝は、ともに黄褐色系の色調を呈する粘質土や粘質シルトが覆土となる。掘立柱建物と畠は重複関係はないため、同時並存していた可能性もある。

柵列

ＳＡ01（第10図）：Ｂ４地区Ｘ100Ｙ138付近に位置する。６基の柱穴が、約2.4～2.5mの間隔で並ぶ。方位はＮ－６°－Ｗとなる。柱穴は円形もしくは楕円形を呈する。規模は径0.75mまでのＳＰ3228・3248・3249・3259と、径１ｍを越えるＳＰ3234・3269がある。ＳＡ01は調査区外へ続き、掘立

柱建物となる可能性もある。ここでは、柵列として扱っておく。遺物は出土していない。

ＳＡ02（第10図）：Ｂ４地区Ｘ100Ｙ137付近に位置する。５基の柱穴が、約1.7 ～2.0mの間隔で並ぶ。方位はＮ－10°－Ｗとなる。柱穴の規模はＳＰ3258・3237は直径0.7m、他は0.4m程である。南側３基はＳＤ3250の埋没後に構築されている。ＳＡ02西側は、中世以降の自然流路ＳＤ2172があり、古代の遺構確認面が削られている。そのため、本来は掘立柱建物であった一部がＳＡ02となった可能性もある。ＳＰ3237から土師器杯（346）が出土している。

ＳＡ03（第10図）：Ｂ４地区Ｘ95Ｙ139付近に位置する。４基の柱穴が、約1.4～1.8mの間隔で並ぶ。方位はＮ－１°－Ｅとなる。規模は径0.7～0.8m程の円形・楕円形である。柵列を構成するＳＰ3155がＳＢ02のＳＰ3154に切られるため、ＳＡ03が後出であることが分かる。ＳＰ3106・3155から土師器が出土している。

ＳＡ04（第８図）：Ｂ４地区Ｘ92Ｙ139付近に位置する。４基の柱穴が、約2.0～2.5mの間隔で並ぶ。方位はＮ－６°－Ｅとなる。規模は径0.6m程のＳＰ3276・3345と、径0.9m程のＳＰ3137・3278の２種からなる。方位は若干ずれるが、配置から考えるとＳＢ04に伴う柵列の可能性が高い。ＳＰ3137から土師器が出土している。

ＳＡ05（第10図）：Ｂ４地区Ｘ89Ｙ134付近に位置する。３基の柱穴が、約1.4～1.6mの間隔で並ぶ。調査区西側へと続く可能性もある。方位はＮ－78°－Ｗとなる。規模は径0.5～0.75mと一様ではない。ＳＰ3335から土師器が出土している。

土坑

ＳＫ221（第11図）：Ｂ１地区Ｘ119Ｙ144に位置する。ＳＤ263の西側に隣接する。直径0.77mの円形を呈する。深さは0.05mを測る。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ224（第11図）：Ｂ１地区Ｘ118Ｙ145に位置する。調査区外にかかるため形態・規模は不明である。深さは0.08mを測る。土師器甕もしくは鉢（13）が出土している。

ＳＫ232（第11図）：Ｂ１地区Ｘ112Ｙ144に位置する。ＳＤ223の南側に隣接する。調査区外にかかるため形態・規模は不明である。隅丸方形になると思われる。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ234（第11図）：Ｂ１地区Ｘ113Ｙ146に位置する。ＳＤ223の南側に隣接する。0.97m×0.8mの不整楕円を呈し、深さは0.05mを測る。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ235（第11図）：Ｂ１地区Ｘ112Ｙ146に位置する。ＳＤ231・270の間にあり、ＳＤ270を切る。1.15m×0.75mの楕円形を呈し、深さは0.1mを測る。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ256（第11図）：Ｂ１地区Ｘ121Ｙ144、ＳＤ262・263の北側に位置する。0.52m×0.36mの不整形を呈し、深さは0.15mを測る。須恵器杯蓋（４）の他、土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ261（第11図）：Ｂ１地区Ｘ121Ｙ144に位置する。ＳＫ256の南西に隣接する。0.7m×0.42mの楕円形を呈し、深さは0.12mを測る。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ272（第11図）：Ｂ１地区Ｘ111Ｙ145に位置する。ＳＤ273を切る。0.91m×0.52mの不整な楕円形を呈し、深さは0.26mを測る。土師器・須恵器が出土する。

ＳＫ800（第11図）：Ｂ２地区Ｘ101Ｙ173に位置する。ＳＤ329の東側に隣接する。1.0m×0.88mの楕円形を呈し、深さは0.45mを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ810（第11図）：Ｂ２地区Ｘ99Ｙ179に位置する。調査区外へ続くため、形態・規模は不明である。深さは0.06mを測る。須恵器杯（92）が出土している。

ＳＫ815（第11図）：Ｂ２地区Ｘ98Ｙ178に位置する。直径0.32mの円形を呈し、深さは0.07mを測

る。須恵器が出土する。

ＳＫ828（第11図）：Ｂ２地区Ｘ101Ｙ172に位置する。ＳＫ300の東側に隣接する。1.35m×0.9mの不整形を呈し、深さは0.18mを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ2056（第11図）：Ｂ４地区Ｘ42Ｙ149に位置し、ＳＫ76の南に隣接する。中世の遺構確認面で、すでに確認することができた。中世の遺構であるＢ３地区ＳＫ1460に切られているために全体の形態・規模は不明である。2.3m×1.95m以上となる。深さは0.05～0.07mと浅い。須恵器杯（330・331）の他、土師器・中世土師器・珠洲が出土している。後述するＳＫ2076同様に中世の遺構検出面で確認されたが、覆土や出土遺物から古代の遺構と判断された。

ＳＫ2070（第11図）：Ｂ４地区Ｘ42Ｙ148に位置し、ＳＫ2056・2076の西に隣接する。中世の遺構確認面で、すでに確認することができたが、覆土により古代の遺構と判断された。2.05m×1.3mの不整楕円形を呈し、深さは0.05ｍとなる。遺物は出土していない。

ＳＫ2076（第12図）：Ｂ４地区Ｘ45Ｙ149に位置し、ＳＫ2056・2070の北側に隣接する。中世の遺構検出面の高さで、すでに確認することができた。4.3m×3.3mの南北に長い方形を呈する。深さは0.2mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかな傾斜を持つ。遺構内の南西部分には拳大～人頭大の礫が散在し、北東側では主に拳大の礫が密集した状態で出土した。後者を除去した下からＳＫ2568～2572が検出された。覆土や、古代の遺物の出土が比較的多いことから、古代の遺構として扱った。

ＳＫ2591（第12図）：Ｂ４地区Ｘ49Ｙ146に位置する。1.49m×1.28mの南北に長い隅丸方形を呈する。深さは0.1mであった。遺物は出土していない。

ＳＫ3053（第12図）：Ｂ４地区Ｘ88Ｙ141に位置する。ＳＢ03の東側に隣接する。0.86m×0.78mの楕円形を呈する。深さは0.15mある。須恵器の壺蓋（337）・杯（338）の他に土師器が出土している。

ＳＫ3055（第12図）：Ｂ４地区Ｘ88Ｙ138に位置する。ＳＢ05の北西隅の柱穴ＳＰ3280の南側に隣接する。0.62m×0.52mの楕円形を呈する。深さは0.32mとなる。須恵器の杯蓋（339）が出土している。

ＳＫ3072（第12図）：Ｂ４地区Ｘ90Ｙ153に位置する。ＳＢ03の北西隅の柱穴ＳＰ3334を切り、調査区外へ続く。全体の規模は不明だが、南北で1.32mを測る。深さは0.1mで、方形を基調とする平面形と思われる。覆土上層に炭化物・焼土が混入する。土師器が出土している。

ＳＫ3075（第12図）：Ｂ４地区Ｘ91Ｙ133に位置する。ＳＢ03の北西隅の柱穴ＳＰ3334の北側に隣接する。0.9m×0.72mの楕円形を呈する。深さは0.08～0.22mを測る。

ＳＫ3080（第12図）：Ｂ４地区Ｘ91Ｙ134に位置する。ＳＩ05の南東隅を切る。直径1.1mの円形を呈する。深さは0.32mを測る。覆土中層に炭化物を含む層が形成されている。覆土中から土師器の破片が出土している。

ＳＫ3110（第12図）：Ｂ４地区Ｘ95Ｙ140に位置する。ＳＫ3109に切られる。0.92m×0.59mの楕円形を呈する。深さは0.08mを測る。土師器甕の破片が出土している。

ＳＫ3117（第12図）：Ｘ94Ｙ135に位置する。ＳＢ04の北西隅の柱穴ＳＰ3357・ＳＫ3118を切る。0.97m×0.54mの楕円形を呈する。深さは0.07～0.22mで、東側がやや深くなる。覆土中から須恵器杯（340・341）が出土する。

ＳＫ3140（第13図）：Ｂ４地区Ｘ89Ｙ140に位置する。ＳＩ08の西側に隣接する。不整の台形を呈し、長軸2.05m、短軸1.35～1.95mを測る。深さは0.09～0.16mで、北側がやや深くなる。土師器甕の破片が出土している。

ＳＫ3145（第13図）：Ｂ４地区Ｘ97Ｙ138に位置する。ＳＩ09の北東部分を切る。1.14m×0.67mの楕円形を呈する。深さは0.15mを測る。覆土中には炭化物の混入が目立つが、重複するＳＩ09竈周辺の炭化物が混ざったものと思われる。出土遺物には土師器甕（354）・壺（355）があるが、これらもＳＩ09の遺物が混入したものと考えられる。

ＳＫ3163（第13図）：Ｂ４地区Ｘ94Ｙ137に位置する。ＳＫ3283の東に隣接する。ＳＫ3099に切られる。ＳＫ3324を切る。直径1.35mの不整円形を呈する。深さは0.1～0.13mで、東側がやや浅くなる。土師器甕の破片が出土する。

ＳＫ3166（第13図）：Ｂ４地区Ｘ93Ｙ136に位置する。ＳＩ03の南東に隣接する。直径0.4m程の円形を呈し、深さは0.12mを測る。土師器片が出土している。

ＳＫ3169（第13図）：Ｂ４地区Ｘ94Ｙ134に位置する。ＳＩ06の北に隣接する。0.79m×0.79mの丸味を帯びた方形を呈する。深さは0.18mを測る。土師器甕の破片が出土している。

ＳＫ3187（第13図）：Ｂ４地区Ｘ88Ｙ140に位置する。ＳＢ05の北東隅の柱穴ＳＰ3186の南側に隣接し、ＳＤ3196の北端と接する。1.35m×0.86mの楕円形を呈し、深さは0.15～0.19mを測る。覆土中には炭化物の混入が目立ち、特に上層には炭化物・焼土が多く含まれる。遺物は出土していない。

ＳＫ3253（第13図）：Ｂ４地区Ｘ111Ｙ138に位置する。ＳＡ01とＳＡ02の間に位置し、ＳＫ3254を切る。0.7m×0.6mの楕円形を呈し、深さは0.37mを測る。釘（2081）が出土している。

ＳＫ3261（第13図）：Ｂ４地区Ｘ110Ｙ137に位置する。ＳＡ02の東側に位置し、ＳＫ3260を切る。中世の遺構であるＳＤ2172に西側が破壊されている。確認できる規模は南北1.4m、東西0.75mで、深さは0.29mを測る。壁面は緩やかな傾斜を持つ。覆土中から須恵器杯（327～329）の他、土師器甕の破片が出土している。

ＳＫ3283（第13図、図版７）：Ｂ４地区Ｘ94Ｙ136に位置する。ＳＩ07の南側に隣接する。ＳＢ02の柱穴ＳＰ3103、ＳＢ04の柱穴3101・3284に切られる。2.33m×1.6mの南北に長い長方形を呈する。深さは0.13mを測り、底面はほぼ平坦である。土師器甕（353）の他、須恵器・土師器の破片が出土している。

ＳＫ3285（第13図）：Ｂ４地区Ｘ87Ｙ139に位置する。ＳＩ02の北壁部分を切る。0.92m×0.84mの楕円形を呈し、深さは0.11mを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ3326（第13図）：Ｂ４地区Ｘ94Ｙ133に位置する。調査区西壁に接している。0.75m×0.52mの楕円形を呈し、深さは0.16mを測る。須恵器杯（345）が出土する。

ＳＫ3346（第13図、図版７）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ137に位置する。ＳＩ07とＳＩ09の間に位置する。0.44m×0.3mの楕円形を呈し、深さは0.3mを測る。須恵器杯（268）が出土する。

溝

ＳＤ230（第14・19図）：Ｂ１地区Ｘ113Ｙ145付近に位置する。東西方向に走り、ＳＤ231・240・252に平行する溝で、調査区外へ続く。確認できた長さは約3.8m、幅0.6m程となる。深さは0.08mを測る。須恵器杯蓋（５）が出土している。

ＳＤ240（第14・19図）：Ｂ１地区Ｘ108Ｙ146に位置する。東西方向に走り、ＳＤ230・231・252に平行する溝で、調査区外へ続くため確認できた長さは約3.5m、幅1.17m程となる。深さは、0.26mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。須恵器杯（８）が出土している。

ＳＤ243（第14・19図）：Ｂ１地区Ｘ119Ｙ140に位置する。南北方向に走り、調査区外南側へ続く。確認できた長さは約9.1mを測る。幅は1.69m、深さは0.34mを測る。壁面の立ち上がりはやや傾斜を

持つが、垂直に近い。底面では地山礫層が露出する。土師器・須恵器が出土している。

ＳＤ263（第14・19図）：Ｂ１地区Ｘ119Ｙ144に位置する。東西方向に走り、調査区外東側に続く。確認できた長さは2.6m、幅は0.64mを測る。深さは0.1mとなる。土師器が出土している。ＳＤ263の北側には、約１mの間隔を空けてＳＤ262が平行し、同様に東へ続く。

ＳＤ2960（第14・21図）：Ｂ４地区Ｘ40Ｙ150から、Ｘ50Ｙ148にかけて南北方向に走り、調査区外へと続く。ＳＫ2076・2599に切られる。確認できた長さは約21m、幅は0.85～2.2mを測る。深さは0.21～0.46mとなった。底面は南側から北側に向かって緩やかに低くなっており、南端と北端の比高差は0.15mとなる。須恵器杯（326）が出土する。

ＳＤ3195（第14・20図）：Ｂ４地区Ｘ88Ｙ142に位置する。南北に走り、調査区外北側に続く。ＳＢ03の東側に隣接する。確認できた長さは約3.6m、幅は0.24mを測る。深さは0.08mとなった。底面からＳＫ3337・3338が検出された。ＳＤ1196と2.2mの間隔を空けて、平行している。遺物は出土していない。

ＳＤ3196（第14・20図）：Ｂ４地区Ｘ87Ｙ140に位置する。南北に走る。ＳＢ05の東側に隣接する。長さは3.6m、幅は0.37mを測る。深さは0.09mとなる。ＳＢ03の柱穴ＳＰ3313と、ＳＫ3189に切られる。ＳＤ3195と2.2mの間隔を空けて、平行している。土師器・須恵器が出土している。

ＳＤ3200（第14・19図）：Ｂ４地区Ｘ97Ｙ134に位置する。ＳＩ07の西側に隣接し、その西壁・北壁の一部分に沿うようなＬ字状の形態となる。北辺は1.1m、西辺は3.25mを測る。幅は0.23～0.6m、深さは0.09 mとなる。ＳＫ3124に切られ、ＳＫ3329を切る。遺物は出土していない。

ＳＤ3206（第14・19図）：Ｂ４地区Ｘ96Ｙ134に位置する。ＳＩ07の西壁から約２mの間隔を空けている。南北方向に走り、長さは3.9m、幅は0.7～1.0mとなる。深さは0.09mを測る。ＳＤ3209・ＳＫ3211に切られる。土師器が出土している。

ＳＤ3209（第14・19図）：Ｂ４地区Ｘ95Ｙ134に位置する。ＳＩ07の西壁から約1.9m、ＳＩ06の北壁から約1.1mの間隔を空け、それぞれに平行する部分からなるＬ字状の形態となる。南辺は1.45m、東辺は4.15mを測る。幅は0.45m、深さは0.06mとなる。ＳＤ3206を切り、ＳＫ3288に切られる。土師器が出土している。

自然流路

ＳＤ284（第14・22図、図版８）：Ｂ１地区Ｘ100～103Ｙ161～168に位置する。南から北に向かって流れる自然流路である。東西幅で約11～12m、深さは最深部で約1.3mを測る。壁面は緩やかな傾斜を持って立ち上がる。覆土は粘土層・シルト層・砂層が、色調や混入物を変えつつ互層状に堆積している。また、基本層Ⅳａ～Ⅳｃ層はＳＤ284の埋没後に形成されたことが確認された。Ⅳａ～Ⅳｃ層が他の部分に比べ、ＳＤ284付近で一段低くなっていることから、後の地形に影響を及ぼしていたことが分かる。このやや落ち込んだ地形という特性からか、中世の段階でＳＤ119が掘削されている。出土遺物は須恵器杯蓋（10・11）・須恵器杯（12）が出土している。

ＳＤ3347（第14・19図、図版８）：Ｂ４地区Ｘ100～105Ｙ132～140に位置する。東から西に向かって流れる自然流路である。Ｂ１・４地区において確認されている。また、Ｙ135より西側の部分では中世の自然流路ＳＤ2172と重複しており、その底面部分を検出したにとどまる。検出された範囲において、南北幅は約６～10m、深さは最深部で0.9mを測る。壁面はやや傾斜を持って立ち上がり、特にＢ１地区部分での北壁は緩やかな立ち上がりとなる。覆土は粘土層・シルト層・砂層が、色調・粒度・混入物を異にしながら互層状に堆積している。また、基本層Ⅳａ～Ⅳｃ層は、ＳＤ1347の埋没後

に形成されている。そのため、ＳＤ3347部分では他の部分に比べ、一段低くなる。その後堆積したⅢ層より上では、徐々に水平に堆積するようになり、中世の遺構が検出されるⅢａ・Ⅲｂ層ではその上面はほぼ平坦になっている。ＳＤ3347の北側では遺構の分布が漫然と分布している。その南側は、Ｂ１地区においてはやや低い地形となり、遺構分布が希薄となる。また、Ｂ４地区では掘立柱建物・竪穴建物などの遺構が集中的に検出されている。Ｂ１地区部分での出土遺物はＳＤ252として提示している。土師器皿（14・15）・土師器椀（16～18）・緑釉陶器碗（19）・須恵器杯蓋（19・20）・須恵器杯（22～31）が出土している。Ｂ４地区では須恵器杯蓋（250～255）・須恵器杯身（256～267・269～311・460）・土師器椀（312・313）・土師器皿（314）・黒色土器（315）・土師器甕（316・317）・須恵器壺（318～320）・緑釉陶器（321・322）・須恵器瓶（323～325）がある。この他、覆土中から桃・李の種子が出土している。他に加工材や杭状の木材が出土している。また、ＳＤ3347を切っている中世の自然流路ＳＤ2172においても古代の遺物（207～249）が多く出土している。この内のいくつかは本来ＳＤ3347内にあったものだが、他の遺構の遺物も少なからず混入していると思われる。

畠

ＳＤ801～804・4412・4414・4418・4421・4422・4433・4435ａ・4435ｂ・4437・4438・4440・4455（第15図、図版９）：畠のさく部分と考えられる遺構がＢ２地区北東とＢ６地区南部にまたがった範囲で検出された。16条の溝として検出されている。溝の方位にはＮ－13°－ＷからＮ－14°－Ｅの振幅があるが、大きく２つの方向に集中する。一つはＮ－13°－Ｗで、ＳＤ804・802・801が揃う。もう一つのＮ－６～８°－ＷではＳＤ803・4412・4414・4418・4421・4422・4433が認められる。方位が異なるＳＤ4414がＳＤ801を切ることと、方位が近似するＳＤ4422とＳＤ4421の重複関係が存在することから、少なくとも２回は畝の作り替えがあったと思われる。全体の長さが判明するのは６条のみで、3.6～10.6ｍと一様ではない。幅も0.3～0.7ｍまでが確認されている。深さは、ほとんどの溝で0.07ｍ程度にとどまる。傾向として、ＳＤ422より東側では長さが5.2～5.4ｍ程、幅0.35ｍ程度となる溝が多い。それより西側では長さがやや長く、幅も0.4～0.6ｍと広めの溝が多い。また、ＳＤ4435ａ・ｂの北側では不整形の土坑状となる部分がある。掘り込みは浅く、性格は明らかでない。Ｂ２地区ＳＤ801・804から土師器の破片が出土している。

集石遺構

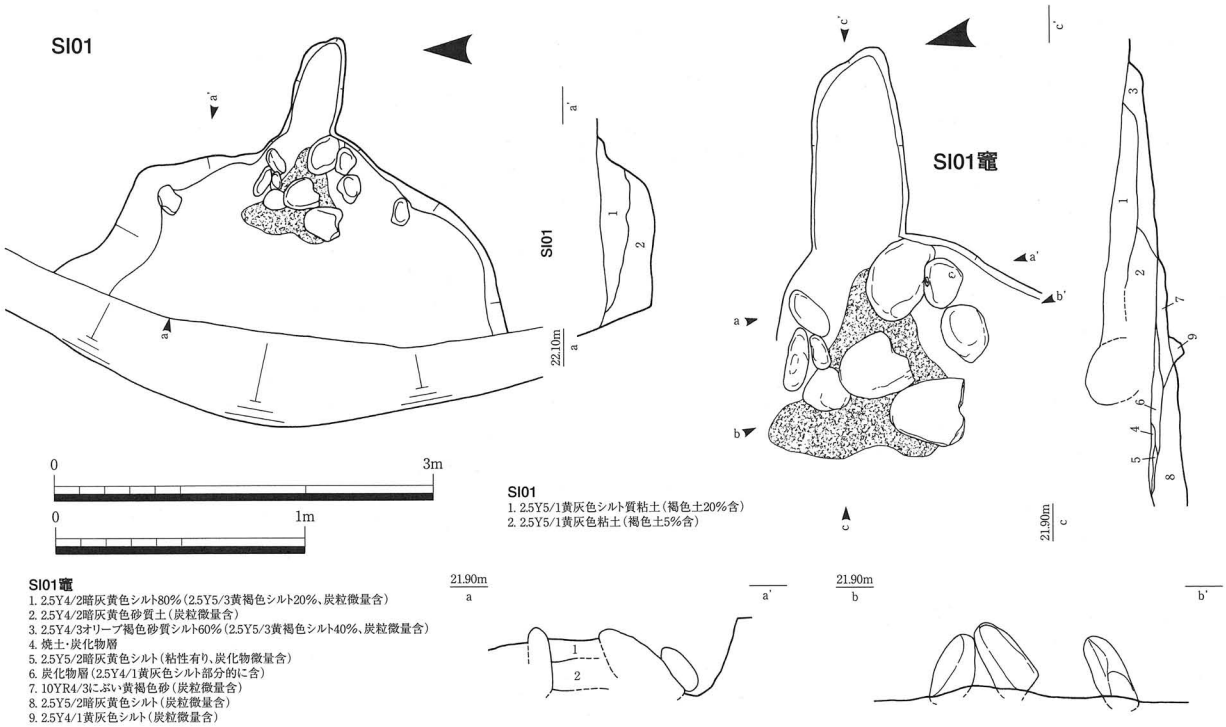
ＳＸ3348（第16・17図、図版９）：Ｂ４地区Ｘ90Ｙ136に位置する。ＳＸ3349の北に隣接する。直径30㎝までの礫によって構築された集石遺構で、平面は3.7ｍ×3.35ｍの隅丸方形をなし、高さ0.5ｍ程の石積となる。石積は３層に分層された。まず、基盤礫層の上面に直径20㎝の自然礫が混ざったにぶい黄褐色シルト層が形成される。その上に部分的ながら、小礫混じりのにぶい黄褐色シルト層がある。それらの上を直径30㎝の自然礫を主体とする層が全体に覆っている。これらの中から、土師器・須恵器がわずかに出土している。ＳＸ3348を構成する礫は、周囲に広がる基盤礫層のそれが起源だと思われる。周辺の遺構分布から、礫層部分では竪穴建物の構築は認められず、掘立柱建物については構築が確認されている。このことから、掘立柱建物構築に伴う、整地作業工程の一つとして礫の除去が行われ、その集積の結果としてＳＸ3348が形成されたものと思われる。なお、ＳＢ03のＳＰ3074・3299と重複し、ＳＸ3348が後出することが分かる。つまり、ＳＢ03以外にその起因を求めねばならない。ＳＢ02の構築範囲では砂質の基本層であるため、直接的な関連が深いとは思われない。ＳＢ04では礫層を掘り込む柱穴は少ないが、並存すると思われるＳＡ04との間では礫層が高く、この空間を利用するために整地を行った可能性が考えられる。ＳＢ05は柱穴の多くが礫層を掘り込んでいる。ＳＢ

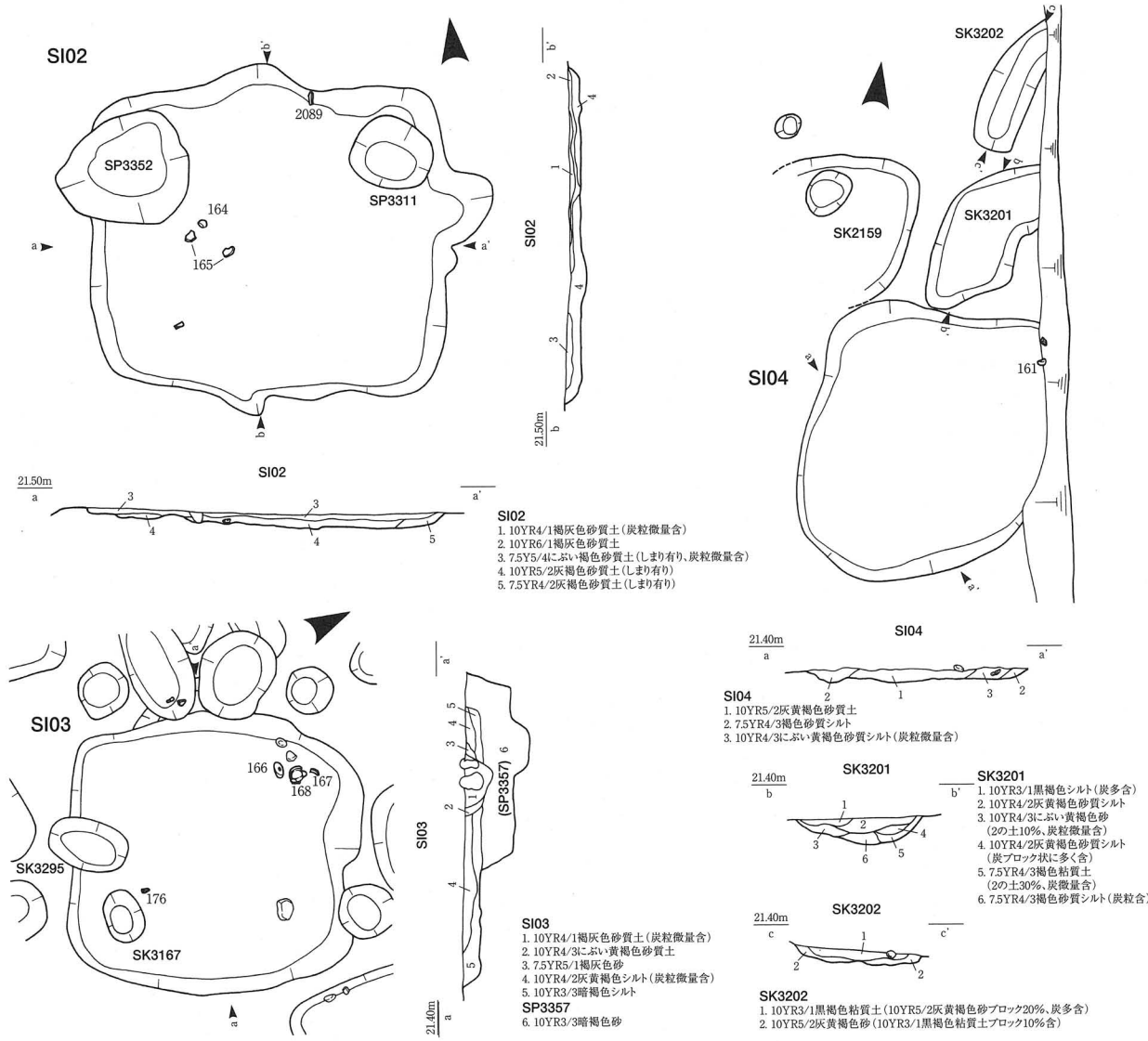
03との前後関係が不明確だが、仮にＳＢ05構築に伴いＳＸ3348が形成されたとするならば、それはＳＢ03廃絶よりも後になる。ＳＢ05がＳＢ03より後出するとした場合、すでにＳＢ03構築によりある程度整地された範囲にあるため、ＳＸ3348を形成するような礫の排出がなされたとは考えにくい。よって、ＳＢ04・ＳＡ04の構築に関係してＳＸ3348が形成されたと考えることが妥当であろう。

ＳＸ3349（第16・17図、図版９）：Ｂ４地区Ｘ87Ｙ135に位置する。ＳＸ3348から南へ2.55m、ＳＸ3353から北へ1.26m離れた位置にある。直径30cmまでの礫が表面を覆っている集石遺構である。平面は1.33m×0.92mの不整楕円形をなし、0.4mの高さとなる。石積部分を除去したところ、0.62m×0.51mの楕円形で、深さ0.17mの土坑が検出された。土坑部分は暗褐色の粘質土を基調とする第２・３層により埋没している。この内、第２層中には骨片が含まれていた。成人のヒトで、肢骨の一部であることが判明している。この上に礫や炭化物を含む黒褐色の粘質土である第１層がマウンド状に作られている。土坑状に掘り込んだ部分は、ＳＢ03のＳＰ3351を切っていることから、ＳＢ03廃絶後にＳＸ3349は構築されたこととなる。土師器破片が出土している。ヒトの骨が出土していることから、墓である可能性がある。

ＳＸ3353（第16図、図版９）：Ｂ４地区の調査区ほぼ中央部において検出された集石遺構である。南北はＸ80～Ｘ87、東西はＹ133～Ｙ137にかけての範囲となる。調査区外へ続くため、全体の規模は不明である。確認された範囲では南北12m、東西７m、高さ0.5mを測る。石積みは５層に分層された。基盤礫層の上面に褐色の砂質シルトが形成され、部分的に黄褐色系、黒褐色系のシルトがあり、これらの上面を全体的に暗褐色のシルトが覆っている。各層中には径10～30cm程までの礫が多く混ざる。また、遺物の混入も各層に認められた。ＳＸ3353の範囲以外では、基本層であるⅣａ層以下が水平堆積している。古代の遺物包含層より上層の無遺物層であるⅣａ～Ⅳｃ層が形成される段階で、すでにマウンド状のＳＸ3353が構築されていたものと考えられる。ＳＸ3353の成因は土地利用に際する整地のために、地山礫層の一部を除去したことにより形成されたものと思われる。その整地作業がＢ４地区で検出されたＳＢ03構築に関わると思われるが、当時の居住域が調査区外へ続く可能性もあり、ＳＸ3353の成因は判然としない。出土遺物には須恵器杯蓋（356・357）・須恵器杯（358～363）・須恵器壺（364）・土師器鍋（366・367）・土師器把手付小形甕（369）・土錘（365）がある。

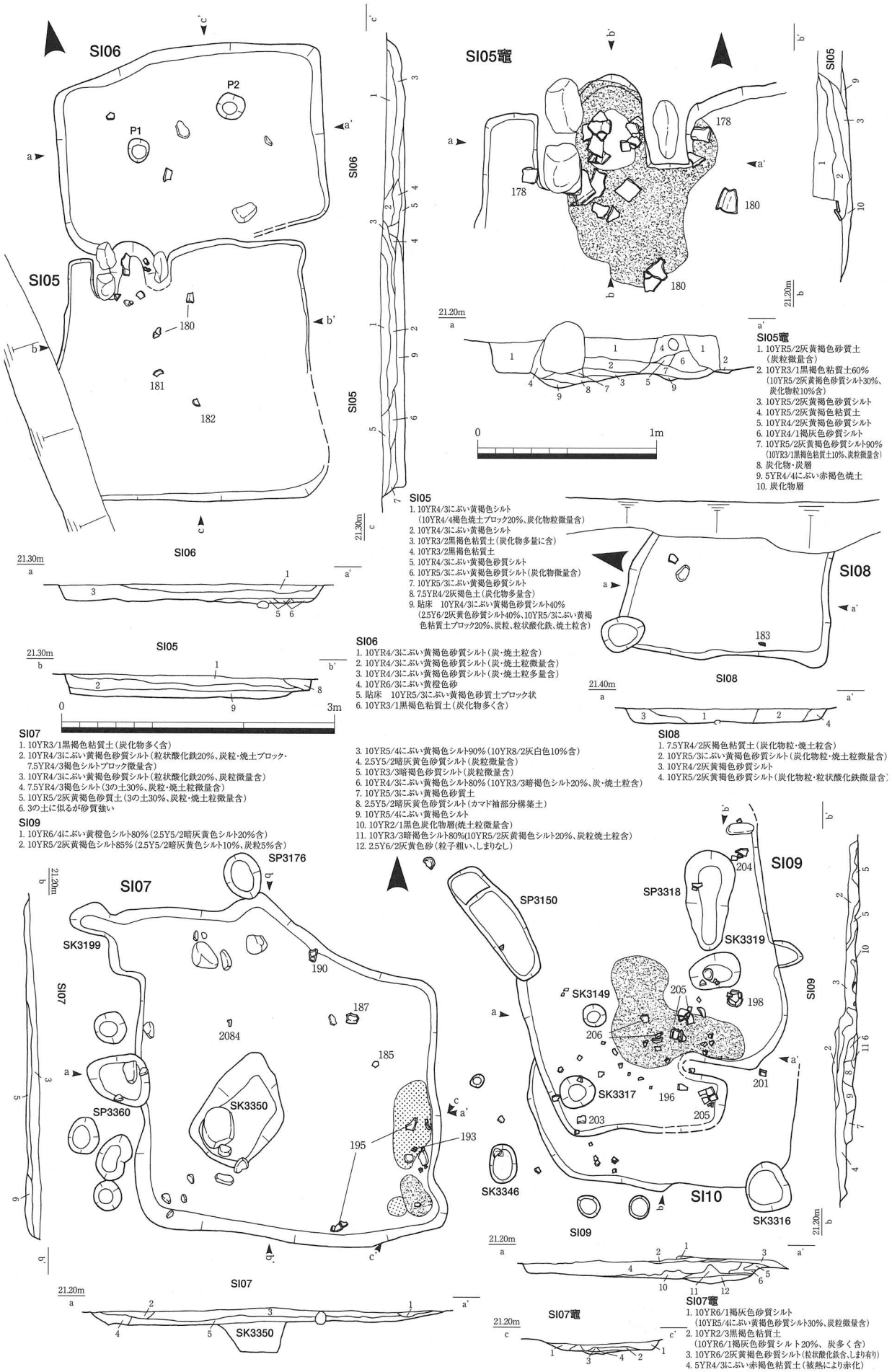
（青山　晃）





第4図　遺構実測図

SI01　SI02　SI03　SI04　SK3201　SK3202　SP3357



SI05竈
1. 10YR5/2灰黄褐色砂質土（炭粒微量含）
2. 10YR3/1黒褐色粘質土60%（10YR5/2灰黄褐色砂質シルト30%、炭化物粒10%含）
3. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト
4. 10YR5/2灰黄褐色粘質土
5. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
6. 10YR4/1褐灰色砂質シルト
7. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト90%（10YR3/1黒褐色粘質土10%、炭粒微量含）
8. 炭化物・炭層
9. 5YR4/4にぶい赤褐色焼土
10. 炭化物層

SI05
1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト（10YR4/4褐色焼土ブロック20%、炭化物粒微量含）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
3. 10YR3/2黒褐色粘質土（炭化物多量に含）
4. 10YR3/2黒褐色粘質土
5. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
6. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物微量含）
7. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト
8. 7.5YR4/2灰褐色土（炭化物多量含）
9. 貼床　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト40%（2.5Y6/2灰黄色砂質シルト40%、10YR5/3にぶい黄褐色粘質土ブロック20%、炭粒、粒状酸化鉄、焼土粒含）

SI06
1. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭・焼土粒含）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭・焼土粒微量含）
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭・焼土粒多量含）
4. 10YR6/3にぶい黄橙色砂
5. 貼床　10YR5/3にぶい黄褐色砂質土ブロック状
6. 10YR3/1黒褐色粘質土（炭化物多く含）

SI07
1. 10YR3/1黒褐色粘質土（炭化物多く含）
2. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（粒状酸化鉄20%、炭粒・焼土ブロック・7.5YR4/3褐色シルトブロック微量含）
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（粒状酸化鉄20%、炭粒微量含）
4. 7.5YR4/3褐色シルト（3の土30%、炭粒・焼土粒微量含）
5. 10YR5/2灰黄褐色砂質土（3の土30%、炭粒・焼土粒微量含）
6. 3の土に似るが砂質強い

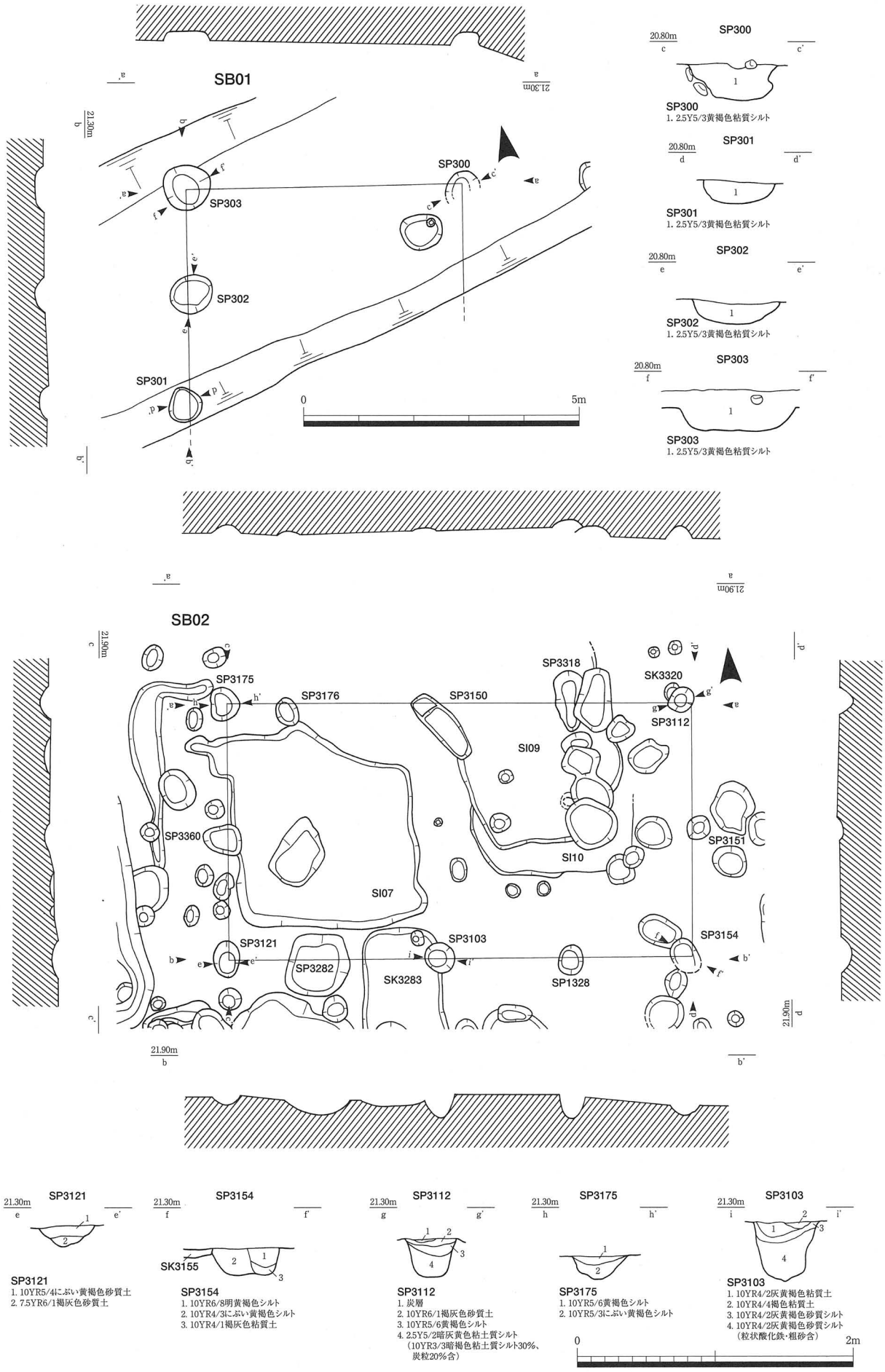
SI09
1. 10YR6/4にぶい黄橙色シルト80%（2.5Y5/2暗灰黄色シルト20%含）
2. 10YR5/2灰黄褐色シルト85%（2.5Y5/2暗灰黄色シルト10%、炭粒5%含）
3. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト90%（10YR8/2灰白色10%含）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（炭粒微量含）
5. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（炭粒微量含）
6. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト80%（10YR3/3暗褐色シルト20%、炭・焼土粒含）
7. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
8. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（カマド袖部分構築土）
9. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
10. 10YR2/1黒色炭化物層(焼土粒微量含)
11. 10YR3/3暗褐色シルト80%(10YR5/2灰黄褐色シルト20%、炭粒焼土粒含)
12. 2.5Y6/2灰黄色砂（粒子粗い、しまりなし）

SI08
1. 7.5YR4/2灰褐色粘質土（炭化物粒・焼土粒含）
2. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物粒・焼土粒微量含）
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
4. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト（炭化物粒・粒状酸化鉄微量含）

SI07竈
1. 10YR6/1褐灰色砂質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト30%、炭粒微量含）
2. 10YR2/2黒褐色粘質土（10YR6/1褐灰色砂質シルト20%、炭多く含）
3. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト（粒状酸化鉄含、しまり有り）
4. 5YR4/3にぶい赤褐色粘質土（被熱により赤化）

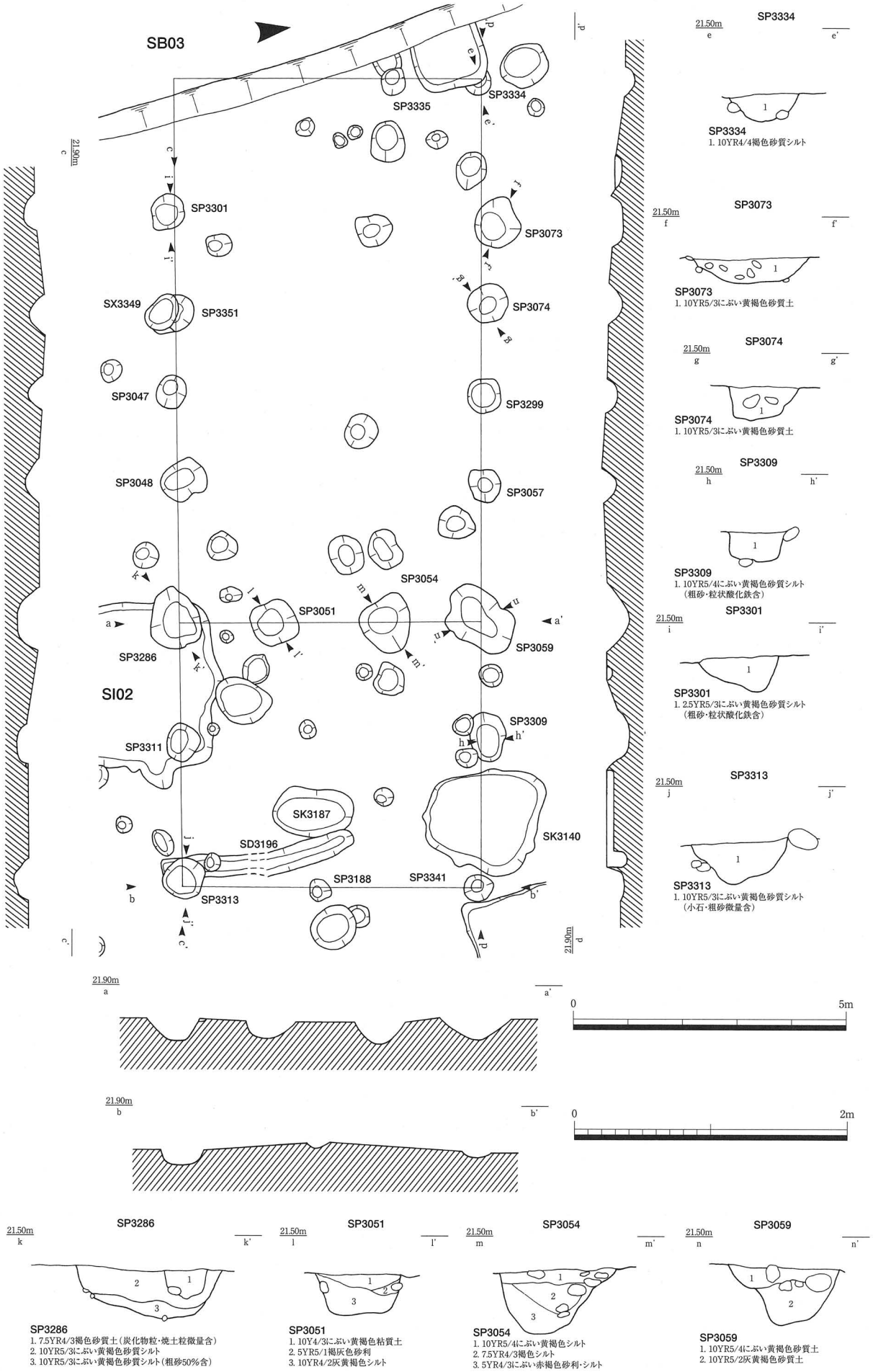
第5図　遺構実測図

SI05　SI06　SI07　SI08　SI09　SI10



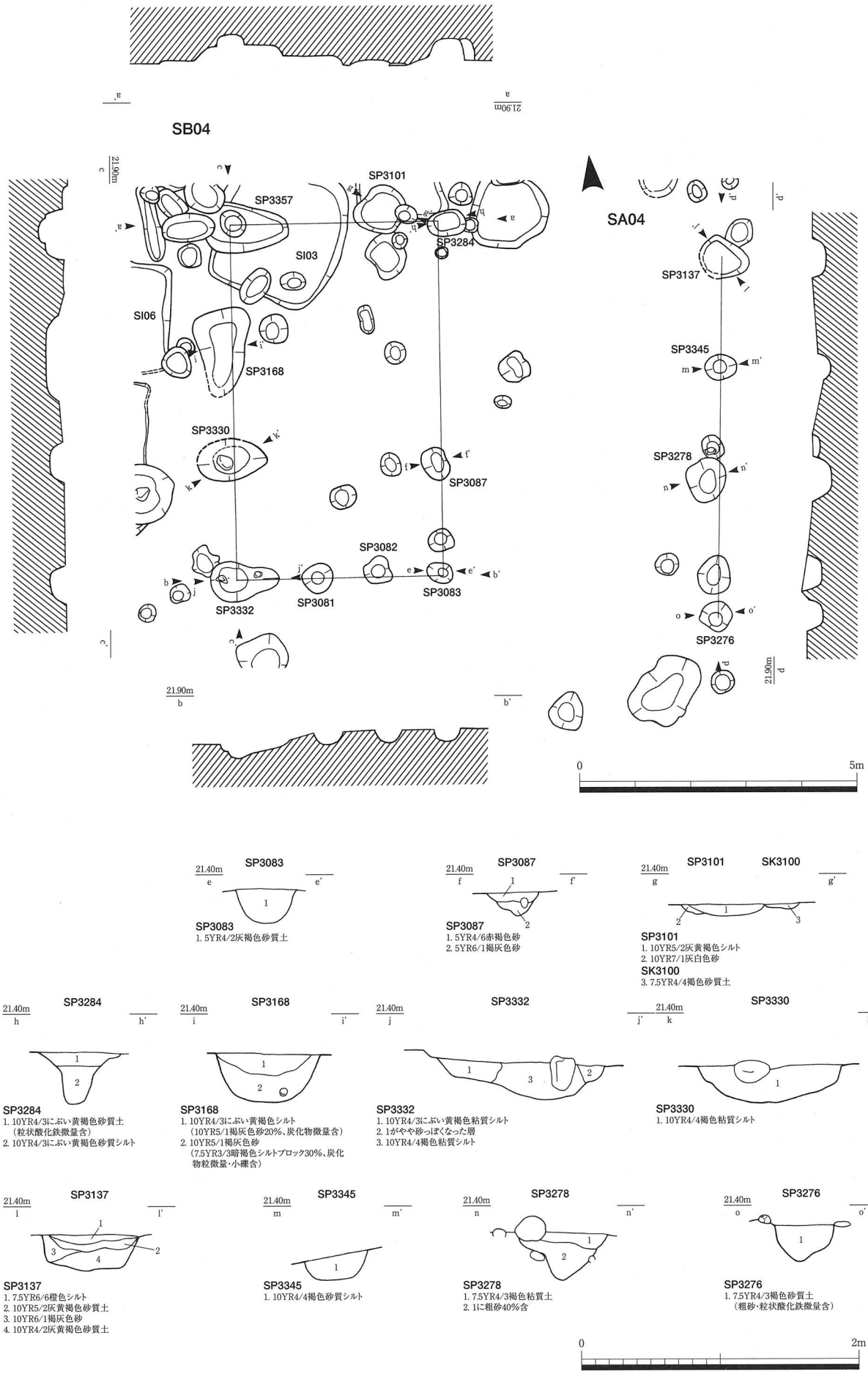
第6図　遺構実測図

SB01　SB02



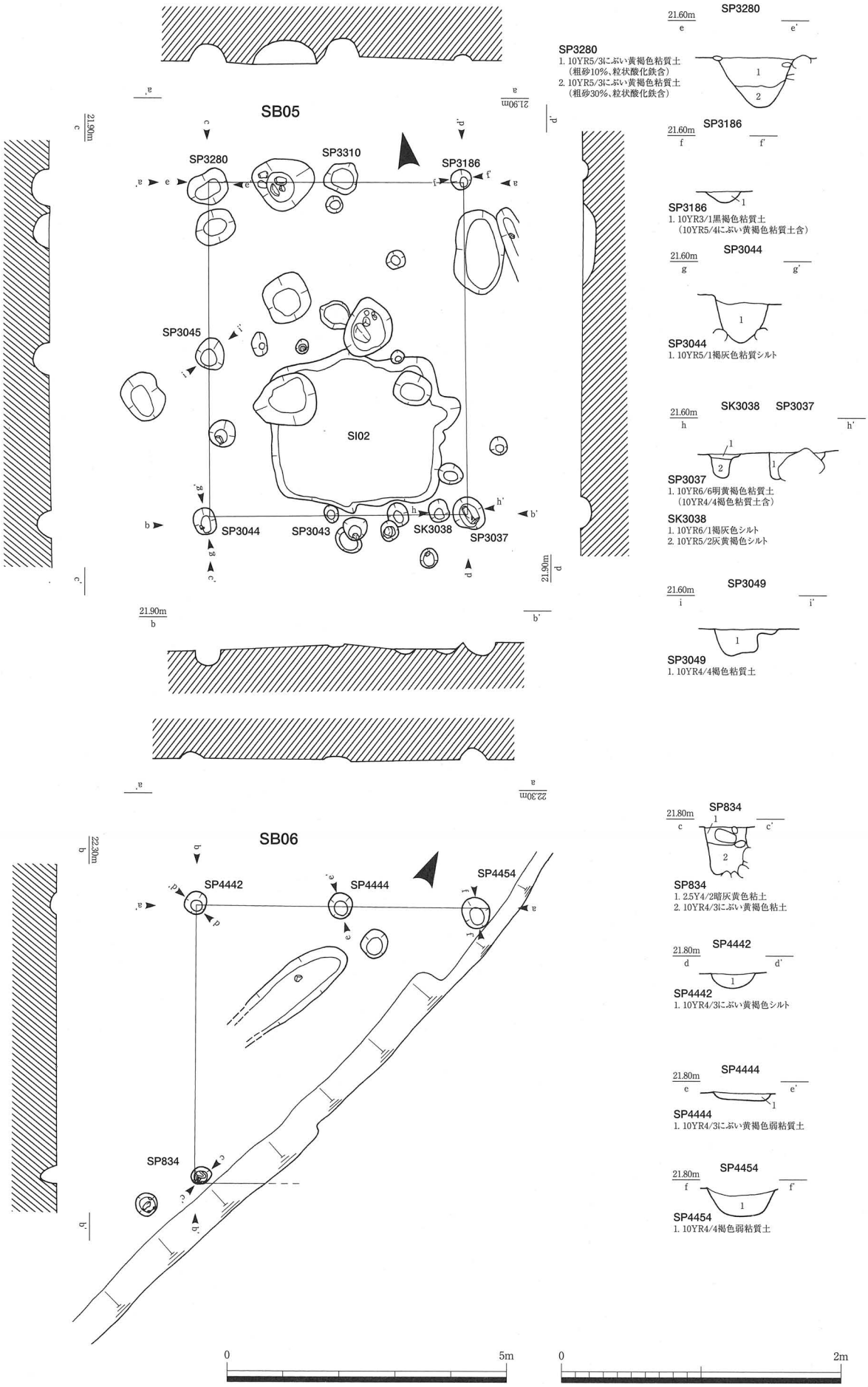
第7図　遺構実測図

SB03



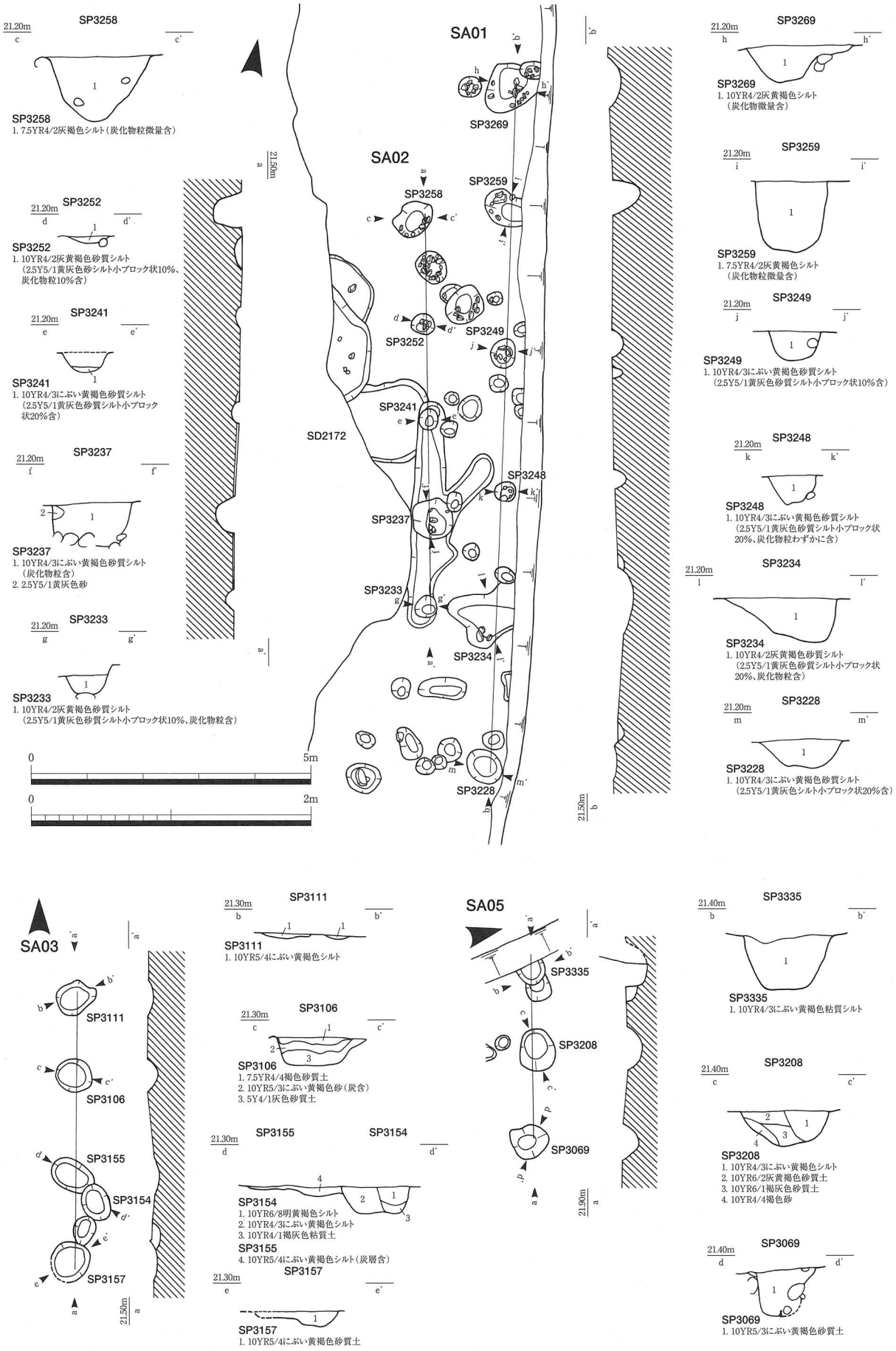
第8図　遺構実測図

SB04　SA04



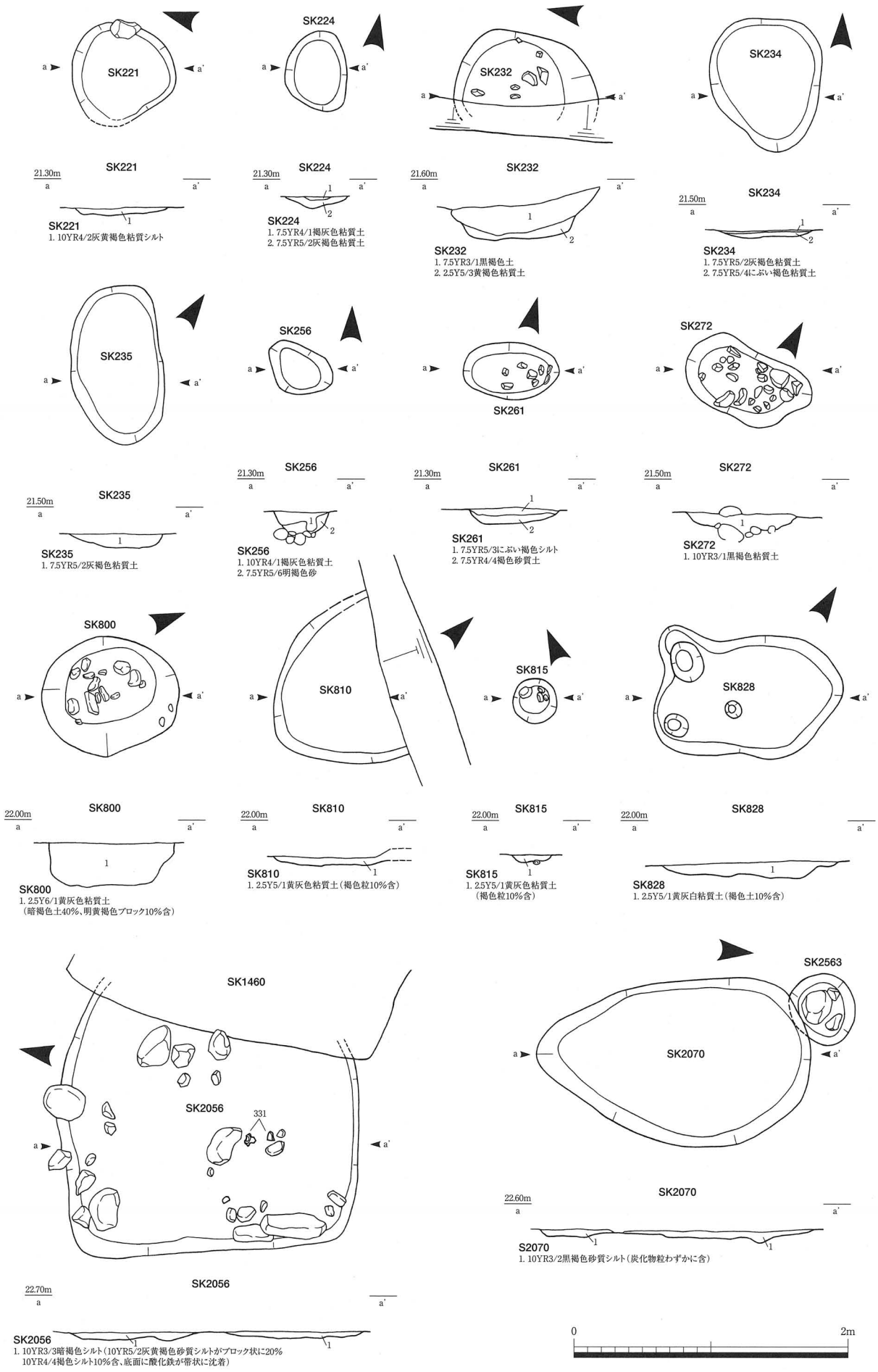
第9図 遺構実測図

SB05 SB06



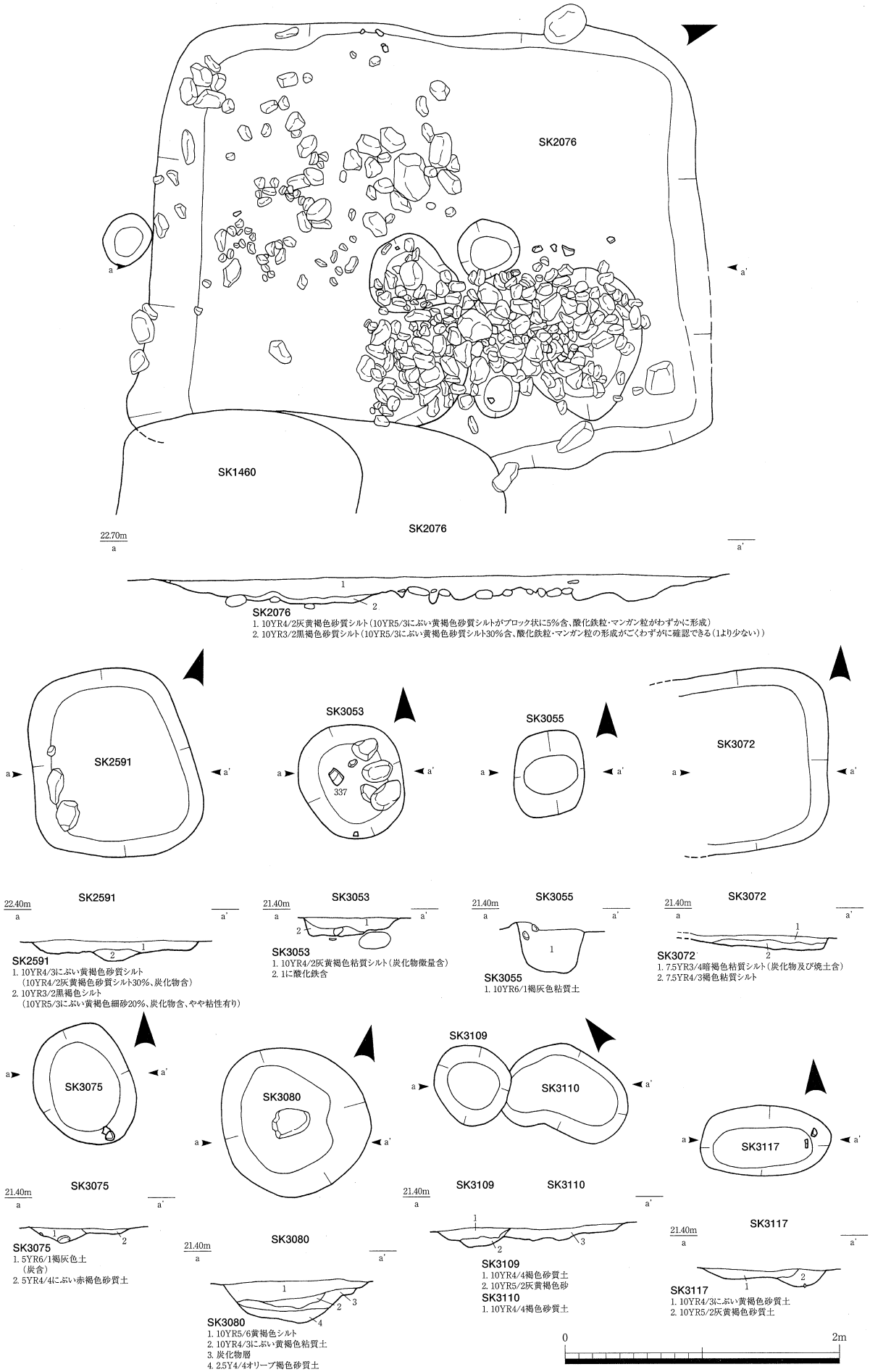
第10図　遺構実測図

SA01　SA02　SA03　SA05



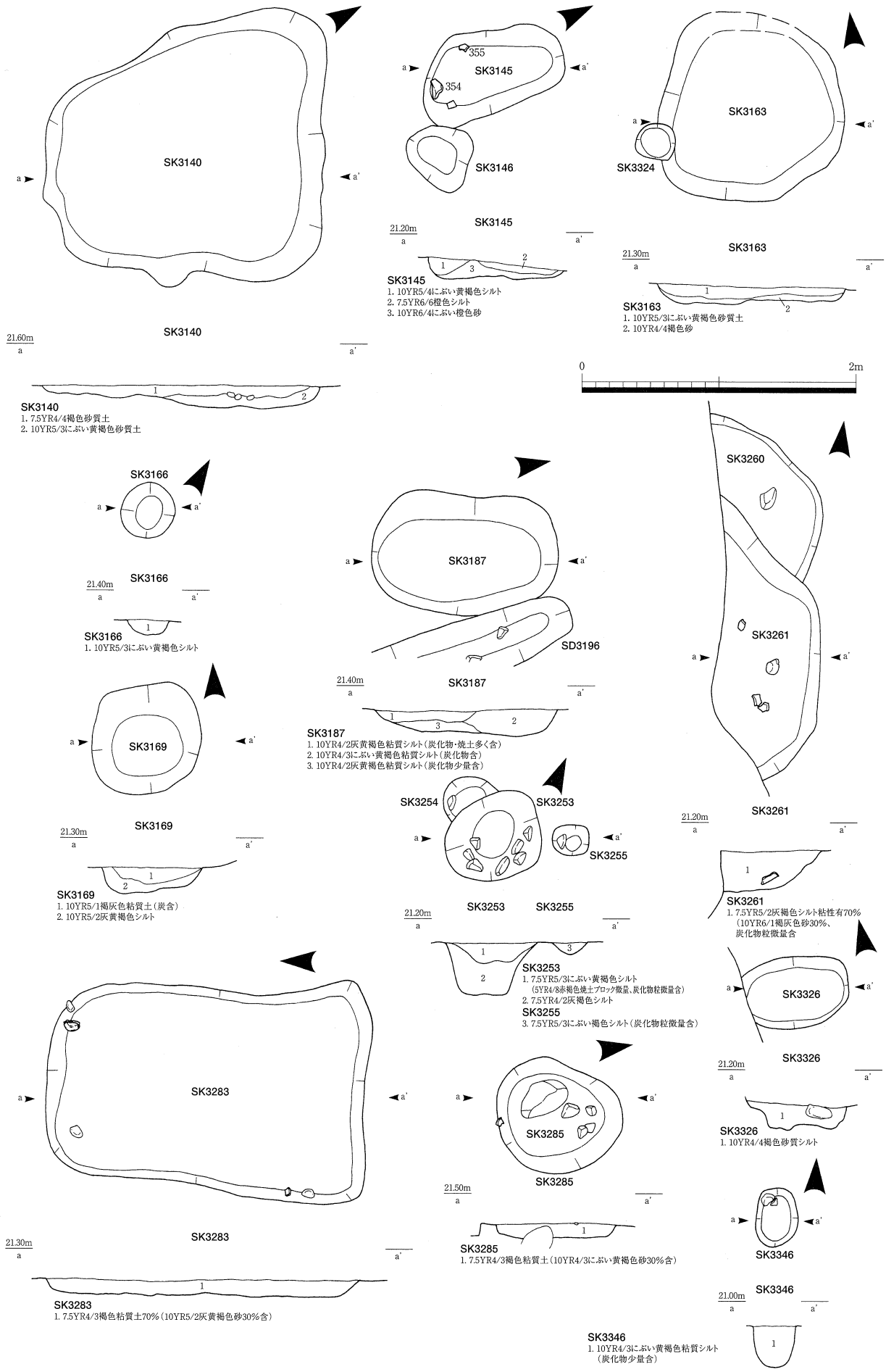
第11図　遺構実測図

SK221　SK224　SK232　SK234　SK235　SK256　SK261　SK272　SK800　SK810　SK815
SK828　SK2056　SK2070



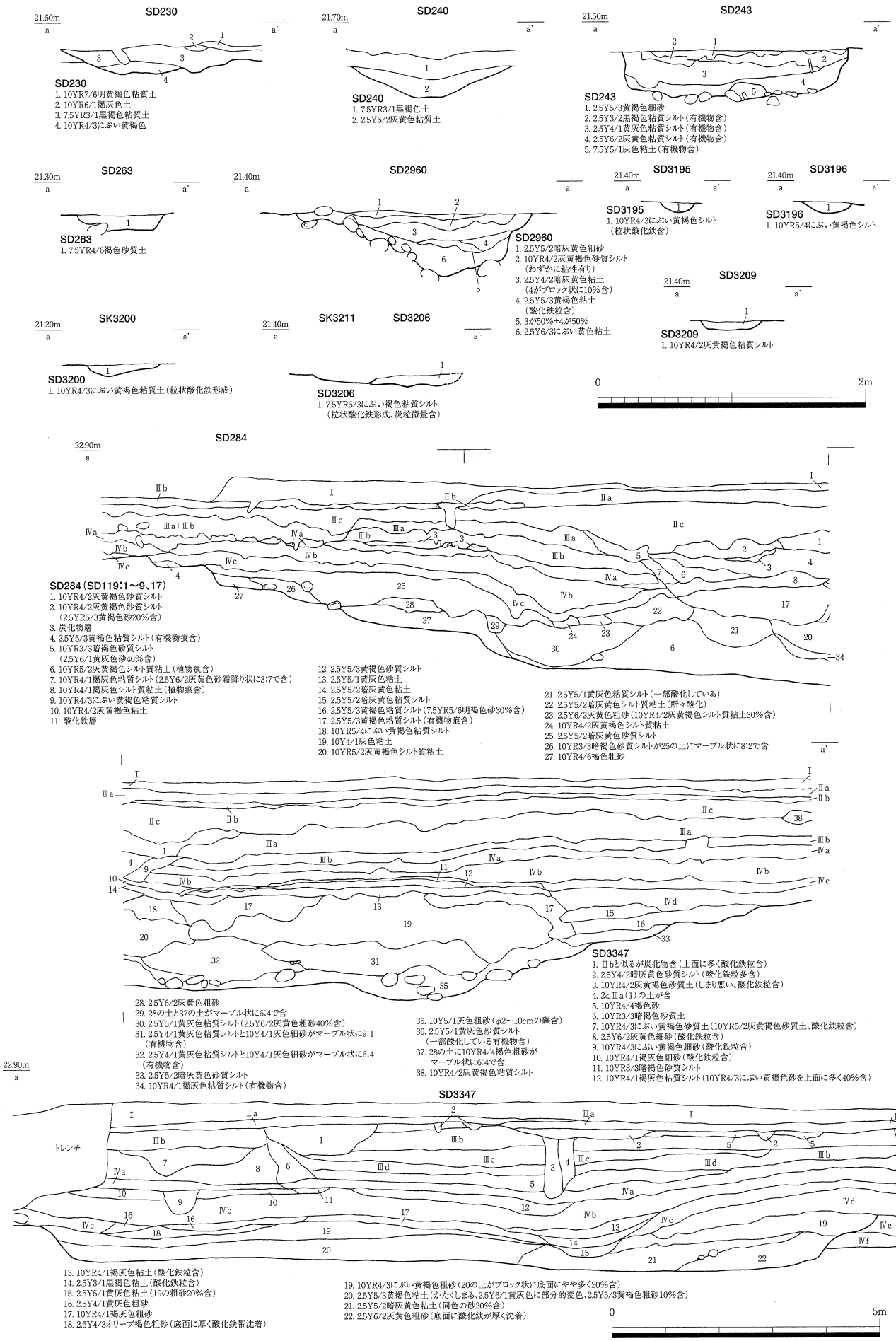
第12図　遺構実測図

SK2076　SK2591　SK3053　SK3055　SK3072　SK3075　SK3080　SK3109　SK3110　SK3117



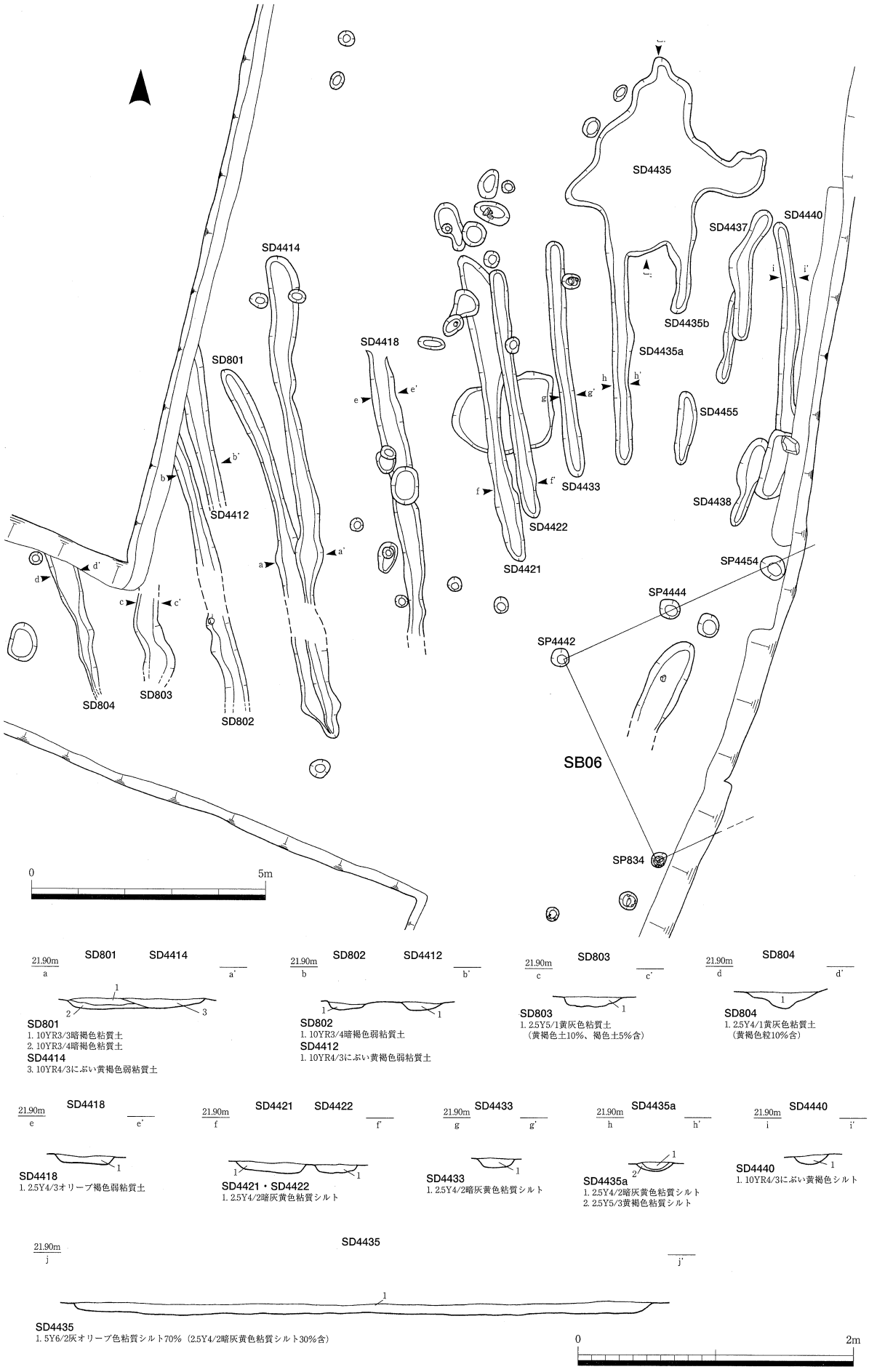
第13図　遺構実測図

SK3140　SK3145　SK3163　SK3166　SK3169　SK3187　SK3253　SK3261　SK3283　SK3285
SK3326　SK3346



第14図　遺構実測図

SD230　SD240　SD243　SD263　SD284　SD2960　SD3195　SD3196　SD3200　SD3206　SD3209
SD3347

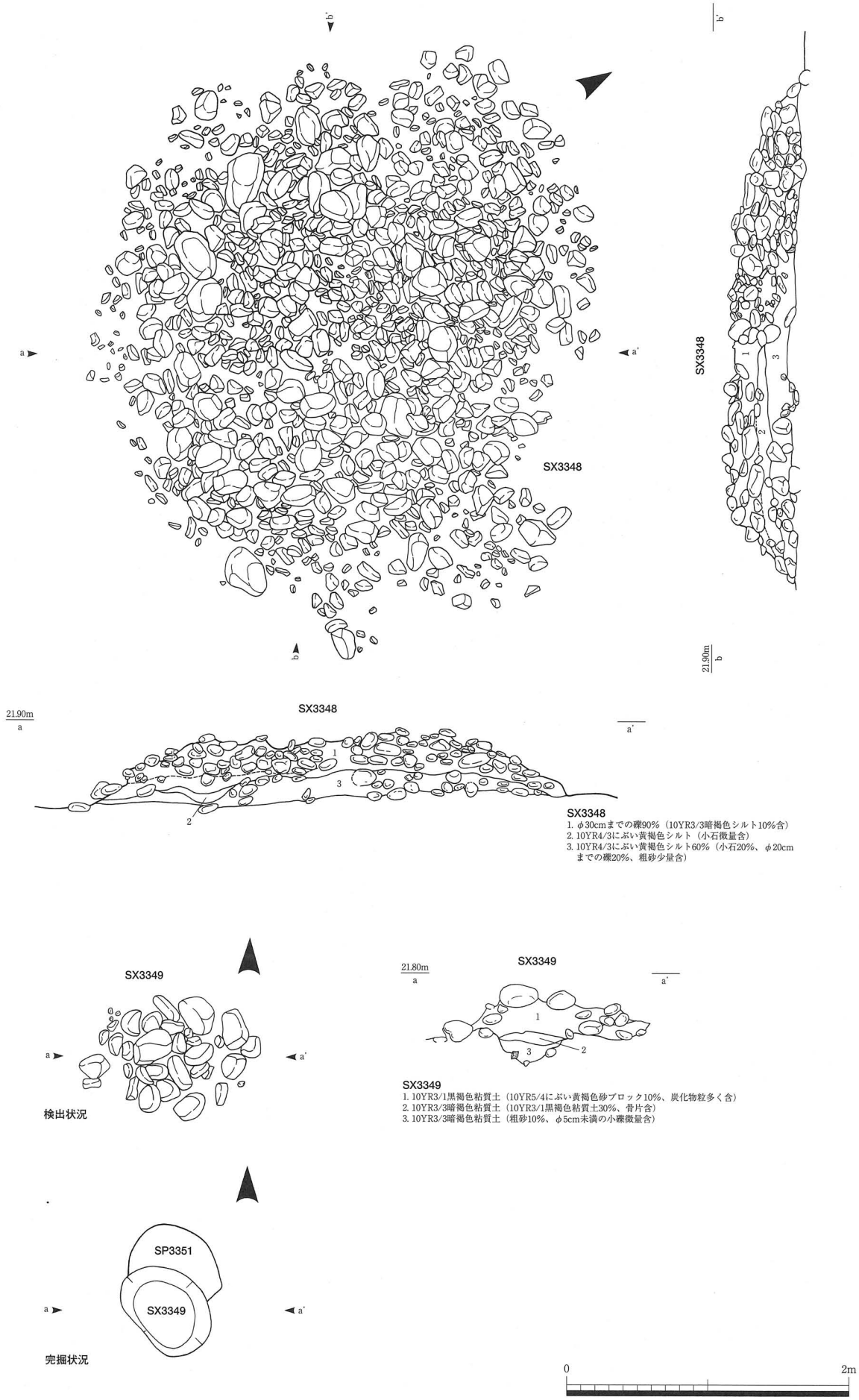


第15図　遺構実測図

SD801　SD802　SD803　SD804　SD4412　SD4414　SD4418　SD4421　SD4422　SD4433　SD4435
SD4435a　SD4440

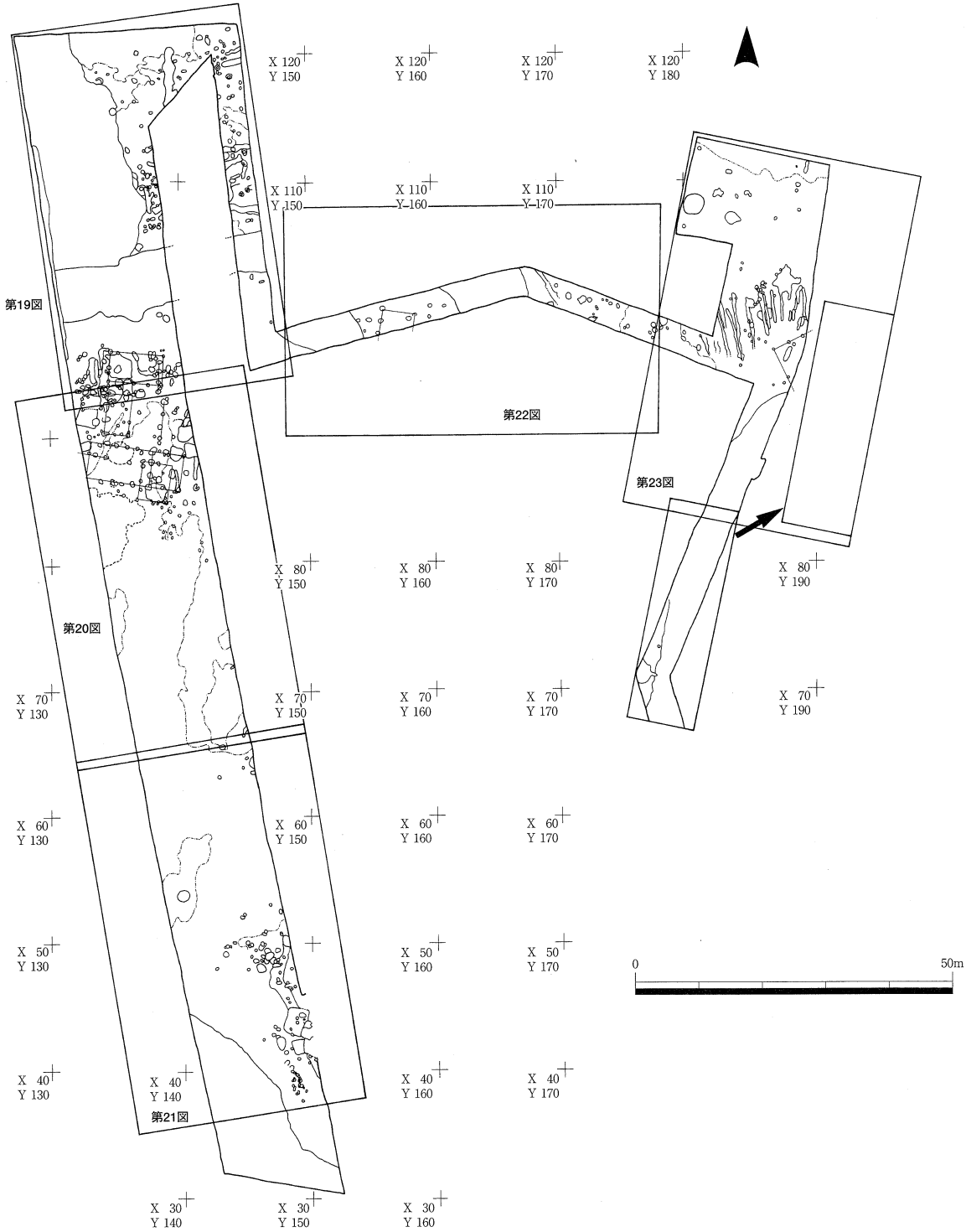
第16図　遺構実測図

SX3348　SX3349　SX3353

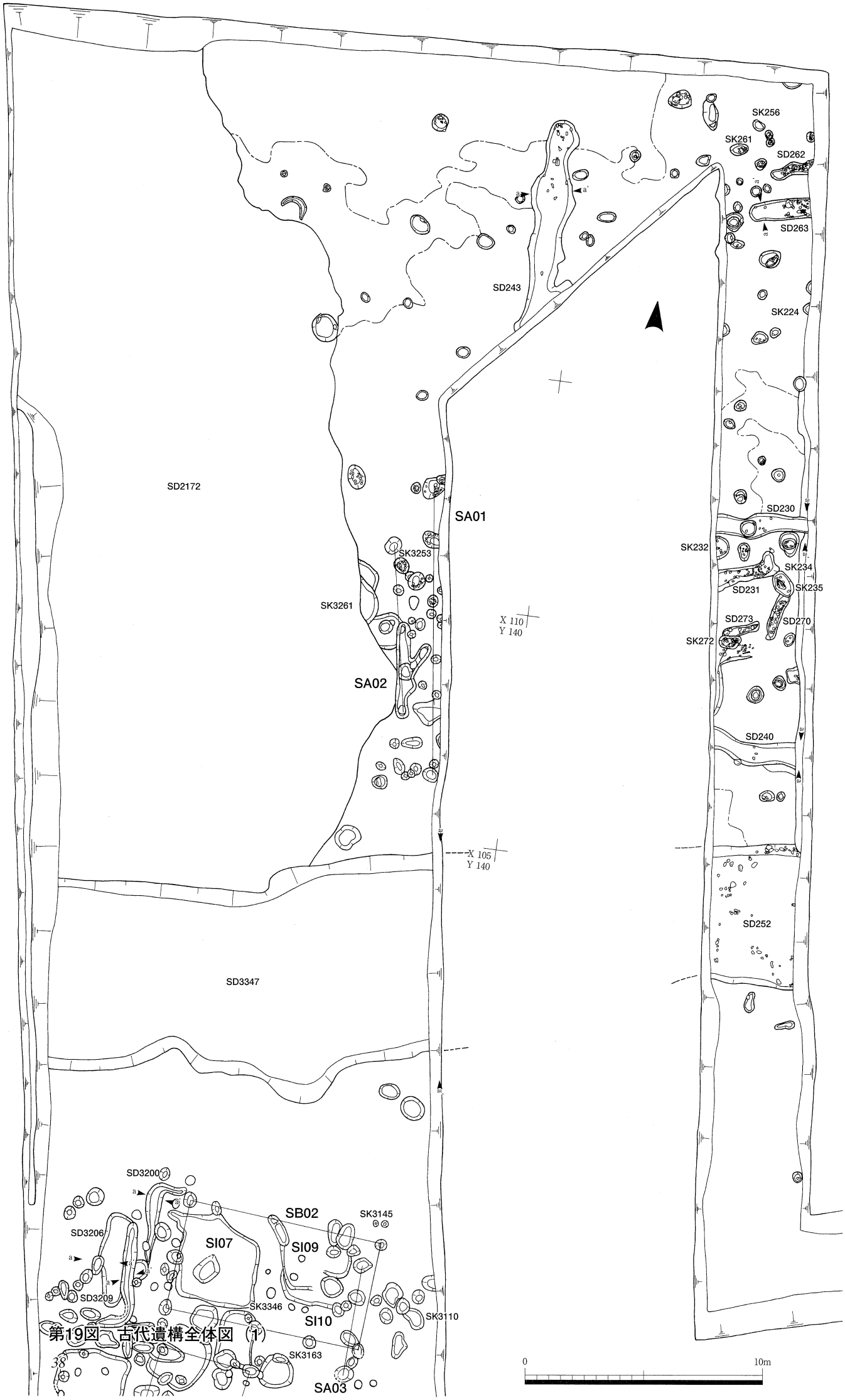


第17図　遺構実測図

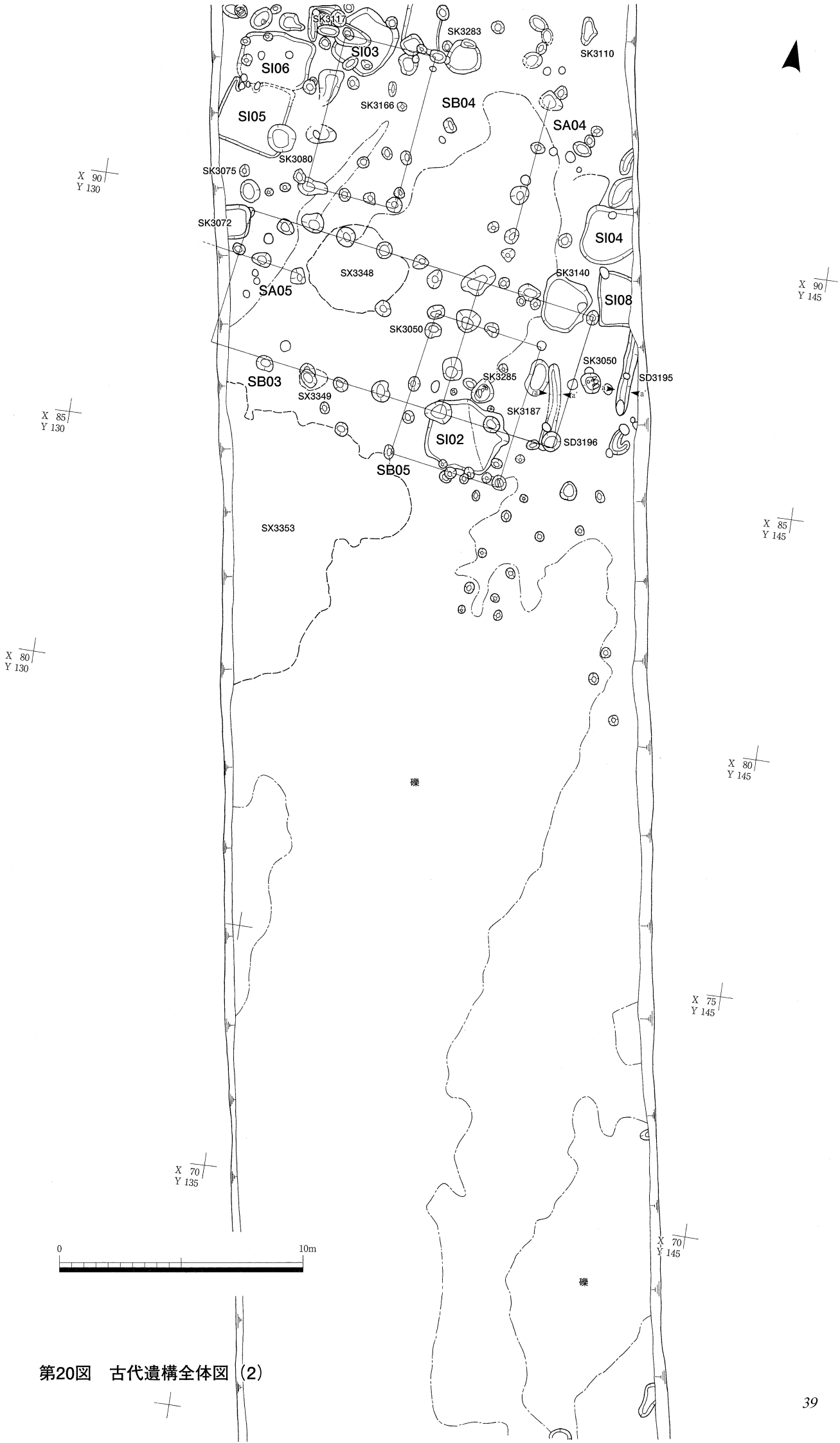
SX3348　SX3349



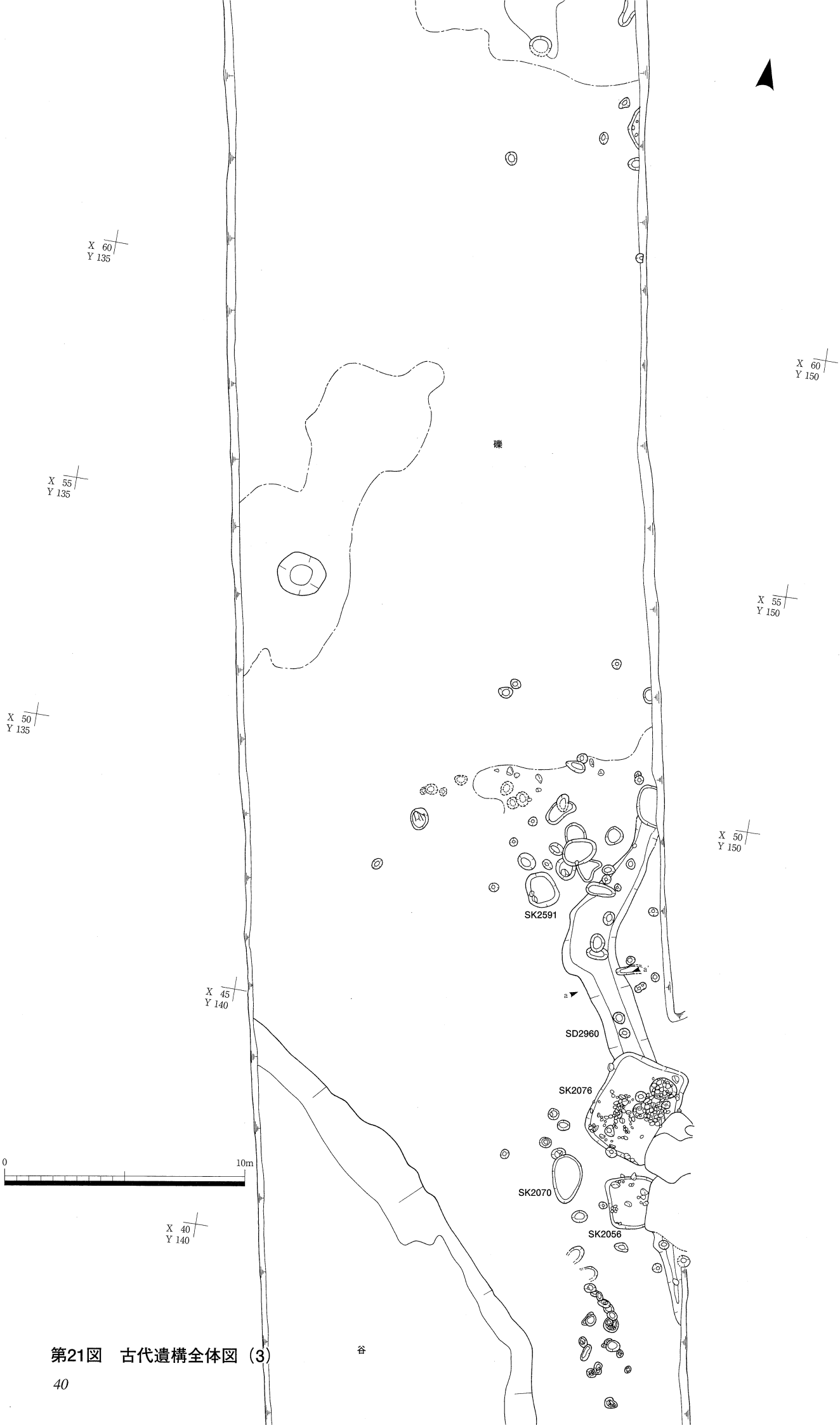
第18図　古代遺構全体図割付図



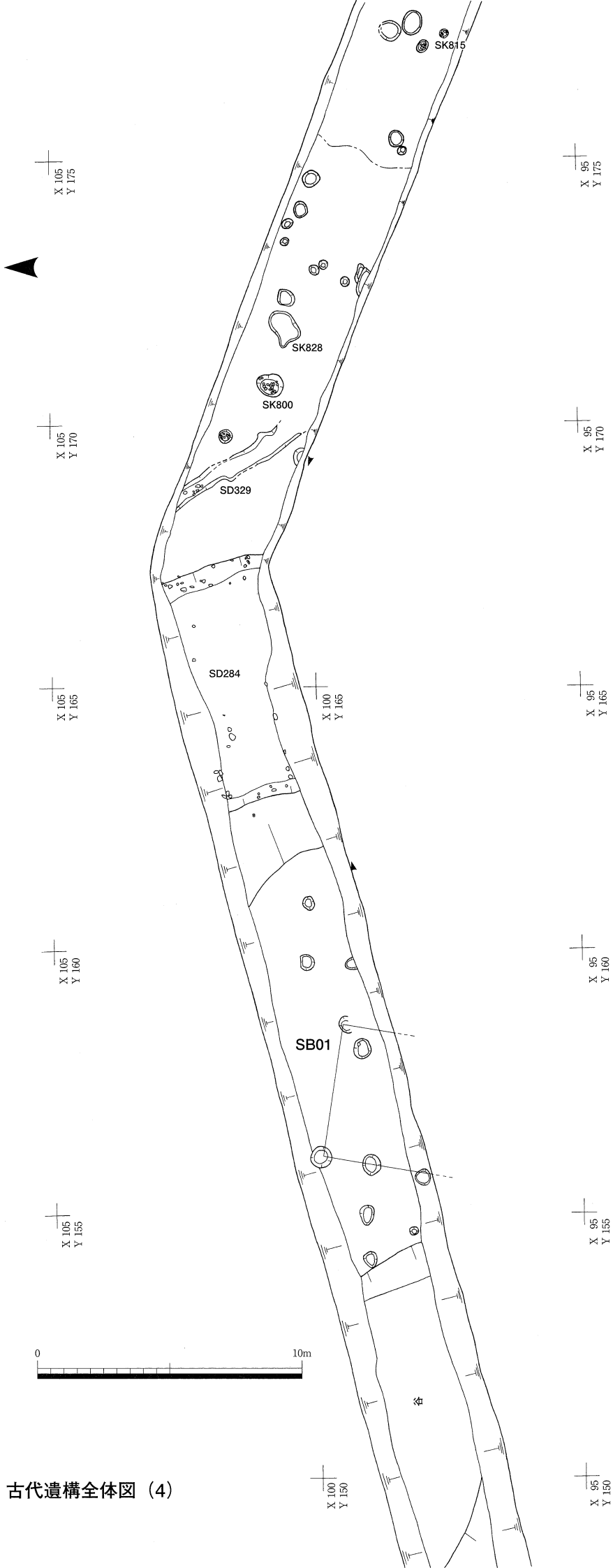
第19図　古代遺構全体図（1）



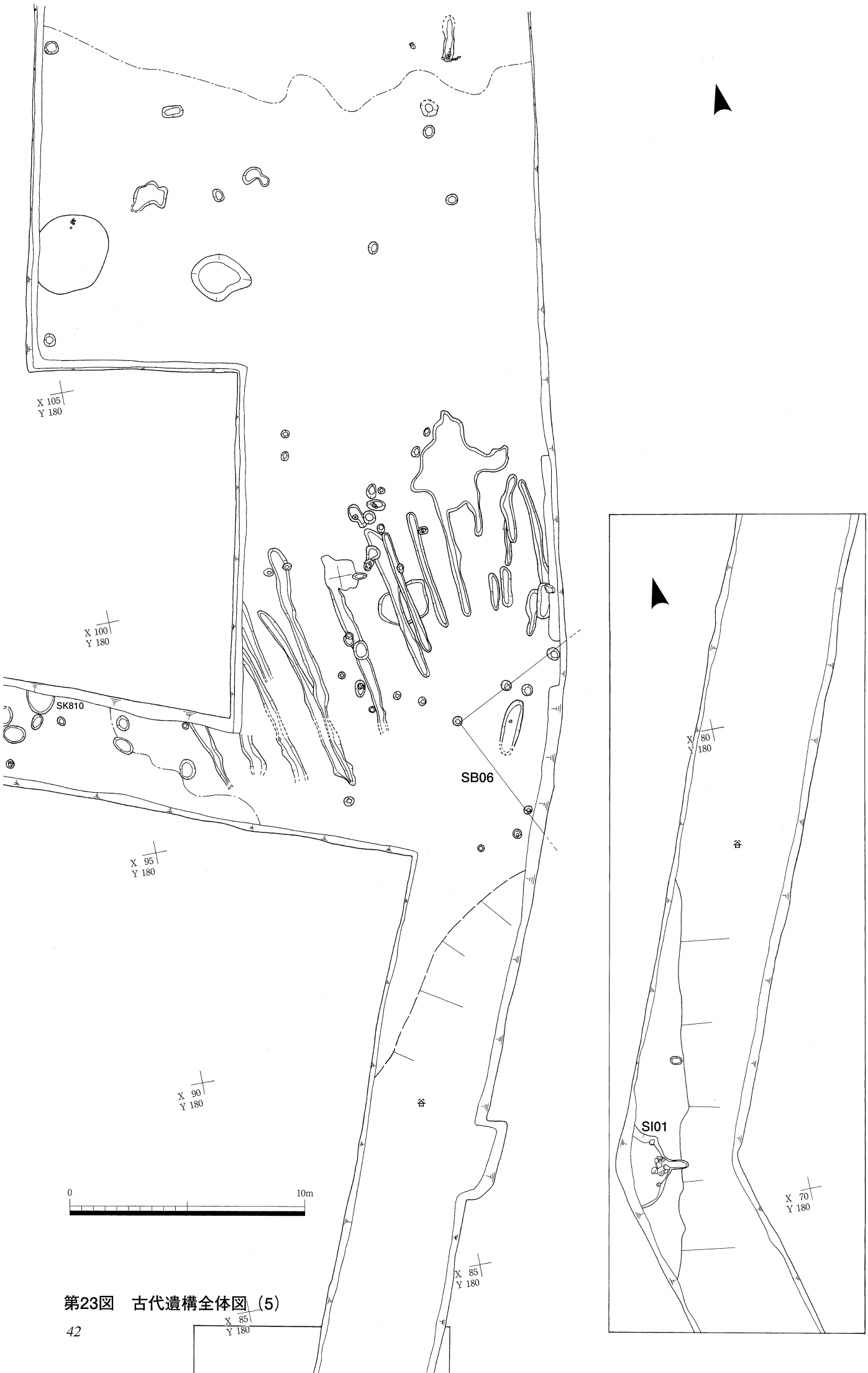
第20図　古代遺構全体図（2）



第21図　古代遺構全体図（3）



第22図　古代遺構全体図（4）



第23図　古代遺構全体図（5）

B　中世

①Ｂ１地区

調査区は、北側の復田工事部分と用水路工事部分からなり、用水路部分は幅３ｍ程度でＬ字状に南から東へと延びる。中世の検出面は南から北へ緩く傾斜しており、西側のＢ４地区には南北に北流する中世から近世まで存在した自然流路（ＳＤ2172）がある。Ｂ１地区はその東岸に位置する。また、Ⅲｂ層から上の部分が後世のほ場整備により削平されており、中世上層と下層の遺構を同一面で検出した。遺構数はＢ３地区やＢ４地区などに比べると希薄であり、集落の縁辺部と考えられる。主な遺構には掘立柱建物３棟、柵１条、井戸、土坑、溝などがある。なお３棟の掘立柱建物は建物方位からＳＢ07とＳＢ08・ＳＢ09の２グループに大別でき、遺構の重複関係や周辺地区の建物方位との関係からＳＢ08・ＳＢ09の方がＳＢ07よりも先行する建物と考えている。またＢ１地区は集落の中心部分と考えられるＢ３地区よりも遺構数が希薄なものの、流路の際であることや、建物群が調査区際の北東よりに位置することから、集落の縁辺といえども調査区外の北側あるいは東側に若干のまとまった建物群があるものと推測される。

掘立柱建物

ＳＢ07（第24図、図版11）：Ｘ108Ｙ142に位置する。確認した部分は２間×２間の総柱建物である。調査区南端にあり、全容は明らかでない。ここでは桁行２間以上、梁行２間以上の東西棟として復元した。確認した部分は桁行4.5ｍ、梁行3.5ｍを測り、面積15.75㎡、主軸はＮ－73°－Ｗである。柱穴掘方はほぼ円形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質シルトである。直径0.29～0.39ｍの大きさで、現存する深さ0.06～0.21ｍを測る。明確な付属施設などは認められず、柱穴から中世土師器皿の小破片が出土している。

ＳＢ08（第24図、図版11）：Ｘ115Ｙ145に位置する。確認した部分は２間×２間の総柱建物である。調査区東端にあり、全容は明らかでない。ここでは桁行２間以上、梁行２間以上の南北棟として復元した。確認した部分は桁行５ｍ、梁行4.6ｍを測り、面積23㎡、主軸はＮ－49°－Ｗである。柱穴掘方はほぼ円形を呈し、直径0.26～0.48ｍの大きさで、現存する深さ0.12～0.37ｍを測る。柱穴覆土は暗オリーブ褐色粘土質シルト、暗灰黄色砂質シルトである。明確な付属施設などは認められない。

ＳＢ09（第25図、図版11）：Ｘ120Ｙ143に位置する。確認した部分は２間×２間の建物である。調査区北東端にあり、全容は明らかでない。ここでは桁行２間以上、梁行２間の南北棟として復元した。確認した部分は桁行3.6ｍ、梁行4.2ｍを測り、面積14.7㎡、主軸はＮ－36°－Ｗである。柱穴掘方は円形ないしは楕円形を呈し、直径0.26ｍ～0.41ｍの大きさで、現存する深さ0.08ｍ～0.34ｍを測る。柱穴覆土は暗オリーブ褐色粘土質シルト、暗灰黄色砂質シルトである。またＳＢ03の南にはＳＡ06がある。調査概要では、この柵列をＳＢ09の柱列南端としたが、柱間距離が他に比べやや長いことや方位がやや異なることから、建物とは分離し柵列とした。ＳＡ06は２間以上の規模で調査区東側に延びる可能性がある。0.33～0.66ｍの円形の掘方で、確認した範囲では４ｍの長さを測る。なおＳＢ09と重複してＳＥ115があり、重複部分でＳＢ09の柱穴を確認できないことから、ＳＥ115に先行する建物と考えられる。

井戸

ＳＥ115（第25図、図版11）：Ｘ120Ｙ143に位置する。ＳＢ09と重複する井戸で、ＳＢ09が周辺の建物同様に総柱建物であるならば重複関係から、ＳＢ09よりも新しいものと判断できる。底には縦板組の木枠が一段分残存している。掘方はほぼ円形を呈し、覆土は黒褐色粘質シルトおよび暗オリーブ

褐色粘土質シルトが基本となり、レンズ状に堆積する。直径1.83～1.92m、深さ1.04mを測り、礫層部分を掘り込んでいる。約0.8m四方の縦板組の井戸側を持ち、覆土中から中世土師器・珠洲の甕（659）・鉢（658）・青磁（657）・角材（3038～3048）・刀子（2035）が出土しており、13世紀前半～中頃のものと考えられる。

土坑

土坑は調査区全体で、大小様々なものを確認したが、ここでは主なものについて説明する。

ＳＫ59（第25図、図版11）：Ｘ111Ｙ142に位置する。ＳＢ07の北側約５ｍにあり、自然流路ＳＤ2172の東岸に隣接する。ＳＫ59は長辺2.49m×短辺１ｍ、深さ0.28mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。覆土は黄灰色粘土質シルト、にぶい黄色砂質土が上面に堆積し、下層にオリーブ褐色粘土質シルト、黒褐色粘質土などが堆積する。また炭化物および焼土ブロックが覆土中位～下層に含まれており、炭化物に混じって、ヒトの骨片が出土した。また焼土がブロック状に混入し、土坑の底に焼土面を確認できなかったので、どこかで焼いた骨をＳＫ59に運んで埋めた可能性が高い。骨片以外の出土遺物は無く詳細時期は不明。

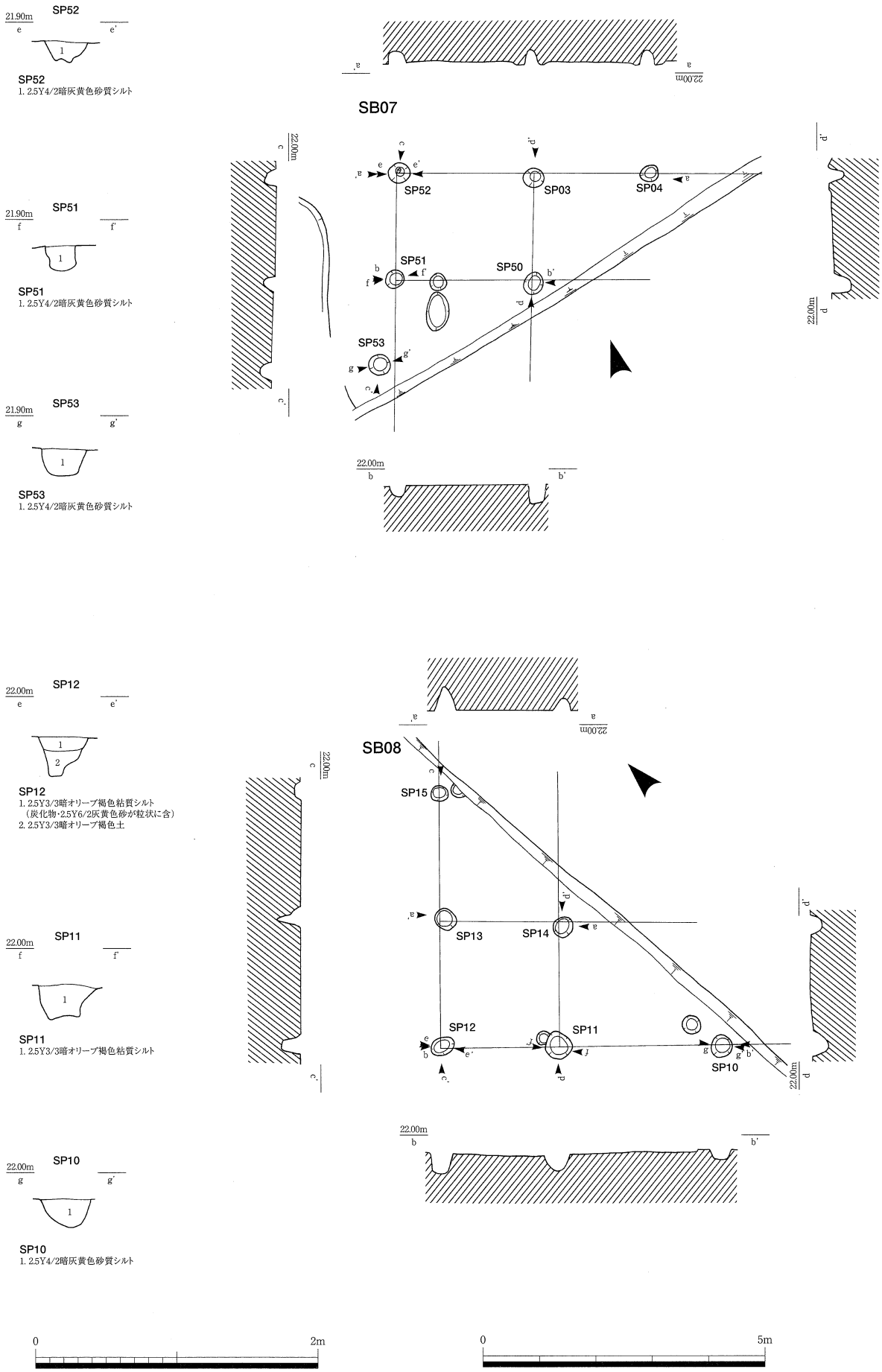
溝

ＳＤ81（第26・105図）：南東から北西方向に延びる溝であり、水路部分のＬ字状屈曲部に位置する。古代の溝（ＳＤ252）と重複し、幅2.79m、深さ0.1mの規模である。ＳＤ81は周囲の遺構と比べ浅い掘方であることや堆積状況から、古代の溝の窪みや自然地形の低い部分を雨水などが西側の自然流路（ＳＤ2172）へ自然に流れ込んで形成された溝と考えられる。堆積土は黄褐色シルトで、出土遺物は無く詳細時期は不明。

ＳＤ112（第26・105図）：ＳＤ81に続く溝で、自然の窪地と考えられる。幅4.5m、深さ0.2cmを測り、ＳＤ81よりも更に幅が広くなる。

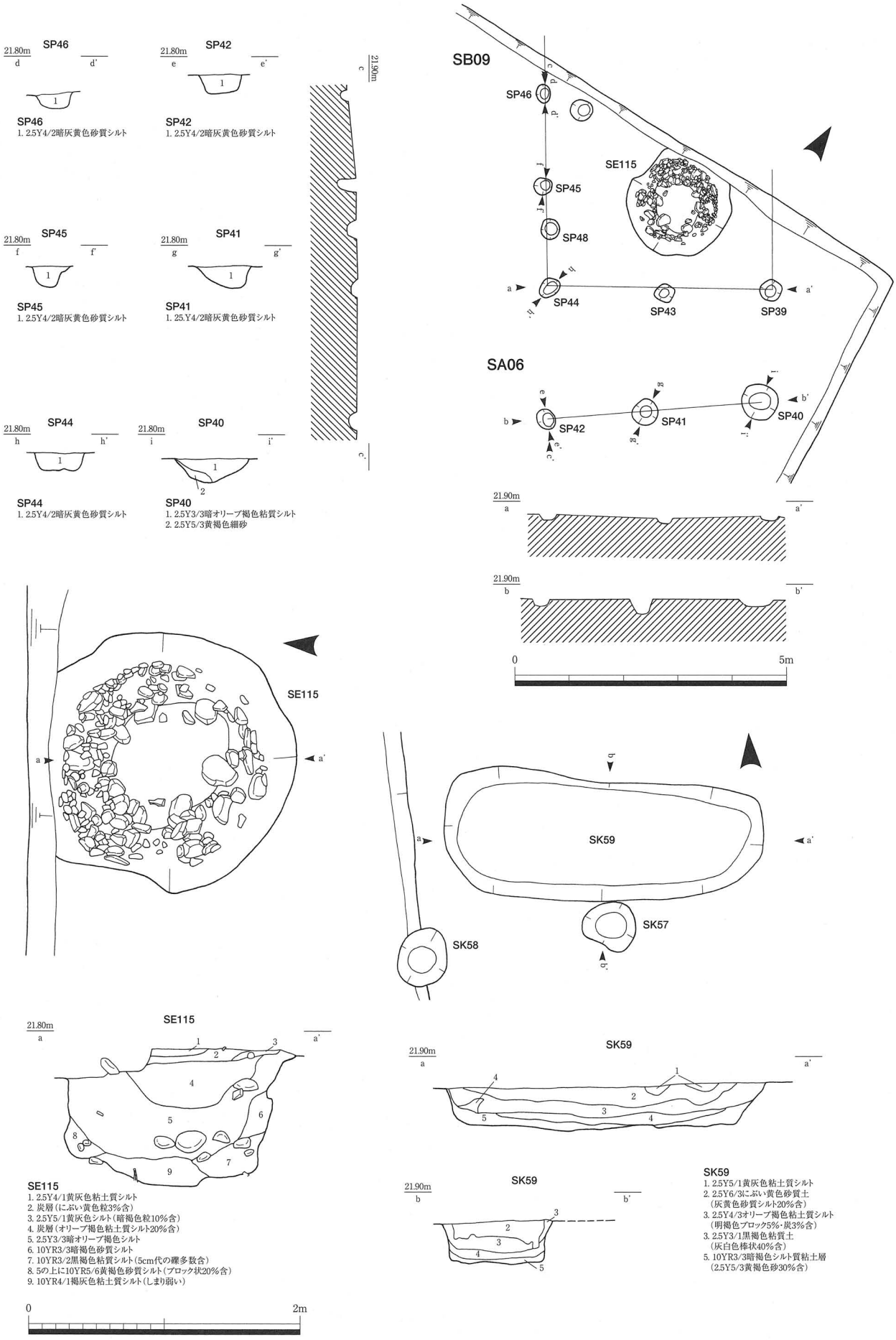
ＳＤ113（第26・105図）：東西方向水路部分の中央に位置し、南西から北東方向に延びるが、部分的な確認のため全容は不明。幅約3.1m、深さ約0.92mを測る。覆土は暗灰黄色シルトやオリーブ褐色シルトからなり、やや粘性が強い。ＳＤ113とＳＢ01は同一方位を示し、他地区の溝および建物とも一致するものがあることから屋敷地などを区画した溝と考えられる。この覆土中から中世土師器の皿（648・649・650）・珠洲の鉢（653）・双耳壺（651）・龍泉窯系青磁碗（652）が出土しており、13世紀中頃～後半と考えられる。

ＳＤ119（第26・105図）：東西方向水路部分の東端に位置し、Ｂ２地区に隣接する。幅約５ｍ、深さ約0.4mを測る。古代の大溝（ＳＤ284）と重複しているが、基本層が堆積した後で溝が形成されていることから中世になって新たに形成されたものかあるいは人為的に造られたものであろう。ＳＤ119の西岸はＳＤ113と方位が一致し、東岸は一致しない。部分的な確認のため明確ではないがＳＤ113と同様、区画溝の可能性も窺える。出土遺物には中世土師器の皿・瀬戸・青白磁の合子（654）がある。



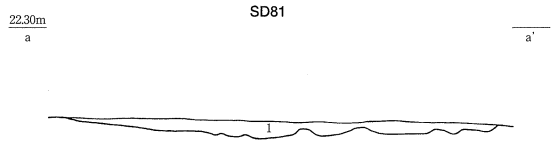
第24図　遺構実測図

SB07　SB08

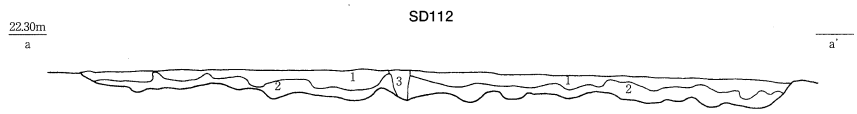


第25図 遺構実測図

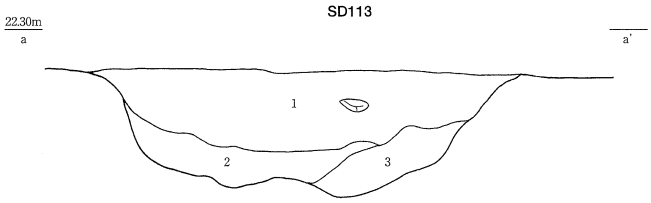
SB09 SE115 SA06 SK59



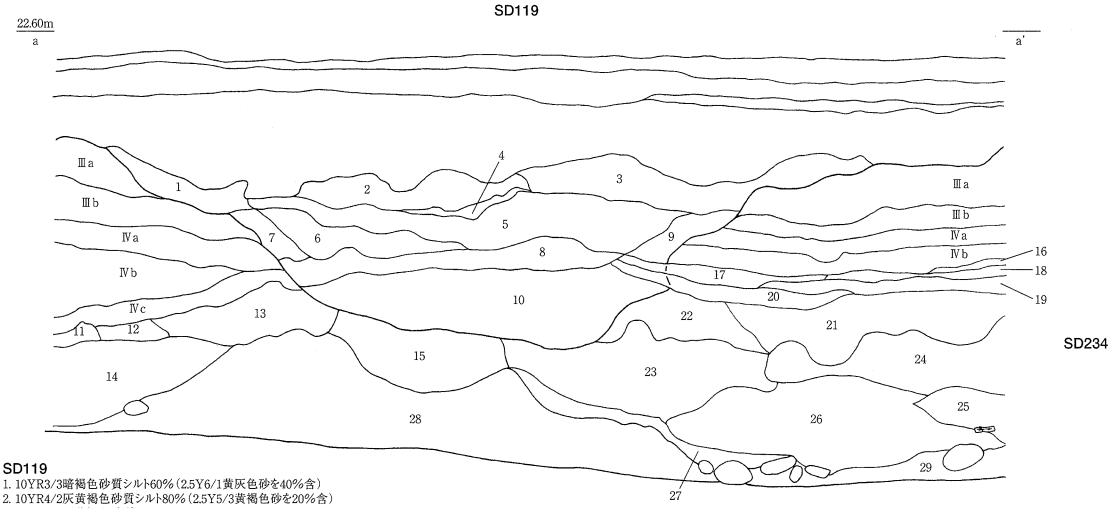
SD81
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト（やや粘性あり）



SD112
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（炭5%含）
2. 2.5Y5/4黄褐色シルト
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト（やや粘性あり）

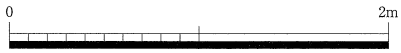


SD113
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（炭5%含）
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト（炭1%含）
3. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（やや粘性あり）



SD119
1. 10YR3/3暗褐色砂質シルト60%（2.5Y6/1黄灰色砂を40%含）
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト80%（2.5Y5/3黄褐色砂を20%含）
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
4. 炭化物層
5. 10YR4/1褐灰色砂質シルト（下層に植物痕有り）
6. 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土（植物痕有り）
7. 10YR4/1褐灰色粘質シルト30%（2.5Y6/2灰黄色砂を霜降り状に70%含）
8. 10YR4/1褐灰色シルト質粘土（植物痕有り）
9. 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
10. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト（有機物痕有り）

SD234
11. 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土
12. 2.5Y6/2灰黄色粗砂（10を30%含）
13. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土（所々酸化している）
14. 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト（2.5Y6/2灰黄色粗砂40%含）
15. 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト（一部酸化している）
16. 酸化鉄層
17. 10YR4/2灰黄褐色粘土
18. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
19. 2.5Y5/1黄灰色粘土
20. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土
21. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト（有機物痕有り）
22. 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト
23. 10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
24. 10Y4/1灰色粘土
25. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト90%(10Y4/1灰色細砂を10%、有機物含)
26. 10Y4/1灰色細砂60%、
(2.5Y4/1黄灰色粘質シルトをマーブル状に40%、有機物含)
27. 10YR4/1褐灰色粘質シルト（有機物含）
28. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト（有機物含、一部酸化している）



第26図　遺構実測図

SD81　SD112　SD113　SD119

②Ｂ２地区

調査区は田面復元工事部分と用水路工事部分からなり、用水路部分は幅３ｍ程度でＬ字状に西から南へと延びる。田面復元工事部分は中世包含層の標高により、復元工事で削平されないと判断されたため保存となった。そのため、中世の遺構は用水路部分のみの調査となった。中世の遺構は主に中世上層で確認されており、石組井戸４基、土坑、溝などを検出した。調査区北側部分に井戸が集中し、居住空間を想定できるが幅の狭い調査区のため、掘立柱建物などの居住部分は確認できていない。調査区東側では、主に溝を検出した。溝の大半が南北に平行して走るものである。Ｂ２地区南端から北端まで延びるものもあり、道路の側溝などの性格が想定できる。中世下層では、溝および土坑を確認している。ＳＤ729・ＳＤ750は一続きの溝と考えられ、この溝に囲まれた範囲に建物の存在が推測される。

井戸

ＳＥ731（第27図、図版14）：Ｂ２地区水路部分のＬ字状に屈曲した位置にあり、井戸の北東すぐ側にはＳＫ728が確認されている。井戸の掘方はほぼ円形を呈し、直径約2.2ｍを測る。深さ0.85ｍで、礫層まで掘り込んでいる。井戸側は石組で、直径20～60㎝程度のやや不均一な石を利用しており、ほとんどの石の長辺を中心に向かって配置している。ＳＥ731はＳＤ686によって上部が壊されており、石組は４段程度が残る。石組の裏込めには小石などは利用せず、側の断面形はすり鉢状を呈し、石を右巻きに積み上げている。井戸の底には曲げ物が設置されており、水溜として利用されている。覆土中から須恵器が出土している。

ＳＥ734（第27図、図版14）：Ｂ２地区東西方向水路部分の中央に位置する石組井戸で、ＳＥ738と重複する。重複関係からＳＥ738よりも新しい。掘方の北部分は調査区外になり、確認した部分は掘方の南半分で、おそらく円形の掘方のものであろう。直径約2.1ｍ、深さ0.7ｍを測り、礫層まで掘り込んでいる。井戸の掘方と石組との間隔は狭く、裏込めに小石などは利用しない。石組は、直径20～30㎝のほぼ均一な石を利用し、石の長辺を中心に向かって配置している。側の断面はＵ字状を呈し、石を右巻きに積み上げる。井戸の底には曲げ物が設置されており、水溜として利用されている。覆土中から須恵器・中世土師器の皿・八尾が出土している。

ＳＥ738（第27図、図版14）：ＳＥ734と重複する石組井戸で、重複関係からＳＥ734よりも先行する井戸である。掘方の北部分は調査区外になり、確認した部分は掘方の南半分で、円形ないしは隅丸方形の掘方のものであろう。直径約3.1ｍ、深さ1.02ｍを測り、礫層まで掘り込んでいる。石組は、直径20～30㎝のほぼ均一な石を利用し、石の長辺を中心に向かって配置している。井戸の掘方の東側に寄せて石組が配置されている。石組の残りが悪く、掘り込みの土層が検出面まで断面に残っていることから、廃棄される際に石は抜き取られたものと考えられる。側の断面はすり鉢状を呈する。覆土中から土師器・中世土師器・珠洲・八尾の甕（694）・土錘が出土している。

ＳＥ740（第27図、図版14）：Ｂ２地区東西水路部分の中央にあり、ＳＥ734・738の南西約２ｍに近接する。掘方の南部分は調査区外になり、確認した部分は掘方の北半分で、楕円形の掘方のものであろう。幅約2.3ｍ、長さ2.08ｍ以上、深さ0.84ｍで、礫層まで掘り込んでいる。井戸側は石組で、直径20～40㎝程度のやや不均一な石を利用しており、石の長辺を中心に向かって配置している。石組の裏込めには小石などは利用せず、側の断面形はすり鉢状を呈し、石を右巻きに積み上げている。井戸の底には曲げ物が設置されており、水溜として利用されている。覆土中から中世土師器の皿（691）・八尾・金属製品（2038）が出土しており、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

土坑

ＳＫ707（第28図）：Ｂ２地区南北水路部分の南側に位置し、ＳＤ701・703と重複する。重複関係からＳＫ707の方が新しい。掘方は不整形で西側調査区外まで延びる。確認した部分の幅は2.56m、深さ0.2mと広く浅い。土坑中央には直径10～50㎝の石が集中して出土している。覆土からは中世土師器の皿（689）が出土している。

ＳＫ728（第28図、図版14）：Ｂ２地区水路部分のＬ字状に屈曲した位置にあり、Ｂ６地区に接する。ＳＤ701と重複し、ＳＤ701よりも新しいか、もしくは同時期のものである。掘方は楕円形を呈し、東西に長く、長さ4.3m、幅2.5m、深さ0.4mを測る。覆土は黄灰色粘質土からなり、土坑の底一面に直径５～30㎝の石を充填している。また集石には規則性は認められず、石を積み上げた様子はない。Ｂ２地区やＢ６地区の井戸が集中する北西側の土坑内部に、底から10㎝の高さに小規模な段が形成されている。これらの状況ではやや根拠に乏しいが、ここでは洗い場や排水施設など井戸に伴う施設と推測したい。覆土中からは土師器・須恵器・珠洲の鉢（693）・八尾・青磁の碗（692）・土錘が出土している。

ＳＫ751（第29図）：Ｂ２地区水路部分のＬ字状に屈曲した位置にあり、Ｂ６地区に接する。掘方は不整形で、長さ2.08m、深さ0.31mを測る。５～30㎝の石が散在する。

溝

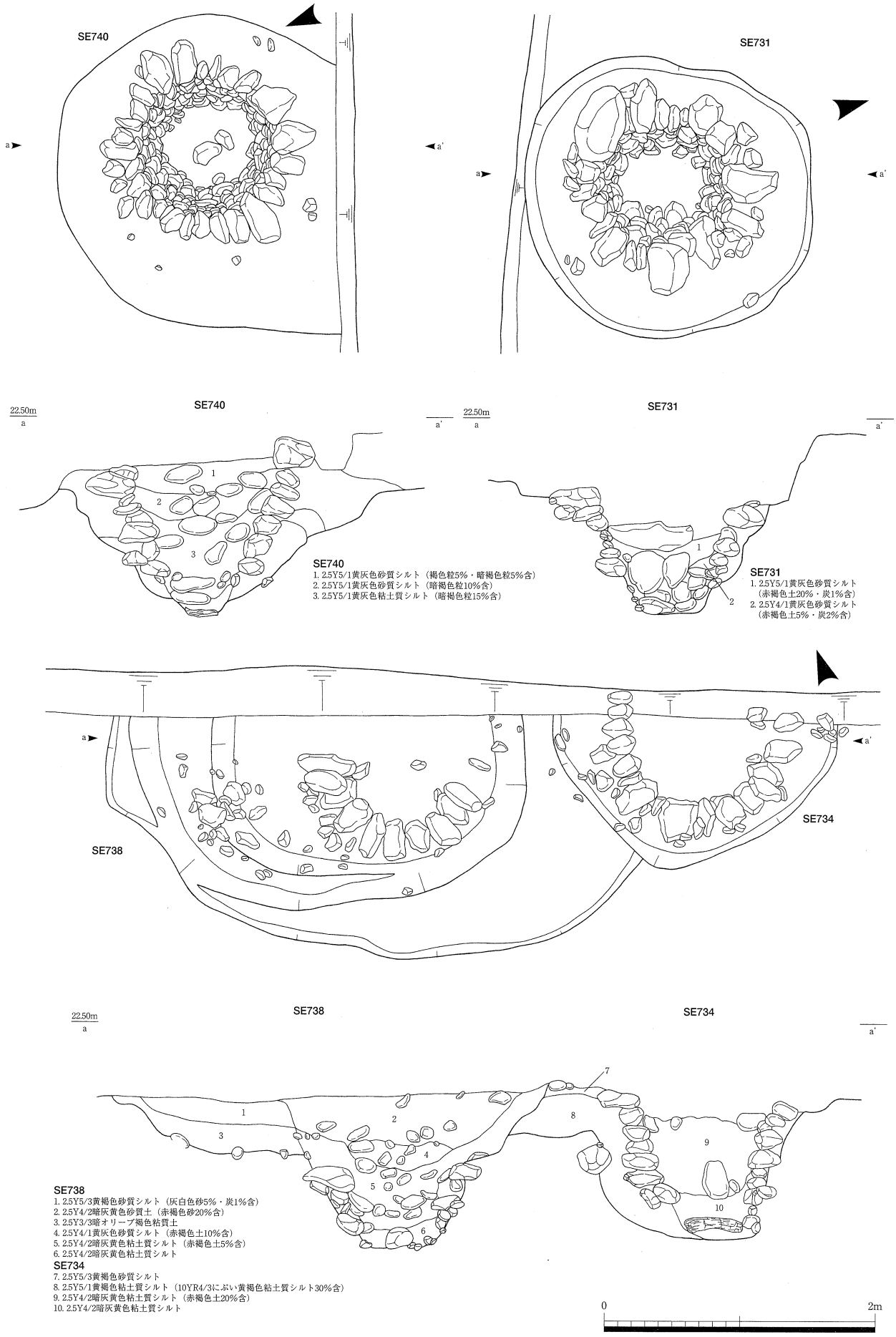
ＳＤ675（第29図）：Ｂ２地区南北水路部分の南端に位置する。幅2.76m、深さ0.49mの規模をもつ比較的大きな溝で、東西方向に延びる。覆土は黄褐色砂や暗灰黄色砂質シルトからなり、流水していたものと考えられる。この溝の南側とＢ３地区のＳＤ1712よりも東側の遺構の様相が、それらの溝よりも北東側の様相と大きく異なることから、集落を区画する機能を保持していたことが窺える。覆土中からは中世土師器（684）や珠洲が出土しており、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ701（第29図）：Ｂ２地区南北水路部分の調査区と平行に延びる溝で、北側部分で西側に折れ、ＳＫ728と合流あるいは重複する。最大幅1.2m、深さ0.33mを測り、長さ約50mである。また、ＳＤ701と対を為すように同規模の溝（ＳＤ703）が南北に平行に延びる。これら２本の溝の北側延長上に、更にＢ６地区の溝（ＳＤ4103）が配置されており、建物群の区画へと続く。溝と溝の間隔は最小幅約0.8mと狭いため、遺構の性格は畦道程度の生活道が推測される。覆土中からは土師器・中世土師器の皿（699～705）・珠洲の甕（698）・鉢（708）・八尾・白磁の碗（706）・青磁の碗（707）・金属製品（2037）が出土しており、13世紀～16世紀前半のものが混じる。

ＳＤ703（第29図）：最大幅１m、深さ0.11mを測り、長さ約50mである。覆土中からは瓦質土器が出土している。遺構の性格については上記に記載。

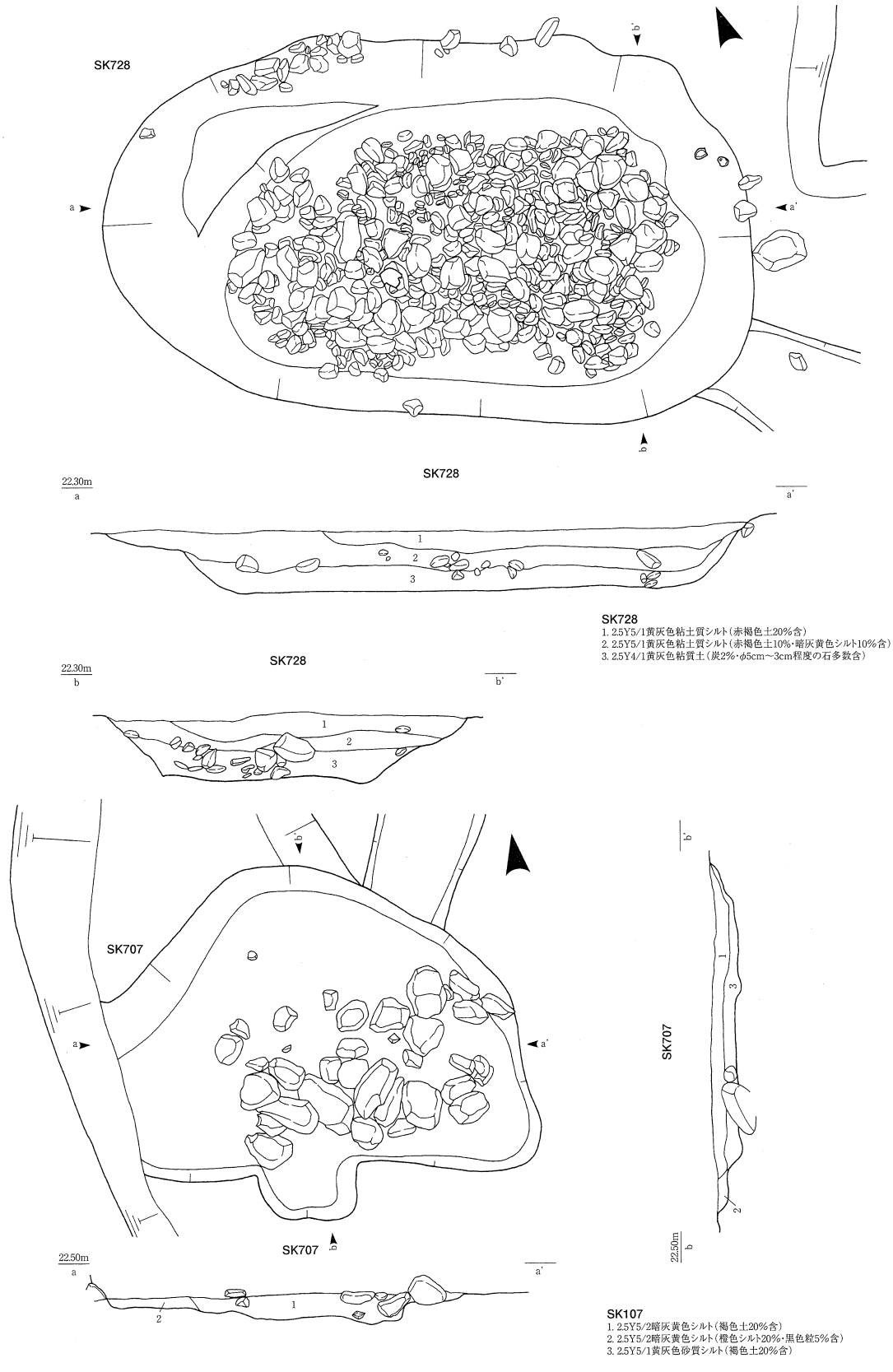
ＳＤ727（第29図）：Ｘ90Ｙ185付近に位置し、東側がＳＤ701と重複し、西側が調査区外へと延び規模は不明であるが、掘方の状況から溝と判断した。重複関係からＳＤ701に先行する溝で、幅1.67m、深さ0.34mを測る。Ｂ２地区では比較的希な東西方向に延びる掘方の深い溝で、区画溝の一部と考えられる。覆土中から八尾が出土している。

（武田　健次郎）



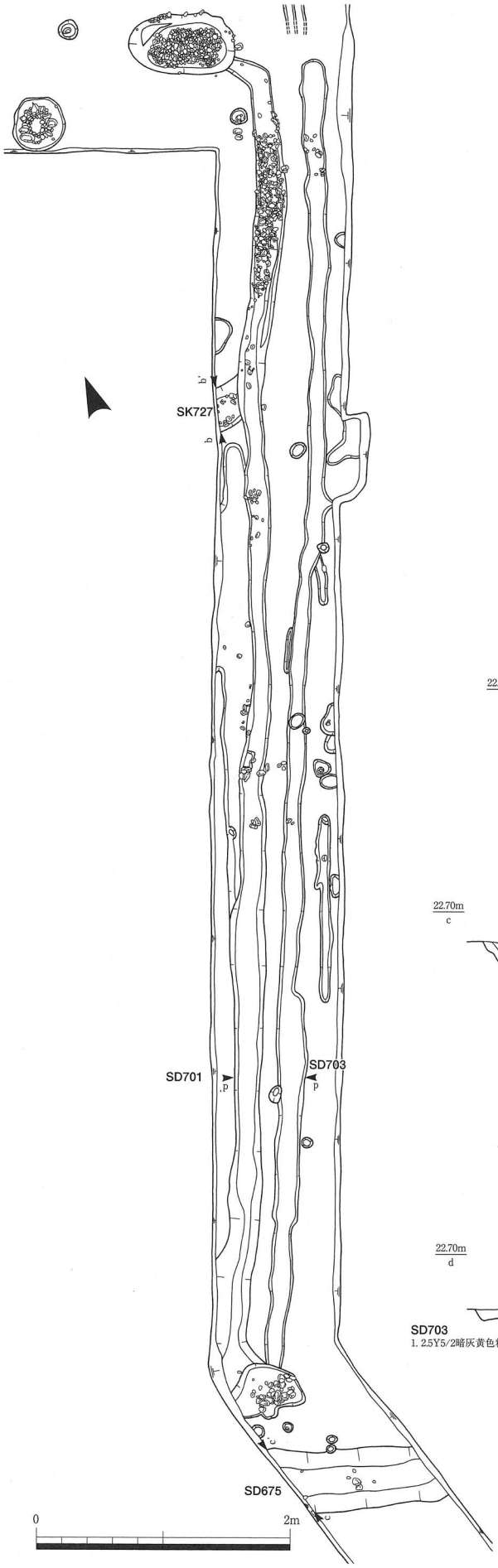
第27図　遺構実測図

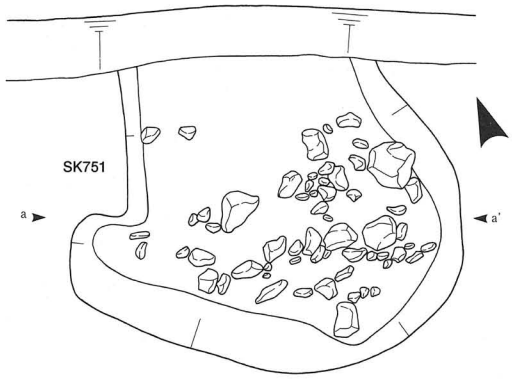
SE731　SE734　SE738　SE740

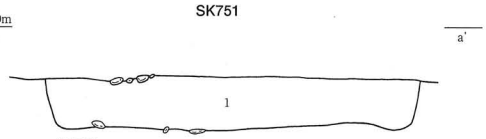


第28図　遺構実測図

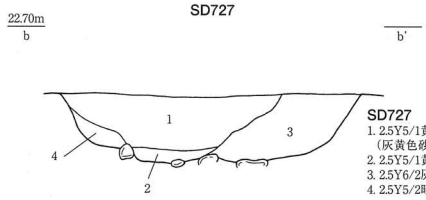
SK707　SK728



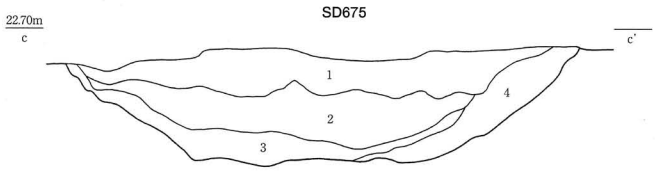




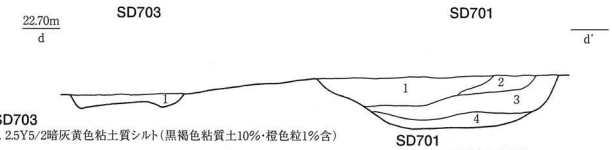
SD751
1. 5Y5/2灰オリーブ粘土質シルト（赤褐色粒10%含）



SD727
1. 2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト
（灰黄色砂10%含、黒色粒5%含）
2. 2.5Y5/1黄灰色粘質土
3. 2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト（褐色粒10%含）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト（褐色粒10%含）



SD675
1. 2.5Y6/1黄灰色シルト（褐色粒30%含）
2. 10YR5/6黄褐色砂（黄灰色シルト10%・炭1%含）
3. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（黄灰色粘土20%含）
4. 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト（明褐色粒20%含）



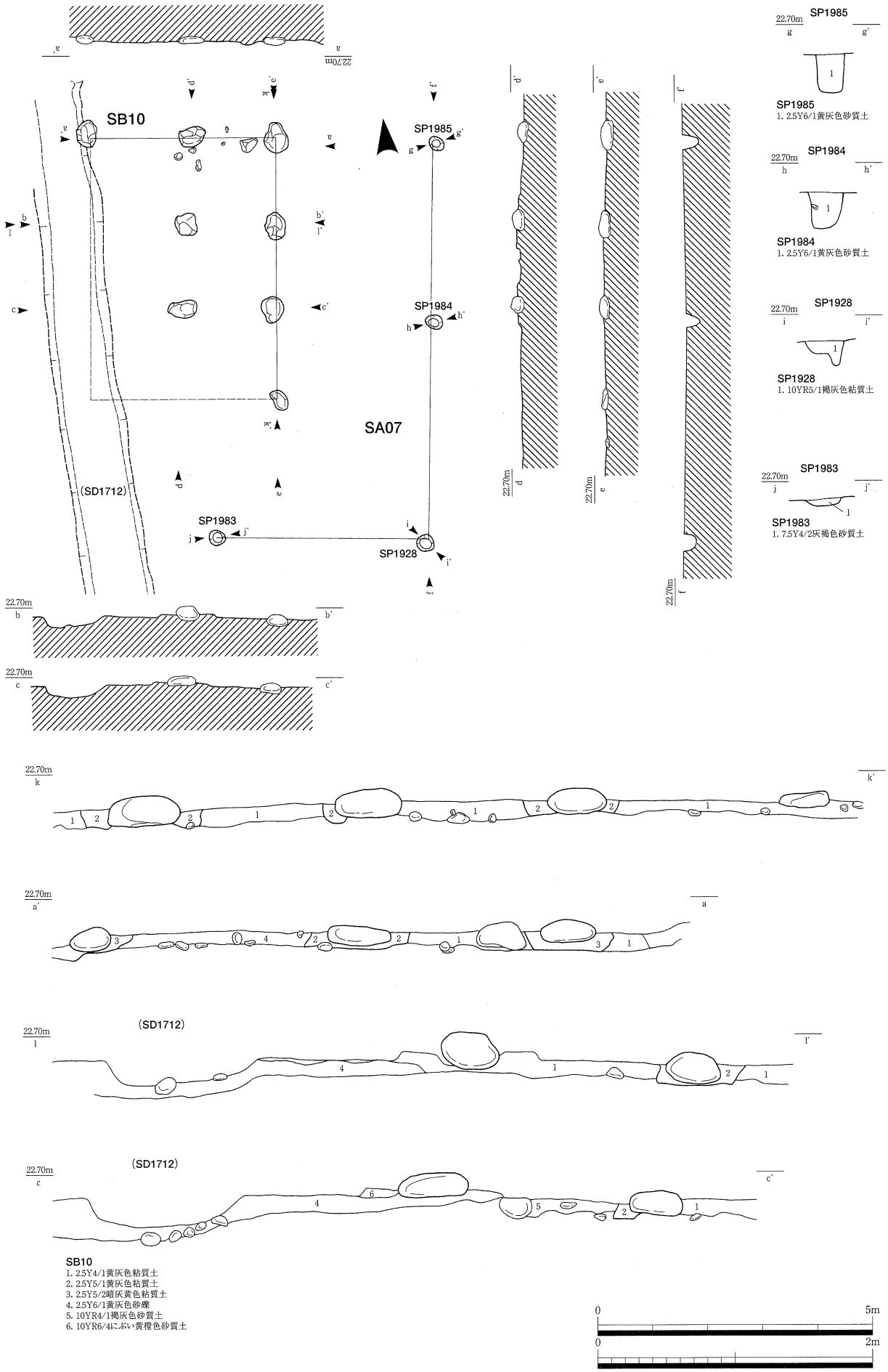
SD703
1. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト（黒褐色粘質土10%・橙色粒1%含）

SD701
1. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
2. 2.5Y5/1暗灰黄色粘土質シルト（橙色粒5%含）
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト（暗灰黄色粗砂20%含）
4. 2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト

0 2m

第29図　遺構実測図

SD675　SD701　SD703　SD727　SK751



第30図　遺構実測図

SB10　SA07

③Ｂ３地区

Ｂ３地区では中世下層・上層の２層が確認された。出土遺物から中世下層は12世紀後半～13世紀前半、中世上層は13世紀後半～14世紀に相当すると思われる。

〈中世下層〉

礎石建物

ＳＢ10（第30図、図版15）：上層の遺構ＳＤ1712に西側を切られているため全体は不明であるが、３間×２間と思われる礎石建物。南北棟で、建物方位はＮ－５°－Ｅ。梁行3.4m、桁行4.7m、面積は15.98m²である。礎石には直径40～58cmの石が使われている。中央の礎石は、外周の礎石よりもやや高い位置に据えられており、そのレベル差は12～20cm程である。柵列ＳＡ07を伴う。北陸地方の中世遺跡でみられる礎石建物としては、最も古いもののひとつである。建物の規模から、小さな御堂の様なものが考えられる。遺物の出土はみられない。

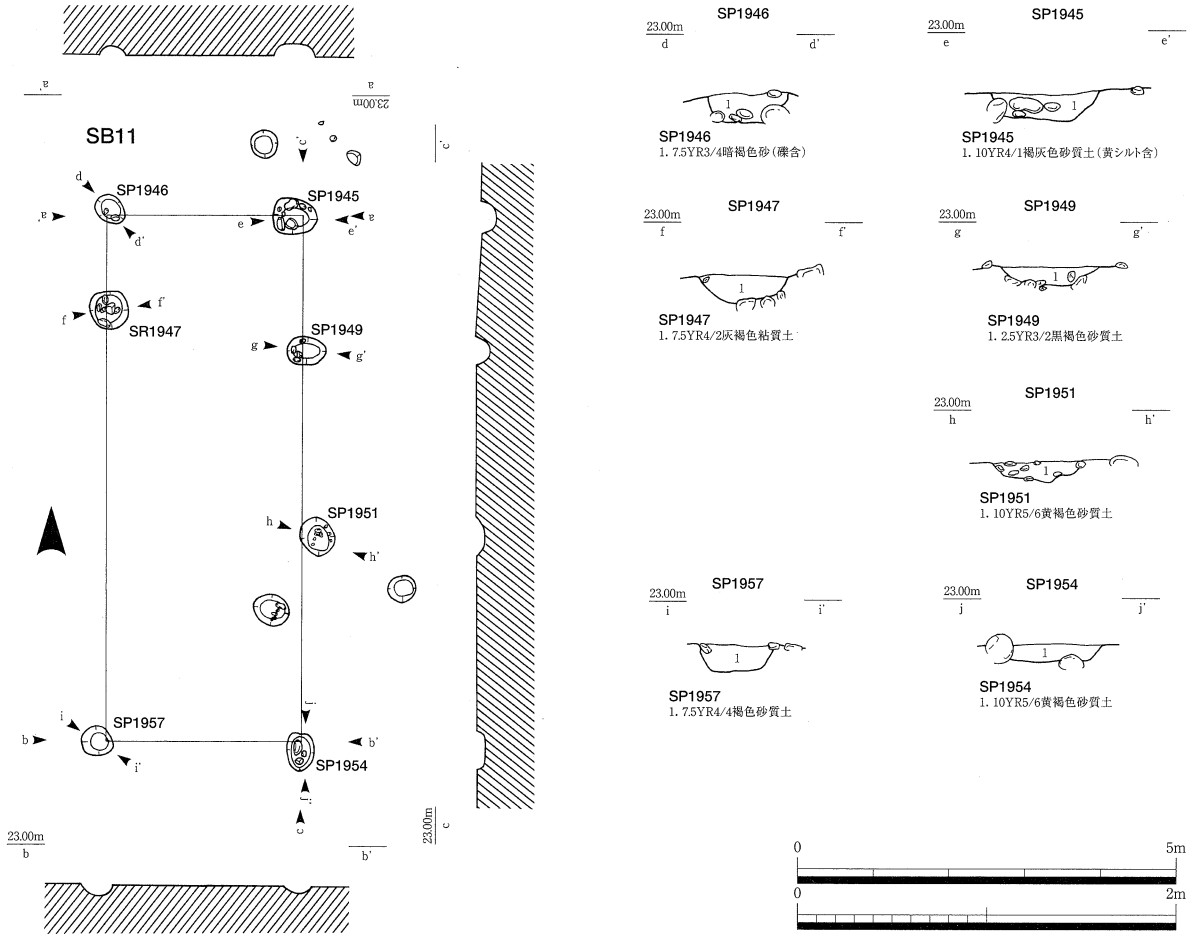
掘立柱建物

ＳＢ11（第31図）：Ｘ33～37Ｙ169～171に位置する１間×３間の掘立柱建物。南北棟で、建物方位はＮ－２°－Ｅ。西側の柱穴が一部欠けている。梁行2.6m、桁行6.7m、面積は17.42m²である。遺物の出土はみられない。

柵列

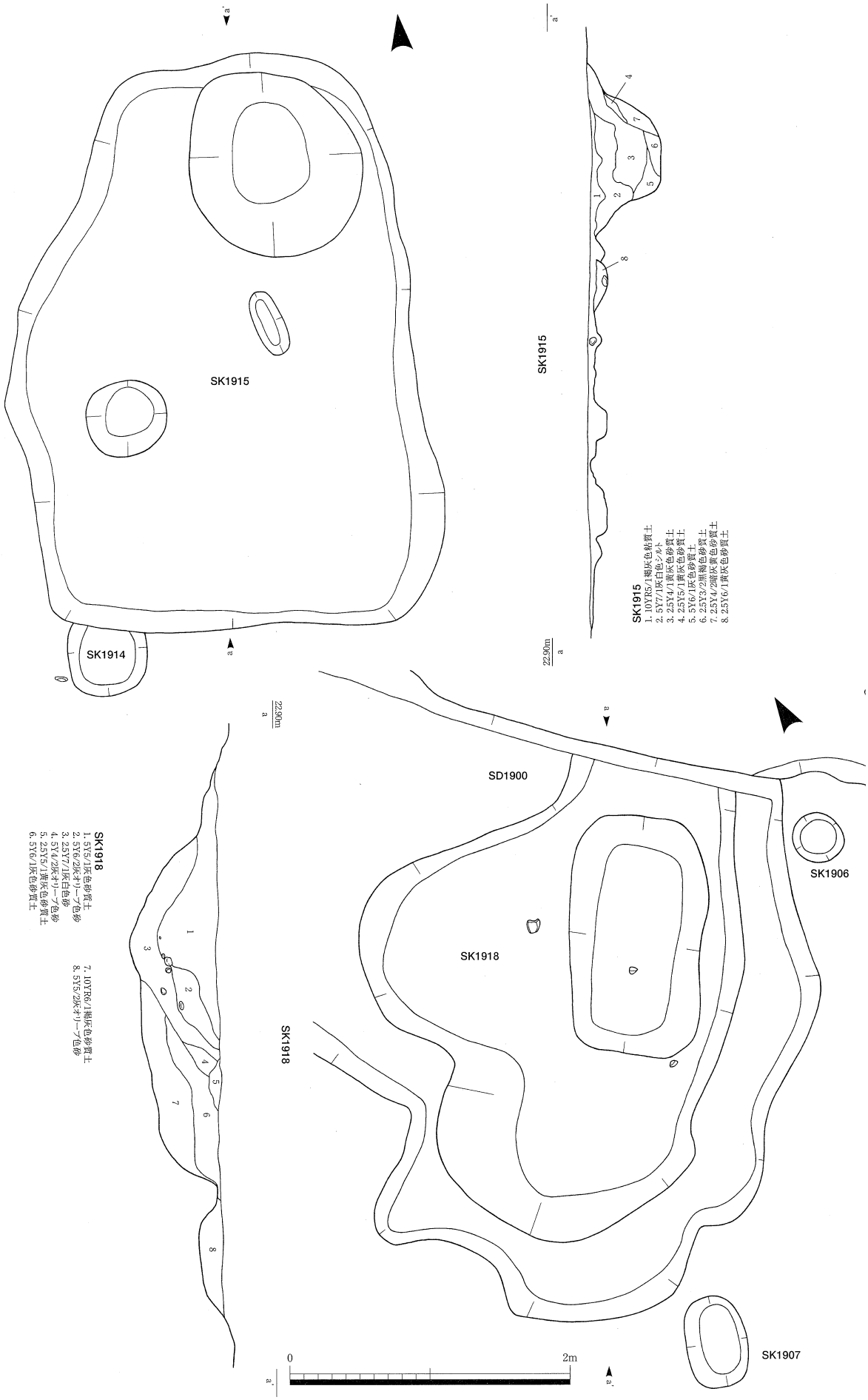
ＳＡ07（第30図）：礎石建物ＳＢ10に伴う柵列。建物の東南を逆Ｌ字形に廻り、４基の柱穴で構成される。柱穴の直径は0.25～0.3m、深さは0.04～0.29m。

土坑



第31図　遺構実測図

SB11



第32図　遺構実測図

SK1915　SK1918

ＳＫ1915（第32図）：Ｘ33～35Ｙ176～178に位置する長方形の浅い土坑。ＳＫ1914を切る。長さ4.1m、幅2.8m、深さ0.13m。北東隅に落ち込みがあり、その部分の深さは0.50m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1918（第32図）：Ｘ33～35Ｙ181～183に位置する不整形な土坑。ＳＤ1900に切られる。長さ3.55m、幅3.25m、深さ0.37m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1924（第33図）：ＳＢ10の東に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1923に切られる。長さ1.73m、幅1.3m、深さ0.29m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1931（第33図）：Ｘ49～50Ｙ162に位置する円形の土坑。長さ1.5m、幅1.23m、深さ0.15m。珠洲が出土している。

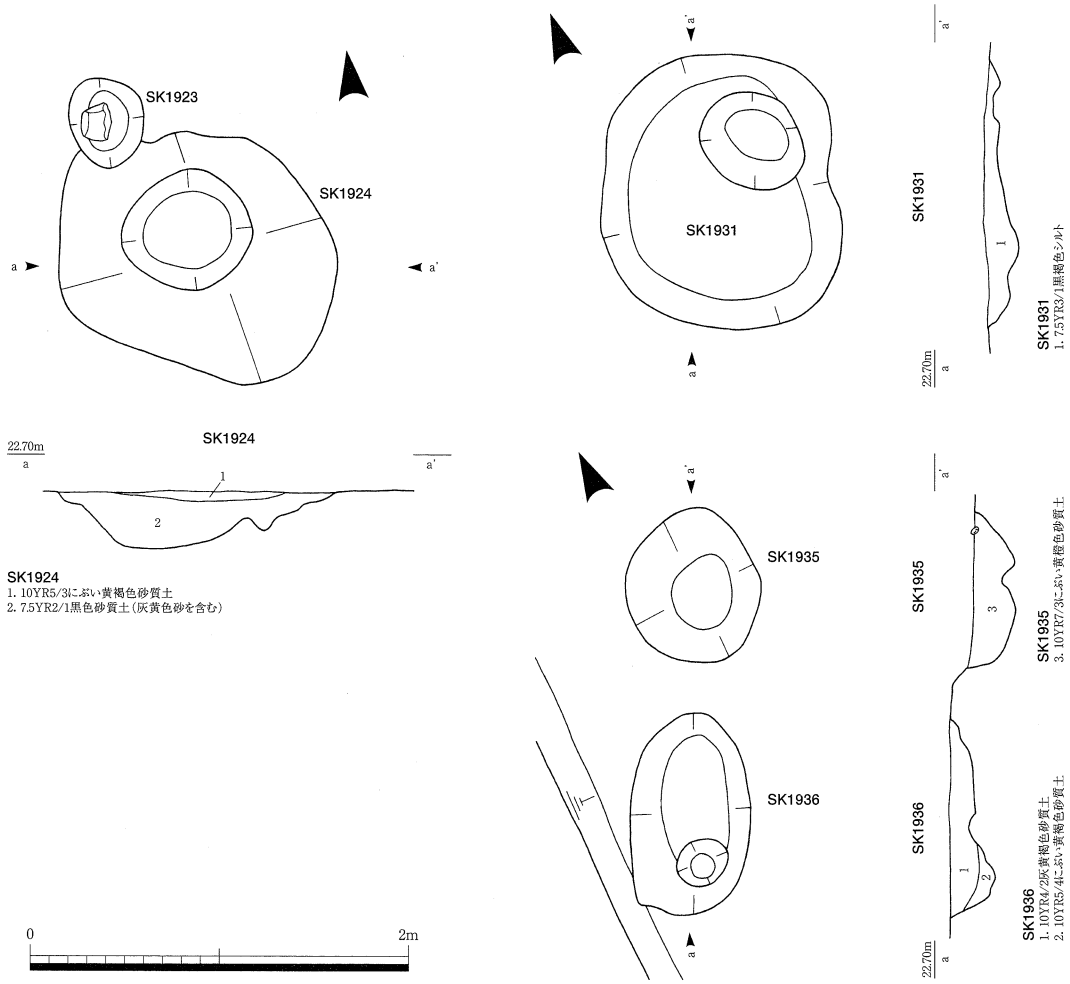
ＳＫ1936（第33図）：中世下層の調査区西端に位置する楕円形の浅い土坑。長さ1.07m、幅0.63m、深さ0.24m。中世土師器が出土している。

溝

ＳＤ1900（第34・102・103図）：調査区東側を南北に流れる溝。Ｘ40付近で「くの字」に折れ、これより南では浅くなって終わる。北はＢ２地区へ延びる。最大幅6.6m、深さ0.92m。ＳＫ1918を切る。土師器・中世土師器・珠洲・漆器・鉄滓が出土している。

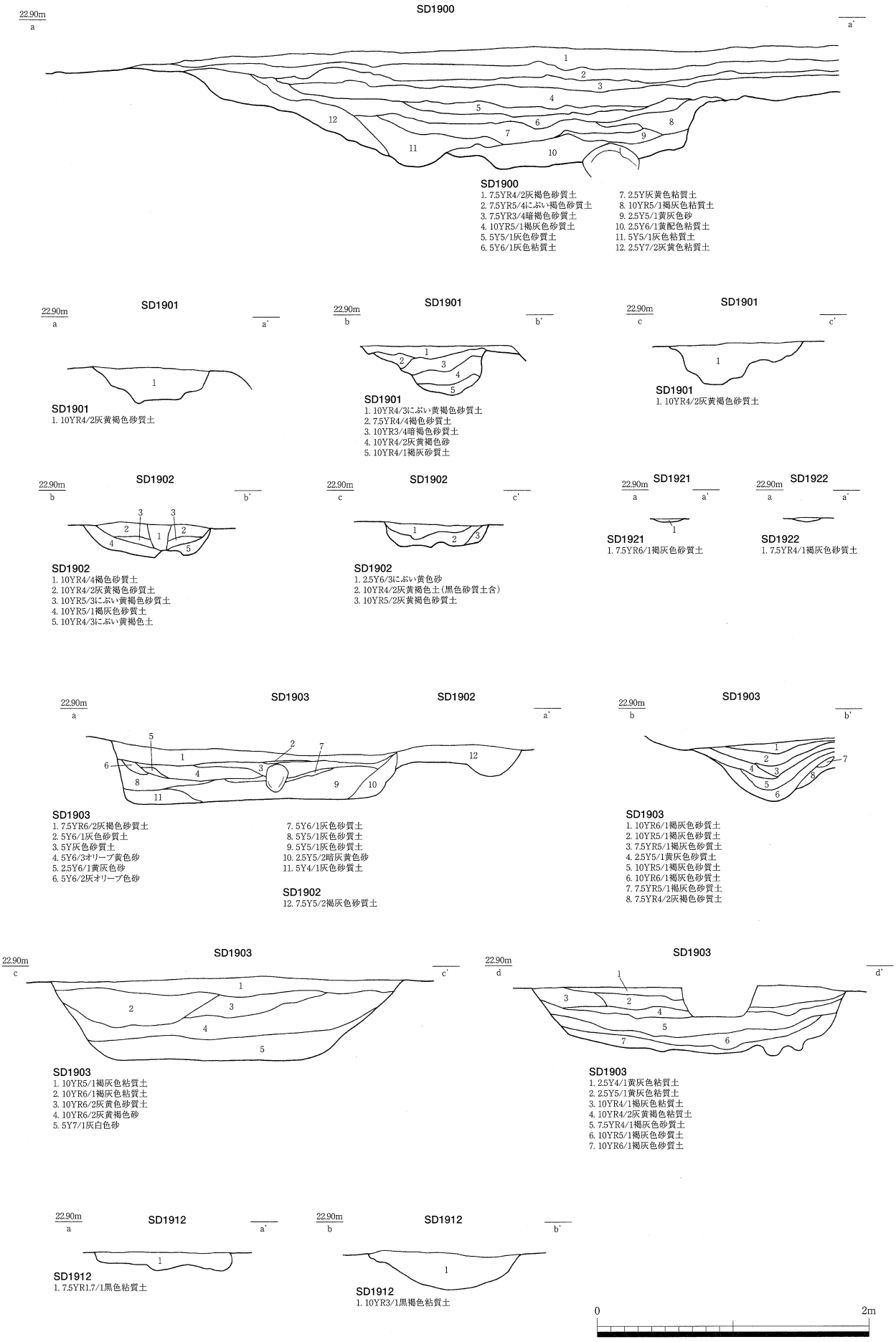
ＳＤ1901（第34・102・103図）：ＳＤ1900の東側に沿って南北に流れる溝。南端をＳＤ1903に切られる。最大幅0.9m、深さ0.23m。中世土師器が出土している。

ＳＤ1902（第34・102・103図）：ＳＤ1901の東側をほぼ平行に流れる溝。北端と南端をＳＤ1903に切られる。最大幅1.1m、深さ0.2m。遺物の出土はみられない。



第33図　遺構実測図

SK1924　SK1931　SK1935　SK1936



第34図　遺構実測図

SD1900　SD1901　SD1902　SD1903　SD1912　SD1921　SD1922

ＳＤ1903（第34・102・103図）：調査区の東端を南北に流れる溝。ＳＤ1901・1902・1904・1917を切る。最大幅2.5m、深さ0.54m。中世土師器・珠洲・八尾・白磁が出土している。

ＳＤ1912（第34・103図）：調査区南端から北へ向かって「くの字」に延びる溝。最大幅1.1m、深さ0.1m。中世土師器が出土している。

ＳＤ1921・ＳＤ1922（第34・102図）：ＳＤ1902の西側に沿う短く浅い溝。近世面で検出された畑跡に類似の遺構と思われる。遺物の出土は見られない。

〈中世上層〉

掘立柱建物

ＳＢ12（第35図、図版16）：調査区のほぼ中央、Ｘ48～51Ｙ168～171に位置する２間×３間の総柱建物。南北棟で、建物方位はＮ－10°－Ｅ。梁行4.4m、桁行6.7m、面積は29.48㎡である。ＳＰ1053から中世土師器が出土している。

ＳＢ13（第35図）：Ｂ２地区に接する調査区北東端、Ｘ62～64Ｙ154～157に位置する。２間×４間以上の側柱建物が想定されるが、Ｂ２地区中世面が未調査のため全体の規模は不明である。建物方位はＮ－16°－Ｅ。ＳＰ1218から珠洲が出土している。

ＳＢ14（第36図）：Ｘ37～40Ｙ170～173に位置する２間×２間の側柱建物。南北棟で、建物方位はＮ－４°－Ｅ。梁行は4.9m、桁行は5.8m、面積は28.42㎡である。遺物の出土はみられない。建物の西南をＬ字形に柵列ＳＡ08が廻る。

ＳＢ15（第37図、図版17）：Ｘ55～58Ｙ151～155に位置する２間×３間の総柱建物。東西棟で、建物方位はＮ－28°－Ｅ。梁行4.3m、桁行6.76m、面積29.068㎡である。ＳＰ1140とＳＰ1347から中世土師器、ＳＰ1143から須恵器が出土している。

ＳＢ16（第38図、図版17）：調査区西端Ｘ41～45Ｙ152～155に位置する２間×２間の総柱建物。北側に不揃いではあるが柱穴が並び、庇状のものが想定される。南北棟で、建物方位はＮ－８°－Ｅ。梁行５m、桁行6.9m、面積34.5㎡である。西側に柵列ＳＡ09を伴う。建物南に位置する方形の土坑ＳＫ1371は建物に伴うものと思われる。ＳＰ1373から中世土師器、ＳＰ1603から須恵器、ＳＫ1371から中世土師器・八尾・白磁・板状金属製品が出土している。

ＳＢ17（第39図）：ＳＢ18の東側に一部重なる総柱建物。調査区外に延び、建物全体の規模は不明であるが、２間×２間以上の建物が想定される。建物方位はＮ－３°－Ｅ。遺物の出土は見られない。

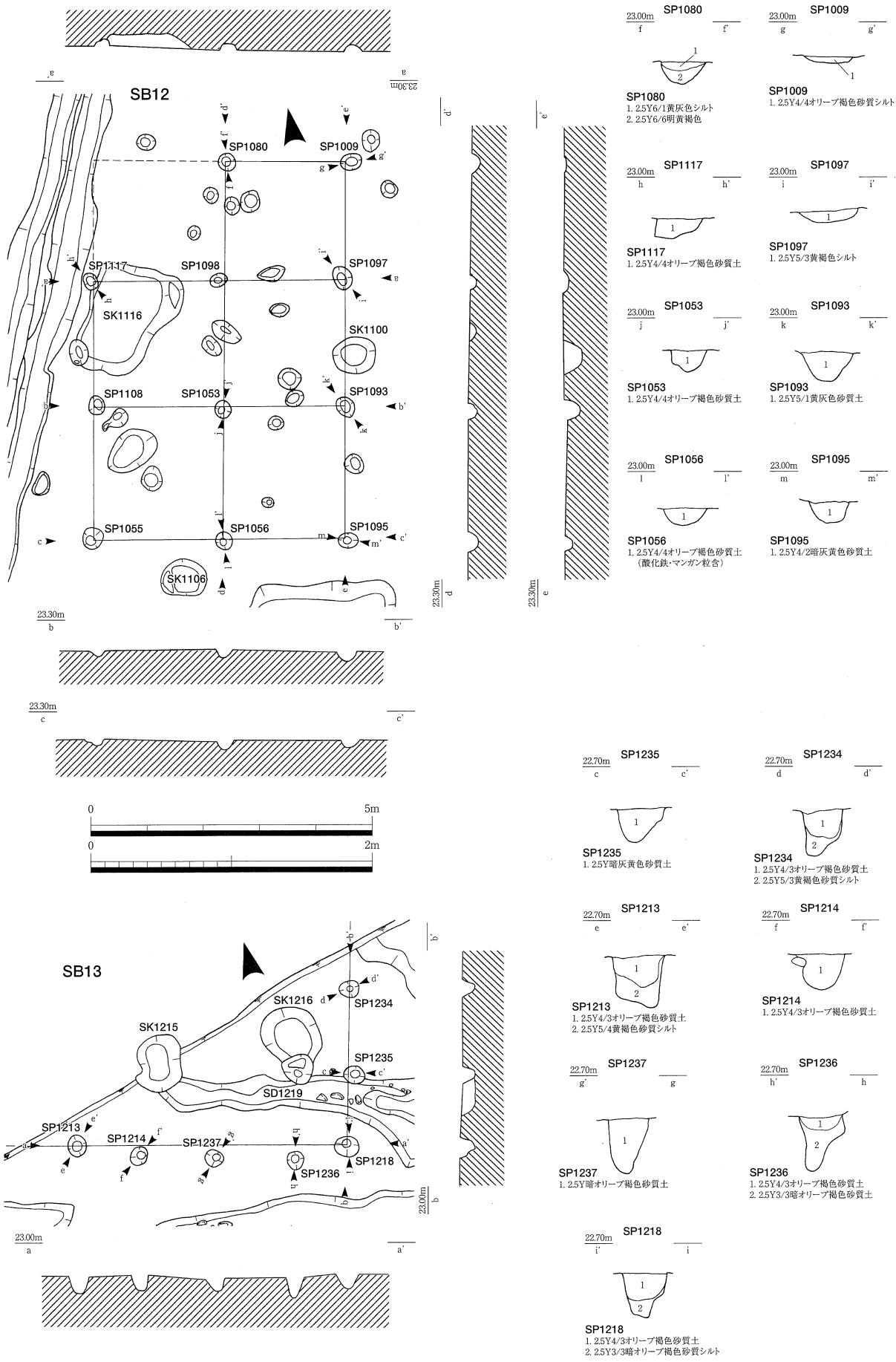
ＳＢ18（第39図）：Ｘ46～47Ｙ149～152に位置し、Ｂ４地区にまたがる総柱建物。調査区外に延びるため、建物の規模は不明である。建物方位はＮ－５°－Ｅ。ＳＰ1521から中世土師器・珠洲・青磁、ＳＰ1526から中世土師器・青磁が出土している。

ＳＢ19（第40図）：Ｂ３・Ｂ４地区にまたがる掘立柱建物。建物方位はＮ－44°－Ｗ。ＳＰ1515から土師器、ＳＰ1524から須恵器が出土している。

ＳＢ20（第40図）：Ｘ33～40Ｙ160～161に位置する掘立柱建物。柱穴は小さく、並び方も不規則である。建物方位はＮ－26°－Ｅ。梁行2.2m、桁行4.3m、面積9.46㎡。ＳＰ1658から中世土師器が出土している。

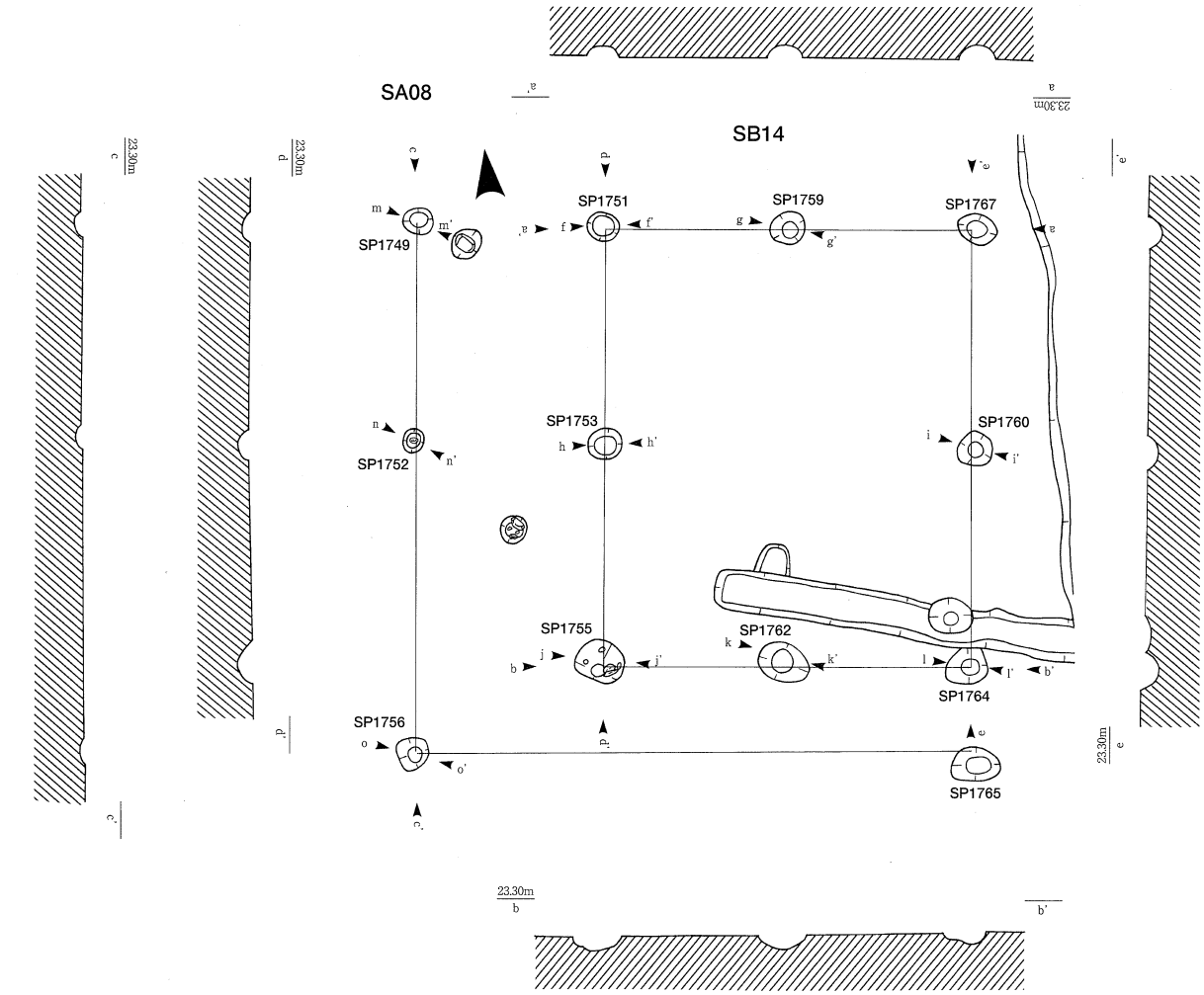
柵列

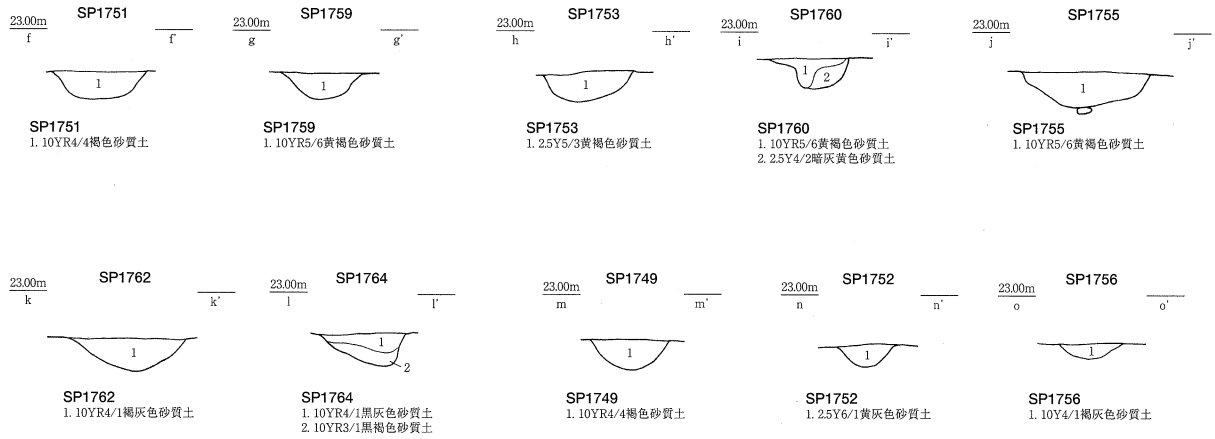
ＳＡ08（第36図）：ＳＢ14に伴うＬ字形の柵列。４基の柱穴で構成され、建物の西南を廻る。ＳＰ1749・1752・1765が建物の柱穴と並ぶため柵列ではなく建物の建て増しや庇とも考えられる。

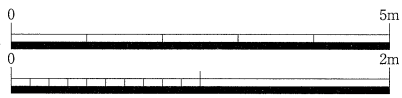


第35図　遺構実測図

SB12　SB13

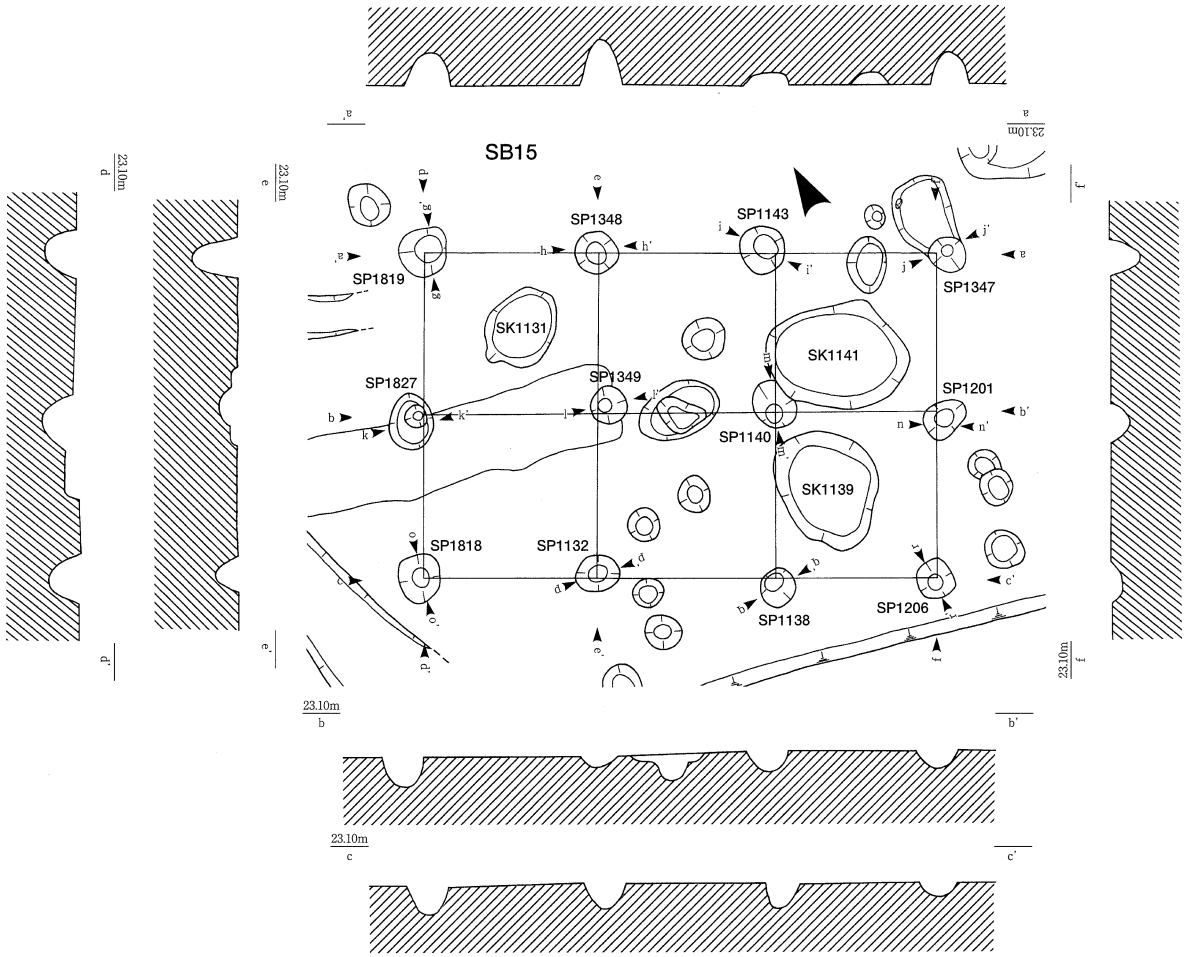


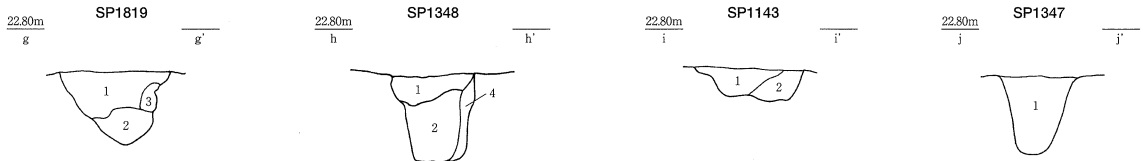




第36図　遺構実測図

SB14　SA08



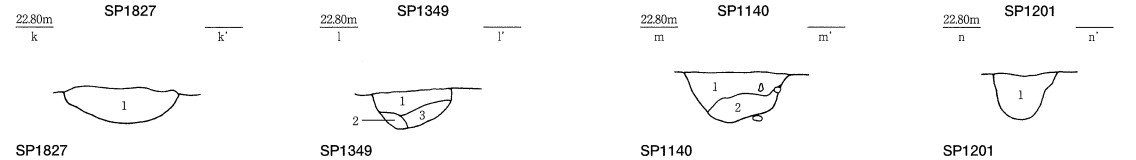


SP1819
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y4/5オリーブ褐色砂
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

SP1348
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
3. 2.5Y4/2オリーブ褐色粘質シルト
4. 2.5YR3/2暗オリーブ褐色シルト
（2.5Y7/4浅黄色砂を層状に含）

SP1143
1. 2.5Y5/4黄褐色砂質土
2. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土

SP1347
1. 10YR4/4褐色砂質土

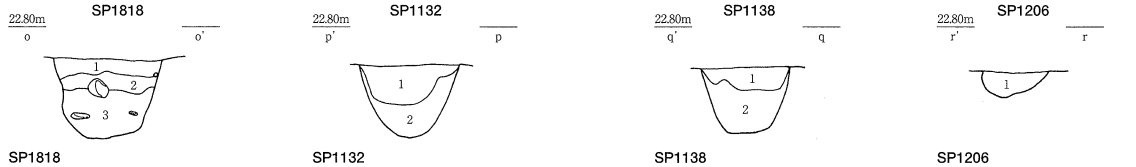


SP1827
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

SP1349
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y5/4黄褐色砂
3. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土

SP1140
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト

SP1201
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土



SP1818
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y5/3黄褐色砂質土
3. 2.5Y5/4黄褐色砂質土

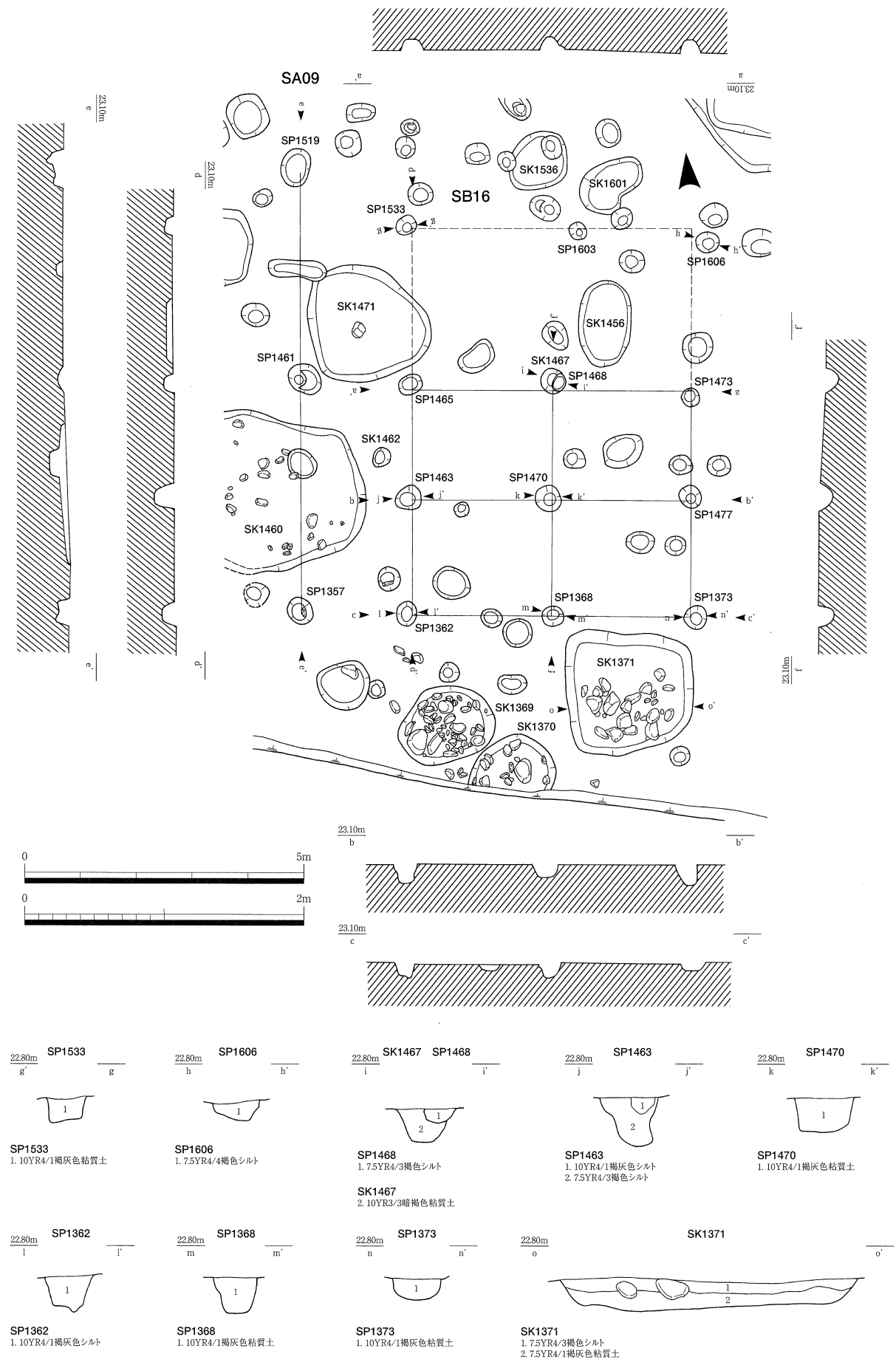
SP1132
1. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
2. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土

SP1138
1. 10YR4/4褐色砂質土
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

SP1206
1. 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土

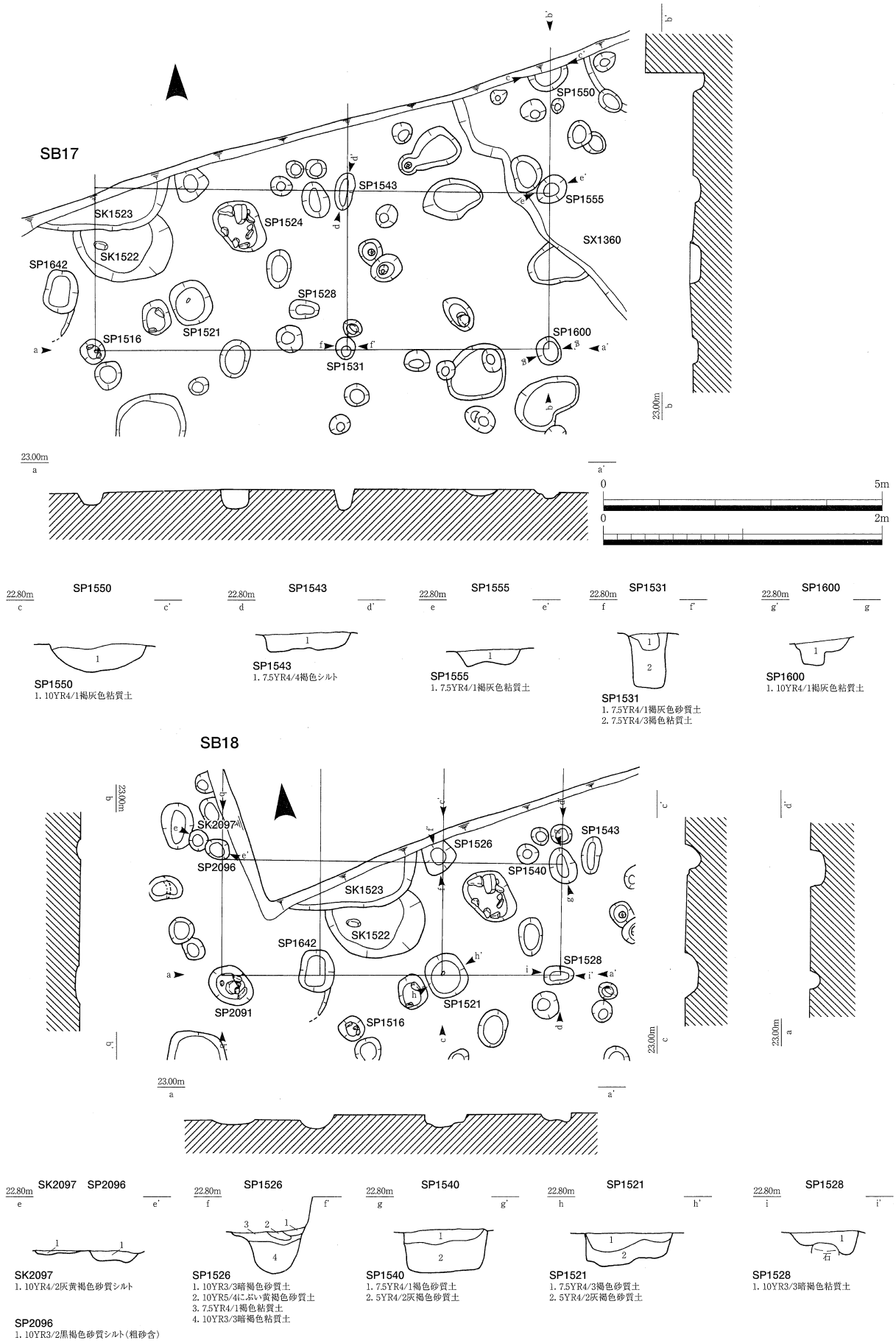
第37図　遺構実測図

SB15



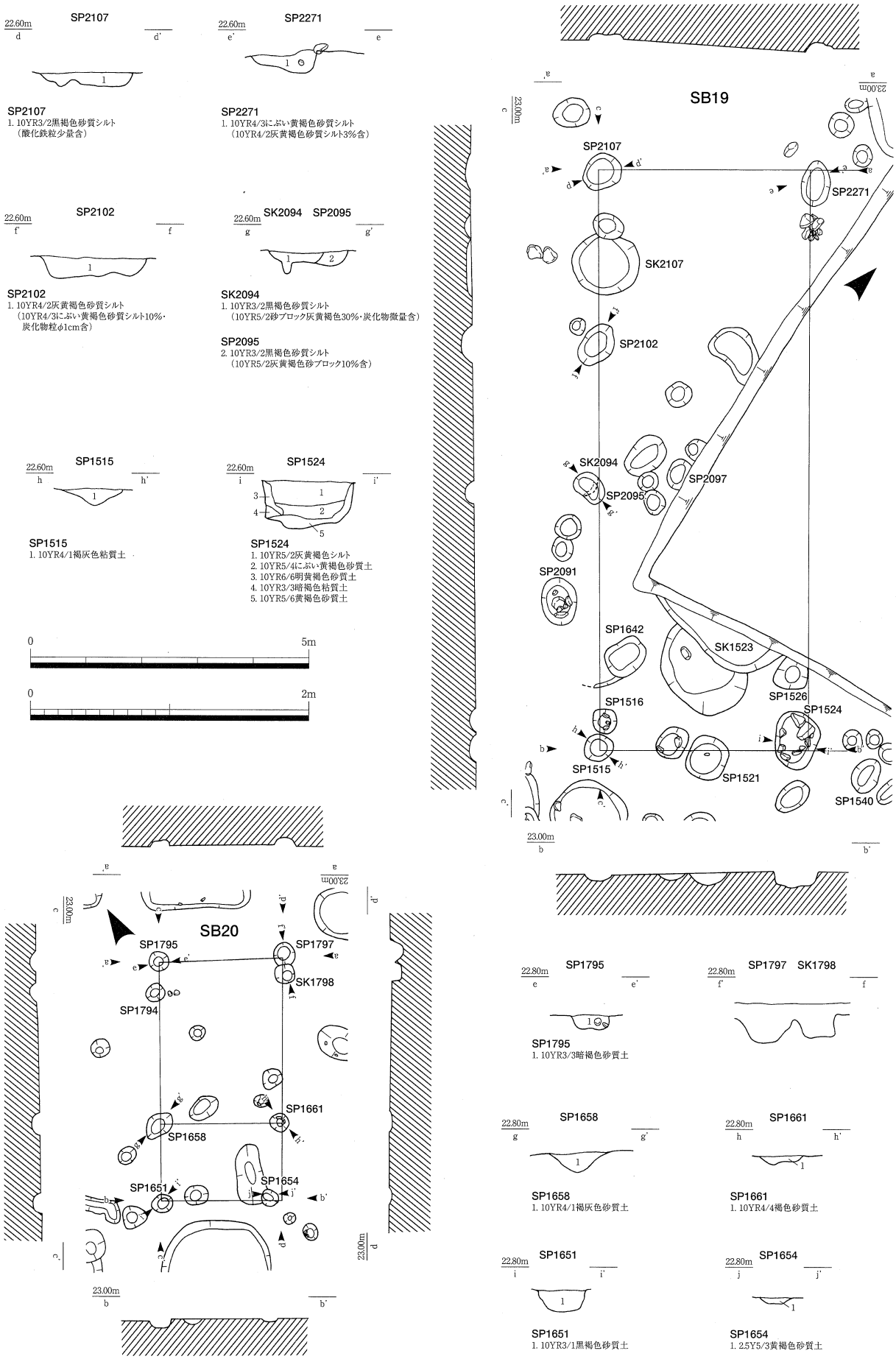
第38図　遺構実測図

SB16　SA09



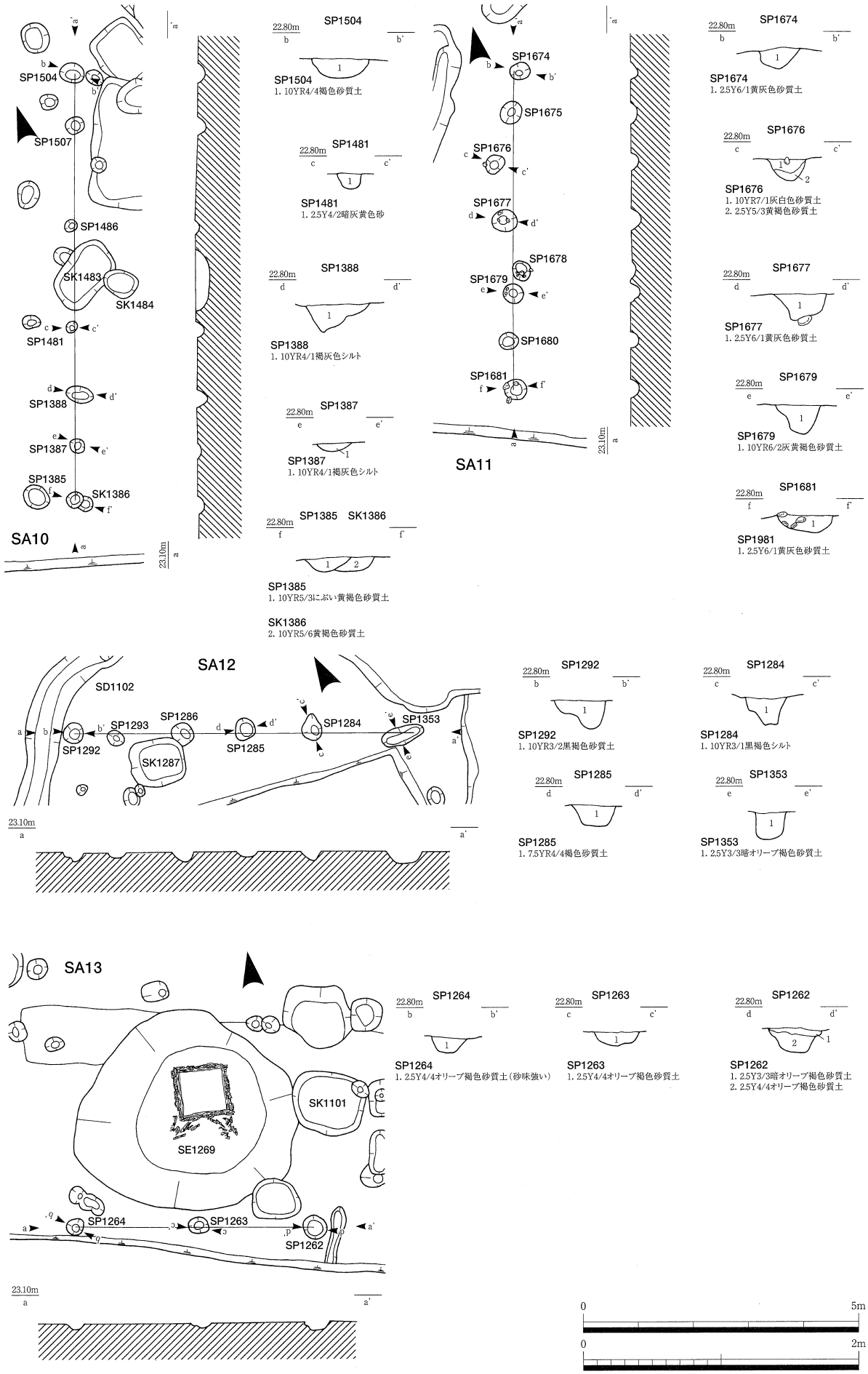
第39図　遺構実測図

SB17　SB18



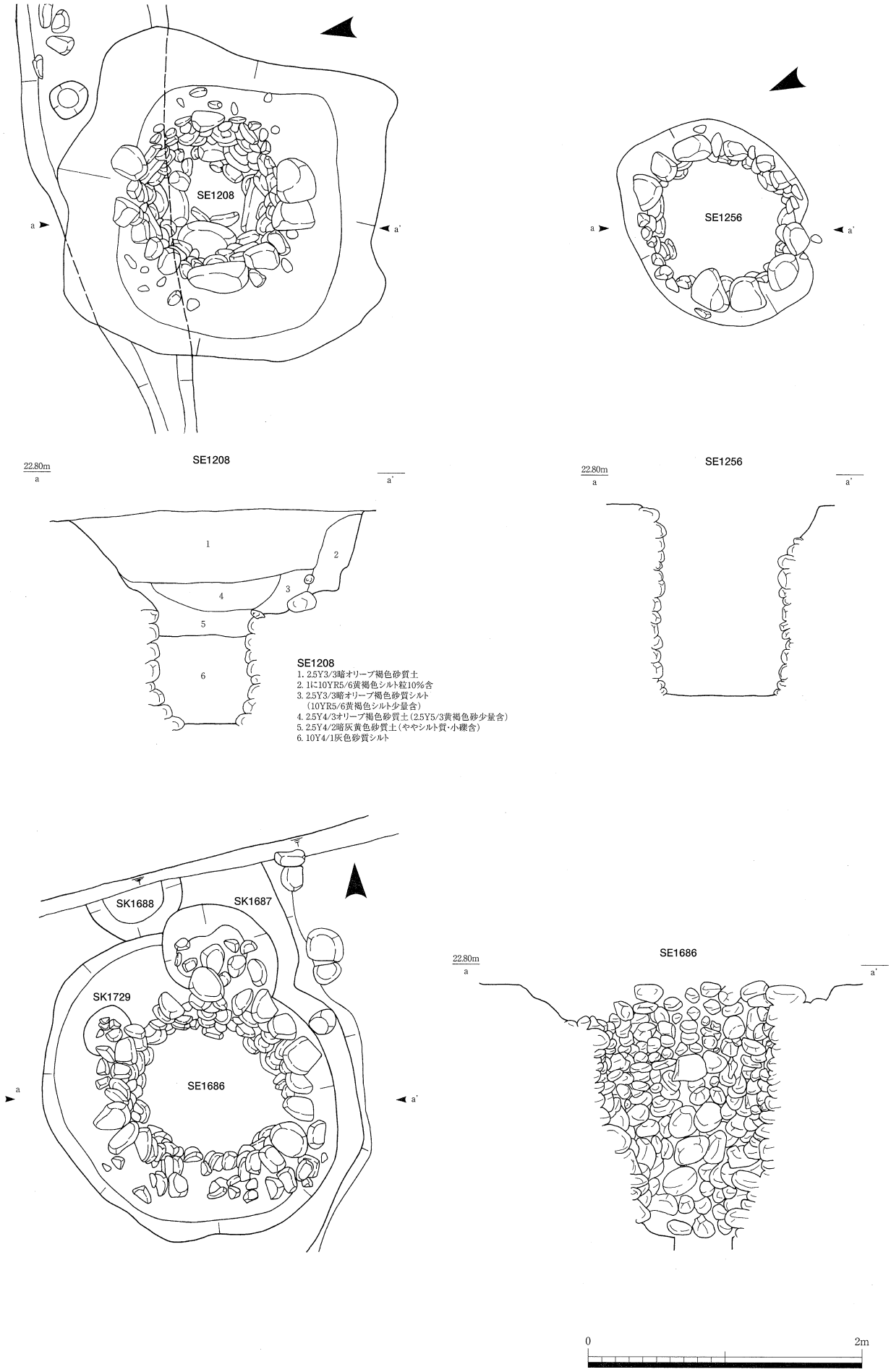
第40図　遺構実測図

SB19　SB20



第41図　遺構実測図

SA10　SA11　SA12　SA13



第42図　遺構実測図

SE1208　SE1256　SE1686　SK1729

ＳＡ09（第38図）：ＳＢ16の西側に位置する柵列。全長８ｍで、３基の柱穴で構成される。

ＳＡ10・ＳＡ11（第41図）：ＳＸ1360の東西に位置する柵列。ほぼ平行に並んでいる。ＳＡ10はＸ39～43Ｙ156～157に位置し、７基の柱穴で構成される。全長7.8ｍ。ＳＡ11はＸ37～40Ｙ162～163に位置し、８基の柱穴で構成される。全長5.8ｍ。ＳＰ1677・1679から中世土師器が出土している。

ＳＡ12（第41図）：調査区のほぼ中央Ｘ52～53Ｙ163～166に位置する東西方向の柵列。全長6.1ｍ。６基の柱穴で構成される。ＳＰ1284から中世土師器が出土している。

ＳＡ13（第41図）：木組井戸ＳＥ1269の南に位置する柵列。井戸に伴うと思われる。全長4.3ｍ。３基の柱穴で構成される。ＳＰ1262から中世土師器が出土している。

井戸

ＳＥ1208（第42図、図版18）：調査区の北西Ｘ61～62Ｙ154～155に位置する石組井戸。ＳＤ1219に切られる。長さ2.32ｍ、幅2.28ｍ、深さ1.54ｍ。井戸上部はすり鉢状に開き、石組は下半分のみが残っていた。中央に水溜の曲物が入っていたが、状態が悪く完形で取り上げることはできなかった。中世土師器・珠洲・土錘が出土している。

ＳＥ1256（第42図、図版18）：ＳＥ1304・1305・1308の東に位置する石組井戸。長さ1.55ｍ、幅1.3ｍ、深さ1.39ｍ。検出面まで石組が残っていた。石組はほぼ垂直に組まれている。水溜の施設はみつからなかった。遺物の出土はみられない。

ＳＥ1686（第42図、図版18）：ＳＤ1103の西側Ｘ49～50Ｙ164～165に位置する石組井戸。石組が検出面まで残っていた。底には水溜の痕跡があったが、曲物などはみつからなかった。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＥ1269（第43図、図版18）：Ｘ54～55Ｙ159～161に位置する木組井戸。長さ4.04ｍ、幅3.67ｍ、深さ1.79ｍ。方形隅柱横桟組の井戸側を持つ。南側の横桟が折れて縦板が倒れ込んでいたが、新たな隅柱と横桟を入れ修復している。井戸側内には長さ50～60㎝の長楕円形の礫が並べるように入れられており、井戸を廃棄する際の祭祀が考えられる。出土遺物には、土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・青磁・釘・鉄滓・銭・曲物底板・漆器・箸・ヘラ・種子（モモ・ウメ・クリ・ヒョウタン）などがある。珠洲の鉢はＳＫ1104から出土したものと接合した。また、掘方の南西隅から完形の漆器の椀が伏せた状態でみつかっており、井戸を造る際の地鎮と思われる。

ＳＥ1304（第44図、図版18）：Ｘ56～57Ｙ160～161に位置する石組井戸。ＳＫ1168・1169・1171・1172・1328・1329に切られ、ＳＥ1305を切る。切り合う３つの井戸ＳＥ1304・1305・1308の中では最も新しい。幅1.04ｍ、深さ1.12ｍ。石組は４段程度しか残っていなかった。土師器・中世土師器・珠洲・八尾・砥石が出土している。

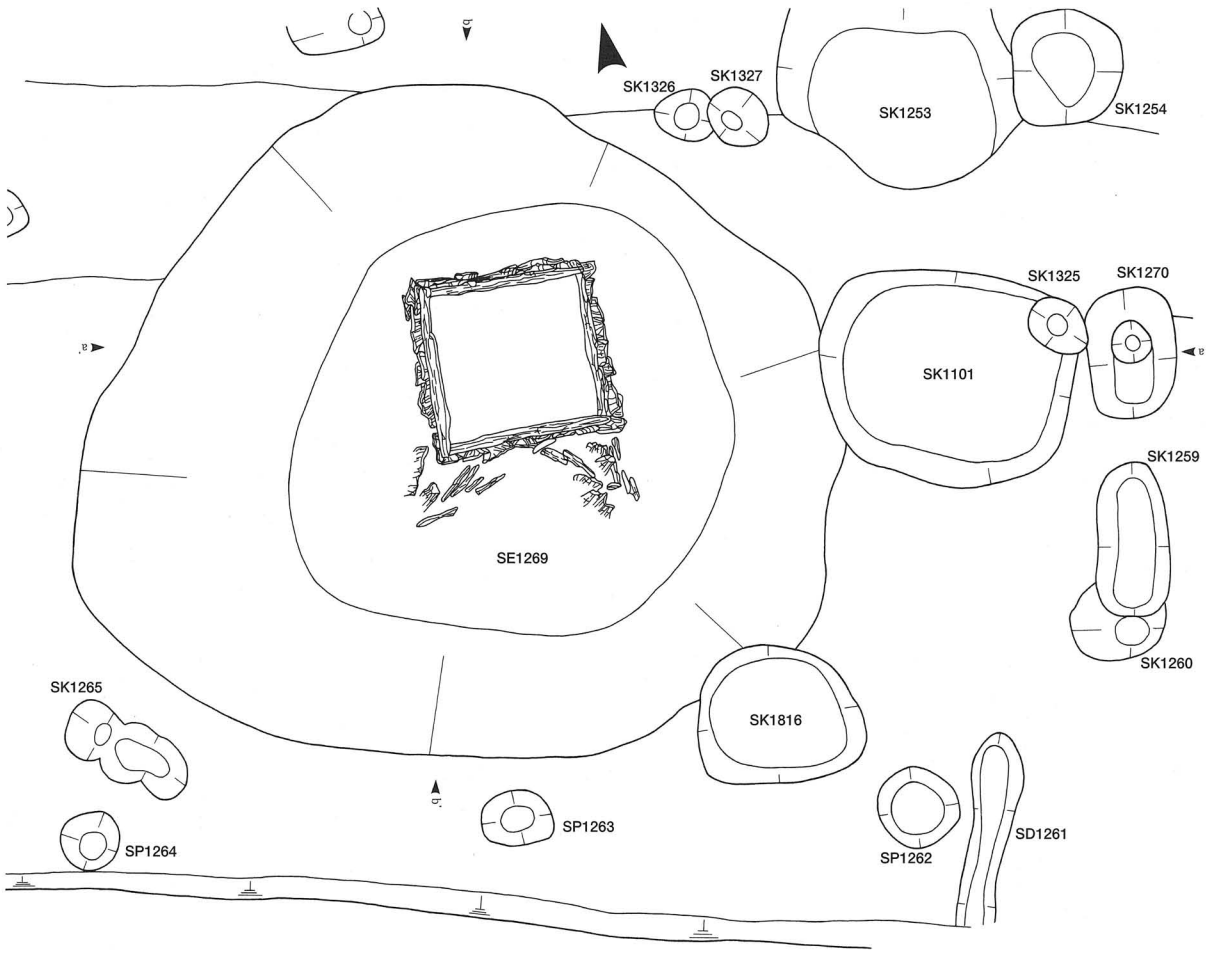
ＳＥ1305（第44図、図版18）：ＳＥ1308より新しく、ＳＥ1304より古い石組井戸。幅2.94ｍ、深さ1.56ｍ。石組は３段程度しか残っておらず、その中からはザルが出土した。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・八尾・漆器・箸・砥石がみつかっている。

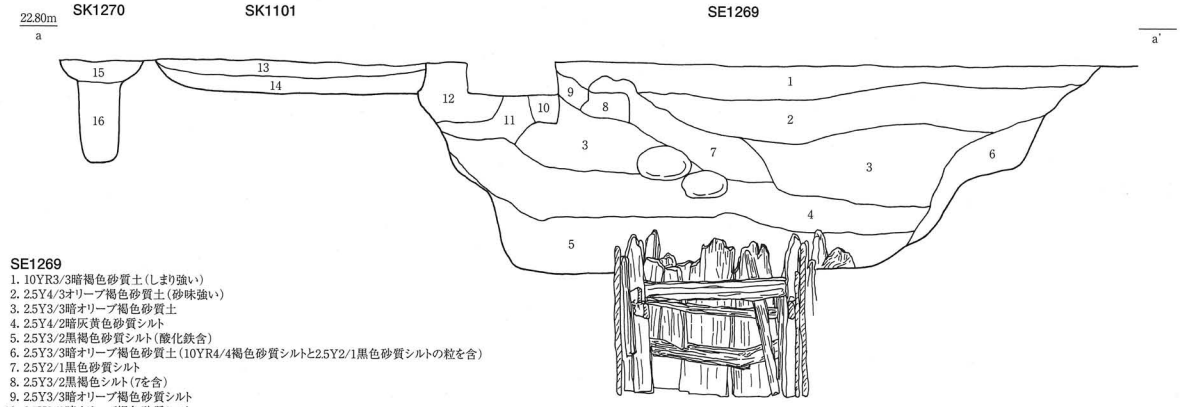
ＳＥ1308（第44図、図版18）：ＳＥ1305に切られ、１～２段の石組が半円状に残るのみである。土層断面の観察からもＳＥ1308の掘方等は確認できず、ＳＥ1305によって壊されたものと思われる。

土坑

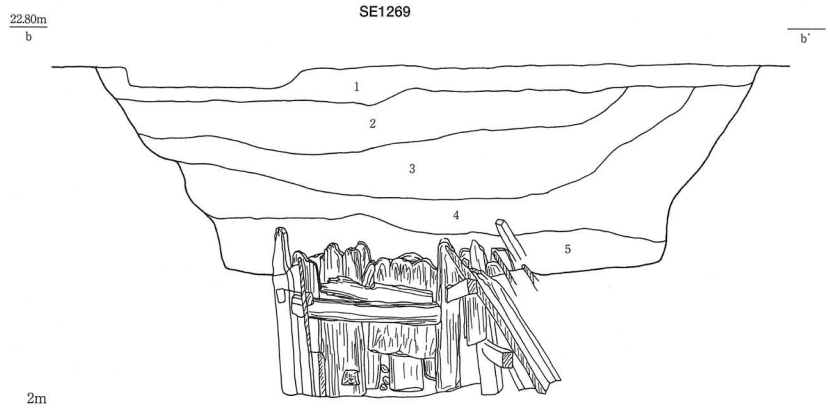
ＳＫ1101（第43図）：Ｘ59Ｙ162に位置する土坑。ＳＥ1269を切る。長さ1.35ｍ、幅1.12ｍ、深さ0.16ｍ。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1104（第45図、図版19）：Ｘ52～54Ｙ169～170に位置する長さ5.1ｍ、幅4.32ｍ、深さ1.18ｍの





SE1269
1. 10YR3/3暗褐色砂質土(しまり強い)
2. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土(砂味強い)
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
4. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
5. 2.5Y3/2黒褐色砂質シルト(酸化鉄含)
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土(10YR4/4褐色砂質シルトと2.5Y2/1黒色砂質シルトの粒を含)
7. 2.5Y2/1黒色砂質シルト
8. 2.5Y3/2黒褐色シルト(7を含)
9. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト
10. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト
11. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
12. 10YR3/3暗褐色砂質土(しまり強い)



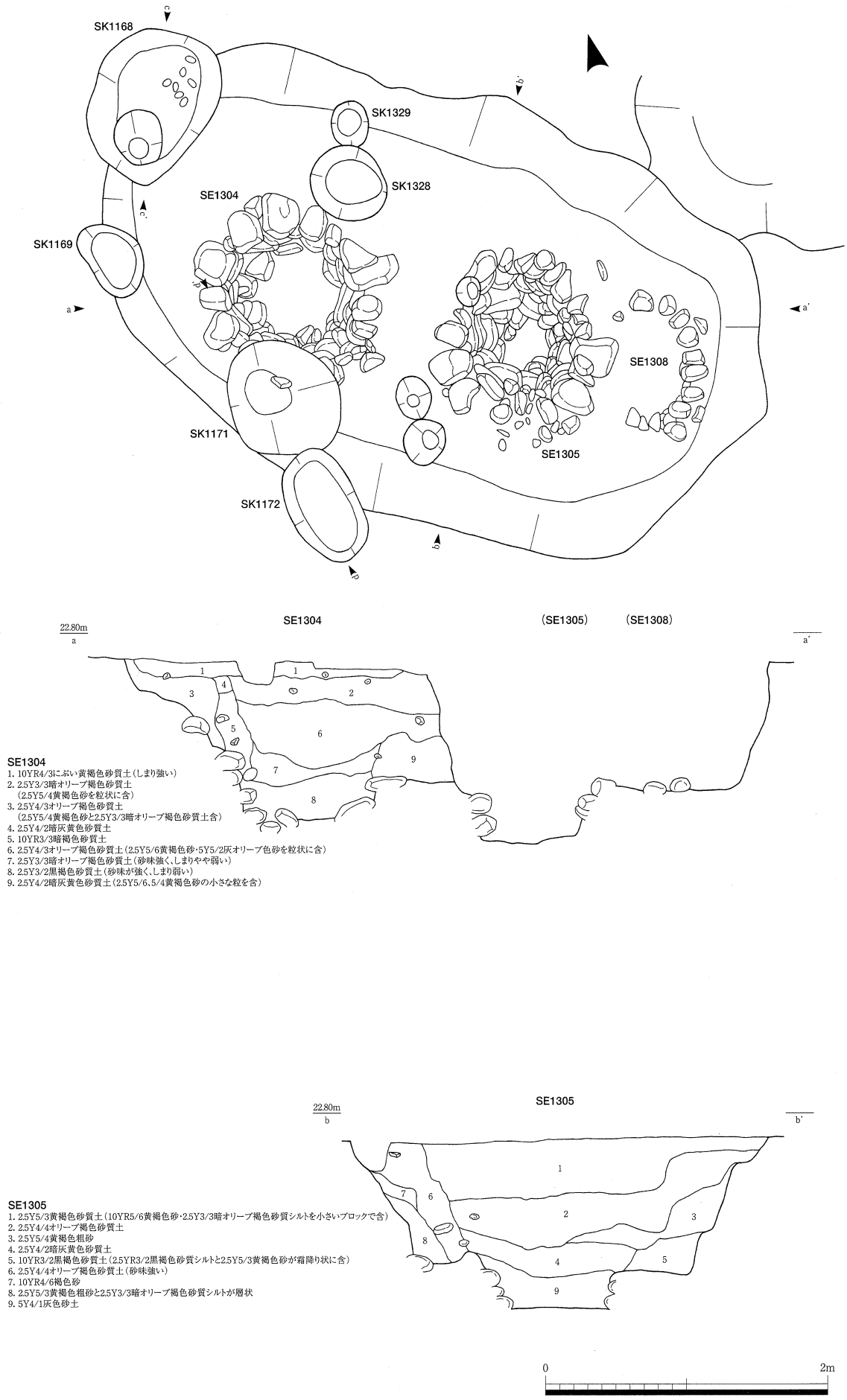
SK1101
13. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
14. 10YR3/3暗褐色砂質土

SK1270
15. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
16. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土

0 2m

第43図　遺構実測図

SE1269　SK1101　SK1270



第44図　遺構実測図

SE1304　SE1305　SE1308　SK1168　SK1171

土坑。ＳＤ1709・1710に切られる。大量の遺物が出土した。中世土師器・珠洲・八尾・白磁・青磁・土錘・釘・鉄滓・板状金属製品・漆器・曲物・下駄・箸・砥石・叩き石が出土している。中世土師器や珠洲の編年から推定すると、この土坑は長期間に渡って使用されたようである。覆土中に炭化物を多量に含む黒色層があり、遺物のほとんどはこの層から出土している。この土を洗浄したところ、植物の種子・昆虫・魚骨・人骨（歯）が検出された。植物の種子は特に多く、コメ・ムギ・ダイズ・ウリ・カキなどの食用植物と、カヤツリグサ・カナムグラ・メナモミといった人家の周辺に自生する植物の両者が出土している。食用植物の種子は炭化している場合が多い。昆虫については、ハエ・エンマムシ・ゴミムシなどの死肉や腐敗した食物に集まる種類がみつかっている。このことからＳＫ1104はゴミ捨て場として使われた後、コメやムギなどを捧げて火を焚く祭祀を行い廃棄したと考えられる。（植物・昆虫・魚の種類については自然化学分析を参照）

ＳＫ1116（第46図）：ＳＢ12の柱穴ＳＰ1117とＳＫ1118に切られる不整形な土坑。長さ1.96m、幅1.57m、深さ0.26m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1168（第44・46図）：ＳＥ1304を切る楕円形の土坑。長さ1.09m、幅0.86m、深さ0.46m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1171（第44・46図）：ＳＥ1304を切る円形の土坑。直径0.82m、深さ0.46m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1175（第107図）：Ｘ59～60Ｙ161に位置する長楕円形の土坑。ＳＫ1174・1249に切られる。幅1.12m、深さ0.47m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1180（第46図）：Ｘ61Ｙ148に位置する円形の土坑。長さ0.72m、幅0.57m、深さ0.47m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1186（第46図）：Ｘ60Ｙ149に位置する円形の土坑。長さ0.57m、幅0.49m、深さ0.22m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1197（第46図）：Ｘ61Ｙ150に位置する楕円形の土坑。ＳＤ1189に切られる。長さ1.3m、幅0.79m、深さ0.35m。中世土師器・八尾が出土している。

ＳＫ1210（第46図）：Ｘ59Ｙ156に位置する円形の土坑。ＳＫ1151に切られ、ＳＫ1339を切っている。幅１m、深さ0.09m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1211（第47図）：Ｘ59Ｙ156～157に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1343・1344を切る。長さ2.61m、幅1.08m、深さ0.2m。遺物の出土はみられない。

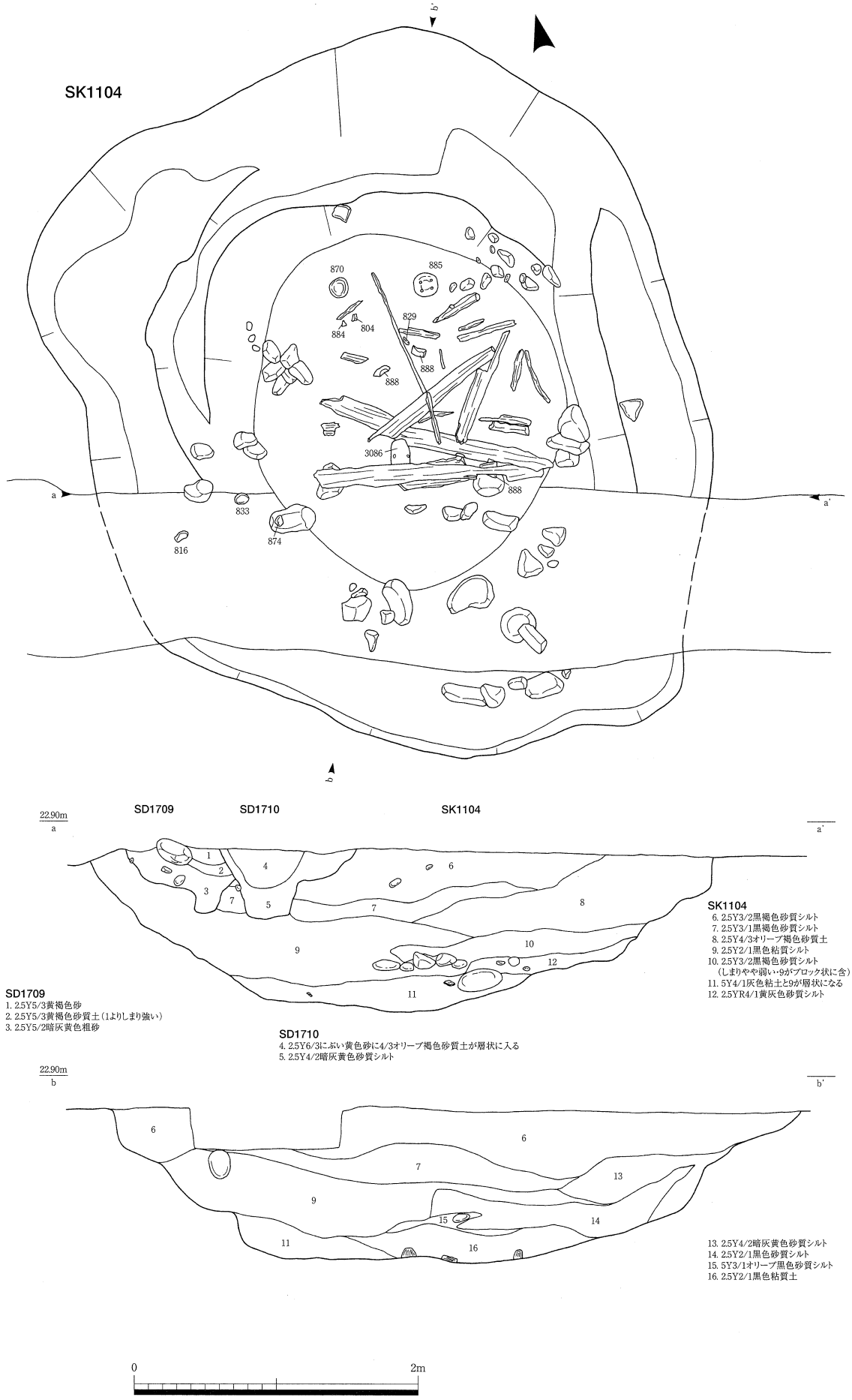
ＳＫ1215（第46図）：Ｘ63Ｙ155に位置する不整形な土坑。ＳＤ1219を切る。長さ1.02m、幅0.72m、深さ0.39m。土師器が出土している。

ＳＫ1216（第46図）：ＳＫ1215の東に位置する円形の土坑。ＳＫ1217に切られる。幅0.99m、深さ0.55m。土師器が出土している。

ＳＫ1220（第47図）：ＳＫ1211の北側に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1337・1812・1813に切られ、ＳＫ1221を切る。長さ2.45m、幅1.56m、深さ0.17m。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲が出土している。

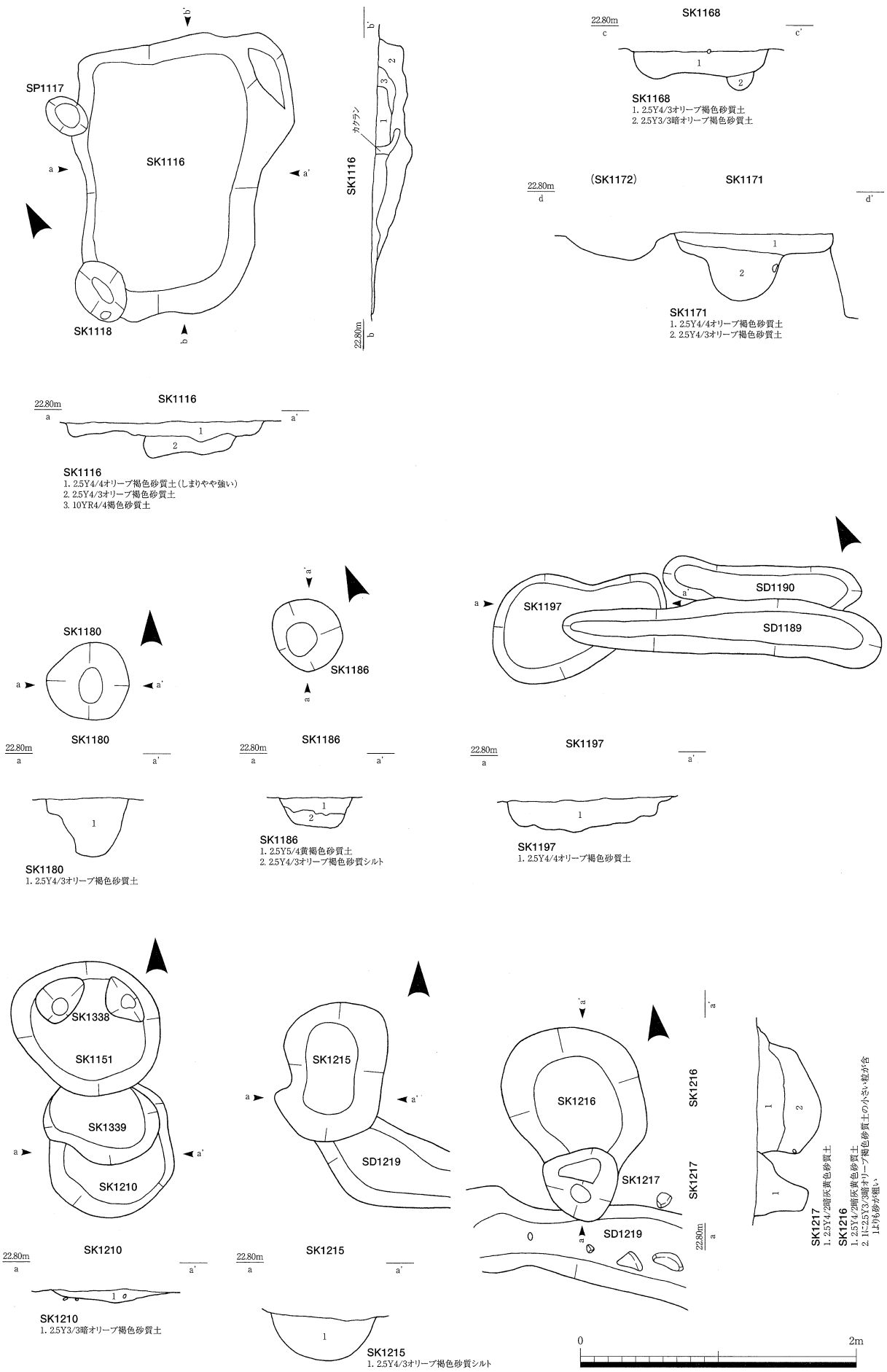
ＳＫ1221（第47図）：ＳＫ1220の北側に位置する円形の土坑。ＳＫ1220に切られ、ＳＫ1233を切る。長さ2.7m、深さ0.55m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1222（第47図）：ＳＫ1220の東側に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1233を切り、ＳＫ1223に切られる。長さ2.43m、幅1.78m、深さ0.59m。土師器・中世土師器が出土している。



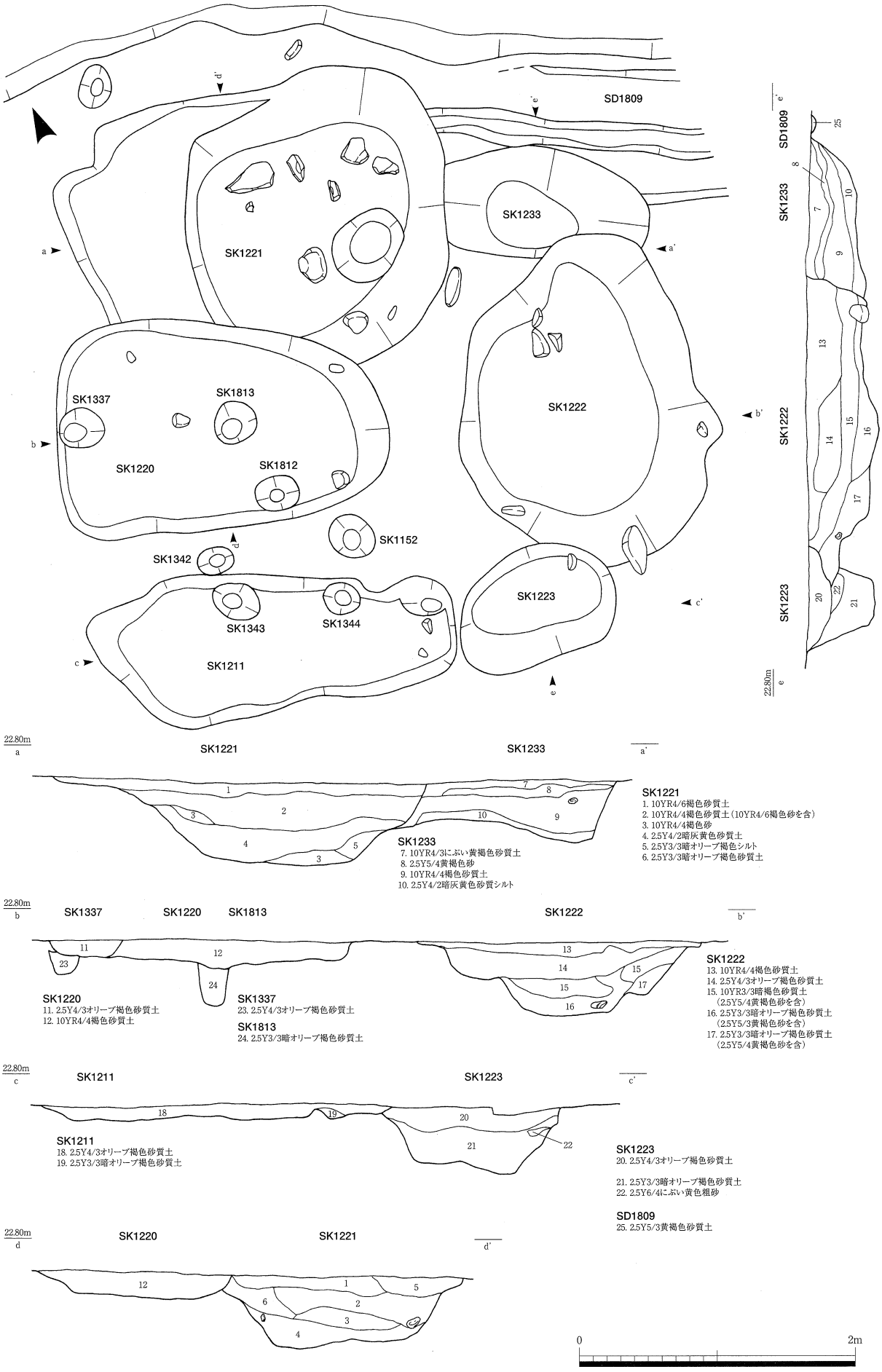
第45図　遺構実測図

SK1104　SD1709　SD1710



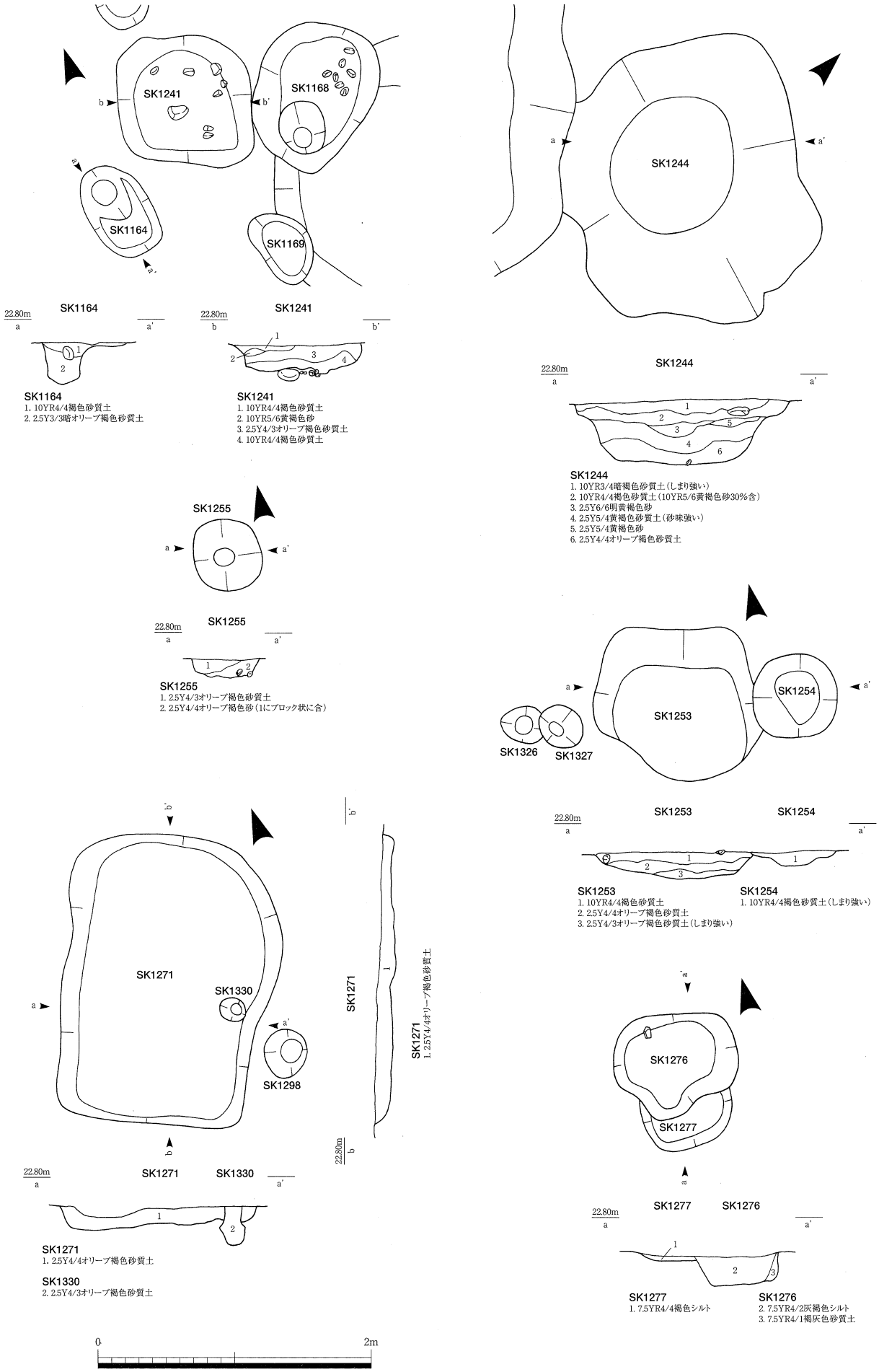
第46図 遺構実測図

SK1116 SK1168 SK1171 SK1180 SK1186 SK1197 SK1210 SK1215 SK1216 SK1217



第47図　遺構実測図

SK1211　SK1220　SK1221　SK1222　SK1223　SK1233　SK1337　SK1813　SD1809



第48図 遺構実測図

SK1164 SK1241 SK1244 SK1253 SK1254 SK1255 SK1271 SK1276 SK1277 SK1330

ＳＫ1223（第47図）：ＳＫ1222の南に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1222を切る。長さ1.22m、幅0.83m、深さ0.52m。土師器・須恵器が出土している。

ＳＫ1233（第47図）：ＳＫ1221・1222に切られる楕円形の土坑。幅0.82m、深さ0.45m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1164（第48図）：ＳＥ1304の西に位置する楕円形の土坑。長さ0.72m、幅0.46m、深さ0.38m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1168（第44・46図）：ＳＥ1304を切る楕円形の土坑。長さ1.09m、幅0.86m、深さ0.46m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1241（第48図）：ＳＫ1164の北東に位置する方形の土坑。長さ0.98m、幅0.94m、深さ0.24m。八尾が出土している。

ＳＫ1244（第48図）：ＳＥ1305に切られる土坑。長さ2.02m、幅1.74m、深さ0.5m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1255（第48図）：ＳＥ1256の南に位置する円形の土坑。直径0.54m、深さ0.44m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1253（第48図）：ＳＥ1269の北東に位置する方形の土坑。南半分を試掘溝に切られている。幅1.11m、深さ0.2m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1271（第48図）：Ｘ56Ｙ164に位置する長方形の土坑。ＳＫ1330に切られる。長さ2.2m、幅1.61m、深さ0.33m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1276（第48図）：Ｘ56Ｙ165に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1277を切る。長さ0.95m、幅0.81m、深さ0.29m。砥石が出土している。

ＳＫ1295（第49図）：Ｘ55～57Ｙ167～168に位置する不整形な土坑。ＳＫ1296を切る。長さ５m、幅3.03m、深さ0.43m。土師器・中世土師器・珠洲・瀬戸が出土している。

ＳＫ1296（第49図）：ＳＫ1295に切られる不整形な土坑。長さ3.95m、深さ0.26m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1282（第49図）：Ｘ54Ｙ167に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1281を切る。長さ1.45m、幅0.97m、深さ0.26m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1322（第49図）：ＳＤ1102に切られる土坑。長さ0.37m、幅0.32m、深さ0.54m。珠洲が出土している。

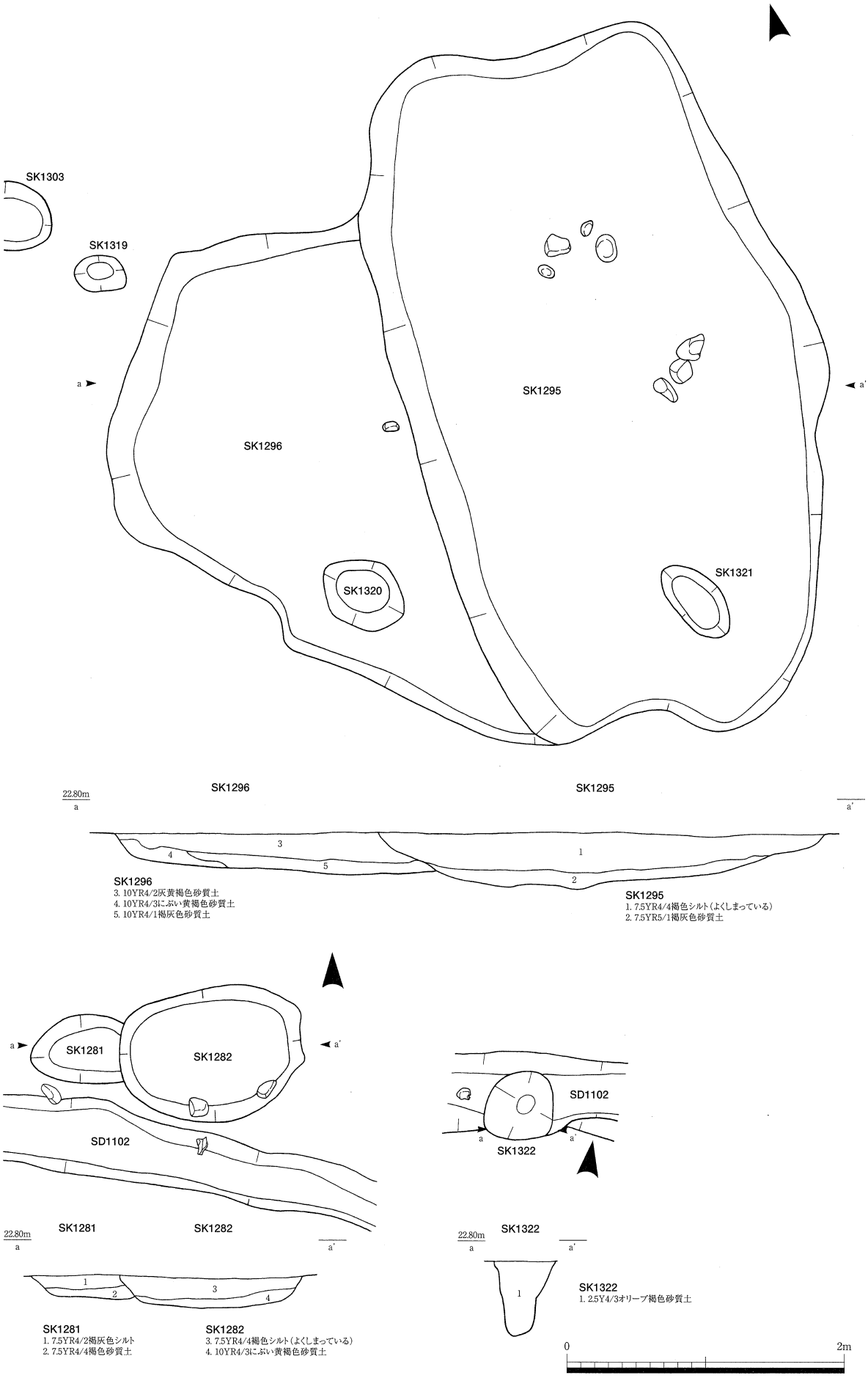
ＳＫ1323（第50図）：Ｘ54Ｙ168に位置する不整形な土坑。ＳＤ1102、ＳＫ1350を切る。幅0.95m、深さ0.19m。珠洲・青磁が出土している。

ＳＫ1350（第50図）：ＳＫ1104の西に位置する土坑。ＳＫ1323・1354に切られ、ＳＤ1102・1103・1824、ＳＫ1355を切る。長さ4.54m、幅2.42m、深さ0.24m。中世土師器・珠洲・瀬戸・砥石が出土している。

ＳＫ1355（第50図）：ＳＫ1350に切られ、ＳＤ1824を切る楕円形の土坑。長さ２m、幅1.05m、深さ0.43m。遺物の出土はみられない。

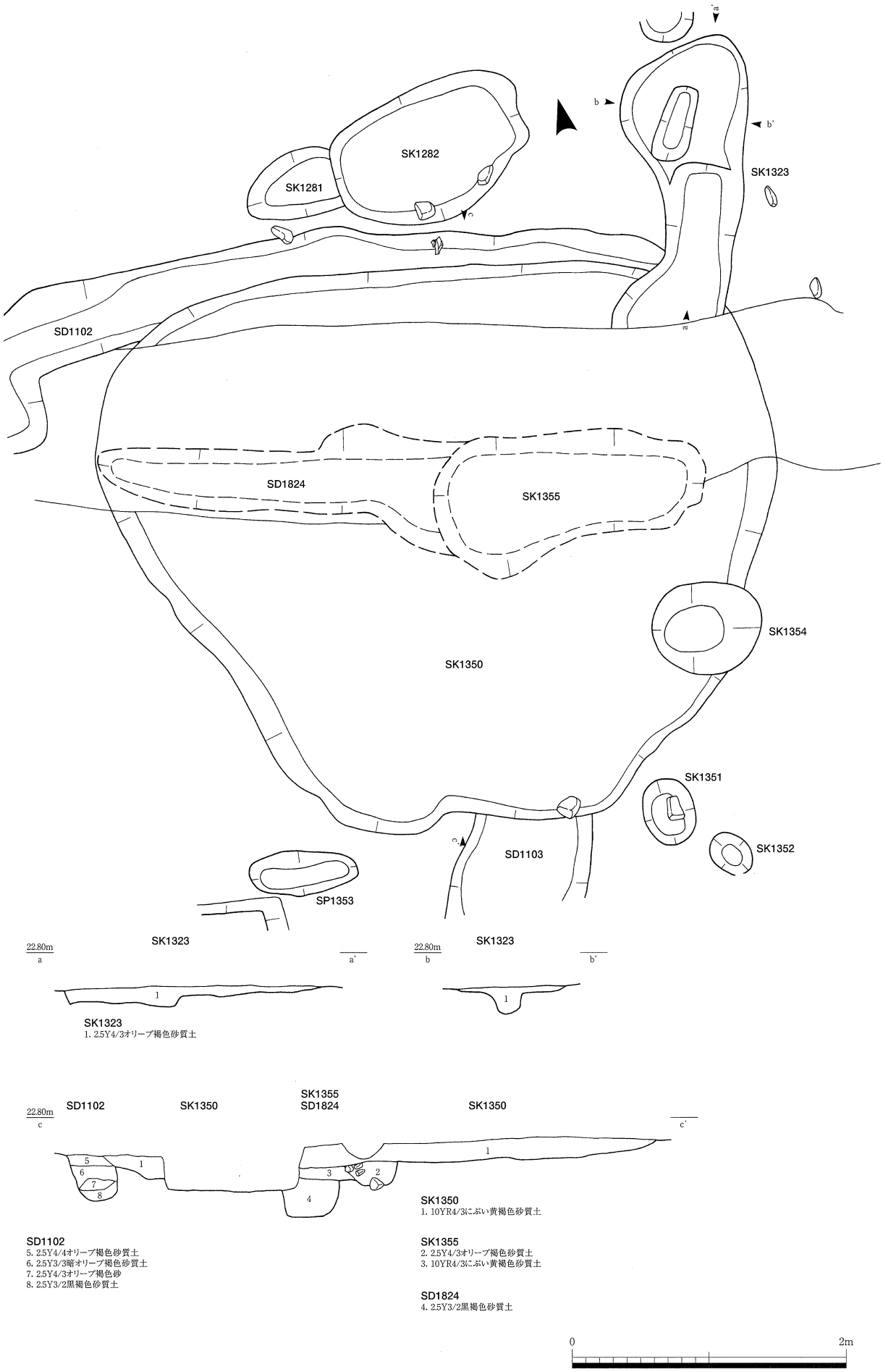
ＳＫ1817（第107図）：ＳＤ1102に切られる不整形な土坑。南半分を試掘溝に切られるため全体形は不明である。中世土師器が出土している。

ＳＫ1411（第51図）：Ｘ55～56Ｙ176～177に位置する不整形な浅い土坑。長さ1.7m、幅1.45m、深さ0.05m。青白磁・刀子が出土している。



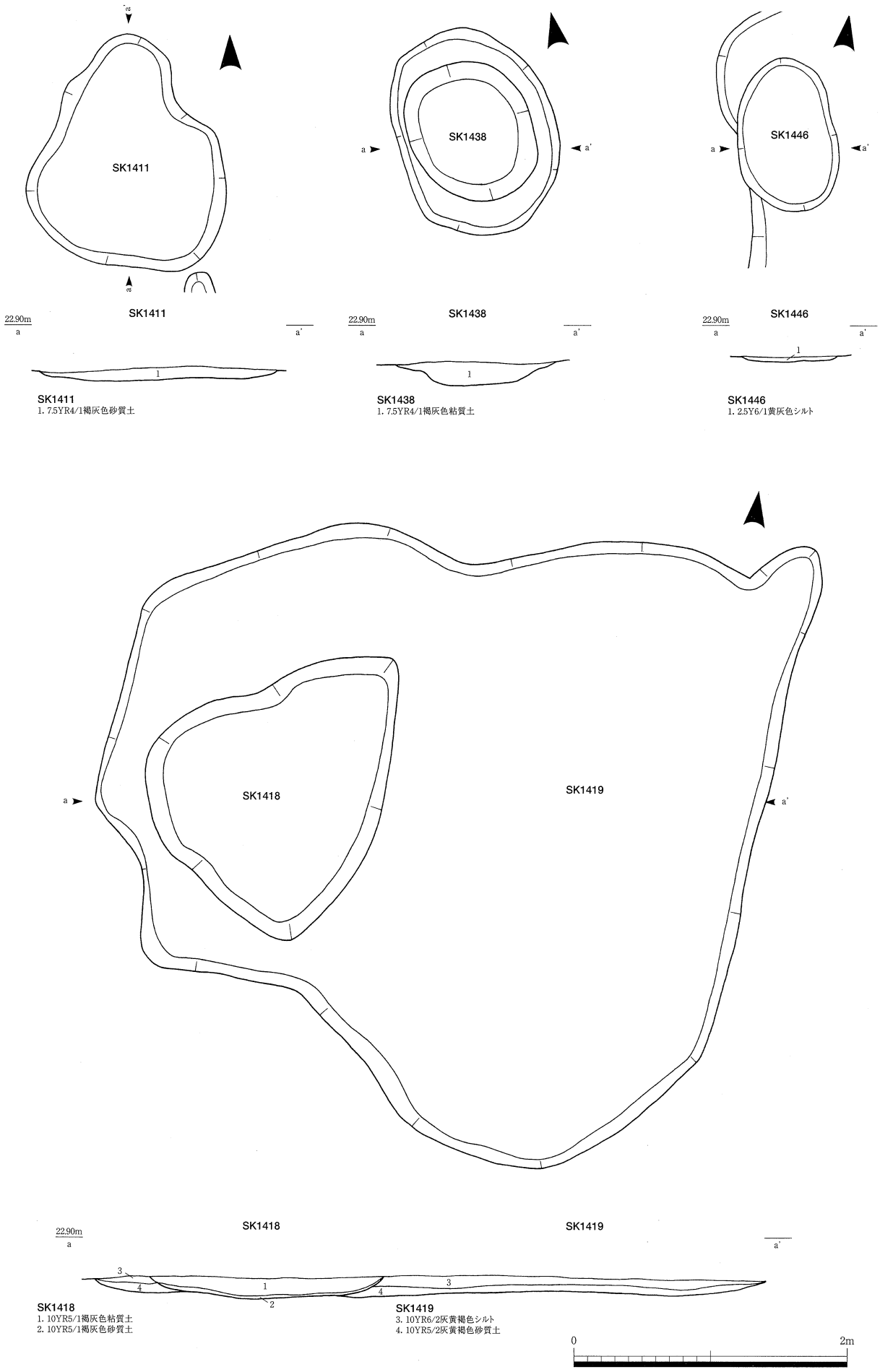
第49図　遺構実測図

SK1281　SK1282　SK1295　SK1296　SK1322



第50図　遺構実測図

SK1323　SK1350　SK1355　SD1102　SD1824



SK1411
1. 7.5YR4/1褐灰色砂質土

SK1438
1. 7.5YR4/1褐灰色粘質土

SK1446
1. 2.5Y6/1黄灰色シルト

SK1418
1. 10YR5/1褐灰色粘質土
2. 10YR5/1褐灰色砂質土

SK1419
3. 10YR6/2灰黄褐色シルト
4. 10YR5/2灰黄褐色砂質土

第51図　遺構実測図

SK1411　SK1418　SK1419　SK1438　SK1446

ＳＫ1438（第51図）：Ｘ35～36Ｙ177に位置する土坑。長さ1.56m、幅1.25m、深さ0.16m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1446（第51図）：Ｘ36Ｙ184に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1447を切る。長さ1.12m、幅0.75m、深さ0.04m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1418（第51図）：ＳＫ1419を切る不整形な土坑。長さ２m、幅1.85m、深さ0.16m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1419（第51図）：Ｘ48～50Ｙ177～180に位置する不整形な土坑。長さ4.93m、幅4.56m、深さ0.1m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1443（第52図）：Ｘ34～36Ｙ181～182に位置する不整形な土坑。長さ3.51m、幅3.14m、深さ0.38m。中世土師器が出土している。

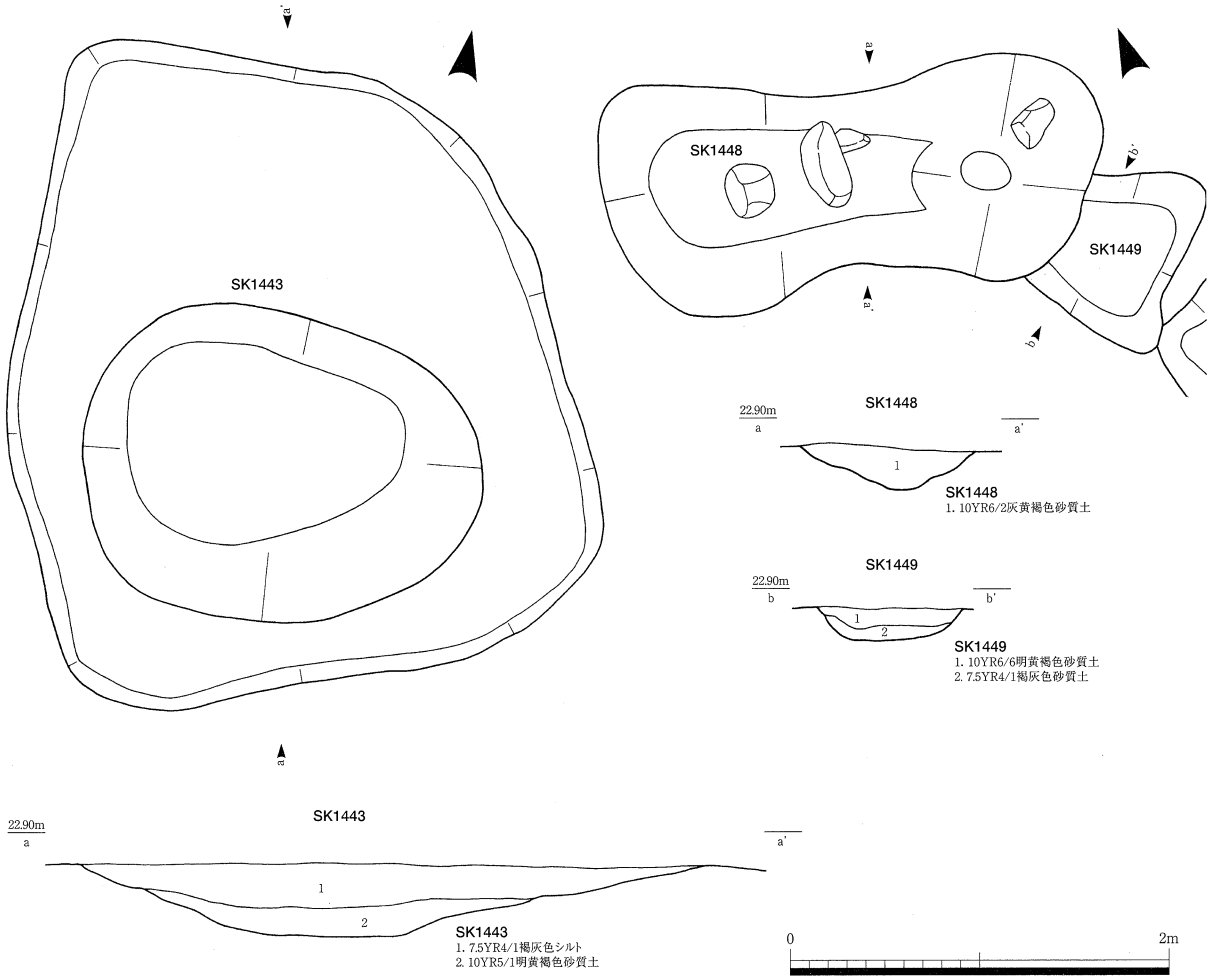
ＳＫ1448（第52図）：Ｘ35Ｙ185～186に位置する不整形な土坑。ＳＫ1449を切る。長さ2.66m、幅1.27m、深さ0.33m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1449（第52図）：ＳＫ1448に切られる土坑。幅１m、深さ0.18m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1488（第53図）：Ｘ41～42Ｙ157～158に位置する長方形の土坑。ＳＫ1487・1508・1509に切られる。長さ2.33m、幅1.5m、深さ0.25m。中世土師器が出土している。

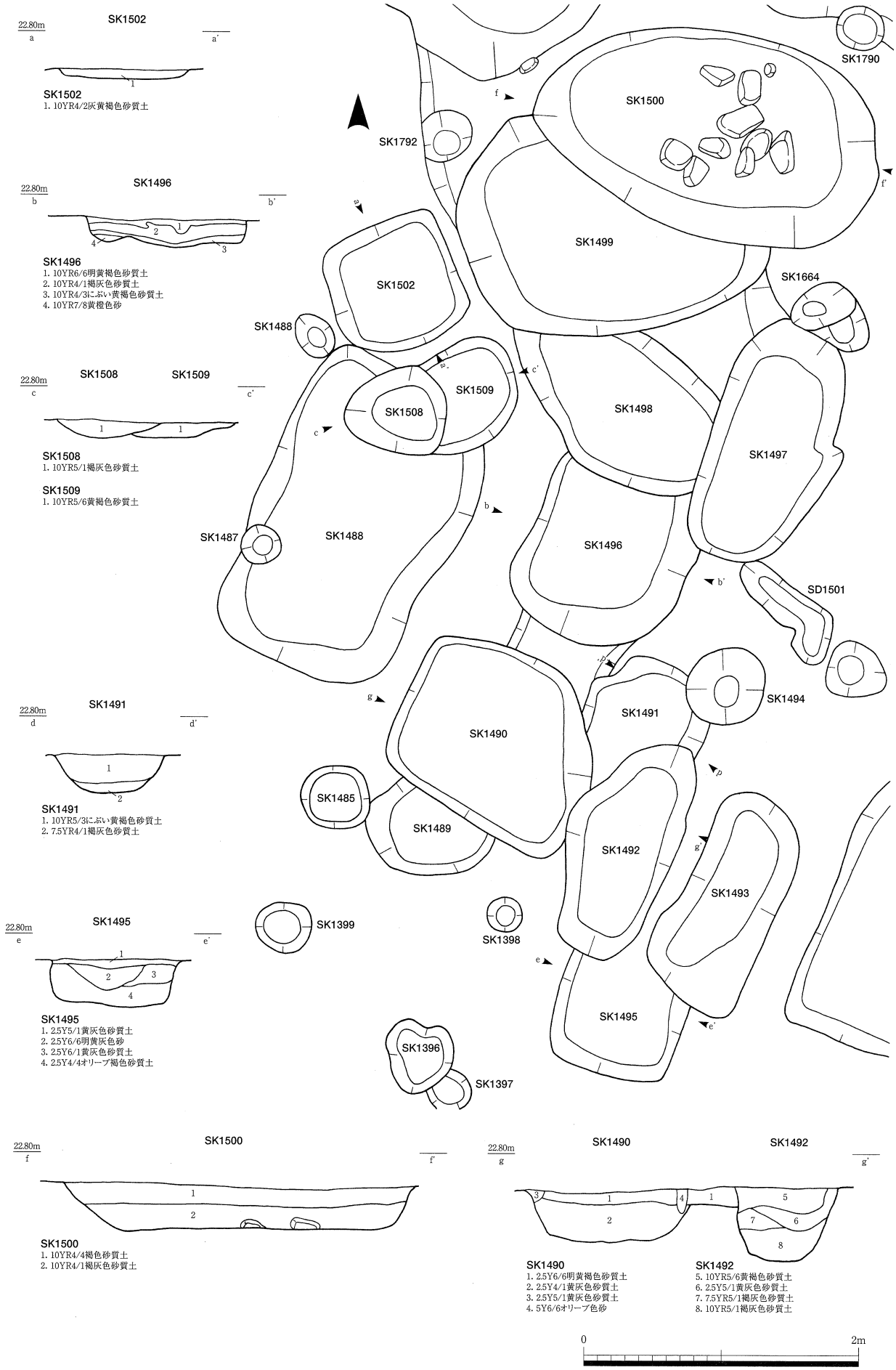
ＳＫ1489（第53図）：ＳＫ1490に切られる土坑。幅0.83m、深さ0.31m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1490（第53図）：Ｘ41Ｙ158に位置する不整形な土坑。ＳＫ1498を切り、ＳＫ1492に切られる。長さ1.3m、幅1.29m、深さ0.46m。須恵器・中世土師器・珠洲が出土している。



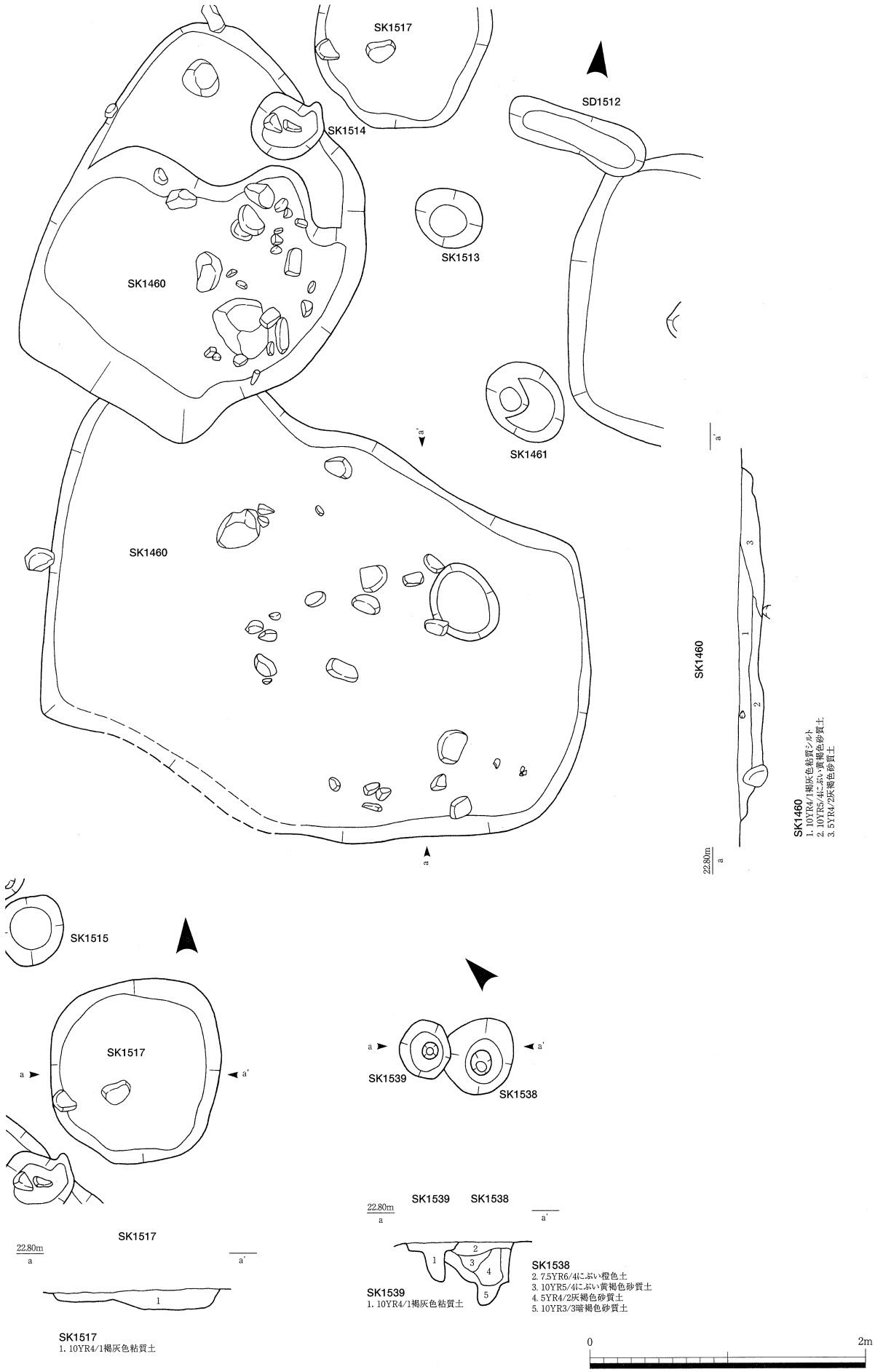
第52図　遺構実測図

SK1443　SK1448　SK1449



第53図　遺構実測図

SK1490　SK1491　SK1492　SK1495　SK1496　SK1500　SK1502　SK1508　SK1509



第54図　遺構実測図

SK1460　SK1517　SK1538　SK1539

ＳＫ1492（第53図）：ＳＫ1490を切る楕円形の土坑。長さ1.66m、幅0.91m、深さ0.56m。珠洲・鉄滓が出土している。

ＳＫ1493（第53図）：ＳＫ1495を切る楕円形の土坑。長さ1.58m、幅0.75m、深さ0.51m。珠洲・鉄滓が出土している。

ＳＫ1495（第53図）：ＳＫ1492・1493に切られる土坑。幅1.33m、深さ0.34m。羽口・鉄滓が出土している。

ＳＫ1496（第53図）：ＳＫ1490の北に位置する土坑。ＳＫ1498に切られる。幅1.19m、深さ0.57m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1497（第53図）：ＳＫ1496・1498を切る土坑。長さ1.82m、幅0.96m、深さ0.32m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1498（第53図）：ＳＫ1496を切り、ＳＫ1497に切られる土坑。幅1.06m、深さ0.31m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1499（第53図）：ＳＫ1498を切り、ＳＫ1500に切られる土坑。幅1.71m、深さ0.37m。土師器・中世土師器・珠洲・八尾・刀子が出土している。

ＳＫ1500（第53図）：ＳＫ1499を切る楕円形の土坑。長さ2.56m、幅1.48m、深さ0.28m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1502（第53図）：ＳＫ1499の西に位置する方形の土坑。長さ0.88m、幅0.95m、深さ0.05m。土師器・須恵器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1460（第54図）：調査区の西端Ｂ４地区にまたがる不整形な土坑。長さ2.15m、幅1.89m、深さ0.36m。土師器・中世土師器・鉄滓が出土している。

ＳＫ1517（第54図）：X44～45Ｙ150～151に位置する円形の土坑。長さ1.36m、幅1.26m、深さ0.27m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1538（第54図）：X46Ｙ153に位置する円形の土坑。ＳＫ1439に切られる。長さ0.56m、幅0.45m、深さ0.36m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1539（第54図）：ＳＫ1538を切る円形の土坑。長さ0.42m、幅0.4m、深さ0.16m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1522（第55図）：X46Ｙ150～151に位置する土坑。ＳＫ1523に切られる。幅1.76m、深さ0.29m。中世土師器・珠洲・釘が出土している。

ＳＫ1523（第55図）：ＳＫ1522を切る土坑。調査区外へ延びるため全体形は不明である。深さ0.22m。中世土師器が出土している。

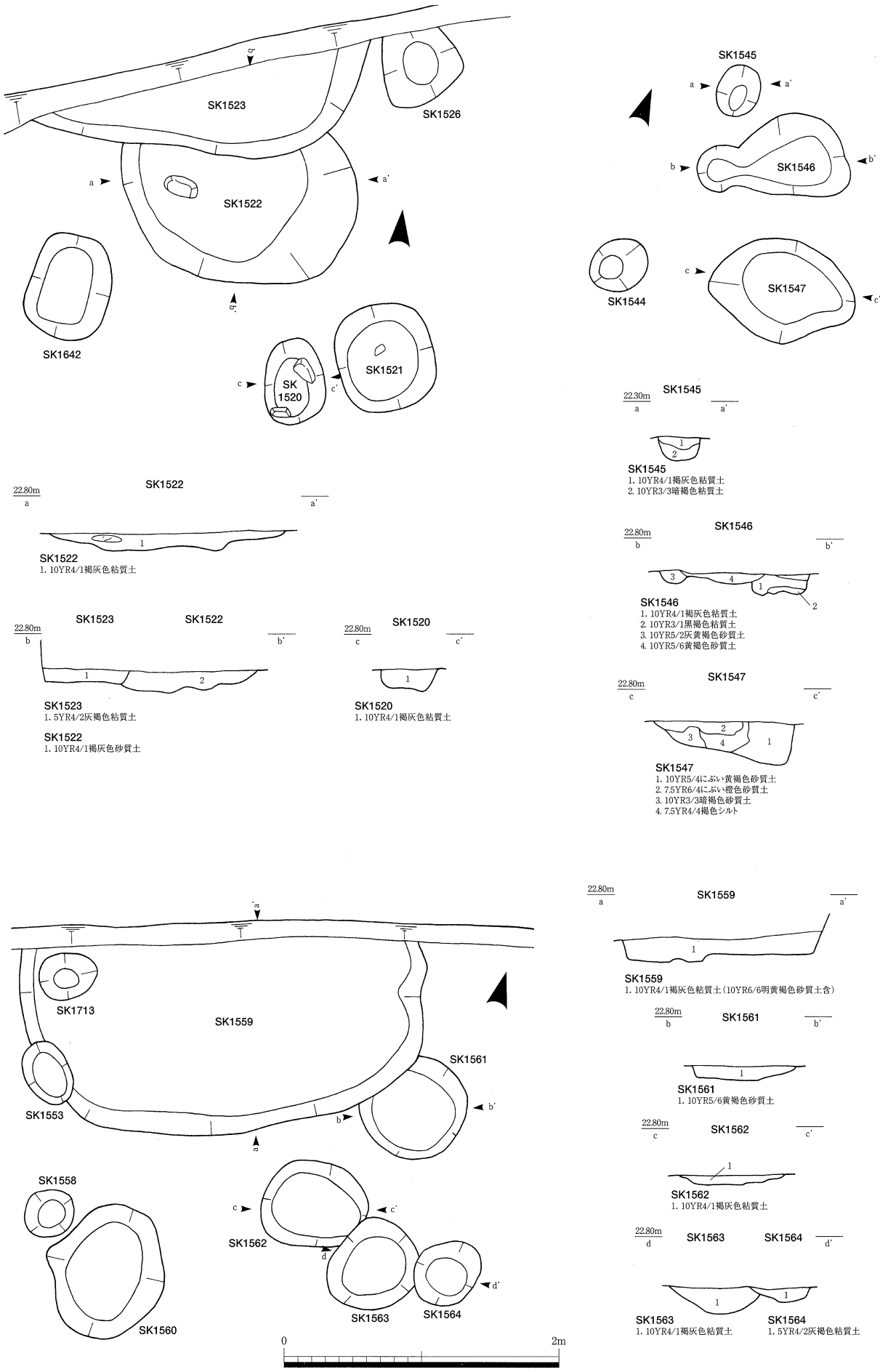
ＳＫ1520（第55図）：ＳＫ1522の南に位置する楕円形の土坑。長さ0.62m、幅0.51m、深さ0.36m。土師器・中世土師器・青磁が出土している。

ＳＫ1525（第108図）：ＳＫ1522の東に位置する土坑。長さ0.39m、幅0.36m、深さ0.28m。砥石が出土している。

ＳＫ1527（第108図）：X46Ｙ152に位置する楕円形の土坑。長さ0.68m、幅0.44m、深さ0.27m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1544（第55図）：ＳＫ1547の西に位置する円形の土坑。長さ0.43m、幅0.37m、深さ0.34m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1545（第55図）：X47Ｙ153に位置する円形の土坑。長さ0.38m、幅0.37m、深さ0.33m。中世



第55図　遺構実測図

SK1520　SK1522　SK1523　SK1545　SK1546　SK1547　SK1559　SK1561
SK1562　SK1563　SK1564

土師器が出土している。

ＳＫ1546（第55図）：ＳＫ1545の南に位置する不整形な土坑。長さ1.14m、幅0.72m、深さ0.17m。白磁が出土している。

ＳＫ1547（第55図）：ＳＫ1546の南に位置する不整形な土坑。長さ1.1m、幅0.76m、深さ0.19m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1559（第55図）：X47～48Y155～156に位置する土坑。ＳＫ1561・1713を切り、ＳＫ1553に切られる。調査区外へ延びるため全体形は不明である。幅2.97m、深さ0.37m。覆土中に炭化物を含む。土師器・中世土師器・釘が出土している。

ＳＫ1561（第55図）：ＳＫ1559に切られる円形の土坑。幅0.75m、深さ0.19m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1562（第55図）：ＳＫ1559の南に位置する楕円形の土坑。ＳＫ1563に切られる。幅0.64m、深さ0.06m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1563（第55図）：ＳＫ1562を切る土坑。長さ0.68m、幅0.61m、深さ0.26m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1564（第55図）：ＳＫ1563を切る土坑。長さ0.5m、幅0.45m、深さ0.2m。土師器・中世土師器・製塩土器が出土している。

ＳＫ1569（第108図）：X46Y157に位置する不整形な土坑。長さ2.24m、幅1.65m、深さ0.32m。中世土師器・珠洲・瀬戸が出土している。

ＳＫ1580（第56図）：X49Y158に位置する不整形な土坑。調査区外へ延びるため全体形は不明である。幅0.92m、深さ0.05m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1585（第56図）：X48Y160に位置する不整形な土坑。ＳＫ1588に切られる。長さ1.29m、幅0.82m、深さ0.17m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1588（第56図）：ＳＫ1585を切る土坑。長さ0.62m、幅0.54m、深さ0.08m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1590（第56図）：X46Y154に位置する土坑。ＳＸ1360に切られる。幅0.91m、深さ0.27m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1593（第56図）：X45～46Y155～156に位置する土坑。ＳＤ1568に切られる。長さ2.28m、幅1.48m、深さ0.14m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1620（第56図）：ＳＫ1636の北に位置する円形の土坑。長さ0.41m、幅0.36m、深さ0.16m。須恵器が出土している。

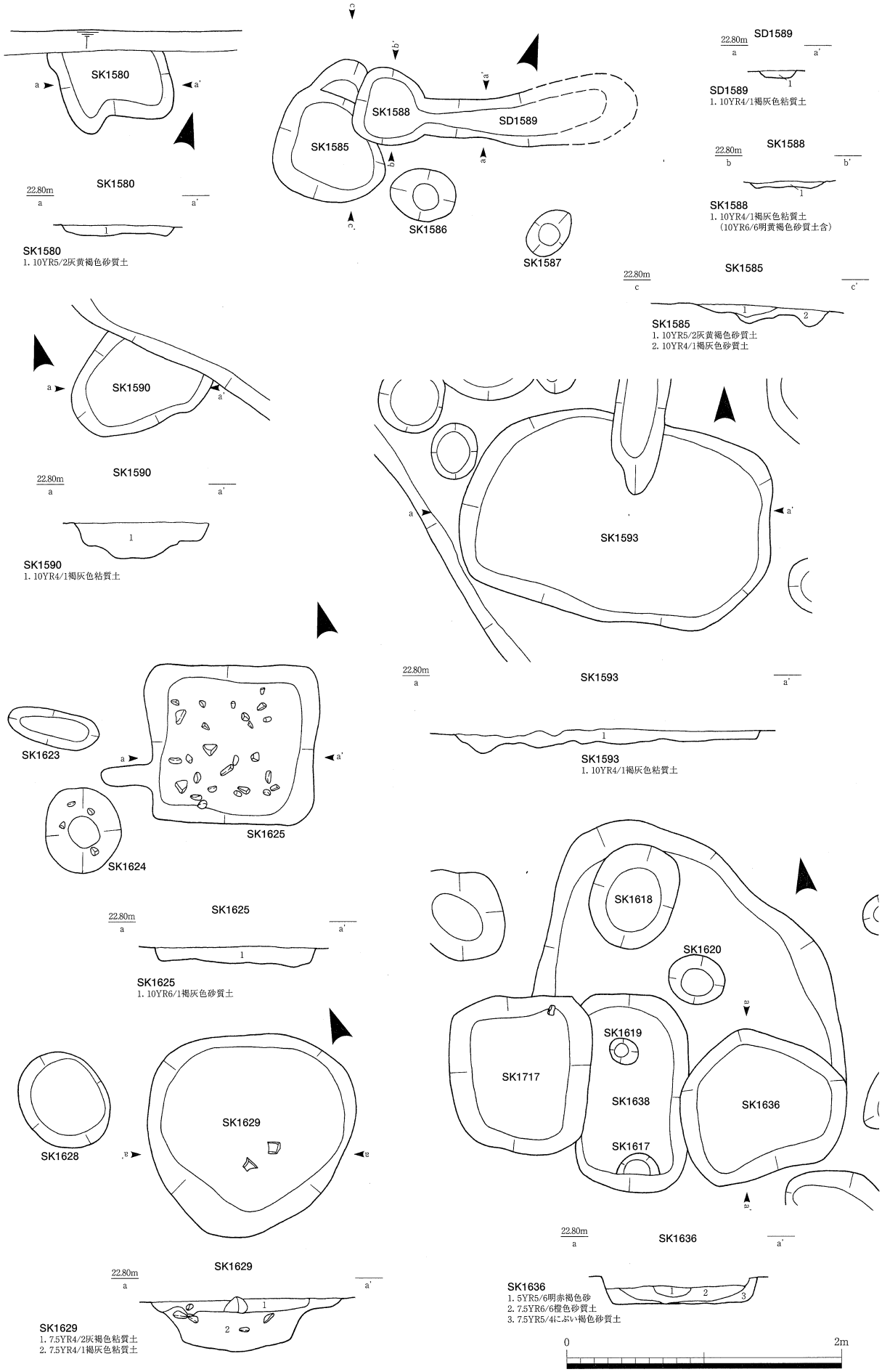
ＳＫ1625（第56図）：X47Y163に位置する方形の土坑。長さ1.4m、幅1.16m、深さ0.16m。珠洲・八尾が出土している。

ＳＫ1629（第56図）：X46Y165に位置する土坑。長さ1.6m、幅1.5m、深さ0.25m。中世土師器・珠洲・青磁が出土している。

ＳＫ1636（第56図）：X47Y160に位置する土坑。ＳＫ1638を切る。長さ1.43m、幅1.12m、深さ0.14m。青磁が出土している。

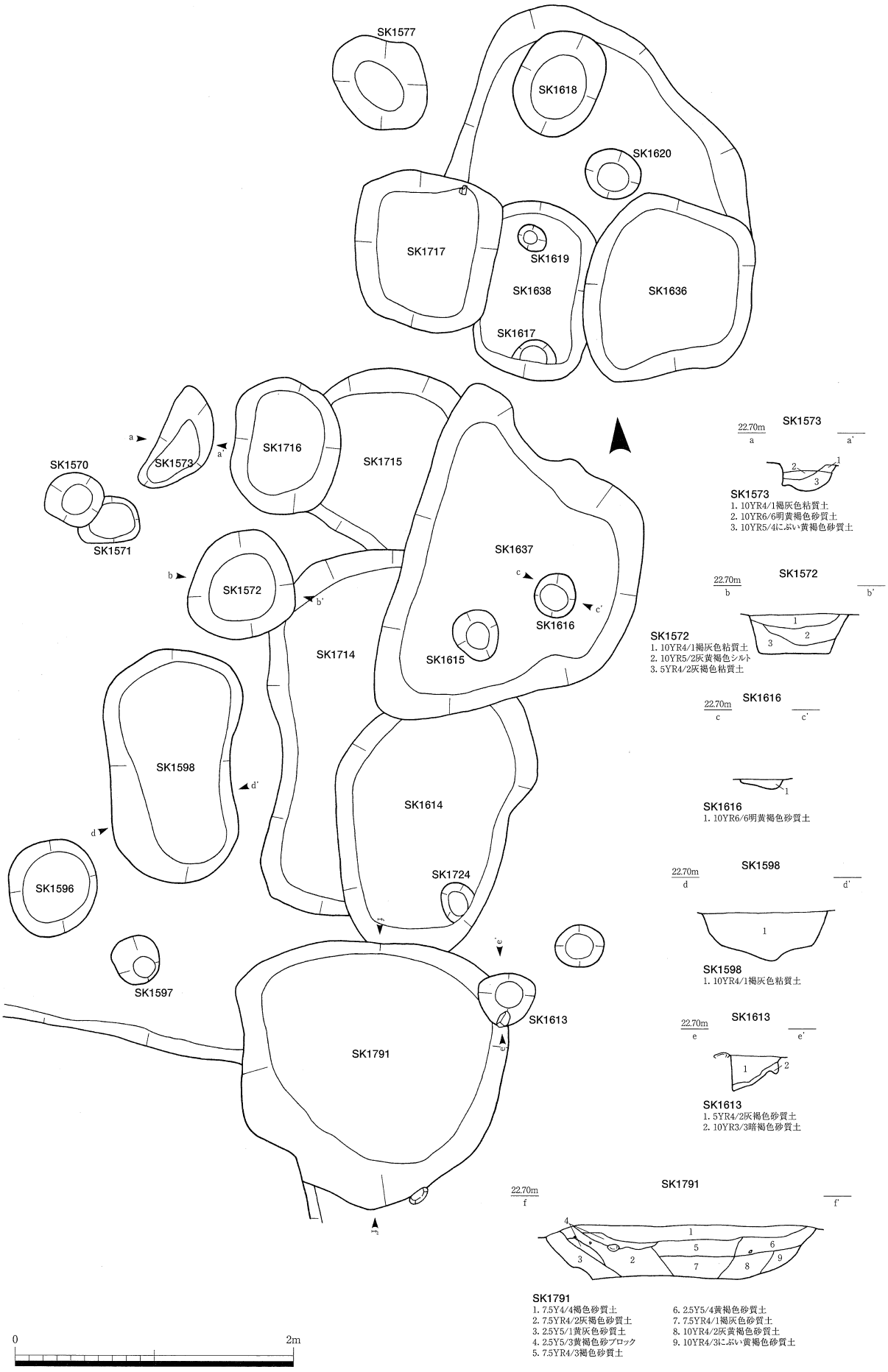
ＳＫ1638（第56図）：ＳＫ1636の西に位置する長方形の土坑。ＳＫ1717に切られる。長さ1.66m、幅1.15m、深さ0.5m。須恵器・中世土師器・珠洲・青磁が出土している。

ＳＫ1640（第108図）：ＳＫ1635に切られる不整形な土坑。幅2.03m、深さ0.26m。中世土師器・八



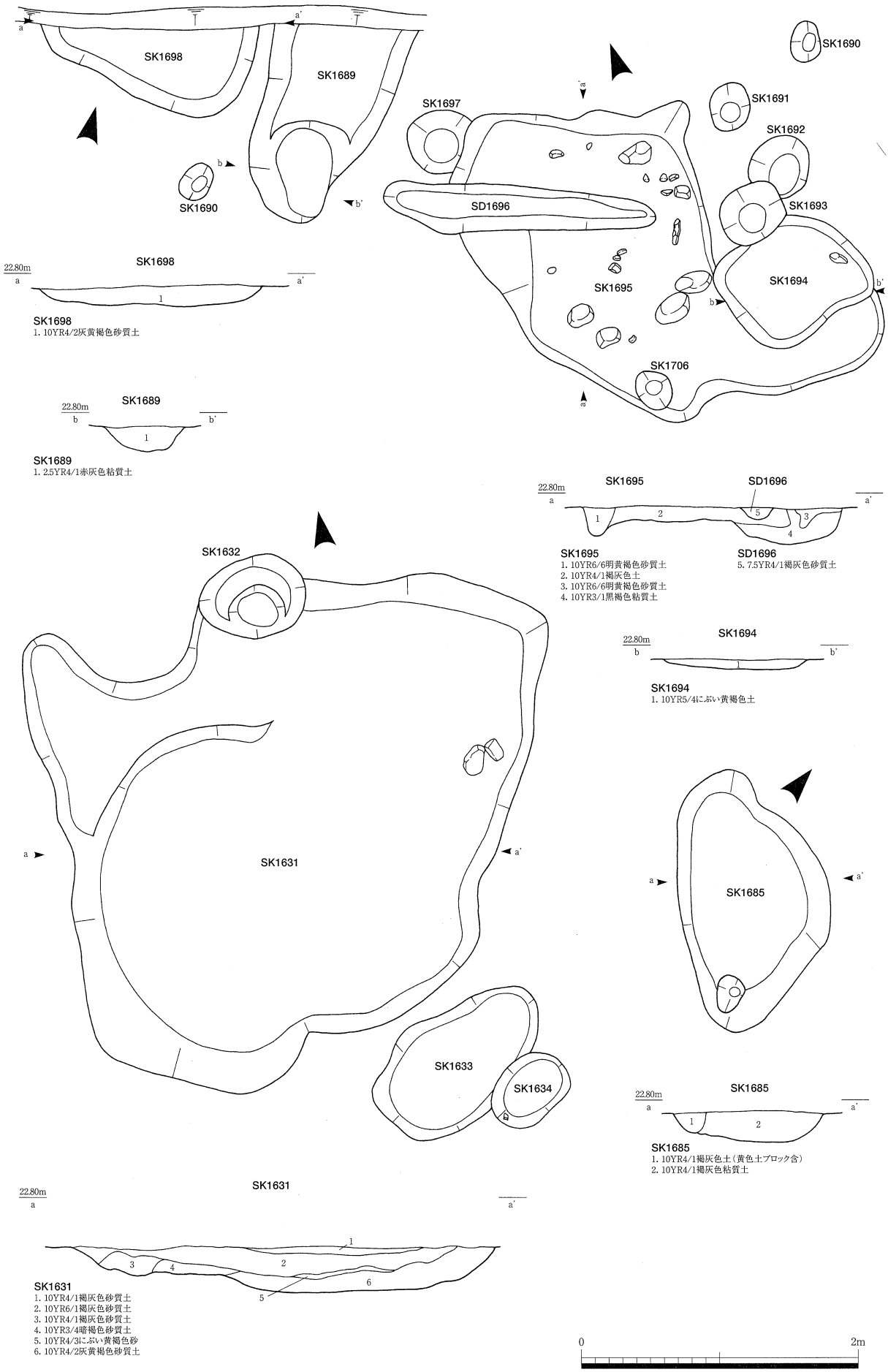
第56図　遺構実測図

SK1580　SK1585　SK1588　SD1589　SK1590　SK1593　SK1625　SK1629　SK1636



第57図　遺構実測図

SK1572　SK1573　SK1598　SK1613　SK1616　SK1791



第58図　遺構実測図

SK1631　SK1685　SK1689　SK1694　SK1695　SK1698　SD1696

尾が出土している。

ＳＫ1644（第108図）：Ｘ39Ｙ159に位置する不整形な土坑。ＳＫ1645を切る。長さ1.2m、幅0.65m、深さ0.08m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1717（第56図）：ＳＫ1636の西に位置する土坑。長さ1.68m、幅1.43m、深さ0.45m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1572（第57図）：Ｘ46Ｙ168に位置する円形の土坑。ＳＫ1714を切る。直径0.77m、深さ0.23m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1573（第57図）：Ｘ47Ｙ168に位置する不整形な土坑。長さ0.77m、幅0.38m、深さ0.27m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1616（第57図）：ＳＫ1637に切られる土坑。長さ0.32m、幅0.29m、深さ0.12m。土師器が出土している。

ＳＫ1598（第57図）：ＳＫ1714の西に位置する不整形な土坑。長さ1.68m、幅0.99m、深さ0.51m。土師器が出土している。

ＳＫ1613（第57図）：ＳＫ1791を切る土坑。長さ0.41m、幅0.4m、深さ0.39m。遺物の出土はみられない。

ＳＫ1614（第57図）：ＳＫ1791に切られ、ＳＫ1714を切る土坑。長さ0.85m、幅1.83m、深さ0.44m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1637（第57図）：ＳＫ1614・1615・1616を切る不整形な土坑。長さ1.62m、幅1.2m、深さ0.39m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1714（第57図）：ＳＫ1614・1637に切られる土坑。長さ1.56m、深さ0.15m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1715（第57図）：ＳＫ1637・1714・1716に切られる土坑。幅1.58m、深さ0.2m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1716（第57図）：ＳＫ1715を切る楕円形の土坑。長さ0.98m、幅0.75m、深さ0.2m。珠洲が出土している。

ＳＫ1791（第57図）：Ｘ44Ｙ158～159に位置する土坑。ＳＫ1614を切り、ＳＫ1613に切られる。長さ1.93m、幅1.86m、深さ0.41m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1698（第58図）：ＳＫ1689の西に位置する土坑。調査区外に延びる。長さ1.65m、深さ0.2m。中世土師器が出土している。

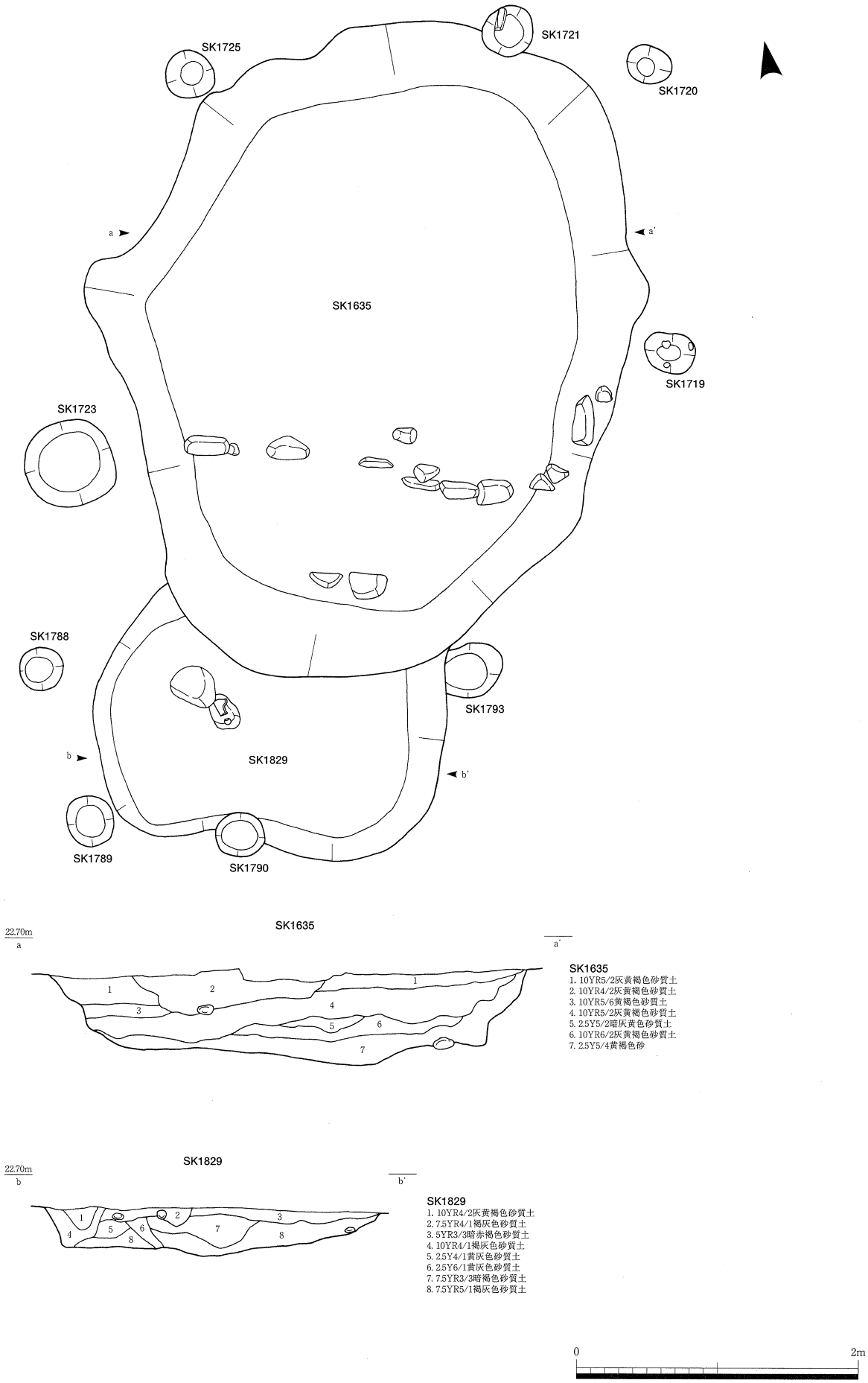
ＳＫ1689（第58図）：Ｘ50Ｙ164に位置する不整形な土坑。幅0.59m、深さ0.18m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＫ1690（第58図）：ＳＫ1695の北東に位置する土坑。長さ0.3m、幅0.21m、深さ0.15m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1695（第58図）：Ｘ49Ｙ168に位置する不整形な土坑。ＳＤ1696、ＳＫ1694に切られる。長さ2.45m、幅2.34m、深さ0.31m。中世土師器・珠洲・八尾・青磁・刀子・鉄滓が出土している。

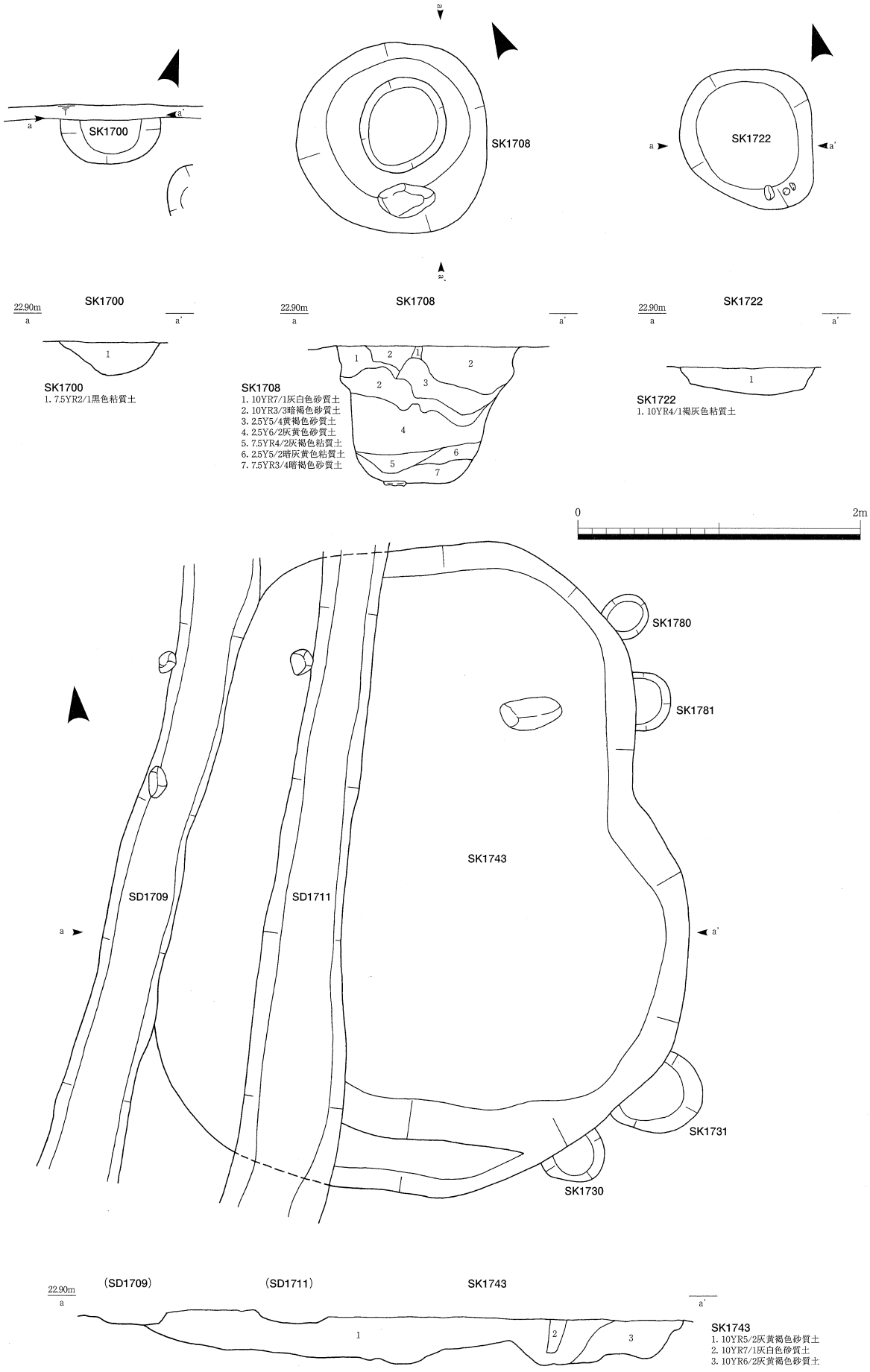
ＳＫ1694（第58図）：ＳＫ1695を切る方形の浅い土坑。長さ0.98m、幅0.83m、深さ0.08m。中世土師器・珠洲・八尾・花の線刻が施された滑石製石鍋片が出土している。

ＳＫ1631（第58図）：Ｘ45～46Ｙ167～169に位置する不整形な土坑。ＳＫ1632に切られる。長さ4.4m、幅3.85m、深さ0.37m。中世土師器・珠洲・八尾が出土している。



第59図　遺構実測図

SK1635　SK1829



第60図　遺構実測図

SK1700　SK1708　SK1722　SK1743

ＳＫ1685（第58図）：ＳＫ1695の東に位置する不整形な土坑。長さ2.2m、幅1.04m、深さ0.25m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1635（第59図）：X44～46Y160～161に位置する不整形な土坑。ＳＫ1829を切る。長さ4.68m、幅４m、深さ1.44m。土坑の底面には厚く砂が堆積しており、水溜のような施設と考えられる。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・八尾・白磁・青磁・釘が出土している。

ＳＫ1829（第59図）：ＳＫ1635・1790に切られ、ＳＫ1797を切る土坑。幅2.46m、深さ0.34m。珠洲が出土している。

ＳＫ1700（第60図）：X50Y162に位置する土坑。調査区外へ延びるため全体形は不明である。幅0.76m、深さ0.14m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1708（第60図）：X48～49Y167に位置する円形の土坑。ＳＤ1709・1710に切られる。長さ1.46m、幅1.38m、深さ0.98m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1722（第60図）：X56Y171に位置する円形の土坑。長さ1.1m、幅0.96m、深さ0.23m。土師器・中世土師器が出土している。

ＳＫ1729（第42図）：ＳＥ1686を切る土坑。長さ0.38m、幅0.32m、深さ0.15m。中世土師器が出土している。

ＳＫ1743（第60図）：X42～44Y165～166に位置する不整形の土坑。ＳＤ1709・1711に切られ、ＳＫ1730・1731・1780・1781を切る。長さ4.58m、深さ0.39m。中世土師器・珠洲・八尾・釘・鉄滓が出土している。

溝

ＳＤ1102（第61・107図）：ＳＫ1104の西側を東西に流れる溝。ＳＫ1350に切られる。最大幅0.85m、深さ0.31m。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＤ1103（第107図）：ＳＫ1350に切られる溝。最大幅1.6m、深さ0.34m。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・八尾・砥石が出土している。

ＳＤ1199（第61・107図）：調査区の西端を南北に流れる溝。Ｂ４地区のＳＤ2119につながる。最大幅1.88m、深さ0.55m。ＳＢ15の梁とほぼ平行であるため、区画溝と考えられる。土師器・須恵器・中世土師器が出土している。

ＳＤ1219（第61・107図）：調査区北壁に沿って東西に流れる溝。Y157以西は２条になり、南側の溝はＳＥ1208を切る。最大幅２m、深さ0.25m。土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・釘が出土。

ＳＤ1312（第61・107図）：ＳＤ1219の南側を平行に流れる溝。ＳＫ1231に切られる。最大幅1.1m、深さ0.17m。中世土師器が出土している。

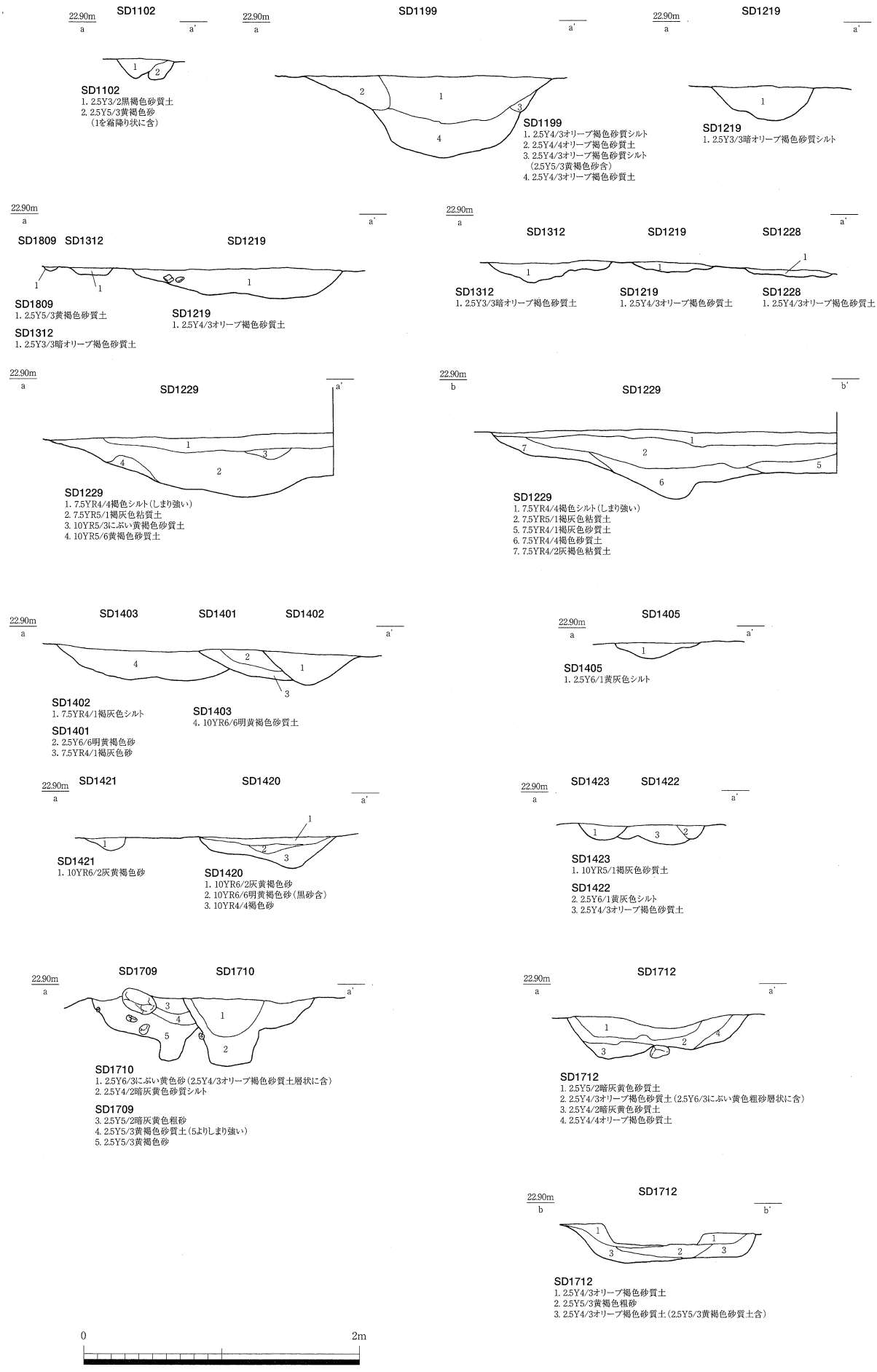
ＳＤ1229（第61・107図）：調査区北端に位置する東西溝。幅３m、深さ0.49m。区画溝と思われる。土師器・中世土師器・珠洲・八尾・瀬戸美濃・瓦質土器・叩き石・砥石が出土している。

ＳＤ1401（第61・109図）：調査区東端を南北に流れる溝。ＳＤ1402・1403を切る。珠洲が出土している。

ＳＤ1402（第61・109図）：ＳＤ1401の西側を流れる溝。ＳＤ1401・1452に切られる。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＤ1403（第61・109図）：ＳＤ1401の東側を流れる溝。ＳＤ1401に切られ、ＳＤ1405を切る。中世土師器・珠洲が出土している。

ＳＤ1405（第61・109図）：ＳＤ1403の東側を流れる溝。一部をＳＤ1403に切られる。中世土師



第61図　遺構実測図

SD1102　SD1199　SD1219　SD1228　SD1229　SD1312　SD1401　SD1402　SD1403　SD1405
SD1420　SD1421　SD1422　SD1423　SD1709　SD1710　SD1712　SD1809

器・珠洲・八尾が出土している。

ＳＤ1420（第61・109・110図）：Ｘ49～59Ｙ174～175に位置する南北溝。最大幅1.7m、深さ0.37m。遺物の出土は見られない。

ＳＤ1421（第61・109・110図）：ＳＤ1420の西側を平行に流れる溝。遺物の出土は見られない。

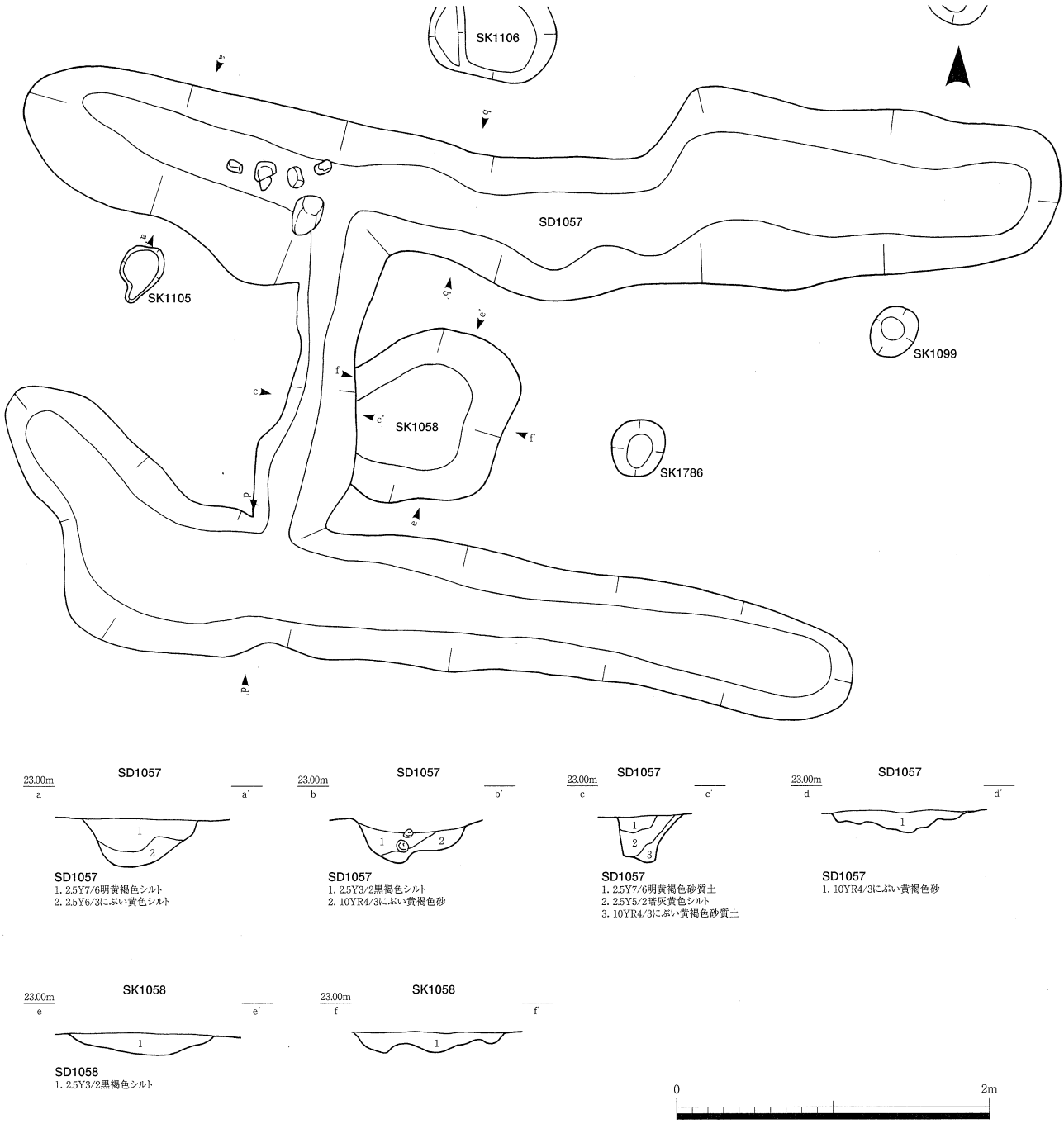
ＳＤ1422（第61・109図）：ＳＤ1420の続きと思われる南北溝。中世土師器が出土している。

ＳＤ1423（第61・109図）：ＳＤ1421の続きと思われる南北溝。中世土師器が出土している。

ＳＤ1709（第61・108・109図）：調査区のほぼ中央を南北に流れる溝。ＳＫ1104・1708を切る。ＳＤ1119と平行し、区画溝と考えられる。土師器・中世土師器・八尾・青磁が出土している。

ＳＤ1710（第61・108・109図）：ＳＤ1709の東側に並ぶ溝。中世土師器・珠洲・八尾が出土する。

ＳＤ1712（第61・109・110図）：ＳＤ1420の西側を平行に流れる南北溝。土師器・中世土師器・珠洲・青磁・土錘が出土している。



第62図　遺構実測図

SD1057　SK1058

その他

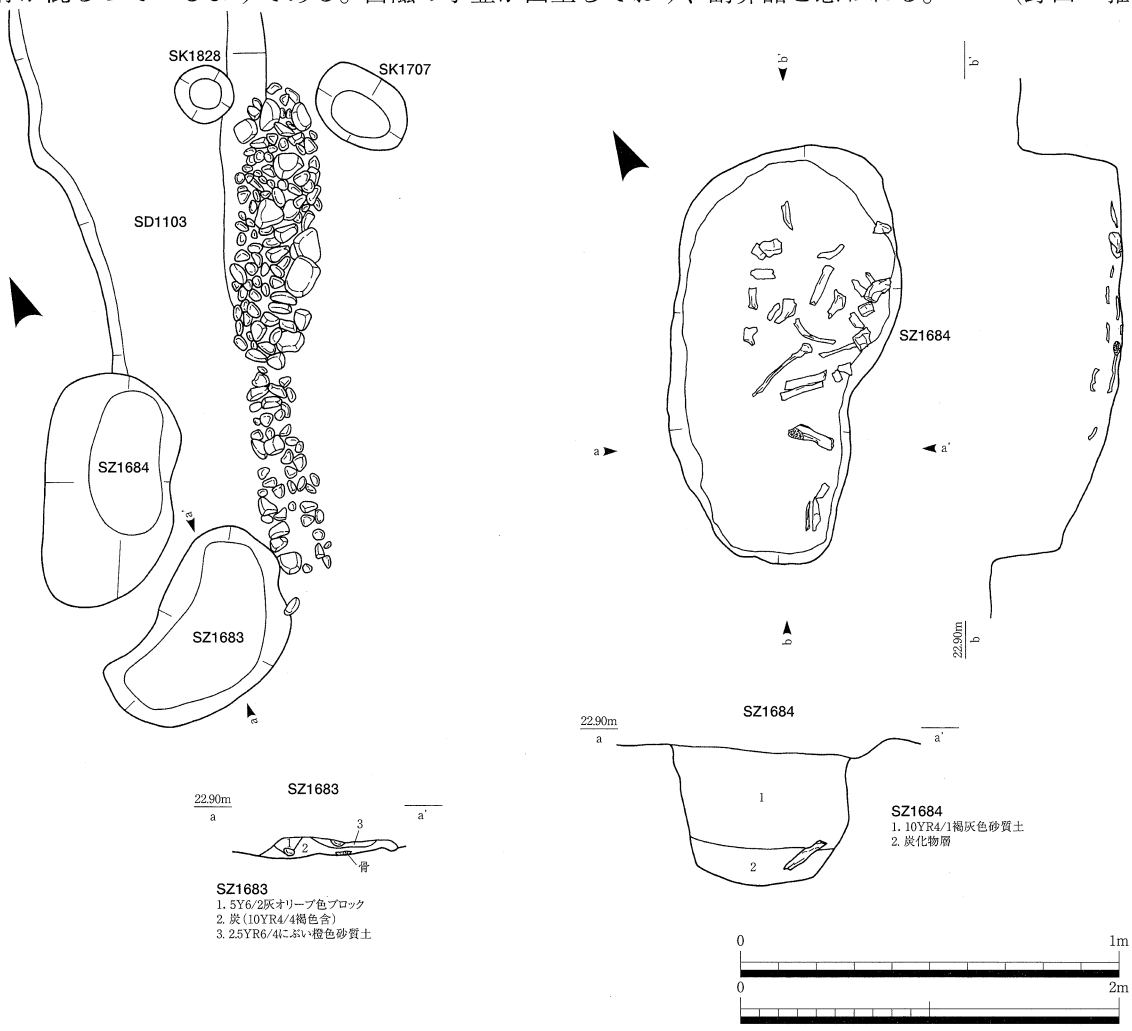
ＳＤ1057・ＳＫ1058（第62図）：ＳＢ12の南側に位置する遺構。ＳＤ1057はＨ字形を呈する溝状の遺構である。浅く幅広な溝が、細く深い溝によって繋がっている。ＳＫ1058は浅い皿状の土坑である。Ｈ字の横棒に接している。鍛冶関連の遺構に似た形状のものがみられるが、ＳＤ1057の覆土中に炭化物が少量混じるのみで、両者とも底面に焼土はみられない。ＳＤ1057からは中世土師器・珠洲・金属製品が、ＳＫ1058からは中世土師器が出土している。

ＳＸ1159・ＳＸ1360（第107・108図）：ＳＸ1159・1360は調査区の西側を広く薄く覆う黒色土の堆積である。ＳＸ1159はＸ54～57Ｙ155～158に位置し、幅5.66m、深さ0.46mを測る。土師器・中世土師器・珠洲・八尾・瀬戸・青磁・釘が出土している。ＳＸ1360はＸ37～48Ｙ154～164を鈎形に覆う。ＳＸ1360内の遺構はすべて、黒色土の下から検出したものである。中世土師器・珠洲・八尾・白磁・青磁・伊万里・鉄滓・釘・口金が出土している。

土壙墓

ＳＺ1683（第63図）：ＳＤ1103の南端に位置する楕円形の土坑。長さ1.14m、幅0.69m、深さ0.12m。人骨が出土しており、ＳＺ1684と同じく土壙墓と思われる。

ＳＺ1684（第63図、図版18）：ＳＺ1683の北に並ぶ土壙墓。長さ1.25m、幅0.71m、深さ0.36m。底面に炭化物が約10cm堆積し、その中から骨が出土した。炭化物層の下に焼土は見られないため、他所で火葬にした骨を炭ごと運んできて埋めたと考えられる。同定の結果、ヒトの骨であったが、複数人の骨が混じっているようである。白磁の小壺が出土しており、副葬品と思われる。　（野口　雅美）



第63図　遺構実測図
SZ1683　SZ1684

④Ｂ４地区・Ｂ４Ｓ地区

中世の遺構は調査区全域にみられるが、北端には旧河道が通るため、集落の中心は調査区中央部以南にある。掘立柱建物15棟、柵列５条、井戸２基、旧河道、溝、土坑多数を確認した。

掘立柱建物

ＳＢ21（第64図）：調査区中央部南寄りに位置する２間×２間の東西棟総柱建物である。桁行5.03ｍ、梁行4.47ｍを測り、面積は22.48㎡である。東西の主軸はＮ－61°－Ｗである。北東角の柱穴ＳＰ2369はＳＢ27南西角の柱穴と重複している。方形の区画溝ＳＤ2371に切られるため、ＳＤ2371と同時期の存在が想定されるＳＢ26・27より古い年代が考えられる。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ22（第65・66図、図版20）：調査区北部南寄りに位置する総柱建物である。建物の北東部分は調査区外に延びるが、５間×４間の南北棟建物であると考えられる。桁行11.40ｍ、梁行8.95ｍを測り、未調査部分をあわせた面積は102.03㎡と想定できる。南北の主軸はＮ－31°－Ｅである。柱間は2.2ｍを基準とし、中央の桁間のみ若干広い2.5ｍを測る。遺物はＳＰ2602から中世土師器、ＳＰ2604から珠洲（1051）が出土している。

ＳＢ23（第67図、図版20）：調査区中央部西寄りに位置する２間×２間の東西棟総柱建物である。桁行5.27ｍ、梁行5.07ｍを測り、面積は26.72㎡である。東西の主軸はＮ－67°－Ｗである。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ24（第68図）：調査区中央部東寄りに位置する総柱建物である。建物の北東部分は調査区外に延びるが、３間×２間の南北棟総柱建物とした。更に間数の大きな建物になる可能性もある。南北の主軸はＮ－21°－Ｅである。桁行5.6ｍ、梁行3.2ｍを測り、未調査部分をあわせた面積は17.92㎡と想定できる。桁間は1.8ｍ、梁間は1.5ｍを基準とし、他より若干柱間が狭い。柱穴から中世の遺物は出土していない。

ＳＢ25（第69図）：調査区中央部南寄りに位置する４間×１間の東西棟側柱建物である。桁行11.1ｍ、梁行4.45ｍを測り、面積は49.40㎡である。桁間は西寄りが狭く2.4ｍ、東寄りがやや広く3.2ｍを基準とする。東西の柱列方位はＮ－55°－Ｗである。ＳＢ21と重複するが、柱穴の直接の切り合いはない。但しＳＤ2371を切る柱穴があるため、ＳＤ2371と同時期存立のＳＢ26・27及びこれらに先行するＳＢ21よりも新しい段階の建物である可能性が高い。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ26・27（第70図、図版20）：調査区中央部南寄りに位置する１間×１間の掘立柱建物で、ＳＤ2371に四方を囲まれた南北4.5ｍ、東西5.5ｍの区画内に建つ。ＳＢ26は桁間2.75ｍ、梁間1.55ｍを基準とし、面積は4.26㎡を測る。ＳＢ27は桁間3.2ｍ、梁間2.7ｍを測り、面積は8.64㎡である。ＳＢ27はＳＢ26と比較すると、柱穴の規模が若干大きく面積も広い。ＳＢ26とＳＢ27は重複しており建て直しが考えられるが、柱穴の直接の切り合いはみられず遺物も出土していないため、先後関係は不明である。南北の柱列方位はＳＢ26がＮ－22°－Ｗ、ＳＢ27がＮ－25°－Ｗを測る。ＳＢ26・27は方形に巡る溝に囲まれた区画の中央に建つ建物として、他の掘立柱建物とは異なる性格が考えられる。類例として、県内では福光町梅原安丸Ⅳ遺跡（福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター1997）と福野町田尻遺跡（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996）が挙げられる。梅原安丸Ⅳ遺跡の事例は、屋敷地の一角に幅0.7ｍの溝を方形に巡らせて東西５ｍ、南北5.5ｍの方形区画をつくり、その中に直径約１ｍの円形の土坑が２つ掘り込まれるものである。土坑内には火葬骨を収めた蔵骨器の存在が考えられており、上屋として浄土信仰の影響を受けた墳墓堂が建てられていたと推定されている。中名Ⅴ遺跡の方形溝ＳＤ2371の区画内からは火葬骨や蔵骨器などは出土していないが、規模などから

みて同様の仏堂などの宗教施設である可能性が高いと考えられる。

ＳＢ28（第71・72図）：調査区南部中央寄りに位置する４間×２間の南北棟総柱建物である。桁行は11.35m、梁行は4.8mを測り、面積は54.48m²である。主軸方位はＮ－22°－Ｅである。東列の南寄り３基の柱穴はＳＤ2704と重複するため、確認できなかった。ＳＰ2324から中世土師器が出土している。

ＳＢ29・30（第72図）：調査区南部中央寄りに位置する２間×２間の東西棟側柱建物である。柱穴の多くに重複がみられ、同位置に建て直しがなされたものと考えられるため、２棟の掘立柱建物と考え、ＳＢ30はＳＢ29を切るとした。ＳＢ29は桁行4.4m×梁行4.0m、面積17.6m²、柱列の東西方位はＮ－65°－Ｗである。ＳＢ30は桁行5.1m×梁行4.0m、面積20.4m²、柱列の東西方位はＮ－63°－Ｗを測り、建て直しに伴って東西の柱間が若干広くなる。ＳＰ2252から木炭が出土している。

ＳＢ31（第73図、図版20）：調査区南部中央寄りに位置する３間×２間の東西棟総柱建物である。建物の東側が調査区外に延びるため、桁行が３間以上になる可能性もある。桁行4.0m×梁行2.9m、面積11.60m²である。西側の柱列は立て直してＳＢ32の柱列に使用されていたと考えられる。柱間は1.5mを基準とするが、西側の桁間のみ1.0mと狭くなる。建物方位はＮ－65°－Ｗである。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ32（第74図、図版20）：調査区南部中央寄りに位置する３間×２間の東西棟総柱建物である。ＳＢ31の立て直しによる建物であると考えられる。桁行4.6m×梁行2.6m、面積は11.83m²を測る。建物方位はＮ－64°－Ｗである。西側はＳＢ28と重複する。ＳＰ2318から金属製品（2087）が、ＳＰ2347から中世土師器（1042）が出土している。

ＳＢ33（第75図）：調査区南部に位置する２間×１間の南北棟側柱建物である。桁行6.05m×梁行3.25m、面積は19.66m²である。建物東列の柱列方位はＮ－32°－Ｅを測るが、西列の３基の柱穴は歪みがみられ軸方位にのらない。また、ほぼ同方位上にあるＳＤ2119を跨いでいることから、東列３基の柱穴による柵列となる可能性もある。

ＳＢ34（第76図、図版20）：調査区中央部に位置する２間×２間の南北棟総柱建物である。桁行5.8m×梁行4.9m、面積は28.42m²を測る。建物方位はＮ－８°－Ｅである。南東の柱穴２基は方形に巡る区画溝ＳＤ2371に切られており、南列中央の柱穴はＳＤ2371落ち際で確認できたが、南東角の柱穴は消滅しており確認出来なかった。ＳＤ2371に伴うＳＢ26・27より古い段階の建物時期が考えられる。南側の柱間は2.7mを基準とするが、北側の桁間は3.1mを測り、若干広くなっている。柱穴から遺物は出土していない。

柵列

ＳＡ14（第77図）：調査区北端のＳＤ2172ａ東壁に位置する３基の柱穴列である。軸方位はＮ－14°－Ｗ、柱間は2.6m、2.3mを測る。覆土は暗灰黄色粘質シルトを基調とする。ＳＡ14の周囲ではこれと対になる柱穴列は検出できなかったため、川底に掘り込まれた３本の柱とＳＤ2172東肩で上部構造を支える桟橋状遺構であると考える。遺物は、ＳＰ2929から土師器・須恵器・中世土師器が、ＳＰ2930から須恵器・中世土師器が、ＳＰ2931から土師器がそれぞれ出土している。ＳＤ2172は古代遺物包含層を削り込んで流れる中近世の旧河道であることから、ＳＡ14柱穴から出土した古代の遺物は流れ込みによるものと考えている。

ＳＡ15（第77図）：調査区北部のＳＤ2172ｂ東壁に沿った曲線上に４基の柱穴が等間隔に並ぶ柵列である。柱間は3.5～4.4mを測る。ＳＤ2172ｂ東肩落ち際で護岸のための石列を確認しており、これ

に伴う施設として、石列と同様に護岸を目的とした杭列であると考えたい。遺物はＳＰ3264とＳＰ3221から土師器が出土しているが、ＳＡ14出土遺物と同様に流れ込みによるものと考える。中世の遺物は出土していない。

ＳＡ16（第78図）：調査区南部中央寄りに位置する５基の柱穴列である。柱列の軸方位は若干ぶれがみられるが、概ねＮ－74°－Ｅに収まる。柱間は1.5mを基準とする。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＡ17（第78図）：調査区南部に位置し、北側がＢ３地区に延びる南北方向の柵列である。５基の柱穴列であると思われるが、北から２基目の柱穴は調査区外のため確認できていない。柱列の軸方位はＮ－４°－Ｅである。柱間は概ね2.7mを基準としている。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＡ18（第78図）：調査区南部に位置する４基の柱穴列である。柱列の軸方位はＮ－76°－Ｗである。柱間は1.8～3.0mを測り、一定しない。柱穴から遺物は出土していない。

井戸

ＳＥ2090（第79図、図版21）：調査区南部に位置する石組井戸である。平面形は、掘方直径1.9m、石組内径1.1mを測る円形を呈し、深さは検出面から1.7mを測る。断面の掘方は中程がやや膨らむ擂り鉢状で、石組も同様に底がすぼまった細長い擂り鉢状を呈する。石組の周囲には黒褐色砂質シルトを基調とする土を用いて裏込めをしており、底部近くでは礫も使用して補強する。石組は直径10～30㎝の円礫を用いて右回りの螺旋状に積まれ、12段が残存する。水溜に曲物（3113・3114）を置いているが残存状態は良くない。覆土上層はにぶい黄褐色シルトを基調とするが、下層には黒褐色シルトの堆積がみられる。よって中程まで土が自然堆積した後、洪水などにより完全に埋没したものと考えられる。遺物は中世土師器・珠洲・八尾・青磁・木蓋（3115）が出土しているがいずれも小片である。Ｂ４地区の掘立柱建物群からは若干離れた位置に構築されており、Ｂ３地区の掘立柱建物群に所属する遺構であると考えられる。

ＳＥ2348（第80図、図版21）：調査区中央部南寄りに位置する井戸である。掘方は一辺1.7mを測る隅丸方形で、井戸内径は1.5m、深さ0.9mを測る。本来は石組井戸であったものと思われるが上部は石が抜き取られ、底部近くに２段を残すのみである。水溜に曲物が置かれていたが残存状態が悪く、一部の破片を確認するにとどまった。石組外側の北から西にかけての範囲に、にぶい黄橙色シルトと黒褐色シルトのブロック状に混ざった埋土が確認でき、石組構築時の裏込めが残存したものと考えられる。覆土は上層が灰黄褐色～暗褐色砂質シルト、下層が褐灰色～オリーブ黒色シルトを基調とし、下層覆土は若干粘性が増す。覆土の中程には、堆積が一旦中断したような水平面がみられ、その面上から直径５～10㎝の礫がまとまって出土した。井戸廃絶後、中程まで土が自然堆積し、窪地状になっていたところに礫が投げ込まれたと考えている。また、ＳＥ2348東側に位置する土坑ＳＫ2349の上面には、直径10～40㎝の円礫が多量に積まれていた。ＳＥ2348の石組上半は廃棄される際に取り外されていることから、井戸を構成していた石であった可能性が高い。井戸の作り替えを目的として取り外されたものであると考えられる。覆土中から中世土師器・加工板が出土している。

土坑

ＳＫ2075（第108図）：調査区南部に位置する土坑である。平面形態はやや歪んだ円形で、直径1.55～1.8m、深さ0.17mを測る。覆土上層は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を一部帯状に含む。覆土下層は暗褐色砂質シルトを基調とし、土坑底面角部分に灰黄褐色砂の堆積がみられる。遺物は中世土師器・八尾・鉄釘（2078）が出土している。

ＳＫ2078（第108図）：調査区南部に位置する土坑である。平面形態は楕円形に近い隅丸方形で、長径1.2m、短径1.05m、深さ0.13mを測る。覆土は単層で、灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器・八尾が出土している。

ＳＫ2081（第108図）：調査区南部に位置する土坑である。南西部分をＢ４Ｓ地区との境にある近世の用水路跡に切られているが、平面形態は円形に近い楕円形と思われる。ＳＤ2089を切る。残存する部分の直径は1.51m、深さは0.15mを測る。覆土上層は灰黄褐色砂質シルト、下層はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2109（第107図）：調査区南部に位置する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.79m、短径1.43m、深さ0.13mを測る。覆土は単層で、灰黄褐色砂質シルトを基調とする。中世の遺物は出土していない。

ＳＫ2182（第107図）：調査区南部の調査区東壁近くに位置する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.54m、短径0.73m、深さ0.16mを測る。覆土は単層で黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物粒を多く含む。遺物は覆土下層から中世土師器（1041・1044）が出土している。

ＳＫ2183（第107図）：調査区南部の調査区東壁近くに位置する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.87m、短径0.83m、深さ0.24mを測る。覆土は水平堆積で、上層は灰黄褐色砂質シルト、下層は黒褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2187（第107図）：調査区南部の調査区東壁近くに位置する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.8m、短径1.3m、深さ0.14mを測る。覆土は単層で、灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は金属製品（2073）が出土している。

ＳＫ2236（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。ＳＫ2267を切る。平面形態は楕円形に近い円形で、長径1.89m、短径1.7m、深さ0.27mを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルト及びにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2240（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。ＳＫ2267、ＳＤ2704を切る。平面形態は不整形で、直径1.8～1.86m、深さ0.12mを測る。覆土は単層で、にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2241（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。ＳＫ2267、ＳＤ2704を切る。平面形態は不整形だが楕円に近く、長径1.78m、短径1.08m、深さ0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2243（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。西部が調査区外に延びるが、平面形態は楕円形と思われる。南北の直径は1.92m、深さ0.23mを測る。覆土は暗灰黄色シルトを基調とする。覆土中から木炭が出土している。

ＳＫ2244（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。北東の一部でＳＫ2662を切り込む。平面形態は円形で、直径0.94～１m、深さ0.15mを測る。覆土は単層でにぶい黄褐色シルトを基調とし、炭化物を多量に含む。中世の遺物は出土していない。

ＳＫ2245（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.35m、短径0.9m、深さ0.12mを測る。覆土は単層で、にぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2247（第107図）：調査区南部中央寄りに位置する土坑である。平面形態は楕円形で、直径1.44～1.94m、深さ0.19mを測る。覆土は単層で灰黄褐色シルトを基調とする。覆土中から木炭が出土し

ている。

ＳＫ2265（第107図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。ＳＢ28の柱穴ＳＰ2697・2936とＳＤ2704を切る。平面形態は不整形で、直径1.9～5.83m、深さ0.15mを測る。覆土は単層で、灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2267（第107図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。ＳＤ2704を切り、ＳＫ2240・2241・2236に切られる。平面形態は不整形だが隅丸方形に近く、長径2.56m、短径1.75m、深さ0.37mを測る。覆土上層はにぶい黄褐色砂質シルト、下層は灰黄褐色砂質土を基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2292（第107図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。平面形態は南北に長い楕円形で、長径1.76m、短径1.22m、深さ0.2mを測る。覆土は単層で、灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2325（第106図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。平面形態は東西に長い楕円形で、直径1.05～2.28m、深さ0.26mを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、下層にやや粘性のある黒褐色シルトをブロック状に含む。遺物は八尾が出土している。

ＳＫ2343（第106図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。北東部分が調査区外へ延びるため規模は不明であるが、平面形態は隅丸方形となるようである。北辺で方形土坑ＳＫ2344を切り込むほか、ＳＢ31・32の柱穴ＳＰ2346・2347・2386・2561・2714を切る。深さは0.22mを測り、覆土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2344（第106図）：調査区中央部南寄りに位置する土坑である。北東部分が調査区外へ延びるため規模は不明であるが、平面形態は隅丸方形となるようである。深さは0.55mを測る。南辺をＳＫ2343に切られ、ＳＫ2349・2561を切る。覆土は水平堆積であるが上層と下層の土質に大きな差異はなく、灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルトを基調としている。遺物は珠洲が出土している。

ＳＫ2349（第80図、図版22）：調査区中央部南寄りに位置する土坑で、石組井戸ＳＥ2348に南西隅を切られる。平面形態は方形に近い不整形で、長軸2.16m、短軸1.6m、深さ0.7mを測る。覆土の上面には直径0.1～0.4mの円礫が多量に積まれていた。西接するＳＥ2348の石組を壊して取り出したものであると考えられる。遺物は中世土師器・珠洲・八尾・炭が出土している。

ＳＫ2448（第106図）：調査区中央部のＳＤ2371北に位置する土坑である。平面形態は不整形で、直径0.67～0.85m、深さ0.15mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2469（第106図）：調査区中央部に位置する土坑である。ＳＫ2470を切る。南半分を試掘トレンチに切られているが、平面形態は円形もしくは楕円形と考えられる。残存する東西の直径は1.73m、深さは0.57mを測る。覆土は水平堆積で、上層は灰黄褐色砂質シルト、下層は暗褐色砂質土を基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2480（第106図）：調査区中央部に位置する土坑である。ＳＤ2479・2481に切られる。平面形態は直径1.02～1.32mを測る楕円形で、深さは0.62mを測る。覆土は上層は灰黄褐色砂質シルト、下層は粒子の細かい暗褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2502（第106図）：調査区中央部に位置する土坑である。平面形態は直径3.4～4.5mを測る方形に近い不整形である。深さは0.42mを測る。覆土は水平堆積で、上層は灰黄褐色・暗褐色砂質シルトを基調とし、下層には僅かに粘性のある黒褐色砂質土が堆積する。遺物は中世土師器と珠洲（1046）

が出土している。

ＳＫ2504（第106図）：調査区中央部に位置し、ＳＤ2948を切り込む土坑である。平面形態は南北に長い楕円形で、長軸1.35m、短軸１m、深さ0.15mを測る。覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2505（第79・106図、図版22）：調査区中央部東寄りに位置する土坑である。平面形態は南北3.8m、東西2.87mを測る隅丸方形で、深さは0.45mを測る。覆土は水平堆積で、上層は灰黄褐色～暗褐色砂質シルト、下層は黒褐色砂質シルトを基調とする。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2529（第105図）：調査区北部に位置し、ＳＤ2850を切り込む。平面形態は楕円形で、長径1.93m、短径0.91m、深さ0.07mを測る。覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2542（第105図）：調査区北部中央寄りに位置し、ＳＫ2543を切る土坑である。東半分は調査区外に延びる。平面形態は円形か楕円形と思われ、南北の直径は2.09m、深さは0.34mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土を基調とし、若干炭化物の混入がみられる。遺物は出土していない。

ＳＫ2543（第105図）：調査区北部中央寄りに位置する土坑である。北東角をＳＫ2542に切られる。平面形態は楕円形で、長軸2.75m、短軸1.87m、深さ0.82mを測る。覆土上層はにぶい黄褐色砂質シルト、下層は灰黄褐色砂質土を基調とする。中世の遺物は漆器・釘が出土している。

ＳＫ2544（第105図）：調査区北部中央寄りに位置し、ＳＫ2545を切る土坑である。平面形態は楕円形で、長軸2.32m、短軸1.8m、深さ0.5mを測る。覆土上層はにぶい黄褐色砂質シルト、下層は灰黄褐色シルトを基調とし、底面近くには黄灰色砂質土が堆積する。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2545（第105図）：調査区北部中央寄りに位置する土坑である。ＳＫ2546を切り込む。東半分をＳＫ2544に切り込まれるが、平面形態はほぼ円形になると考えられ、残存する南北の直径は1.92m、深さは0.27mを測る。覆土上層はにぶい黄褐色砂質シルト、下層は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は出土していない。

ＳＫ2627（第105図）：調査区北部のＳＤ2172東方に位置し、ＳＤ2926を切り込む土坑である。平面形態は円形で、直径は1.2～1.58m、深さは0.36mを測る。覆土は暗灰黄色シルトを基調とし、わずかに炭の混入がみられる。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＫ2633（第105図）：調査区北部のＳＤ2172落ち際に位置する土坑である。平面形態は不整形に近い円形で、直径は最大2.2m、深さは0.09mを測る。覆土は暗灰黄色シルトを基調とする。遺物は珠洲が出土している。

ＳＫ2841（第105図）：調査区中央部東寄りに位置し、ＳＤ2479に切られる土坑である。平面形態は直径1.1～1.95mを測る楕円形で、深さは0.32mを測る。覆土は暗褐色砂質シルトを基調とし、上層には炭化物を微量含む。中世の遺物は出土していない。

ＳＫ2922（第79・105図）：調査区北部に位置し、ＳＤ2638に東側を切り込まれる土坑である。平面形態は隅丸方形で、直径は東西2.86m、南北は1.25m、深さ0.61mを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする水平堆積で、下層は黒褐色シルトと褐色シルトを小ブロック状に混入する。遺物は中世土師器が出土している。

溝

ＳＤ2089（第108図）：調査区南部に位置する区画溝である。幅0.5～0.9m、深さ0.3mを測る。南西から北東方向へ向かって流れ、ＳＤ2119と併走する。南西部分はＳＫ2081及びＢ４Ｓ地区との境にある近世用水路跡に切られるため、長さ７mを検出するにとどまった。覆土は黒褐色シルトを基調とす

る。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＤ2119（第107図、図版23）：調査区南部に位置する区画溝である。幅0.8～1.5m、深さ0.3mを測る。南西から北東方向へ向かって流れるが、ＳＤ2704とは進路の方位が異なり、若干角度は東に振れる。南西端を旧河道ＳＤ3550に切られ、北東部はＢ３地区に繋がる。検出した長さはＢ４地区で20.7m、Ｂ３地区で14.0mを測り、両地区間の未調査部分を含めた全長は37.3mである。覆土は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、下層には黒褐色粘質シルトの堆積がみられる。排水溝として使用されていたと考えられるが、断面からはＳＤ2371と同様に急な水の流れは認めがたい。中世の遺物は出土していない。

ＳＤ2350（第106図）：調査区中央部南寄りに位置する池状の落ち込みである。幅2.8m、深さ0.3mを測る。覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする単層である。中世土師器（1052）・珠洲（1054・1055）・瀬戸（1053）・青磁が出土している。

ＳＤ2371（第70・106図、図版20）：調査区中央部南寄りに位置する区画溝である。ほぼ方形のロの字形に巡り、西部分で最大幅2.9m、深さ0.4mを測る。北西辺が正面と思われ、南西辺には入り江を模したと思われる突出部がある。溝は北東に向かって浅くなり、裏面にあたる北東の一角は幅0.6mを残して繋がらない。溝に囲まれた内部は南北4.5m×東西5.5m、面積約24.8㎡を測り、区画内に建て替えを伴う１間×１間の掘立柱建物（ＳＢ26・27）が建つ。溝の覆土は暗褐色砂質シルトを基調とし、溝下層には粘性のある黒褐色シルトが堆積する。福光町梅原安丸Ⅳ遺跡（福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター1997）や福野町田尻遺跡（財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996）などで同様の区画溝が報告されている。これらの事例ではいずれも池から区画溝へ水が引き込まれ、島状の方形区画内に何らかの宗教施設が建てられていた可能性が高いとされる。ＳＤ2371の南に位置する池状の落ち込みＳＤ2350と南から延びる区画溝ＳＤ2704がこれに関係すると考えるならば、ＳＤ2371にも水が引き込まれていた可能性がある。但し、ＳＤ2371の土層断面からは急な水流があったことは認めがたく、流れの弱い水の存在が想定できる。遺物は中世土師器（1039）・珠洲（1131）・青磁が出土している。

ＳＤ2532（第105図）：調査区北部に位置する溝である。南東から北西へ蛇行しながら延びる。東端はＳＤ2550に切られ、西側は調査区外へ延びるため、調査区内で18.5mを検出した。幅1.3～2.3m、深さ0.1～0.2mを測る。流路は不安定で、自然派生的な溝であると考える。中世の遺物は出土していない。

ＳＤ2550（第105図）：調査区北部中央寄りに位置する区画溝である。幅0.8～1.0m、深さ0.1～0.2mを測る。南東から北西の方向へ向かって流れるが、南東端はＳＤ2638に、北西端はＳＤ2172にそれぞれ切られている。Ｂ４地区では長さ19.5mを検出した。覆土はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。遺物は、中世土師器・珠洲（1047）が出土している。

ＳＤ2638（第105図）：調査区北部中央寄りに位置する区画溝である。幅0.7～2.0m、深さ0.3～0.7mを測る。北西端部分はＳＤ2172に切られる形で合流しており、Ｂ４地区で長さ26.5mを検出した。覆土は黄褐色砂を基調とする。南東から北西の方向へ向かって流れるが、他の区画溝より方位が北に振れる。ＳＤ2550・2532・2926及びＳＢ22の南西角の柱穴ＳＰ2639を切っており、中世の中でも新しい段階の溝であると考えられる。中世の遺物は出土していない。

ＳＤ2704（第107図、図版23）：調査区南部に位置する区画溝である。幅0.8～2.2m、深さ0.2～0.4mを測る。南西から北東方向へ向かって流れ、長さ37mを検出した。覆土は灰黄褐色シルトを基調と

するが、底面近くに黄褐色粘質シルトとにぶい黄褐色砂の互層の堆積がみられ、覆土中に僅かではあるが酸化鉄やマンガンの粒状の形成も認められる。水の流れを伴う区画溝であったことが推測できる。掘立柱建物ＳＢ28・32に切られる。溝の覆土中から珠洲が出土している。

ＳＤ2850（第106図、図版23）：調査区中央部に位置する区画溝である。ＳＤ2948から派生したものと考えられ、緩やかに西折して北西方向へぬける。幅1.2～3.5m、深さ0.1～0.2mを測る。覆土は灰黄褐色シルト及びにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。屈曲部内側にある溝ＳＤ2852・2853・2874とは覆土が類似しており、自然派生したものと考えられる。中世の遺物は出土していない。

ＳＤ2853（第106図、図版23）：調査区中央部に位置する溝である。幅2.0～3.2m、深さ0.1～0.2mを測る。覆土上層は灰黄褐色砂質シルト、下層はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。ＳＤ2948・2850に切られるが、屈曲内部に位置すること、覆土が類似していることから、これらの溝から自然派生したものであると考えている。遺物は中世土師器が出土している。

ＳＤ2926（第105図、図版23）：調査区北部のＳＤ2172ｂ南東側に沿って延びる溝である。総柱建物ＳＢ22に切り込まれる。南側はＳＤ2638に切られて終わるが、ＳＤ2923・2924と繋がり更に南方へ延びる可能性もある。Ｘ99Ｙ136列付近でＳＤ2637と分岐する。幅0.5～1.6m、深さは約0.22mを測る。覆土は上層で褐灰色砂、下層で灰黄褐色砂を基調とする。中世の遺物は出土していない。

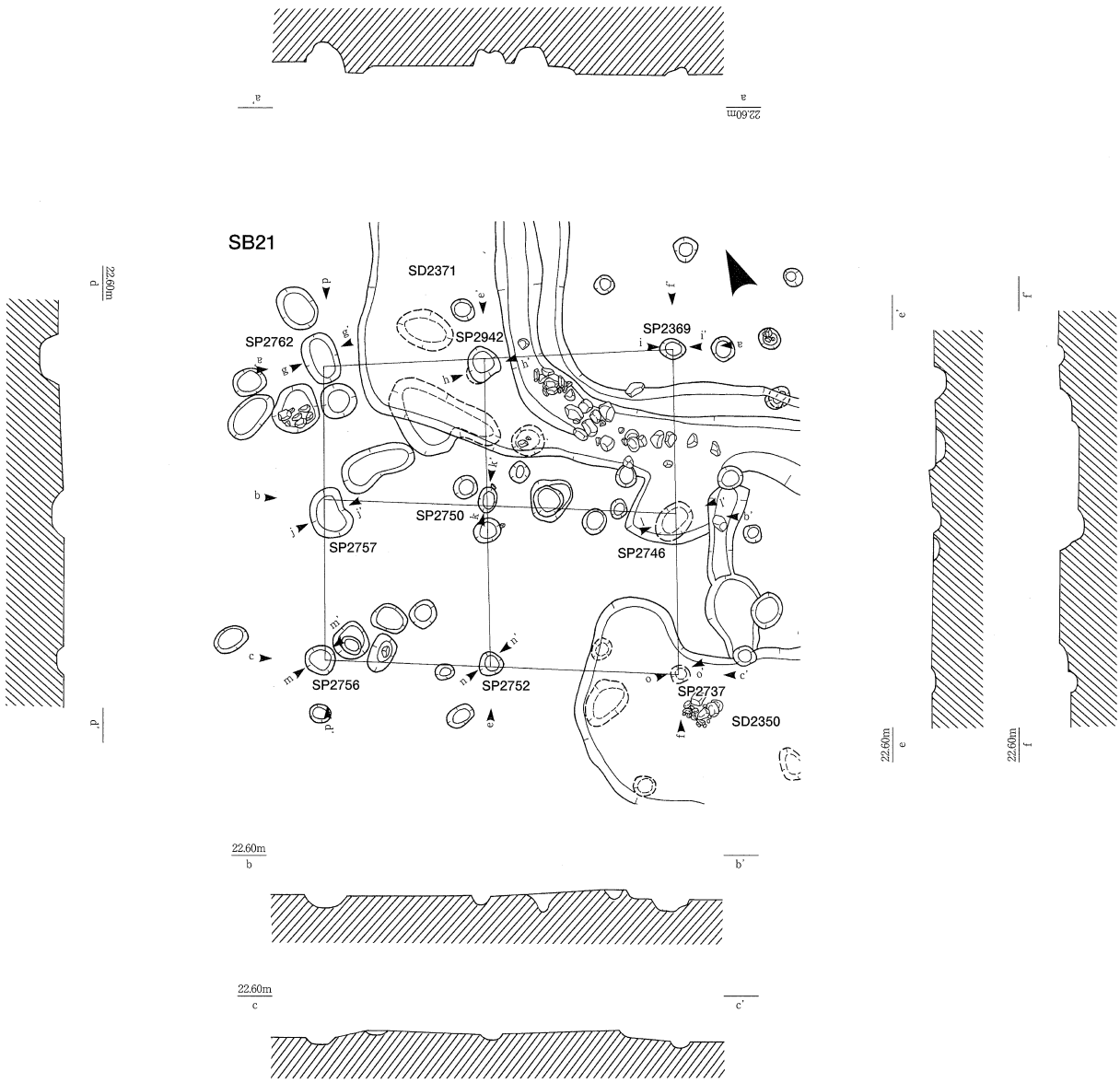
ＳＤ2948（第106図、図版23）：調査区中央部に位置する区画溝で、南西から北東方向へ延びる。幅1.7～2.8m、深さ0.1～0.2mを測る。覆土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。北西に延びる溝ＳＤ2850はＳＤ2948から派生したものと考えられるが、先後関係は不明である。ＳＤ2853を切る。中世の遺物は出土していない。

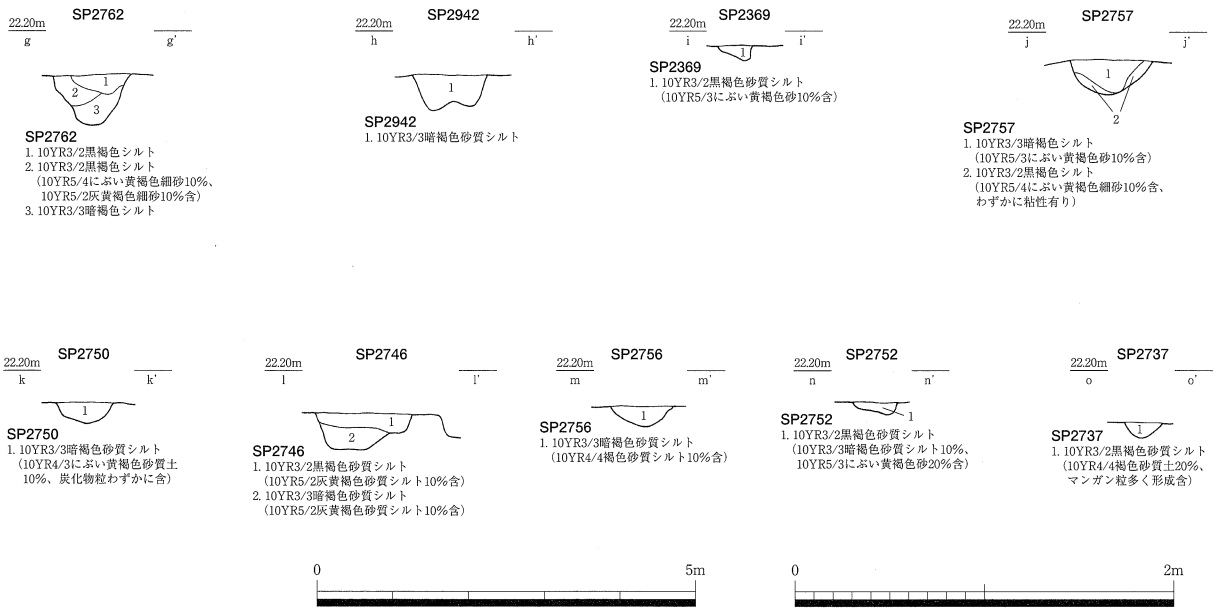
自然流路

ＳＤ2172（第104図、図版24）：調査区北端に位置し、Ｂ４地区の面積全体の約三分の一を占める川跡である。南西から北西へ向かって緩やかな弧を描いて流れる。少なくとも３回にわたって流路を大きく変えており、新しい流路からａ、ｂ、ｃとする。流路ａは幅約８ｍ、深さ1.6mを測る。覆土は上層は暗灰黄色砂質シルト、下層は黄灰色粗砂を基調とする。流路ａの東壁には３基の柱穴が直線上に並ぶ（ＳＡ14）。流路ｂは幅約12m、深さ1.6mを測る。覆土は上層で褐灰色砂質シルト、中層から下層では黄灰色砂を基調とし、底面近くで木質有機物を多量に含む黒褐色粘質シルトの堆積を確認した。流路ｂの東壁には石列が残る。流路ｂの底面で湾曲に沿って等間隔に並ぶ４基の柱穴列を検出した（ＳＡ15）。いずれも川跡に関連する遺構として、護岸のための杭列及び桟橋状の遺構である可能性が考えられる。流路ｃは流路が調査区外に延びるため規模は不明であるが、深さは約1.7mを測り、流路ｂより西流する。覆土は上層から中層でやや粘性のあるにぶい黄褐色シルト、下層で黄灰色粗砂を基調とし、底面近くで流路ｂと同様に木質有機物を多量に含む黒褐色粘質シルトの堆積を確認した。この土層中から、木箸（3100～3109）・漆器（3093～3095）・加工材（3096～3098・3110～3112）等の木製品が出土した。またこの周辺で、ブナを中心にウラジロカシ近似種・グミ属・クマシデ属・ケヤキなどの木葉が厚さ20㎝程堆積しているのを確認した。この他中近世の遺物としては、中世土師器（1056～1060・1066～1071・1077～1079・1081～1087）・珠洲（1061・1062・1072～1076・1091・1092）・瀬戸（1079・1089・1090）・青磁（1064・1065・1080・1088）・青白磁（1063）・越中瀬戸（1068）・伊万里・砥石（4036・4037）・釘（2076・2077・2079）・木の実・種子・人骨・獣骨・昆虫などが出土しており、中世初めから近世に至るまで存続したと考えられる。なおＳＤ2172は古代遺物包含層を切り込んでいるため、須恵器や土師器など古代の遺物も多く出土している。

ＳＤ3550（第108図）：Ｂ４Ｓ地区に位置する旧河道である。数回にわたって流路を変えながら古代から近世に至るまで存続し、ほ場整備に伴い埋め立てられたと考えられる。中世の段階では幅0.7～0.8m程の規模で、南から北西方向へ旧地形に沿って緩く弧を描きながら流れていたと考えられる。南東から延びる区画溝ＳＤ3579と合流する。なお北西岸部分は切り込み面が不安定で、用水跡と重複する付近まで川幅が北に広がる可能性がある。遺物は中世土師器（1146～1175）・瀬戸（1179）・青磁（1176）・白磁（1178）・青白磁（1177）・珠洲（1180～1184）・越中瀬戸（1185）などが出土している。

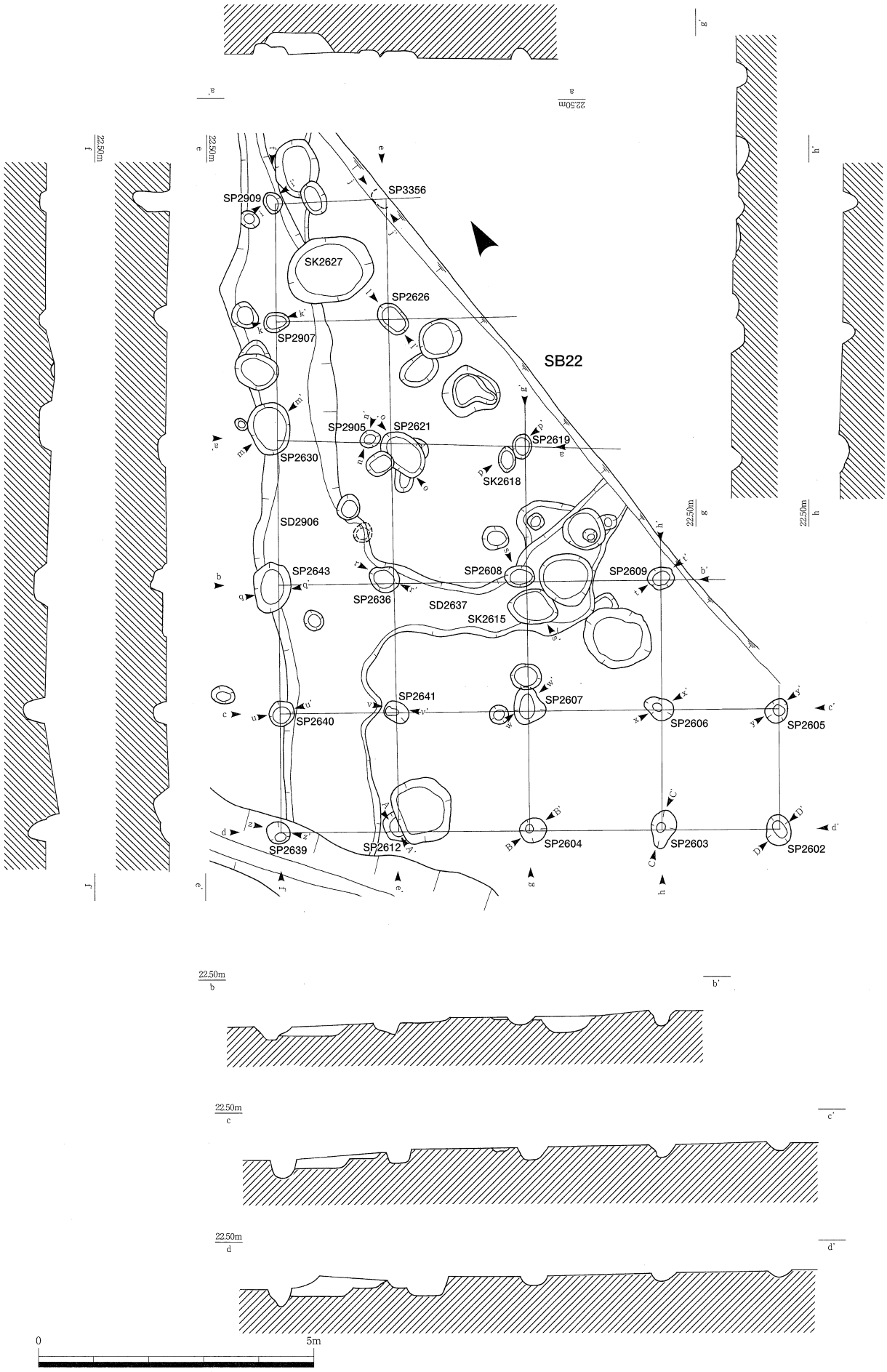
（内田　亜紀子）





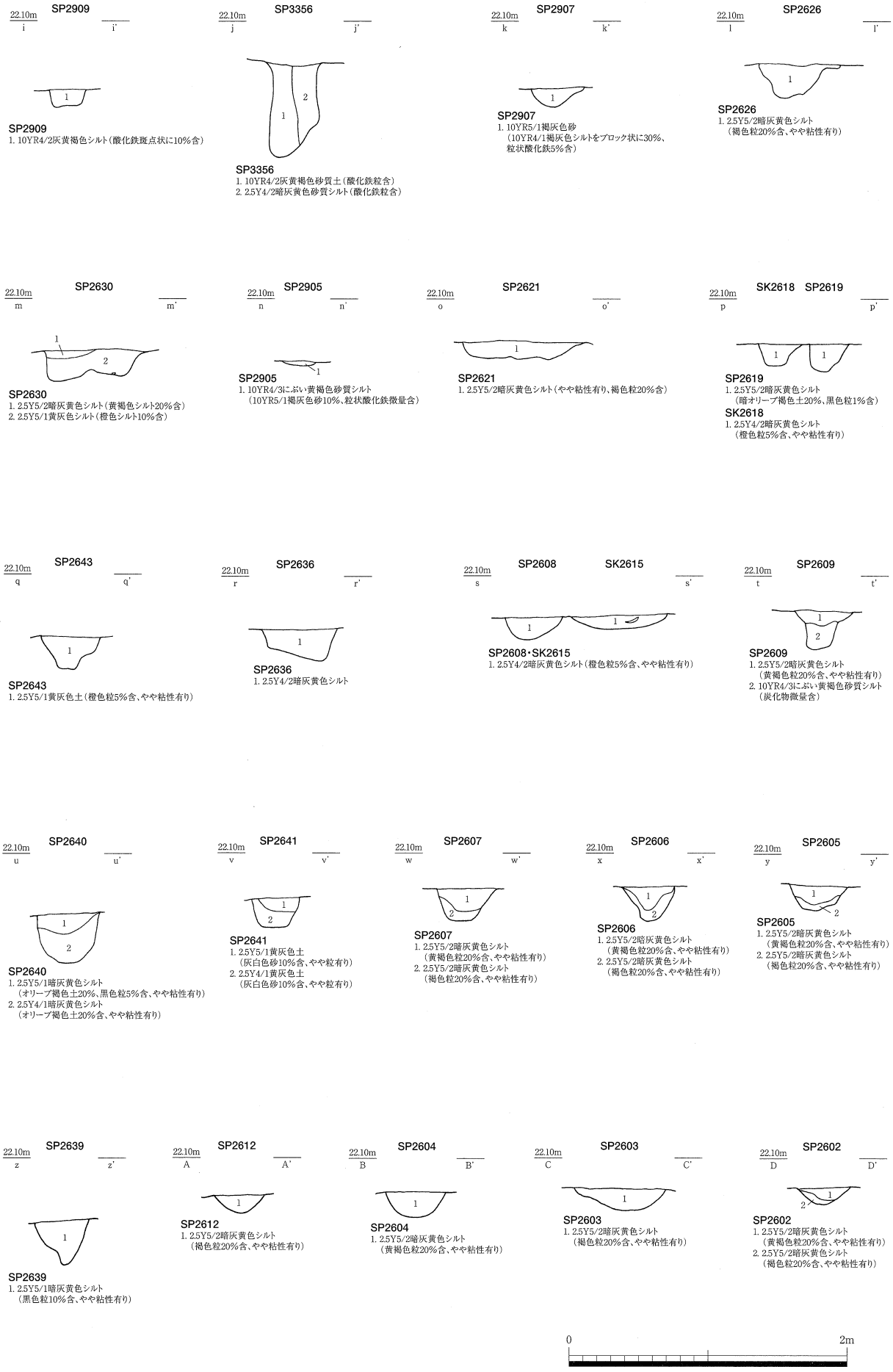
第64図　遺構実測図

SB21



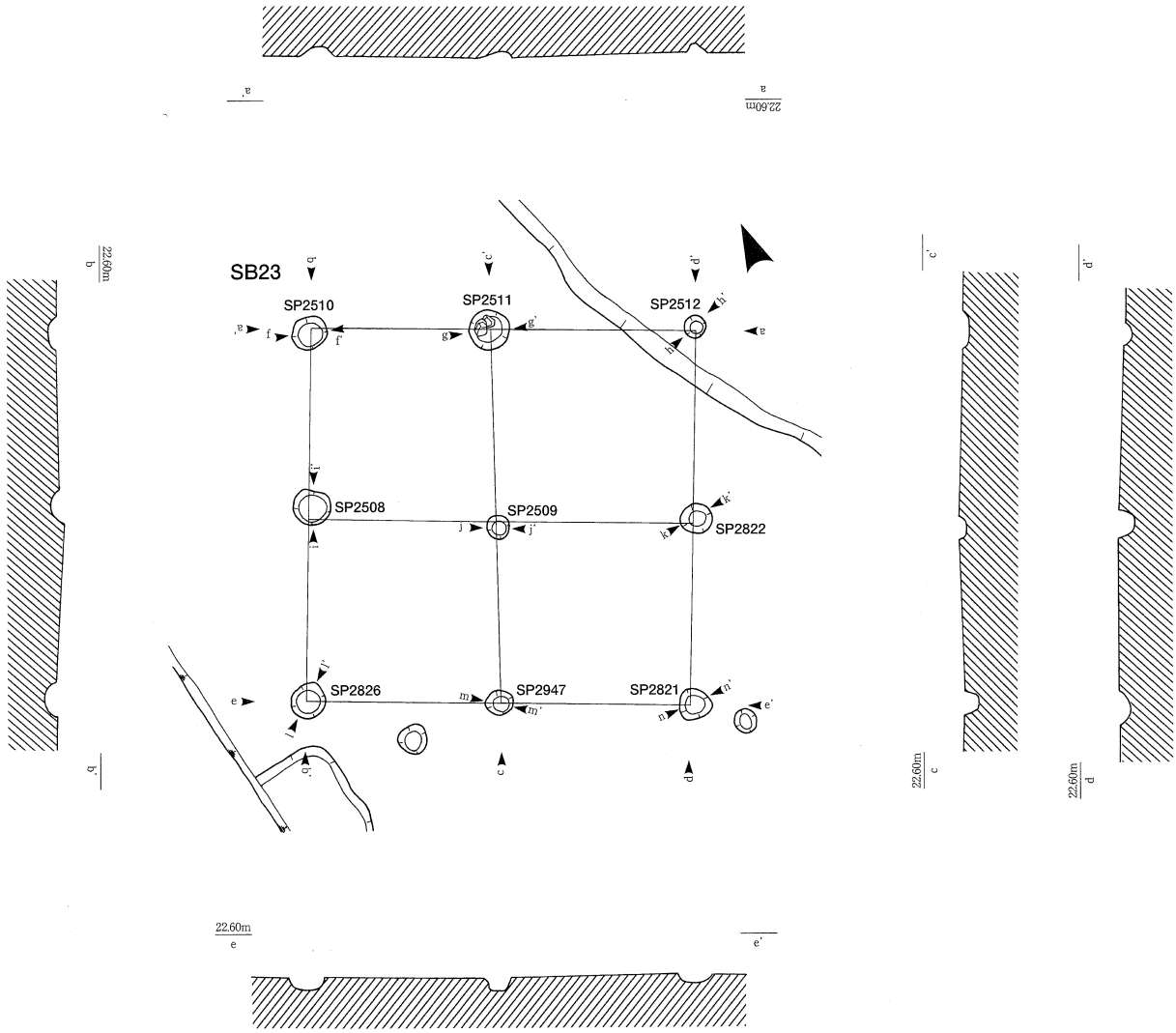
第65図　遺構実測図

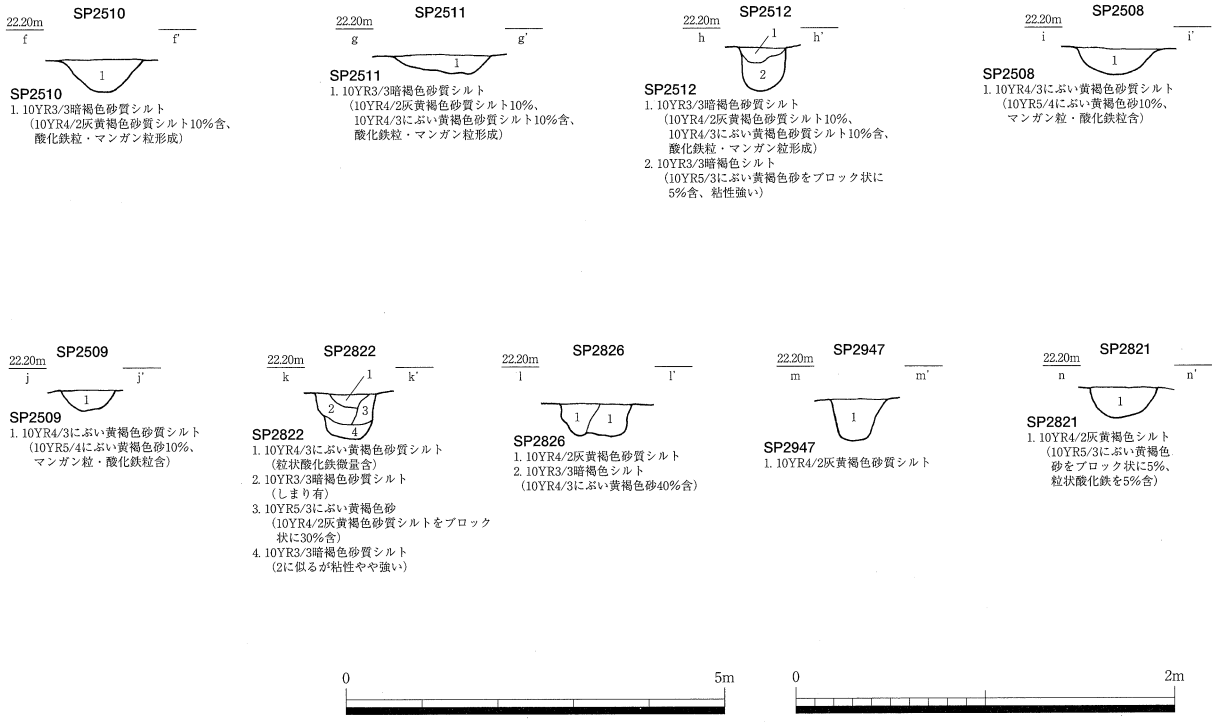
SB22



第66図　遺構実測図

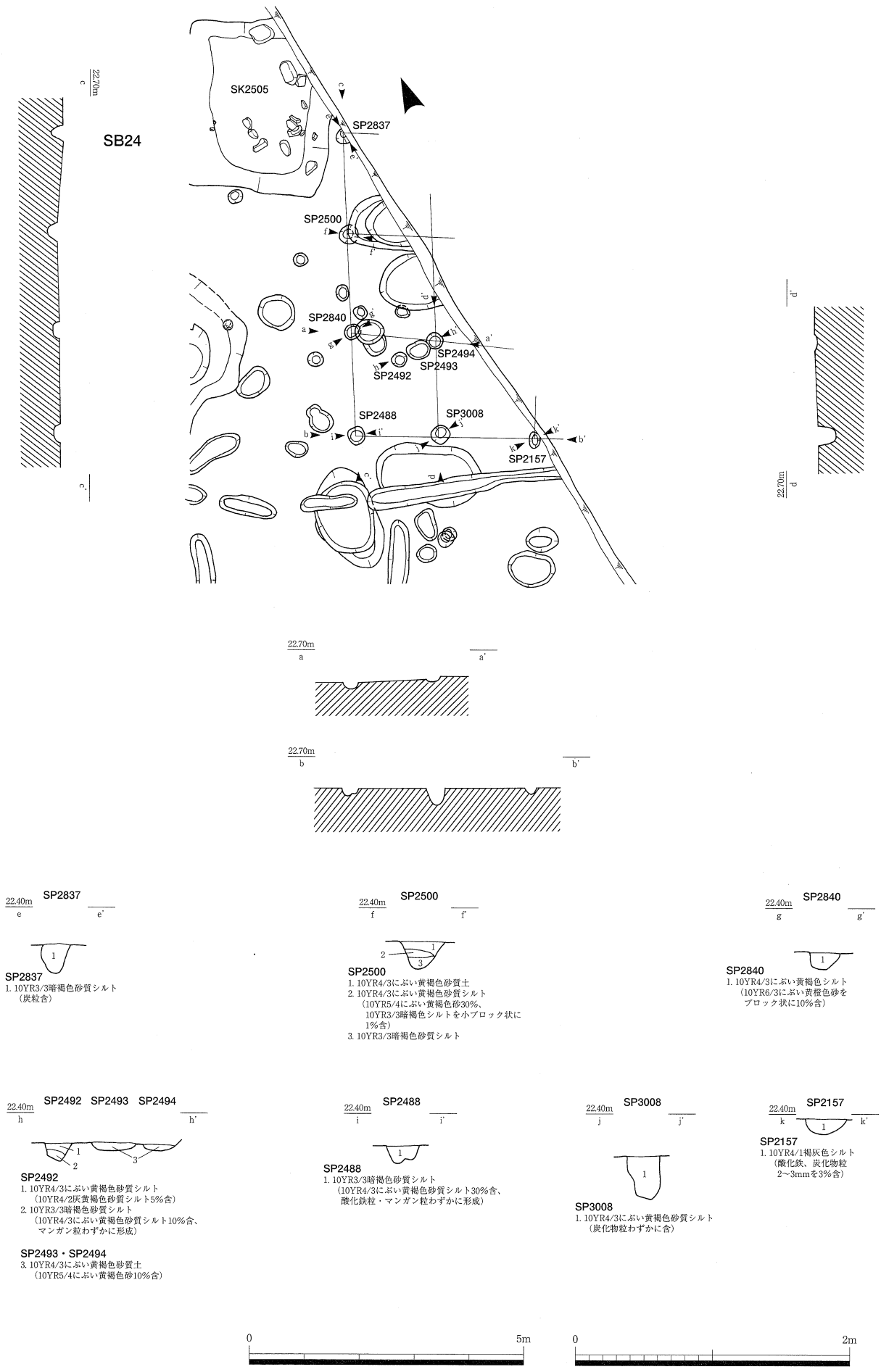
SB22





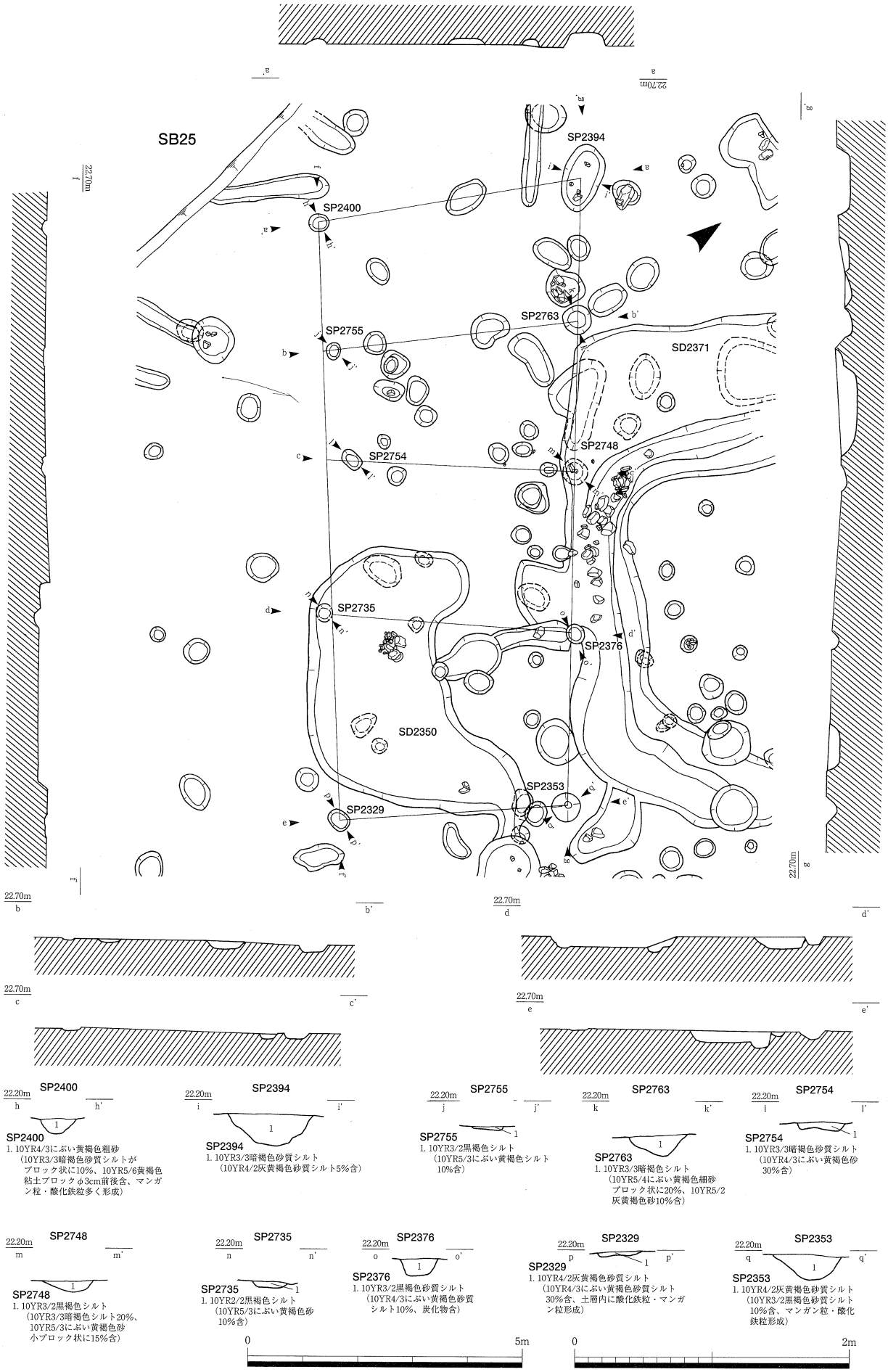
第67図　遺構実測図

SB23



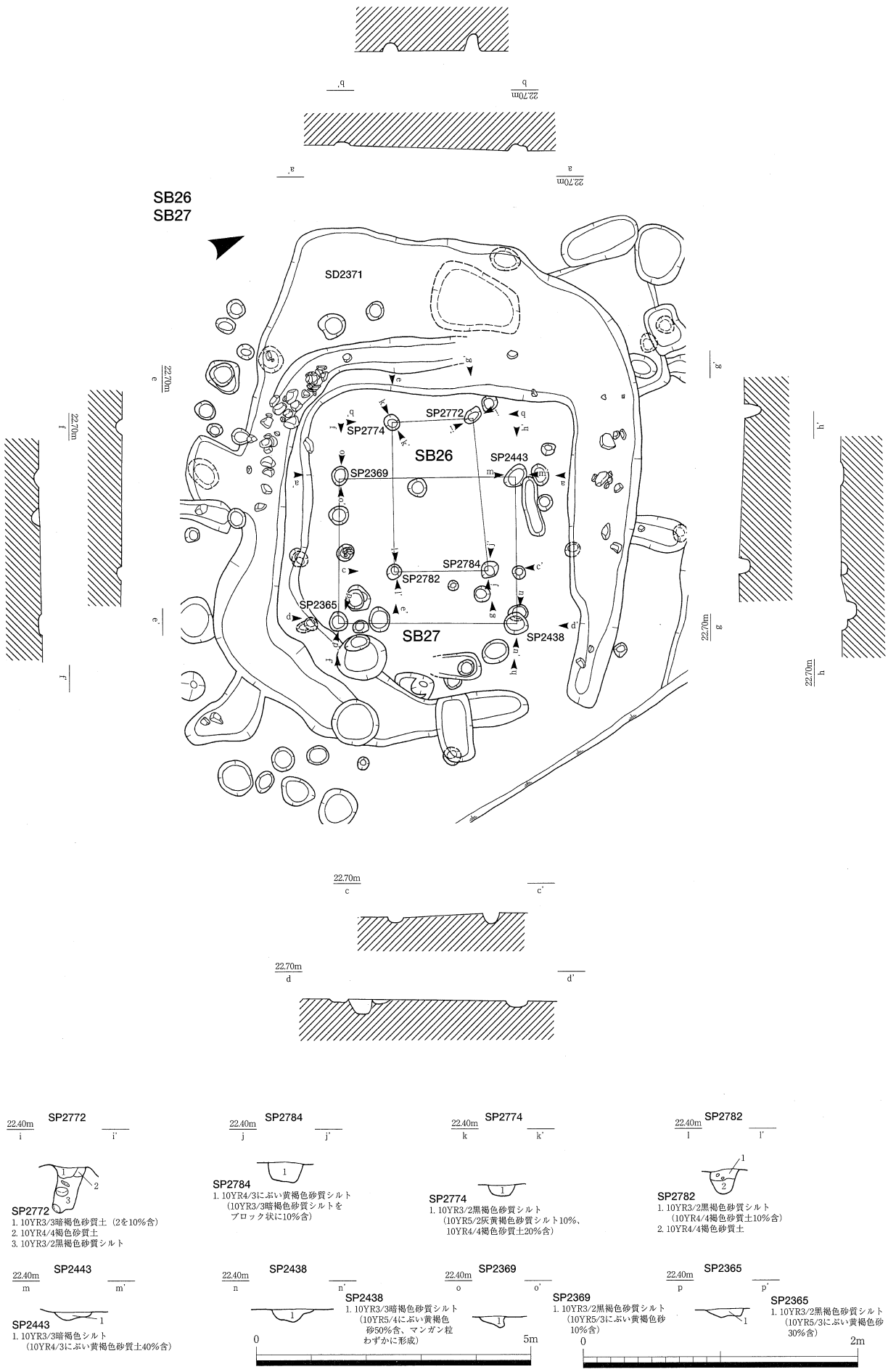
第68図　遺構実測図

SB24



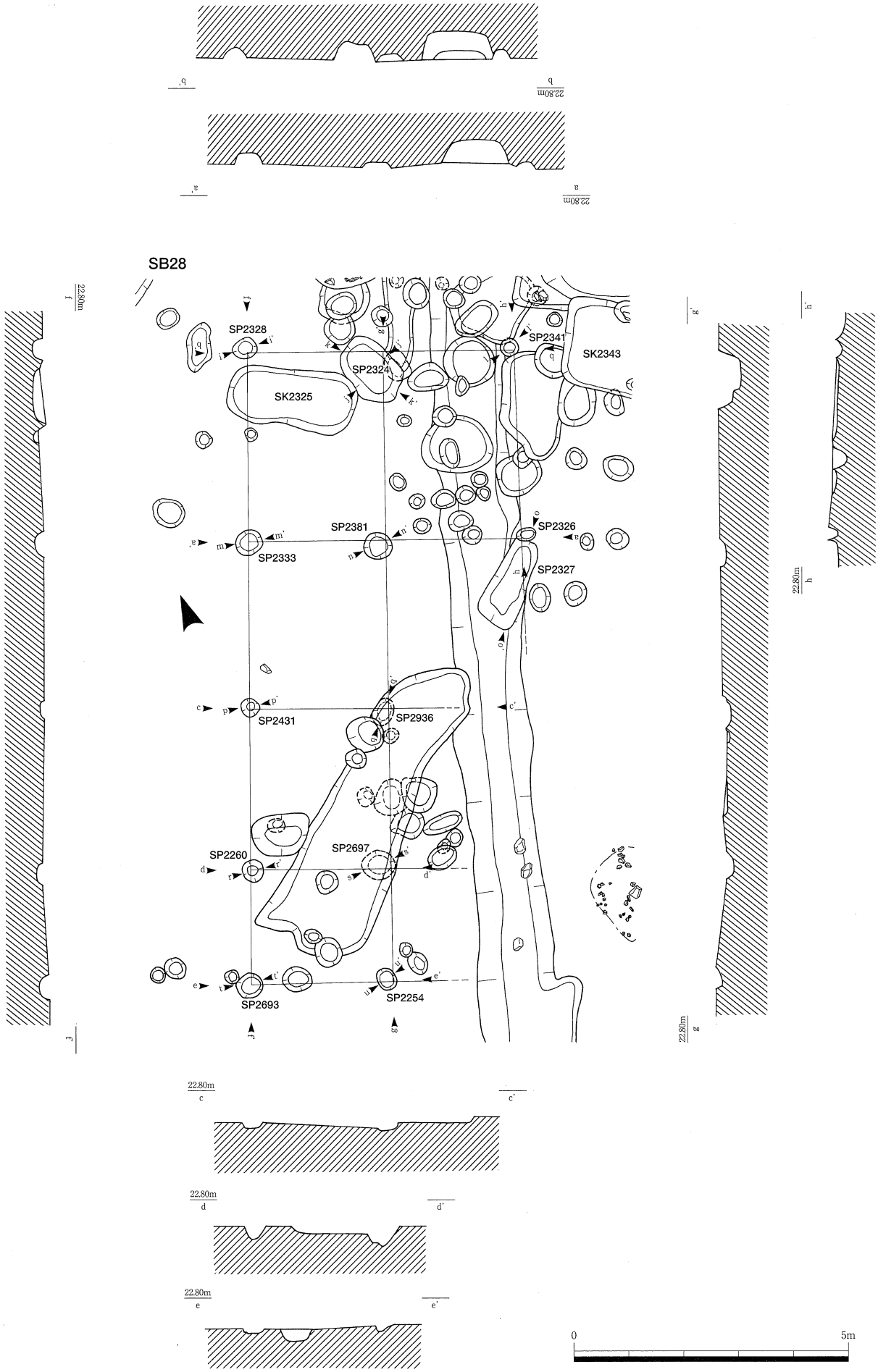
第69図　遺構実測図

SB25



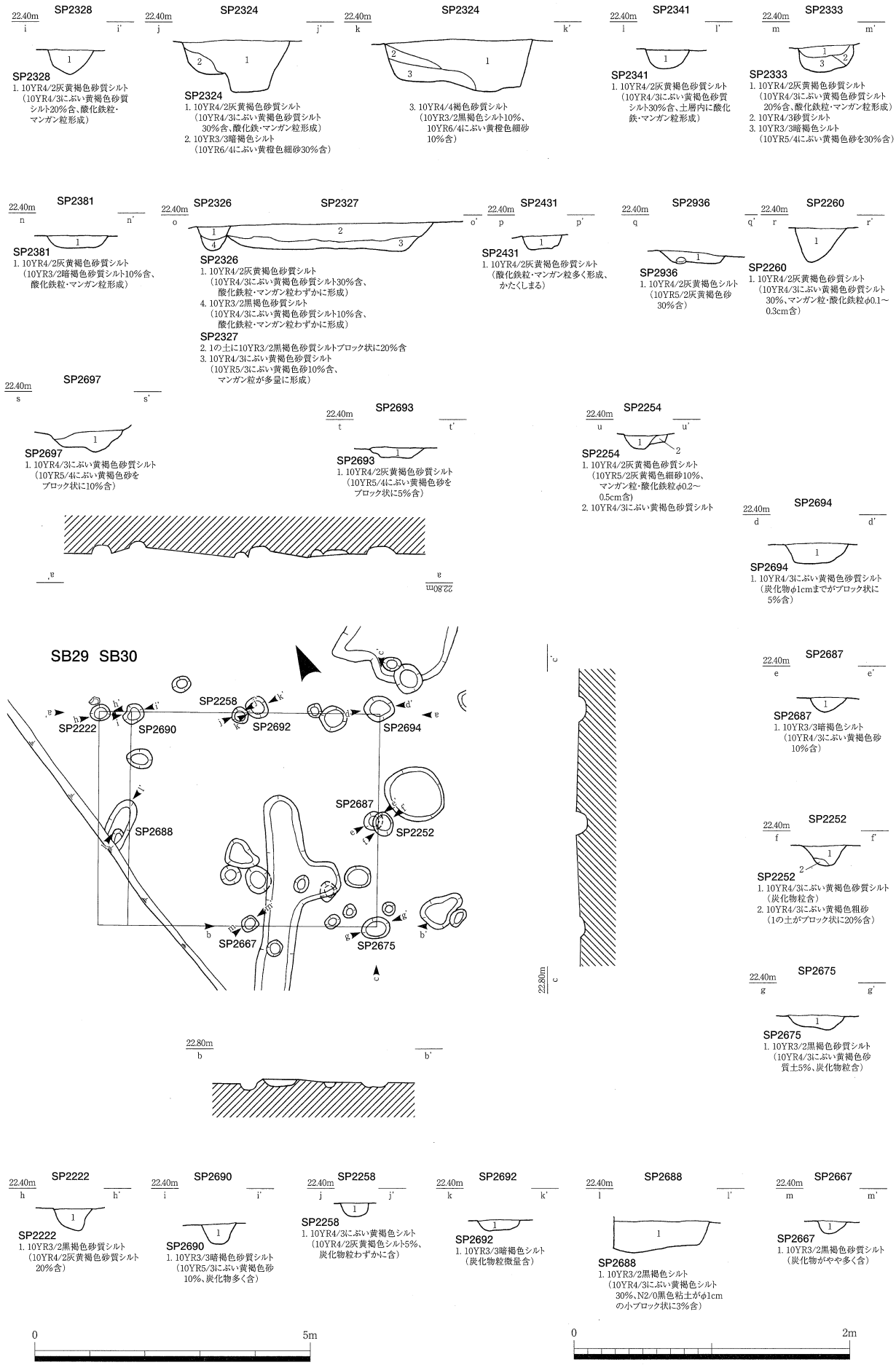
第70図　遺構実測図

SB26　SB27



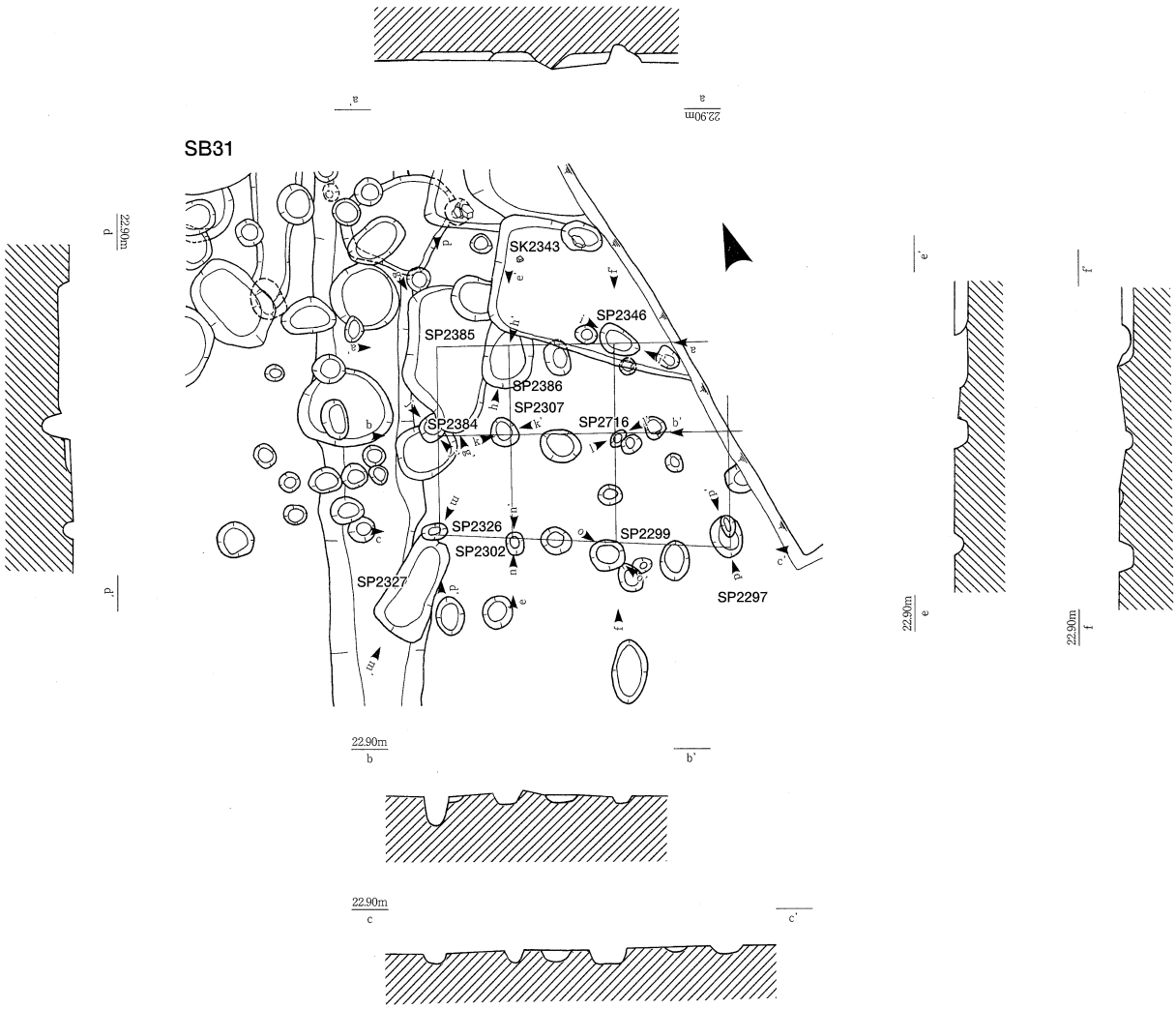
第71図　遺構実測図

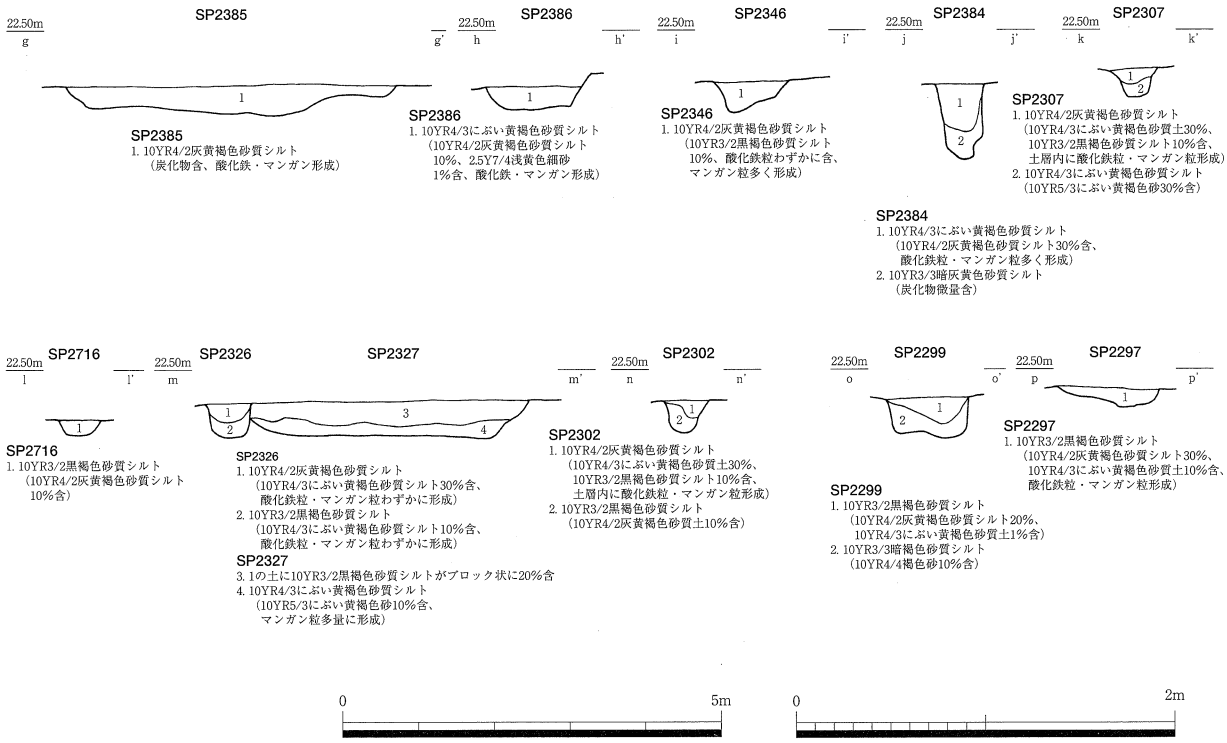
SB28



第72図　遺構実測図

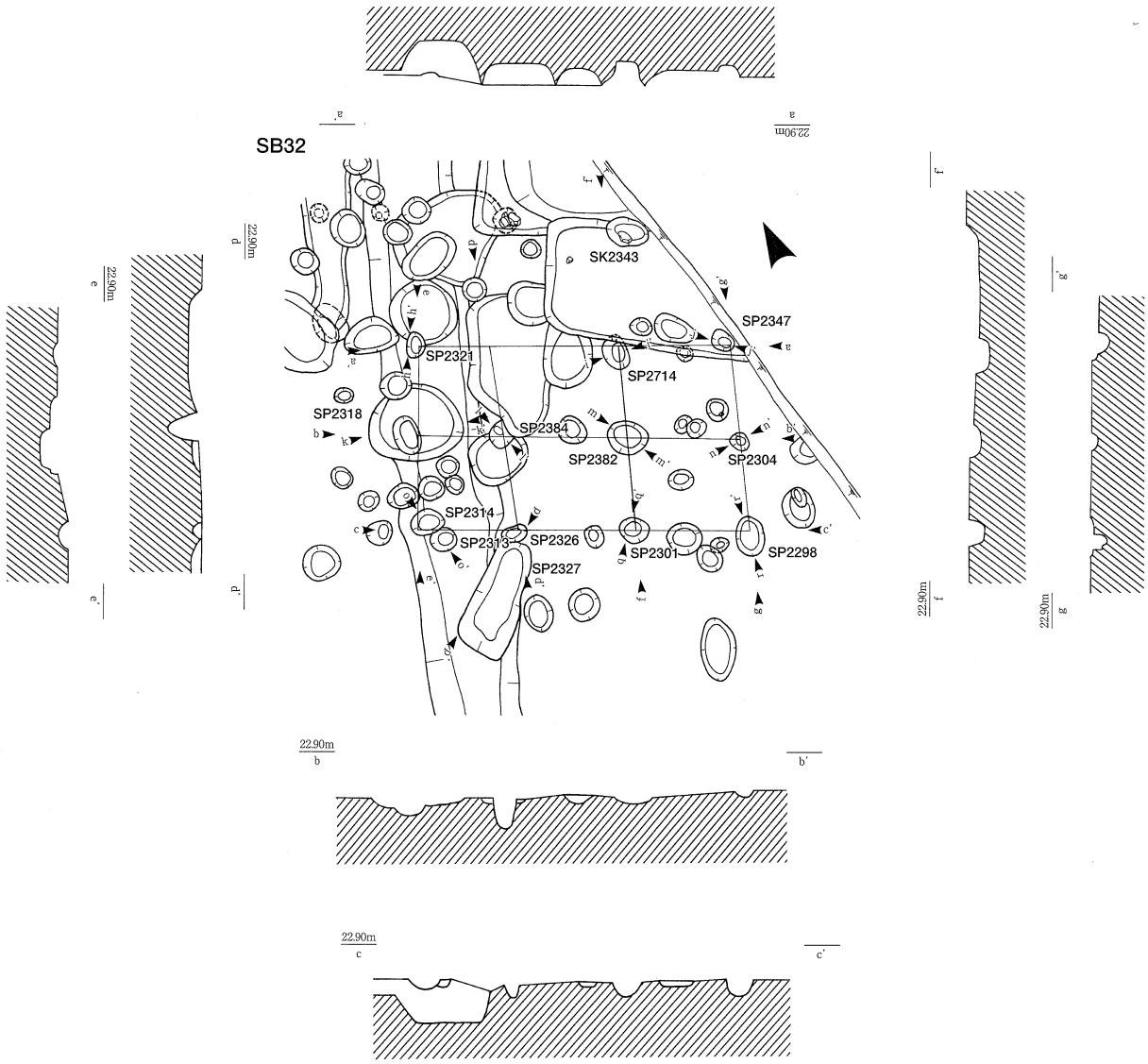
SB28　SB29　SB30

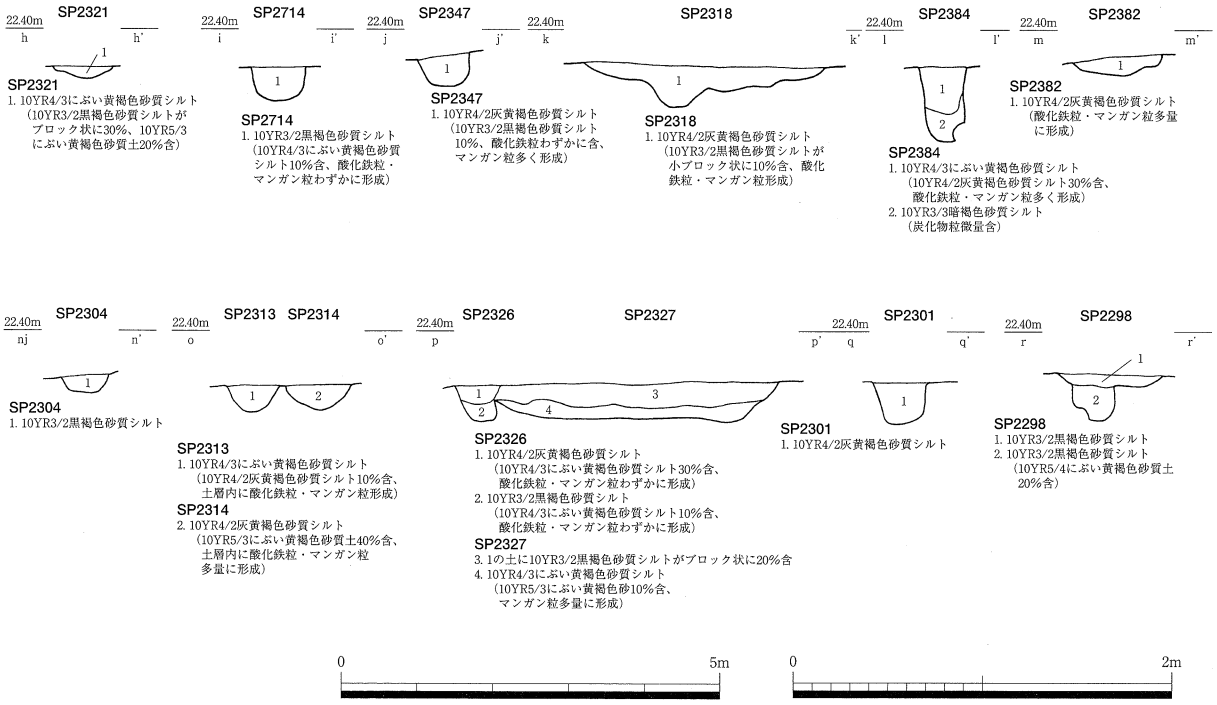




第73図　遺構実測図

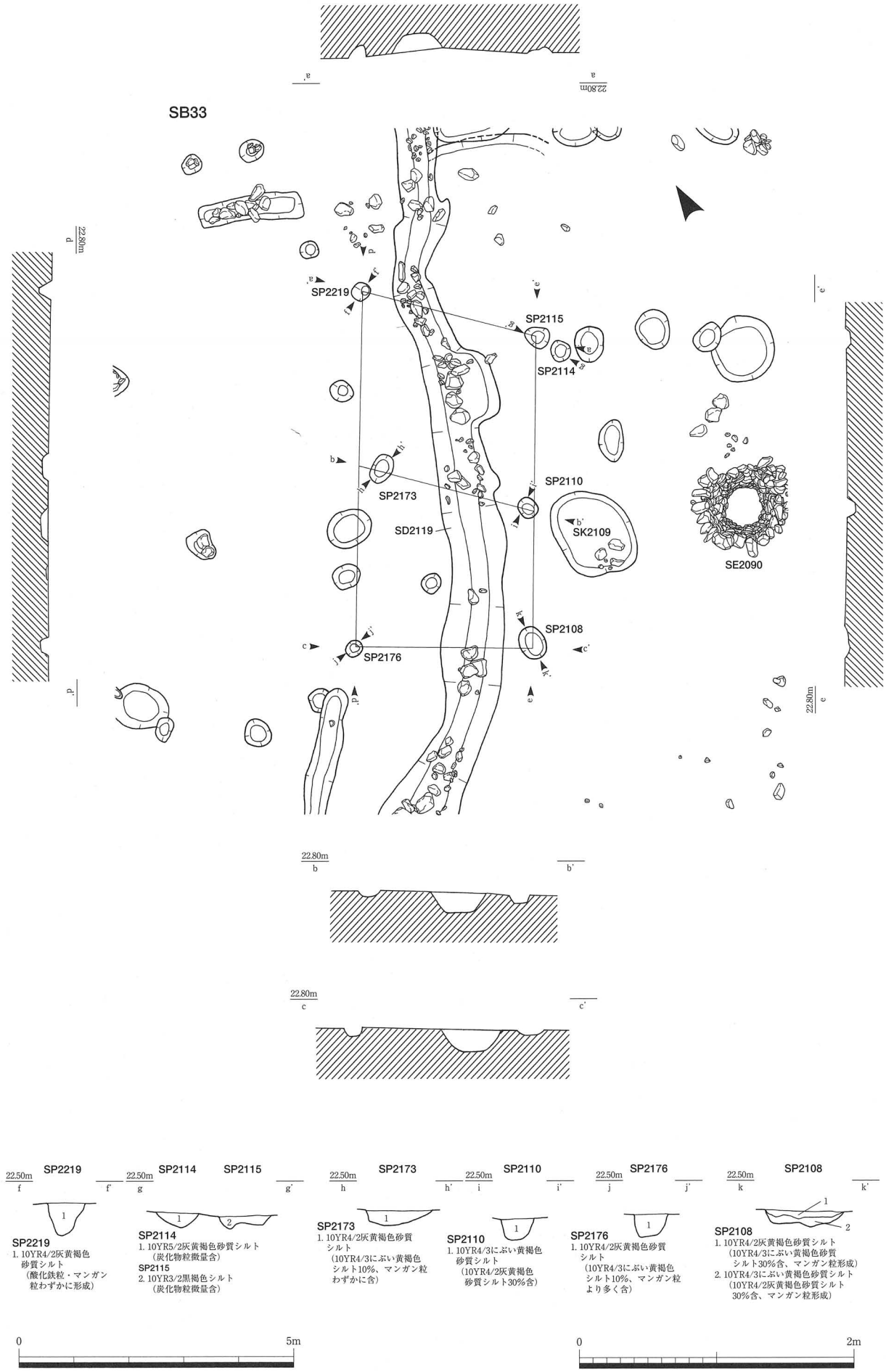
SB31





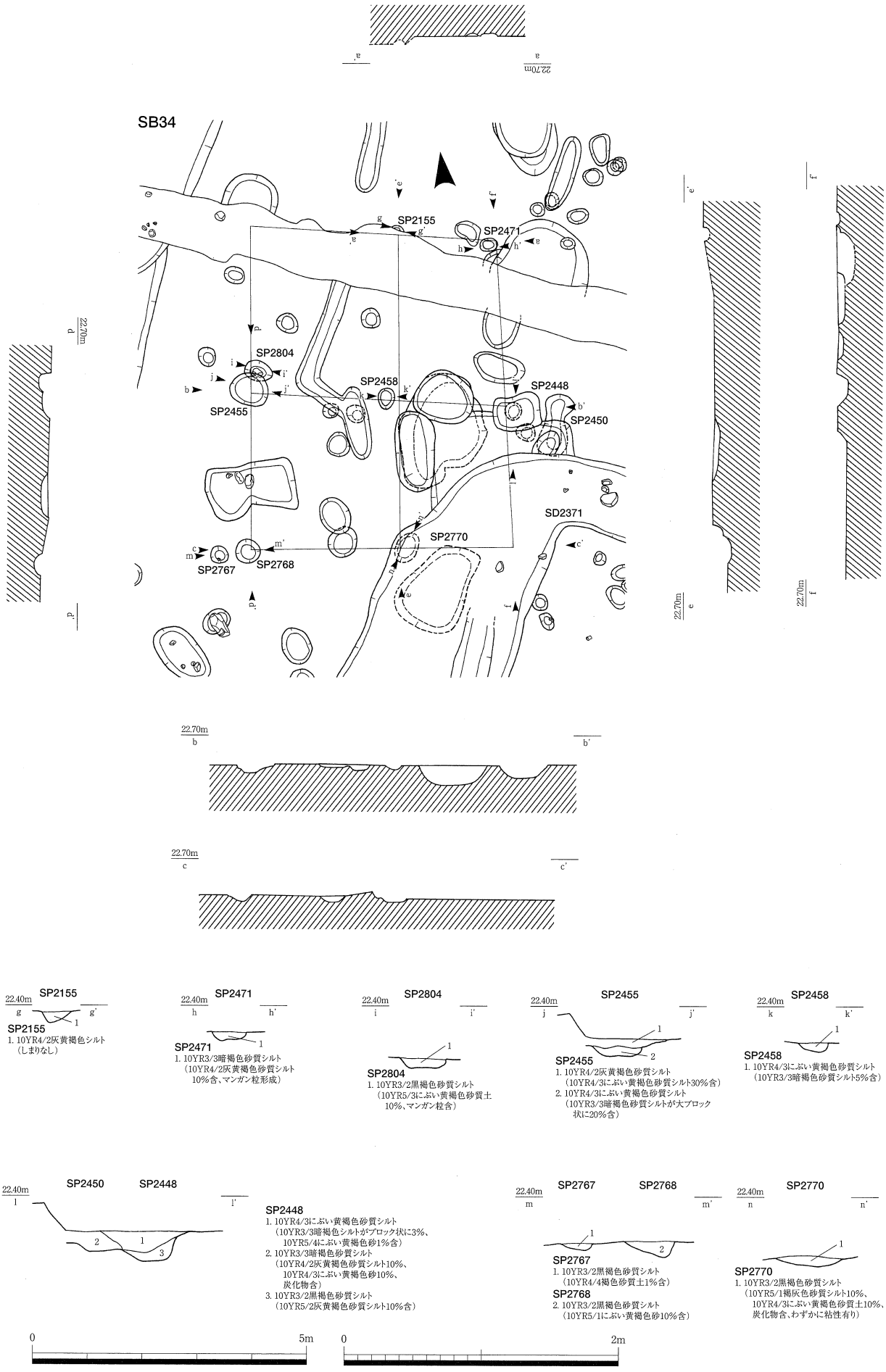
第74図　遺構実測図

SB32



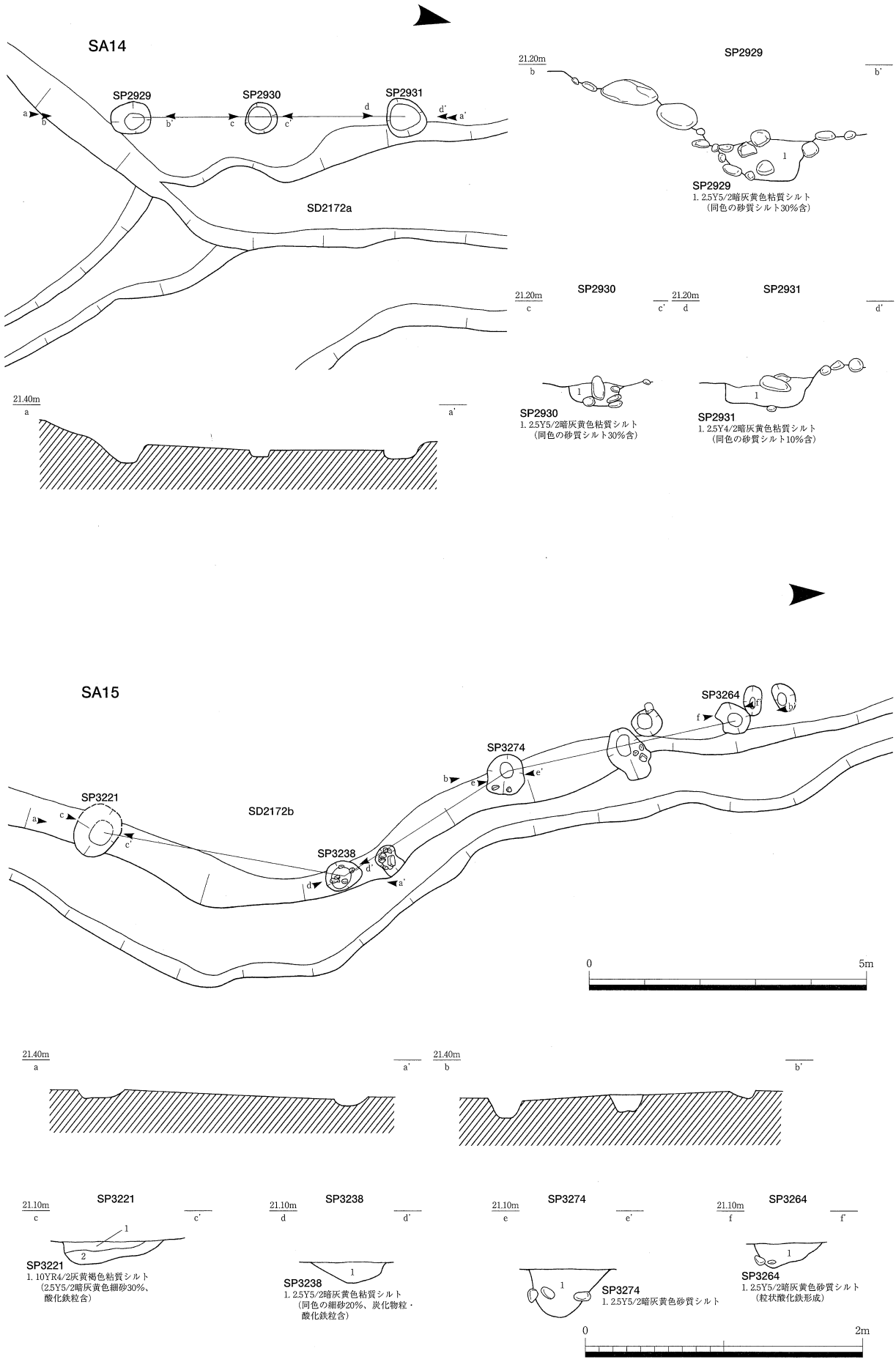
第75図　遺構実測図

SB33



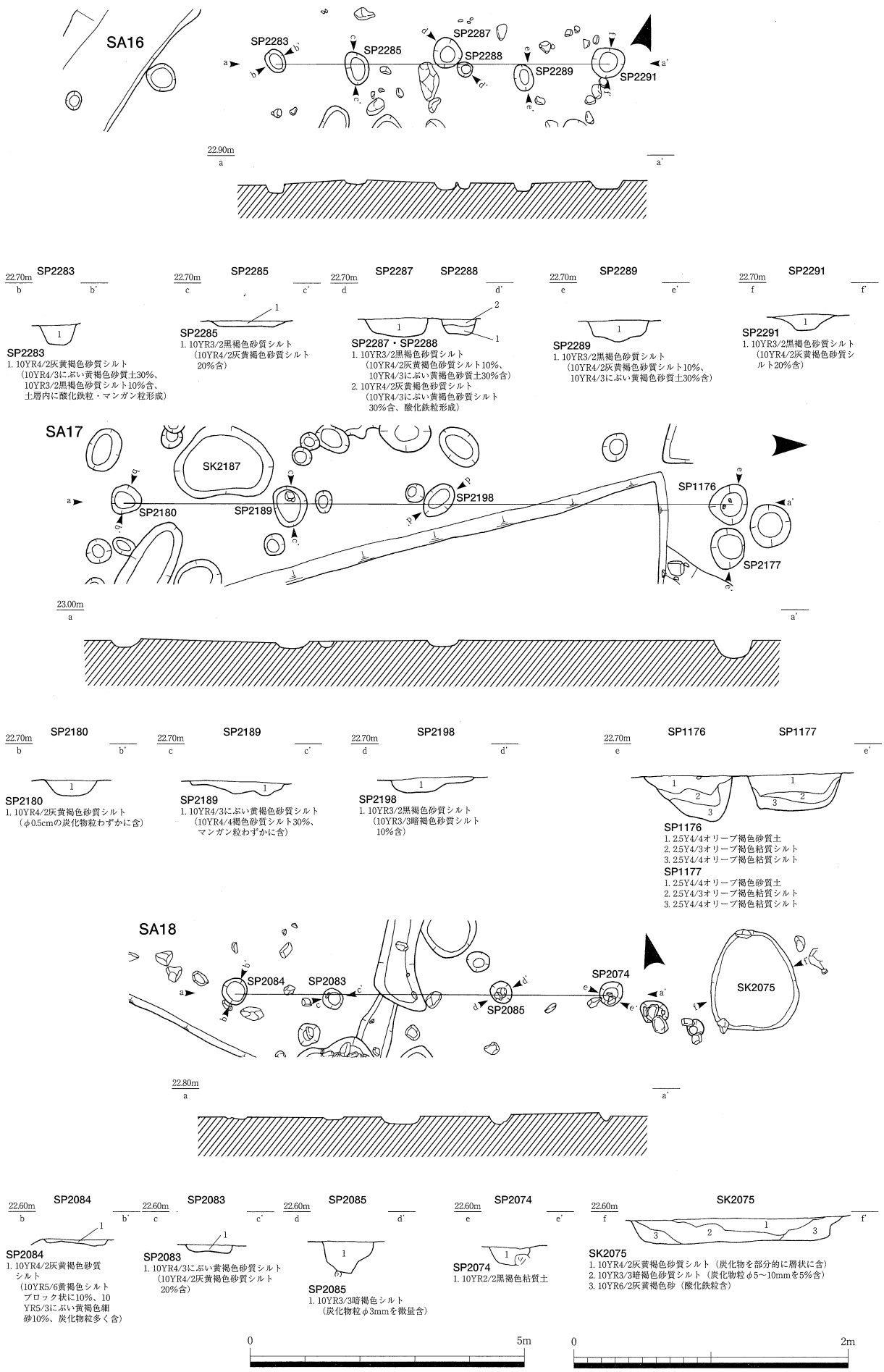
第76図　遺構実測図

SB34



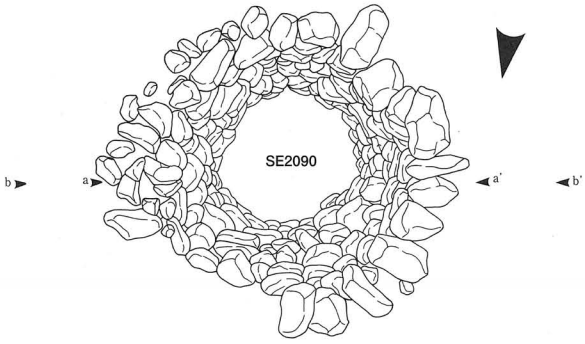
第77図　遺構実測図

SA14　SA15



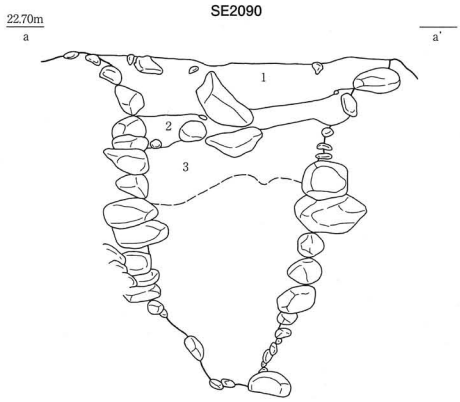
第78図　遺構実測図

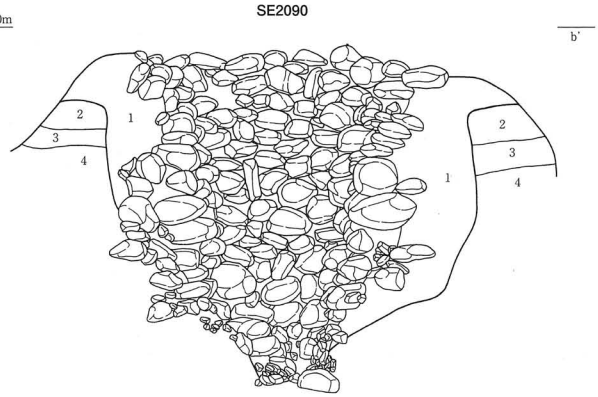
SA16　SA17　SA18

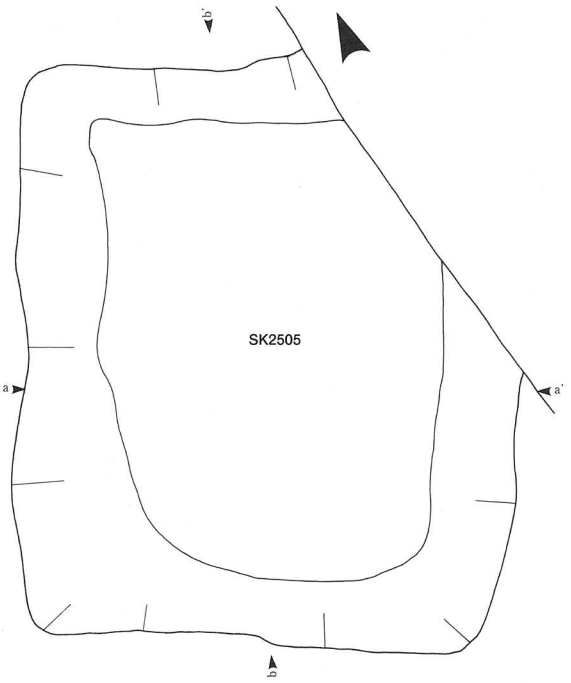


SE2090
1. 10YR4/2灰黄褐色シルト（土層内上方に酸化鉄形成、しまり良い）
2. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色シルト20%含、1よりしまり悪い）
3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR5/2灰黄褐色砂質シルト10%含、2よりしまり悪い）

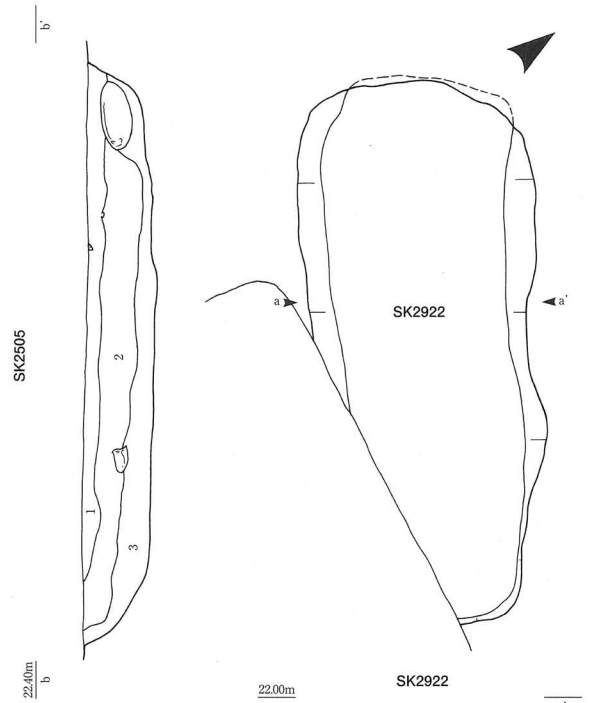
SE2090
断割土層注記
1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（φ5cm程の小石微量、粗砂5%含、堀り方の裏込め）
2. 10YR3/2黒褐色砂質シルト60%（10YR4/2灰黄褐色粘質土40%含）
3. 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土（φ5cmの小石微量、φ20cmの礫微量含）
4. φ15～40cmの礫（20～30cm程の砂が多い）







SK2505
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
（7.5YR3/4暗褐色砂質土小ブロック状に10%含、酸化鉄粒形成、固くしまる）
2. 10YR3/3暗褐色砂質シルト
（10YR1.7/1黒色粘土ブロック状に20%・10YR4/2灰黄褐色砂質シルト10%・10YR4/3にぶい黄褐色砂質土10%含、酸化鉄粒形成、しまり1より弱い）
3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト
（10YR4/2灰黄褐色砂質シルト20%含、酸化鉄粒形成、しまり2より弱い）

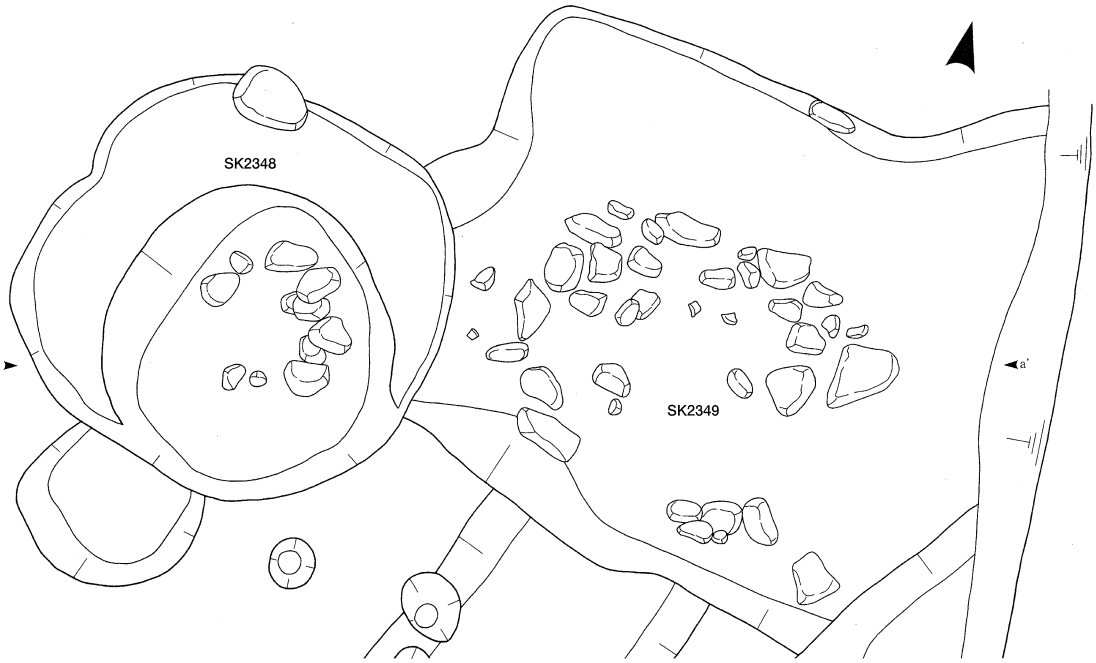


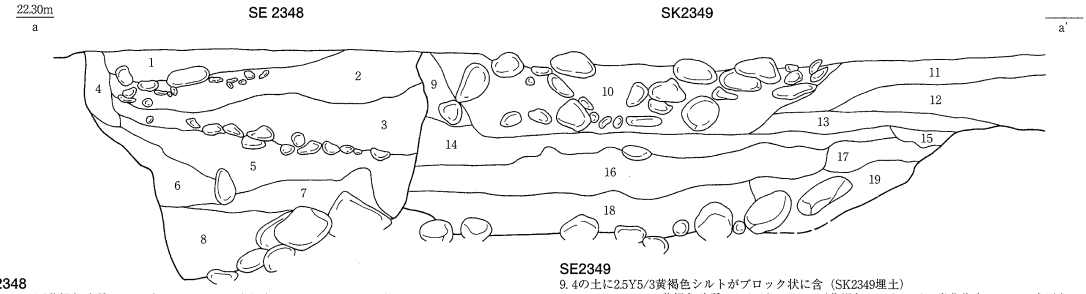
SK2922
1. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
（10YR3/2黒褐色シルトブロック状に10%・7.5YR4/6褐色シルトブロック状に10%含）
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
（10YR3/2黒褐色シルトブロック状に20%・7.5YR4/6褐色シルトブロック状に20%含）
3. 7.5YR4/6褐色シルト
（10YR3/2黒褐色シルト小ブロック状に30%・10YR4/2灰黄褐色砂質シルト小ブロック状に20%含）

0　2m

第79図　遺構実測図

SE2090　SK2505　SK2922





SE2348

1. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（10YR6/4にぶい黄橙色シルトが小ブロック状に10%、10YR3/2黒褐色シルトわずかに粘性有りが小ブロック状に10%含、土層内に酸化鉄粒・マンガン粒形成、固くしまる）
2. 10YR3/3暗褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色砂質シルト10%含、1との境の円礫に接する部分に多く酸化鉄粒・マンガン粒形成、1よりややしまり悪い）
3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色砂質シルト3%、炭化物及び10YR5/6黄褐色粘土のかたまりφ2～3cm含、2よりしまり悪い）
4. 10YR6/4にぶい黄橙色シルトと10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトがブロック状に含（井戸の裏込めの土か）
5. 10YR3/2黒褐色シルト（2.5Y6/4の粘質土ブロックを20%含）
6. 2.5Y5/3黄褐色シルトブロック状に50%、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック状に50%（炭化物わずかに含）
7. 10YR4/1褐灰色シルト（2.5Y5/3にぶい褐色シルトのブロックを5%含）
8. 5Y3/1オリーブ黒色シルト（7.5Y4/1灰色粘質シルトをブロック状に5%含）

※3と5の境目に礫堆積

SE2349

9. 4の土に2.5Y5/3黄褐色シルトがブロック状に含（SK2349埋土）
10. 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（10YR4/2灰黄褐色シルト20%、炭化物含、SK2349埋土）
11. 10とほぼ同じ、炭化物含まない
12. 10YR3/3暗褐色砂質強いシルト（11よりしまりなし）
13. 10YR5/2灰黄褐色シルト（しまりなし）
14. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト
15. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト（2.5Y3/1黒褐色粘質シルトが小ブロック状に20%、14の土が大ブロック状に20%含）
16. 2.5Y5/4黄褐色砂質シルト
17. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト
18. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト（14より粘性強い）
19. 2.5Y5/4黄褐色砂質シルト（16よりわずかに粘性強い）

※11～19　酸化鉄粒を多く含む

0　2m

第80図　遺構実測図

SE2348　SK2349

⑤Ｂ６地区

Ｂ６地区は今回報告する調査地区の中で、最も北東側の一角に所在する。調査地は南北に細長く南側はＢ２地区に接するが、Ｂ２地区は平成９年度、Ｂ６地区は平成10年度と調査年次が異なる。Ｂ６地区の北側は、県道を挟んで熊野神社に対峙している。

Ｂ６地区では大きく古代、中世（上層・下層）、中世末～近世の４時期の遺構が確認された。このうち中世以降の遺構は概ね同一面で重複して検出される。これに対し、中世から古代の遺構面までの間には２～３層の間層がみられ、古代の遺構面は中世の遺構面よりやや深い位置で検出される。この古代の遺構面は北側半分が工事掘削面より低くなることが判明し、工事・削平を受ける南側半分の約600㎡のみが発掘調査されることになった。これはＢ６地区の旧地形が北に向かって緩やかに傾斜し低くなっていくことに起因する。一方中世以降の遺構面は基本的に浅い深度にあり、ほぼ耕作土直下に近いところから中世の遺構が検出されだす。中世の遺構面は一応層位名に換置した中世下層、中世上層の呼称を使っているが、実際の調査では明確に深度の異なる遺構面として両者を分離しているわけではなく、覆土分類、遺構の配置や切り合い関係、調査地全体の遺構変遷を検討した上で、図上において分離している。また最上層とした中世末～近世の遺構面は、耕作土直下で検出された遺構を取りまとめたものである。中世面のように集落遺構を伴うような内容のものではなく、耕作関連の溝や畦、作物の根痕などが該期の遺構に相当する。この中で中世と明確に遺構面を異にするのは、一段高く盛土され畦道として利用された東壁沿いの細長い段上部分だけである。その他の場所では、遺構検出時から既に下層遺構である中世の石組井戸の一部が露出するような状況であった。

なおＢ６地区の基本層序自体は他の調査区とそれほど大きく異にするものではなく、大筋において他地区のそれに準じている。

〈中世下層〉

中世下層として検出された遺構としては、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、柱穴を含む穴などがある。これらの遺構は切り合い関係で先行し、遺構覆土も上層で多い淡灰褐色から黄灰褐色系の砂質土と異なり、褐灰色から黒褐色系の砂質土のものが多くなる。また遺構群の配置においても、後述の中世上層の遺構のように現畦畔地割りの方向に規制されたものではなく、異なる方位となっている。このため検出した掘立柱建物３棟はいずれも現畦畔区割りに対し斜行した棟方向となるが、建物相互に重複がみられ、さらに複数時期に区分可能である。このことを裏付けるように、建物に共伴する井戸にも木枠組と石組のものの二者が認められる。

掘立柱建物

ＳＢ35（第83図）：調査地南側で部分検出された側柱建物で、西側半分が調査地区外となる。現状で梁行１間（4.9m）×桁行３間（9.42m）の規模で、これに東側に向けて１間×１間分の張り出しが付く。面積はこの張り出し部分を含めると54.1㎡となる。建物の棟方向はＮ－18°－Ｅを指す。東西棟建物が多く検出されているＢ６地区のなかでは、珍しく南北棟の建物方位を有する。柱穴形態は円形で、径0.21～0.47m、深さ0.05～0.12mの数値を数える。柱穴内の覆土は灰オリーブから灰色の砂粘質土層が主体となる。柱痕はみられない。遺物はＳＰ4348で珠洲・中世土師器など若干の出土がみられるが、図示できるものはない。他遺構との直接の重複はないが、ＳＥ4132がちょうど建物の張り出し部分に位置しており、両遺構の同時期併存は考え難い。またＳＢ36とも近接しており、やはり併存は難しいものと考えられる。積極的な根拠に欠けるものの、一応Ｂ６地区での最先行期の建物のひとつと考えておく。井戸との組み合わせでは、建物の北東側に３m程離れて位置するＳＥ4120を考えて

いる。

ＳＢ36（第83図）：調査地南端付近で検出された側柱建物で、一部柱穴が試掘トレンチと重複し消失しているが、ほぼ建物の全容は知ることができる。梁行２間（4.02m）×桁行３間（7.83m）の規模を有する。面積は31.5㎡。建物の棟方向はＮ－88°－Ｗを指す。基本的に東西棟の棟方向であるが、後述の中世後期の建物と異なり、棟方向が現畦畔地割りの方向からやや北側に振れている。柱穴形態は円形で、径0.2～0.8m、深さ0.1～0.26mの数値を数える。柱穴覆土は灰オリーブ～灰色砂粘質土層を基調とする。柱痕・出土遺物とも認められない。配置的にみて後述のＳＢ39に先行する建物と考えられ、中世下層とした建物群のなかでは、最も新しい時期の建物と考えている。井戸との組み合わせでは、建物の北側に隣接する石組井戸ＳＥ4132を想定している。

ＳＢ37（第84図）：ＳＢ35・36とは反対に調査地の北側で検出された２棟の側柱建物のひとつ。柱穴の欠落があるものの１間（3.48m）×３間（6.64m）の規模を有す。23.1㎡の面積を有す。建物の棟方向はＮ－42°－Ｗで、周辺地割りに対し斜行する建物方位である。柱穴形態は円形で、径0.26～0.61m、深さ0.03～0.28mの数値を数える。柱穴覆土は灰黄褐色～褐灰色砂粘質土層を基調とする。柱痕・出土遺物は認められない。Ｂ６地区では最先行期の建物のひとつと考えられる。

ＳＢ38（第84図）：ＳＢ37の北東側に位置する側柱建物で、北側半分が調査地区外となる。現状で２間（4.4m）×３間以上（5.7m）が検出される。建物の棟方向はＮ－45°－Ｗで、ほぼＳＢ37と同じ棟方向である。柱穴形態は円形で、径0.2～0.78m、深さ0.06～0.22mの数値を数える。柱穴覆土は暗褐色～褐灰色砂粘質土層を基調とする。柱痕・出土遺物は認められない。ＳＢ37とともに最先行期の建物のひとつと考えている。とくにＳＢ37とはほぼ棟方向を同一にする他、ＳＢ37北側桁行とＳＢ38南側桁行の柱列が概ね一直線に揃っている。このことから両者は雁行配置を有する同時期併存の建物群と考えることができる。

井戸

ＳＥ4120（第87図、図版37）：調査地の中央やや南寄りで検出された井戸。本調査地では唯一木枠組が明確にわかる井戸の例である。掘方の平面形態は隅丸方形で、一辺2.25～2.3mの規模を測る。掘方の横断面は底面が平坦な鍋底状を呈する。底面に一辺0.6～0.7mの方形の井桁の木枠が残存する。四隅に角柱を打ち込み、さらに横桟を渡し、その外側に薄い板を縦方向に重ね合わせて詰め込む。縦板は幅10㎝、厚さ数㎜の薄いもので、最大で高さ40㎝分が残存していた。さらに井戸の内壁の崩落防止のため、掘方の西壁に石積みの補強がなされていた。またこの井戸は最低１回は補修を受けており、井戸底面中央で検出した井桁の西側に、さらに古い井桁の痕跡が一部残存していた。この部分は石積み補強部分のちょうど下面に一部被さる位置にあることから、当初据えたこの井桁が西壁側からの壁面崩落によって使用できなくなったため、新たにやや東側に現在残存する井桁を組み直し、西側の内壁については、石積みで補修し、再度の崩落を防止したものと推定できる。この補強部分の石積みの方法は、木枠組井戸に対し時期的に後出する石組井戸の石積み方に類似している。木枠組井戸から石組井戸への移行期に、古い形式の井戸の補修に部分的に石積みを用いた、いわば折衷形式とでもいう稀少な事例と考えられる。なお遺物は井戸廃絶後の覆土中から若干が出土している。古代の土師器・須恵器・中世の珠洲・土師器皿（1205）などがみられる。これらは井戸祭祀などに伴う遺物などではなく、覆土に含まれた混入と考えるのが妥当であろう。

ＳＥ4132（第88図、図版38）：ＳＢ36の北側、ＳＢ35と重複する位置で検出された石組井戸。掘方の平面形態は大型の楕円形を呈する。長径6.18m、短径4.09mの規模を有す。横断面の形状は底面が

平坦な鍋底状を呈する。石積みは南東側の掘方の肩部に肩持ちさせながら組み上げる。石積みは大型の礫を使い、反時計方向に綺麗に螺旋積みする。内壁面もほぼ垂直に立ち上がっている。上面での内径0.72～0.74m、底面での内径0.49～0.5mを測る。検出面から底面までの最大深は1.28mである。遺物は、掘方の覆土から土師器の小片が出土している程度である。

ＳＥ4288（第88図、図版39）：ＳＢ35の北西側に隣接して位置する石組井戸である。掘方の平面形態は小型の円形で、径1.48～1.6mの規模を測る。掘方の横断面は高さのある台形状を呈する。石組は西壁側に肩持たせするが、掘方が小さいこともあり、下半は掘方の肩をほぼそのまま使って石積みしている。石積みは小礫を使いやや乱積み気味であるが、反時計回りの螺旋状に積み上げている。石積みの内壁は垂直ではなく、下方に向かって傾斜している。上面での内径0.9m前後、底面の内径は0.4m前後で、検出面からの最大深は1.19mを測る。井戸底にはさらに横木を方形に一段組んで、溜め桝部分を作り出している。出土遺物は認められない。

ＳＥ4351（図版39）：ＳＥ4288の南側に近接して位置する。掘方は一辺３m前後の隅丸方形の平面プランを有するが、西側は一部調査地区外となる。横断面の形状は逆台形である。本例の場合石組等はみられず、掘方の底面に木枠の井桁を据えていたと考えられる方形の窪みが、僅かに残存していた。廃絶時に綺麗に木枠が抜取られ、その後掘方の埋め戻しが施されたものと考えられる。遺物は掘方の覆土中からわずかな土師器の小片が出土したに過ぎない。

土坑

ＳＫ4049（第93図）：ＳＢ37の南西側に隣接する土坑である。平面形態は楕円形で、長径0.8m、短径0.53m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4156（第95図）：ＳＥ4132の南西側に隣接し、これに切り込まれている。平面形態は楕円形で、長径1.78m、深さ0.2mの規模を有す。覆土は黄灰色砂質土を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4158（第89図、図版37・40）：調査地の中央やや北側に位置する。西側約３分の１程を試掘トレンチによって破壊されている。平面形態は円形で、当初石組井戸と考えたが、掘削の結果井戸ではなく礫充填の土坑であることが判明した。径1.65m、深さ0.27mの規模を有する。覆土は黄灰褐色砂粘質土層を基調とする。土坑内には礫が密に充填されるが、ＳＫ4108・4149などの大型土坑に比べると小礫が多くなっている。また土坑の北寄りにおいて、礫を円形に配し擂鉢状に窪めた部分がみられる。これらの礫以外の出土遺物は認められない。

ＳＫ4200（第95図）：調査地の北西角付近に位置する。平面形態は不整円形で、肩の一部をＳＢ38の柱穴が切り込んでいる。径1.86～1.98m、深さ0.35mの規模を有す。土坑内の覆土は、上層灰黄褐色砂質土層、下層は褐灰色砂粘質土層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4211（第95図）：ＳＫ4200の東側に隣接して位置する。平面形態は不整楕円形である。長径1.69m、短径1.45m、深さ0.06mの規模を有す。覆土は暗黄灰色砂質土層である。出土遺物はなし。

ＳＫ4226（第95図）：調査地北壁中央付近に位置する。平面形態は不整長楕円形を呈する。長径2.05m、短径0.62m、深さ0.38mの規模。覆土は黄灰褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4228（第95図）：ＳＢ37の西側に隣接して位置する。平面形態は円形で、径1.06～1.18m、深さ0.17mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には珠洲の小片がみられる。

ＳＫ4234（第95図）：ＳＢ37の北側に隣接して位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。幅0.98m、長さ1.6m、深さ0.06mの規模を有す。覆土は暗黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4235（第95図）：ＳＫ4234の東側に隣接して位置する。楕円形の平面形態で、長径1.27m、短

径0.74m、深さ0.12m。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。中世の土師器皿の小片が出土している。

ＳＫ4249（第95図）：ＳＢ37の北東側に隣接して位置する。平面形態は楕円形を呈する。長径1.27m、短径0.68m、深さ0.09mの規模を有す。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層構成。出土遺物なし。

ＳＫ4254（第95図）：調査地の西壁やや北寄りに位置する。西半部が調査地区外となる。平面形態は円形ないしは楕円形で、径1.67m、深さ0.33mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4256（第95図）：ＳＫ4049の南西側に隣接して位置する。平面形態は楕円形で、径0.72～1.01m、深さ0.13mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層構成。中世の土師器皿の小片が出土。

ＳＫ4261（第95図）：ＳＫ4158の北側に隣接して位置する。平面形態は隅丸長方形を呈す。幅1.31m、長さ2.62m、深さ0.04mの規模を有す。覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物なし。

ＳＫ4262（第89図、図版40）：ＳＢ37と重複して位置する大型の礫充填土坑で、ＳＫ4263を切り込んでいる。平面形態は楕円形で、長径2.74m、短径2.09m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は黄灰褐色砂粘質土層を基調とする。土坑内は大小の礫が密集して充填されている。この土坑については円形擂鉢状の窪みなどはみられない。礫以外の出土遺物は認められない。

ＳＫ4263（第95図）：ＳＫ4262に隣接し、これに切り込まれる。平面形態は楕円形と考えられる。現状で長径1.28m、短径0.81mを測る。覆土は灰黄色砂粘質土層の単層構成。出土遺物なし。

ＳＫ4264（第92図、図版40）：ＳＫ4262の南東側に隣接して位置する。平面形態は楕円形を呈する。長径2.26m、短径1.35m、深さ0.34mの規模を有す。覆土は概ね黄灰色砂粘質土層と褐灰色砂粘質土層で構成される。土坑の底面で、一部に礫の散乱がみられる。他の出土遺物は認められない。

ＳＫ4265（第95図）：調査地東壁の北端付近に群在する土坑群の一つで、ＳＫ4271を切り込む。平面形態は隅丸長方形を呈する。幅1.06m、長さ1.43m、深さ0.04mの規模を有す。覆土は褐灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4266（第95図）：ＳＫ4265の北側に隣接して位置する。平面形態は隅丸長方形を呈す。幅0.7m、長さ1.1m、深さ0.04mの規模を有す。覆土は褐灰色砂質土層の単層構成。出土遺物なし。

ＳＫ4269（第95図）：ＳＫ4265の北西側に隣接して位置する。平面形態は楕円形を呈する。長径0.86m、短径0.61m、深さ0.07mの規模を有す。覆土は褐灰色砂質土層である。出土遺物なし。

ＳＫ4270（第96図）：ＳＫ4269の北側に隣接して位置する。平面形態は隅丸長方形を呈す。幅1.12m、長さ2.01m、深さ0.1mの規模。覆土は灰色砂粘質土層を基調とする。中世の土師器皿の小片が出土している。

ＳＫ4271（第96図）：ＳＫ4265の南側に隣接しこれに切り込まれ、同時にＳＫ4272を切り込んでいる。平面形態は楕円形で、現状で長径1.55m、短径0.73m、深さ0.03mの規模を有す。覆土は褐灰色砂質土層の単層構成である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4272（第96図）：ＳＫ4271の東側に位置し、これに切り込まれている。平面形態は楕円形で、現状で長径0.66m、短径0.54m、深さ0.04mの規模を有す。覆土は褐灰色砂質土層の単層構成である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4280（第96図、図版40）：調査地のほぼ中央に位置し、一部をＳＫ4108、試掘トレンチに切り込まれる。平面形態は不整楕円形を呈する。幅1.93m、長さ4.52m、深さ0.22mの規模を有す。覆土は上層が灰黄褐色砂粘質土層、下層が褐灰色砂粘質土層を基調とする。他の土坑に比べ格段に出土遺

物が多く、土師器皿（1217～1219）、珠洲擂鉢（1220）、珠洲甕破片（1221）などの遺物が出土している。

ＳＫ4281（第96図）：ＳＫ4280の南側に隣接して位置し、一部を試掘トレンチに切り込まれる。平面形態は楕円形で、現状で長径1.23m、短径1.01m、深さ0.1mの規模を有す。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層灰黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4286（第96図）：ＳＥ4351の南側に重複し、これを切り込む。平面形態は楕円形で、長径1.94m、短径1.2m、深さ0.11mの規模。覆土は灰色砂粘質土層の単層構成である。珠洲の小片が出土した。

ＳＫ4289（第96図、図版40）：ＳＥ4351の東側に位置する。平面形態は楕円形を呈する。長径2.27m、短径1.09m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層は灰黄褐色砂粘質土層となる。土坑内は、北側の肩部から礫を底面に向け流し込んだような状態で偏って出土している。礫以外の出土遺物は認められない。

ＳＫ4301（第96図）：調査地の南側、ＳＢ36と重複する位置にある。平面形態は円形で、径0.9m、深さ0.1mの規模を有す。覆土は灰色砂質土層単層構成。出土遺物は認められない。

ＳＫ4302（第96図）：ＳＢ36の南側桁行柱穴を含む土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.23m、短径0.71m、深さ0.18mの規模を有す。覆土は灰色砂粘質土層を基調とする。柱穴と土坑の切り合い関係は明瞭でない。出土遺物は認められない。

ＳＫ4303（第96図）：ＳＢ36の東側に位置する。平面形態は楕円形を呈する。長径1.08m、短径0.83m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は上層黄灰色砂粘質土層、下層は灰オリーブ砂粘質土層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4304（第96図）：ＳＫ4303の南側に隣接して位置する。平面形態は円形を呈する。径0.79～0.87m、深さ0.08mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4332（第96図）：調査地西壁南側に位置する。西半部が調査地外となる。平面形態は隅丸方形で、一辺1.96m前後、深さ0.12mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層構成。出土遺物なし。

ＳＫ4333（第96図）：調査地の中央付近に位置する大型の礫充填土坑である。南側肩の一部をＳＫ4361に切り込まれている。平面形態は隅丸方形で、一辺3.34～3.7m、深さ0.09mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層構成である。土坑内の全面に密に礫が充填されている。但し上層ＳＫ4108・4149などに比べると礫がやや小さめで、円形擂鉢状の窪みも認められない。礫以外での出土遺物には古代の土師器・須恵器の小片の混入および中世の土師器皿の小破片がみられる程度である。

ＳＫ4339（第96図）：ＳＥ4351の東側に隣接して位置する。平面形態は不整楕円形で、長径1.43m、短径1.15m、深さ0.08mの規模を有す。覆土は黒褐色砂層の単層構成。珠洲・八尾の小破片が出土する。

ＳＫ4340（第96図）：ＳＢ36の北西角の柱穴である。平面形態は円形を呈する。径0.84m～0.92m、深さ0.13mの規模を有す。覆土は上層灰色砂粘質土層、下層オリーブ黒色砂粘質土層。出土遺物なし。

ＳＫ4345（第96図）：ＳＫ4156の南西側に隣接して位置する。西半部が調査地区外となる。平面形態は円形で、径0.86m、深さ0.16mの規模を有す。覆土は灰色砂質礫混土層。出土遺物なし。

ＳＫ4353（第92図）：ＳＫ4452と重複しこれを切り込む土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.04m、短径0.55m、深さ0.2mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層質を基調とする。中世の土師器小皿（1212）が出土遺物している。

ＳＫ4361（第90図）ＳＫ4333の南側に隣接し、これを切り込んでいる。また東側の肩がＳＫ4092に

切り込まれている。ＳＫ4333と同様の礫充填土坑であるが、やや小型で不整形な平面形態を有す。幅2.15m、長さ2.32m、深さ0.1mの規模を有す。覆土は灰黄色砂粘質土層。やはり土坑の全面に礫が充填されている。但し円形擂鉢状の窪みは認められない。礫以外の出土遺物も認められない。

ＳＫ4362（第92図）：調査地西壁の北側に位置し、ＳＤ4215・4217と重複しこれに切り込まれている。平面形態は隅丸長方形で、幅1.12m、長さ1.52m、深さ0.18mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。土坑内からは礫および板碑２点（4043・4044）が出土している。

ＳＫ4452（第92・96図、図版40）：ＳＥ4120の東側に隣接して位置する。平面形態は長楕円形で、長径3.05m、短径1.72m、深さ0.24mの規模を有す。覆土は暗褐色シルト質土層を基調とする。出土遺物には珠洲擂鉢（1197）がある。

柱穴

ＳＰ4219（第95図）：ＳＢ38の東角の柱穴である。肩の一部が北壁にかかる。平面形態は楕円形で、長径0.66m、短径0.75m、深さ0.31mの規模を有す。覆土は上層灰黄褐色砂質土層、下層褐灰色砂粘質土層となる。柱痕・出土遺物は認められない。

ＳＰ4257（第82図）：ＳＫ4333の北側に隣接して位置する。平面形態は円形で、径0.35m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層である。出土遺物には中国陶磁の青磁碗底部破片がある。

ＳＰ4285（第96図）：ＳＥ4288の西側に隣接して位置する。長楕円形の平面で、長径1.1m、短径0.35m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は灰色砂質土層・灰オリーブ砂質土層の構成である。出土遺物なし。

ＳＰ4354（第82図）：ＳＢ36の北側に隣接して位置する小柱穴。平面形態は円形で、径0.27m、深さ0.7mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層。出土遺物には中世の土師器皿（1210、1211）がある。

溝

ＳＤ4215（第97図）：調査地の西壁北端付近に位置する小溝で、南北方向に短くのび、両端が浅くなり消失している。ＳＤ4217・ＳＫ4362と重複しこれを切り込んでいる。幅0.34m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は暗灰黄色砂粘質土層である。中世の土師器皿の小片などが出土している。

ＳＤ4217（第97図）：ＳＤ4215と重複して位置しこれに切り込まれる。変形した「L」字型の平面形態を有す。最大幅1.23m、深さ0.17mの規模を有す。覆土は上層灰黄褐色粘質土層、下層は褐灰色砂粘質土層である。出土遺物には中世の土師器皿、瀬戸美濃などの小破片がある。

〈中世上層〉

中世上層とした遺構には、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、柱穴などがある。遺構の種類自体は中世下層のものと基本的に変わりがない。ただこれらの遺構は現畦畔地割りに沿った方向のものが多くなり、建物群には周辺にさらに区画溝による宅地の区割りがみられるようになる。井戸についても石組井戸のみの構成となる。遺構覆土は黄灰褐色から灰黄色の砂粘質土層のものが多くなる。このうち区画溝にはいくつか切り合いがみられ、宅地区画の追加変更がみられるものの、抽出した建物群については位置的な重複はなく、棟方向も揃っている。従ってさらに小期に分離し得たとしても、せいぜい二時期程度の変遷が想定できるに過ぎない。なお上層面で多数検出される礫充填の大型土坑についても、建物群や溝の区画の方向に一致する軸線となっている。この点はやはり同じ礫充填の土坑でも軸

線が斜行する下層検出のものと異なる様相を示す。

掘立柱建物

ＳＢ39（第84図）：中世上層とした掘立柱建物のうち南側に位置する２棟の側柱建物のうちの１棟。桁行３間（６ｍ）×梁行３間（3.4ｍ）の規模を有す。建物の面積は20.4㎡を数える。建物の棟方向はＮ－81°－Ｗで、東西棟の棟方向をとる。柱穴形態は円形で、径0.23～0.78ｍ、深さ0.05～0.27ｍの規模を数える。柱穴覆土は灰オリーブ～灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物はみられないが、梁行東側柱列の柱穴はいずれも小礫が充填されている。また南西角の大型の柱穴内には、礫を柱の根石として柱穴底面に据えている。このＳＢ39は下層建物ＳＢ36の建て替えと考えられる。これに伴う遺構としては、建物の南西側に隣接するＢ２地区の石組井戸ＳＥ731を考えておく。

ＳＢ40（第85図）：ＳＢ39の北側に隣接して位置する側柱建物。桁行３間（5.7ｍ）×梁行１間（3.38ｍ）の規模を有す。建物の面積は19.3㎡を数える。建物の棟方向はＮ－77°－Ｅで、東西棟の棟方向をとる。柱穴形態は円形で、径0.3～0.74ｍ、深さ0.1～0.18ｍの規模を有す。柱穴覆土は灰オリーブ砂粘質土層を基調とする。柱痕、出土遺物は認められない。ＳＢ40は、隣接するＳＢ39と建物規模、棟方向がほぼ同一である他、建物相互も近接した並列配置となっており、２棟一単位の建物群と捉えることができる。この建物に伴う遺構には、建物の北西側に隣接する石組井戸ＳＥ4113を考えておく。

ＳＢ41（第85図）：調査地の北側に連接する３棟の側柱建物のうちの、南側の１棟をＳＢ41とする。ただ本建物については柱穴配置があまり明確ではなく、他の建物の遺構群配置を参考に、これに隣接する井戸や土坑との位置関係を加味してこの建物を設定した。一応桁行１間（7.61ｍ）×梁行１間（5.37ｍ）の規模を有す。面積は13㎡を数える。建物の方位はＮ－83°－Ｗで、周辺地割りの方向に一致した東西棟建物である。柱穴は全体に不明瞭であるが、主に建物の角に大型円形のものがみられ、径0.48～0.82ｍ、深さ0.08～0.12ｍの規模を数える。柱穴覆土は灰黄褐色～褐灰色砂粘質土層を基調とする。柱痕、出土遺物は認められない。この建物に伴う遺構としては、区画溝ＳＤ4103・4106、石組井戸ＳＥ4097、礫充填土坑ＳＫ4108などがあげられる。但し区画溝ＳＤ4080や礫充填土坑ＳＫ4149などとは配置上の重複があり、同時期共存は困難である。確たる根拠はないものの、当初後述のＳＢ42・43が成立して以後、南側に宅地を拡張した結果、新たに付設された建物のように思われる。

ＳＢ42（第86図）：３棟並列の建物の中央に位置する１棟がＳＢ42である。桁行２間（5.56ｍ）×梁行１間（3.31ｍ）の規模を有す。面積は18.4㎡を数える。建物の主軸方位はＮ－78°－Ｗを取る東西棟の建物である。柱穴形態は円形で、径0.28～0.8ｍ、深さ0.1～0.16ｍを測る。柱穴覆土は褐灰色～黄灰褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕は認められないが、ＳＰ4039から中世土師器皿（1240）が出土している。但し小破片であり、混入の可能性が高い。この建物に伴う遺構としては、一応石組井戸ＳＥ4027、礫土坑ＳＫ4048、ＳＸ4059などを想定しておく。なお、区画溝との明確な重複や切り合いは認められない。

ＳＢ43（第86図）：３棟の建物のうち最も北側に位置する建物がＳＢ43である。桁行３間（8.87ｍ）×梁行１間（4.7ｍ）の規模を有する。面積は41.7㎡を数える。建物の主軸方位はＮ－78°－Ｗと、ＳＢ42と同じ東西棟建物である。柱穴形態は円形で、径0.25～0.72ｍ、深さ0.04～0.2ｍを測る。柱穴覆土は褐灰色～黄灰褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕、出土遺物は認められない。梁行西柱列がＳＢ42のそれと一直線に揃っており、既述のように両者は一対の建物群と捉えられる。この建物についてもＳＢ42と同様に、建物周囲の区画溝との重複は認められない。

井戸

ＳＥ4027（第87図、図版38）：ＳＢ42の東側、ＳＢ43の南側に隣接する石組井戸である。掘方の平面形態は円形で、径1.5～1.8m、横断面は擂鉢状を呈する。この掘方のほぼ中央に石積みを施こす。石積みは反時計回りで螺旋積みされる。内壁はほぼ垂直に立ち上がり、上面での内径0.7～0.8m、底面の内径0.55～0.6m、検出面からの最大深0.93mを数える。出土遺物は認められない。

ＳＥ4097（第87図、図版37・38）：ＳＢ41の南側に隣接する石組井戸。掘方の平面形態は大きな楕円形を呈す。長径2.6m、短径2.03mの規模。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。石組は掘方の東肩部を利用し、肩持ちさせながら石を積んでいる。輪積みに近い緩やかな螺旋積みである。内壁の横断面は台形を呈する。上面での内径0.7～0.75m、底面の内径0.42～0.5m、検出面からの最大深1.08mを数える。出土遺物は認められない。

ＳＥ4113（第87図、図版38）：ＳＥ4097とＳＢ40とのちょうど中間付近に位置する石組井戸。掘方の平面形態は円形で、径2.14～2.5mの規模を数える。横断面の形状は底面が平坦な鍋底状である。石積みは肩持ちせず掘方の中央になされている。反時計周りの螺旋積みと考えられる。内壁の横断面は垂直ではなく、かなり傾斜のある擂鉢状となっている。上面での内径0.82～0.96m、底面での内径0.2～0.4m、検出面からの最大深は1.32mを数える。出土遺物は認められない。

土坑

ＳＫ4014（第93図）：調査地の北端付近に位置し、ＳＤ4013と重複しこれを切り込んでいる。平面形態は隅丸長方形で、幅0.81m、長さ1.23m、深さ0.08mの規模を有す。覆土には黄褐色砂質土層、灰白色荒砂層がみられる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4015（第93図）：ＳＫ4014の北側に隣接する。平面形態は円形で、径1.3～1.41m、深さ0.22mの規模を有す。覆土は上層黄褐色砂粘質土層、下層は黄灰色砂粘質土層である。出土遺物なし。

ＳＫ4016（第93図）：ＳＫ4015の南側に隣接する。平面形態は円形で、径1.15～1.25m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層黄灰色砂層となる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4017（第93図）：ＳＫ4014の北西側に隣接する。平面形態は不整楕円形で、長径1.34m、短径1.04m、深さ0.23mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4019（第93図）：調査地の西壁北側にあり、肩の一部をＳＤ4020に切り込まれている。平面形態は不整円形で、径1.66～1.88m、深さ0.29mの規模を有す。覆土は上層灰褐色砂粘質土層、下層は黄灰色砂層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4022（第93図）：ＳＢ42の西側に隣接する。ＳＤ4013を切り込み、ＳＫ4023に切られている。平面形態は不整形で、幅0.85m、長さ2.60m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層にぶい黄橙色砂粘質土層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4023（第93図）：ＳＫ4022を切り込み、ＳＢ42の柱穴に切り込まれている。平面形態は不整楕円形で、長径1.45m、短径0.76m、深さ0.1mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4025（第93図）：ＳＫ4019の南東側に隣接する。平面形態は円形で、径0.81～0.94m、深さ0.16mの規模を有する。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層灰白色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4028（第93図）：ＳＢ42と重複する位置にあり、ＳＤ4020を一部切り込んでいる。平面形態は円形で、径1.32～1.35m、深さ0.09mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4030（第93図）：ちょうどＳＫ4028とＳＫ4031との中間に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.61m、短径1.03m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4031（第91・93図、図版39）：ＳＫ4030の北側に隣接する。大型の不整楕円形の土坑で、長径5.51m、短径2.5m、深さ0.24mの規模を有する。覆土は上層黄灰色砂粘質土層、下層は暗黄灰色砂粘質土層となる。土坑の底面、とくに南側において小礫が散乱した状態で検出された。出土遺物としては、土師器小皿（1203）がある。

ＳＫ4039（第93図）：ＳＫ4028の北側に隣接し、ＳＫ4040を切り込む。平面形態は円形で、径1.1～1.4m、深さ0.17m。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。土師器小皿（1204）が出土する。

ＳＫ4040（第93図）：ＳＫ4039・4041に近接しこれに切り込まれる土坑。平面形態は不整形である。最大長1.15m、深さ0.07mの規模。覆土は上層灰褐色砂粘質土層、下層はにぶい黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4041（第93図）：ＳＫ4040の東側に近接し、これを切り込む。平面形態は円形で、径0.58～0.66m、深さ0.29mの規模を有する。覆土は黄灰色砂粘質土層、褐灰色砂粘質土層である。出土遺物なし。

ＳＫ4048（第92図、図版39）：調査地西壁中央付近に位置する大型の円形土坑である。径2.48～2.65m、深さ0.39mの規模を有する。土坑内の覆土は上層灰黄褐色砂粘質土層、下層は褐灰色砂粘質土層を基調とする。覆土を掘削除去すると、土坑の底面一面に礫が散乱した状態で検出された。出土遺物としてはこの他に土師器皿と珠洲の小片がある程度である。

ＳＫ4073（第92図、図版39）：ＳＫ4031の東側に近接し、ＳＢ43と重複する位置にある。平面形態は円形を呈する大型土坑である。径２～2.1m、深さ0.28mの規模を有する。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。土坑の底面上には若干の礫の散乱がみられるが、顕著ではない。出土遺物としては土師器皿（1214）・珠洲擂鉢（1215）などがある。

ＳＫ4083（第93図）：ＳＢ41の西側に近接して並ぶ３基の土坑（ＳＫ4083～4085）のひとつ。平面形態は不整形で、幅0.67m、長さ1.11m、深さ0.09mの規模を有する。覆土は上層褐灰色砂粘質土層、下層は黒褐色砂粘質土層でこれに炭化物の混入がみられる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4084（第93図）：並列する３基の土坑の中央に位置する。平面形態は長楕円形で、長径1.7m、短径0.67m、深さ0.18mの規模を有する。覆土は上層灰黄褐色砂粘質土層、下層褐灰色砂粘質土層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4085（第94図）：並列する３基の土坑の一番南側に位置する。平面形態は隅丸方形で、一辺1.23～1.24m、深さ0.18mの規模を有する。覆土は上層が灰黄褐色砂粘質土層、下層が褐灰色砂質土層である。出土遺物には中世の土師器皿の小片がある程度である。

ＳＫ4087（第94図）：ＳＫ4085の南側に位置する円形土坑。径0.6～0.7m、深さ0.14mの規模。覆土は灰黄褐色砂質土層と褐灰色砂質土層の２層構成。出土遺物は認められない。

ＳＫ4088（第94図）：ＳＫ4087の東側に近接して位置する。ＳＢ41の柱穴の一つ。平面形態は楕円形で、長径0.7m、短径0.62m、深さ0.13mの規模。覆土は褐灰色砂質土層の単層構成。柱痕・出土遺物ともに認められない。

ＳＫ4090（第94図）：ＳＫ4088の東側に近接して位置する。隅丸長方形の平面形態を有する。幅0.86m、長さ1.19m、深さ0.08mの規模を有する。覆土は上層褐灰色砂質土層、下層は灰黄褐色砂粘

質土層である。出土遺物は認められない。

ＳＫ4091（第91・94図）：ＳＫ4090の東側に近接して位置する。大型で隅丸長方形の平面形態である。幅1.04m、長さ2.5m、深さ0.4mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層の単層構成である。土坑底面の中央付近で、若干小礫が集中する部分がみられる。出土遺物には須恵器、中世の土師器皿の破片があるが、いずれも小片である。

ＳＫ4092（第91・94図）：ＳＫ4088とＳＥ4097の中間に位置する。長方形の一端が側方へ張り出したような、不整形な平面形態である。幅1.04m、長さ1.78m、深さ0.14mの規模を測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層構成である。土坑の南肩に一部を持たせるように礫が「C」字状に配置されたような状態で検出される。出土遺物は認められない。

ＳＫ4094（第94図）：ＳＫ4095～4149の間に位置し、ＳＤ4080、ＳＸ4058などに切り込まれる土坑。平面形態は不整形で幅1.7m、最大長4.2m、深さ0.15mの規模を有す。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4095（第92図）：ＳＫ4094の西側に隣接する。平面形態は瓢箪形を呈す。幅0.52m、長さ1.01m、深さ0.01mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。土坑内からは礫が散乱した状態で出土している。出土遺物は認められない。

ＳＫ4096（第94図）：ＳＫ4091とＳＥ4097の中間に位置する。平面形態は円形を呈す。径1.26～1.38m、深さ0.15mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4098（第94図）：ＳＫ4096の東側に隣接する。平面形態は楕円形を呈す。長径1.22m、短径0.6m、深さ0.08mの規模を有す。覆土は灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4107（第94図）：調査地西壁沿いの南側に位置し、西半部をＳＤ4106に切り込まれている。平面形態は隅丸方形。幅1.82m、現状での最大長0.77m、深さ0.13mの規模を有す。覆土は黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＫ4108（第88図、図版37・39）：調査地の中央に位置する礫充填の大型土坑である。平面形態は隅丸長方形を呈する。幅1.8m、長さ5.5m、深さ0.1mの規模を有する。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。土坑の内面は全面に礫が充填される。西端付近に一部やや大型の礫を径１mの円形に配置する様相がみられるが、その目的、機能などについては判然としない。調査地内で地山に礫層基盤が露出する部分もあるものの、礫を破棄するためだけに、わざわざこのような土坑を掘削するとも思えず、現状では性格などは不明である。このような礫充填の大型土坑が本調査地や周辺遺跡でも多く検出されている。礫以外の出土遺物は、須恵器の小片を除き認められない。

ＳＫ4124（第94図）：ＳＥ4113の東側に隣接して位置する。隅丸長方形の平面形態である。幅2.14m、長さ2.75m、深さ0.18mの規模。覆土は上層褐灰色・黄灰色・灰黄色砂粘質土層、下層は灰色砂粘質土層。出土遺物には珠洲擂鉢（1199）・珠洲壷口縁部破片（1208）・土師器大皿（1209）などがある。

ＳＫ4126（第92図）：ＳＫ4124とＳＫ4130のちょうど中間に位置する。隅丸長方形の平面形態を有する。幅1.01m、長さ1.47m、深さ0.09mの規模を有する。覆土は暗オリーブ色砂粘質土層を基調とする。土坑の底面には小礫の散乱が若干みられるが、顕著ではない。他の出土遺物はない。

ＳＫ4130（第94図）：ＳＢ40と重複して位置する大型土坑。平面形態は隅丸方形で、一辺2.6～2.78m、深さ0.5mの規模を有す。覆土は上層は灰黄褐色系の砂質土層が、下層は褐灰色から黒褐色の砂粘質土層がみられる。出土遺物には土師器皿（1207）の他、珠洲・須恵器・土師器が若干混じる程度

である。本土坑はＳＢ40の東側一間分の規模に一致し、一見ＳＢ40の付属施設にも見受けられるが、検出時の知見ではＳＢ40の柱穴が明らかにＳＫ4130を切り込んでおり、土坑はこれに先行する時期のものであることが明確である。

ＳＫ4134（第95図）：ＳＢ39～06の間に位置する土坑の一つ。平面形態は隅丸方形を呈す。一辺1.11～1.42m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は褐色砂質土層単層構成である。出土遺物なし。

ＳＫ4135（第95図）：ＳＫ4034の南側に隣接して位置する。一辺1.05～1.33m、深さ0.08mの規模を有す。覆土は褐色砂質土層の単層構成。出土遺物は認められない。

ＳＫ4137（第95図）：ＳＫ4134の東側に隣接し、ＳＫ4138に切り込まれる。やや不整な楕円形で、長径１m、短径0.81m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は灰褐色砂粘質土層の単層構成。出土遺物なし。

ＳＫ4138（第92図）：ＳＫ4135の東側に隣接して位置し、これを切り込んでいる。平面形態はやや不整な隅丸方形で、一辺1.01～1.17m、深さ0.05mの規模を有す。覆土は灰褐色砂粘質土層の単層構成である。出土遺物は須恵器の小片が混入している程度である。

ＳＫ4141（第92図）：ＳＫ4138の東側に隣接して位置する。平面形態は歪な楕円形で、長径0.86m、短径0.48m、深さ0.07mの規模を有す。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層構成である。土坑内からは礫が散乱した状態で検出された。他に出土遺物は認められない。

ＳＫ4142（第95図）：ＳＫ4138の東側に位置し、ＳＫ4143に切り込まれる。平面形態は隅丸方形で、一辺0.93m前後、深さ0.22m。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＫ4143（第95図）：ＳＫ4142の西側に位置し、これを切り込んでいる。平面形態は長楕円形で、長径173m、短径0.61m、深さ0.12mの規模を有す。覆土は上層灰褐色砂粘質土層、下層は褐灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

ＳＫ4144（第95図）：ＳＢ39の南西角の柱穴に相当する。平面形態は円形で、径0.74～0.8m、深さ0.33mの規模を有す。覆土は黄灰色粘質土層の単層構成である。土坑の底面からやや浮いた状態で、掘立柱建物の柱を据える根石が検出されている。他に出土遺物は認められない。

ＳＫ4149（第89図、図版37・40）：調査地の中央、ＳＢ41の東側に隣接して位置する大型の礫充填の土坑である。平面形態は楕円形で、長径3.6m、短径2.5m、深さ0.36mの規模を有す。覆土は黄灰色粘質土層の単層構成である。土坑内は小礫から人頭大の各種礫で充填されている。中央やや東側において、一部礫を円形に組んで、内部を擂鉢状に窪ませている。平面形態はやや異なるが、南側に隣接するＳＫ4108と同様の検出状況を示す。他に出土遺物は認められない。

ＳＫ4233（第95図、図版40）：掘立柱建物ＳＢ43の南側桁行柱穴のひとつである。平面形態は円形で、径0.75m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物は認められない。

不整形土坑・落ち込み

ＳＸ4058（第93図、図版39）：ＳＢ41～43の中間に位置する大型不整形の落ち込み状遺構。ＳＢ42の柱穴とＳＸ4059に重複し、これに切り込まれる。東西９m、南北2.98m、最大深0.35mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。中世の土師器皿（1202）・珠洲・八尾などが出土している。

ＳＸ4059（第91・97図、図版39）：ＳＸ4058と重複しこれを切り込んでいる。平面形態は楕円形で、長径3.4m、短径2.43m、深さ0.32mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には中世の土師器皿・瓦質土器・八尾などの小破片がある。

ＳＸ4117（第94図）：調査地の西壁沿いやや南側に大きく広がる、不整形な浅い落ち込み状遺構である。ＳＤ4116を切り込む他ＳＤ4106に肩を切り込まれている。東西9.3m、南北8.2m、深さ0.19mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には中世の土師器皿、珠洲などの小片がある。

柱穴

ＳＰ4052（第97図）：ＳＢ42の南側桁行中央の柱穴。平面形態は円形で、径0.56m、深さ0.19mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＰ4057（第93図）：ＳＢ41の北西角の柱穴である。平面形態は楕円形で、長径0.88m、短径0.64m、深さ0.16mの規模を有す。覆土は灰褐色砂質土層を基調とする。「界万」と線刻された八尾の擂鉢（1216）が１点出土している。

ＳＰ4081（第93図）：調査地西壁沿いのほぼ中央に位置する。平面形態は楕円形で長径0.97m、短径0.53m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。中世の土師器皿、珠洲の小片が出土している。

ＳＰ4109（第94図）：ＳＥ4097の南側で東西に４つ並ぶ柱穴群の一番西側に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.2m、短径0.62m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＰ4110（第94図）：柱穴群の西から２番目に位置する。平面形態は楕円形で、長径0.88m、短径0.6m、深さ0.13mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＰ4111（第94図）：柱穴群の西から３番目に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.21m、短径0.58m、深さ0.14mの規模を有す。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

ＳＰ4112（第94図）：柱穴群の一番東側に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.34m、短径0.9m、深さ0.04mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層構成。八尾の小片が出土している。

ＳＰ4121（第97図）：ＳＥ4113とＳＤ4103の中間に位置する。平面形態は円形で、径0.51～0.59m、深さ0.06mの規模を有す。覆土は黄灰色砂質土層の単層構成である。出土遺物は認められない。

溝

ＳＤ4012（第97図）：南北方向にのびる小溝で、北端は調査地の北壁外へ、南端は９m程で先端が浅くなり消失する。ＳＤ4020に横断されこれに切り込まれる。幅0.35m、深さ0.12mの規模を有す。覆土はにぶい褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＤ4013（第97図）：ＳＤ4012の東側で併走する小溝で、北端は調査地区外に、南端は浅く消失している。ＳＫ4022に切り込まれ、ＳＤ4020を切り込んでいる。最大幅2.07m、深さ0.26mの規模を有す。覆土は上層灰褐色砂粘質土層、下層はにぶい橙色砂層となる。中世の土師器皿・珠洲の小片が出土している。

ＳＤ4020（第97図）：西壁から東西方向にのびる溝で、東端はＳＥ4025に接合する。途中ＳＤ4012を切り込み、ＳＤ4013に切られる。幅0.64m、深さ0.09mの規模を有す。覆土には灰黄褐色砂粘質土層・褐灰色砂粘質土層などがみられる。珠洲の小片が出土している。

ＳＤ4066（第97図）：ＳＢ42の桁行南側柱列に沿ってのびる小溝。西端はＳＫ4048に切り込まれる。東端は浅くなりＳＢ42南東角の柱穴に接して消失する。幅0.33m、深さ0.1mの規模を有す。明褐灰色砂粘質土層の覆土を有す。土師器の小片の出土遺物がみられる。

ＳＤ4080（第97図）：ＳＢ41と重複して東西にのびる溝で、西側はさらに南側に溝が分岐して「L」

字状を呈す。ＳＤ4093を切り込みこれに後出する。ＳＤ4093と重複する部分の断面では、幅1.32m、深さ0.22mの規模を有する。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には中世の土師器皿（1191）・珠洲甕（1195）・白磁の小片などがある。

ＳＤ4093（第97図）：ＳＢ41～43の屋敷地の南・西辺を区画する溝と考えられる。南北方向にのびる溝の中央付近から東に分岐する小溝が２条みられる。北端部の様相は判然としないが、南端はＳＤ4116と接合する可能性が高い。前述のＳＤ4080に切り込まれる他、ＳＤ4103・4106、ＳＸ4117にも切り込まれており、中世上層では先行する時期の遺構のひとつである。幅0.5～0.8m、深さ0.05～0.14mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。中世の土師器皿・珠洲などの小片が出土している。

ＳＤ4103（第94・97図）：調査地西壁中央付近から南に向かい、中途から調査地を東西に横断し、東壁でさらに南側に屈曲してのびていく溝で、後述のＳＤ4106と位置的にほぼ重複しており、これを切り込んでいる。幅0.3～0.36m、深さ0.14～0.22mの規模を有す。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。中世の土師器皿・珠洲の小片などが出土している。

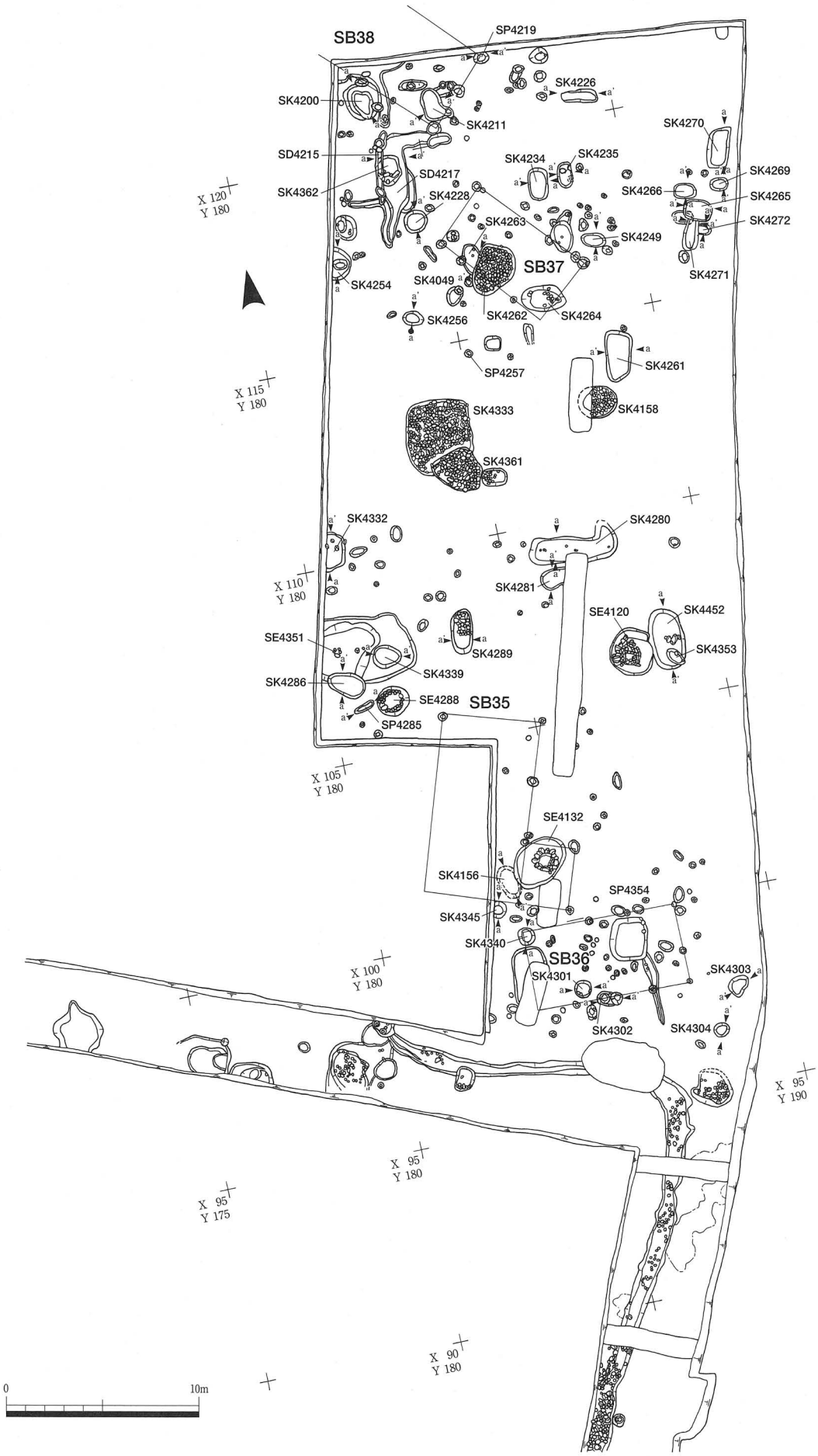
ＳＤ4106（第94・97図）：ＳＤ4103と位置がほぼ重複し、これに切り込まれている溝。このため本来の溝幅はわからないが、１m前後と推定される。深さは東西方向部分の中央付近で、0.14m前後を数える。覆土は灰褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

ＳＤ4116（第97図）：ＳＤ4093の南側の延長上にある溝で、溝自体はさらに調査地外へと延びている。幅1.55m、深さ0.11mの規模を有す。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。中世の土師器皿の小片が出土している。

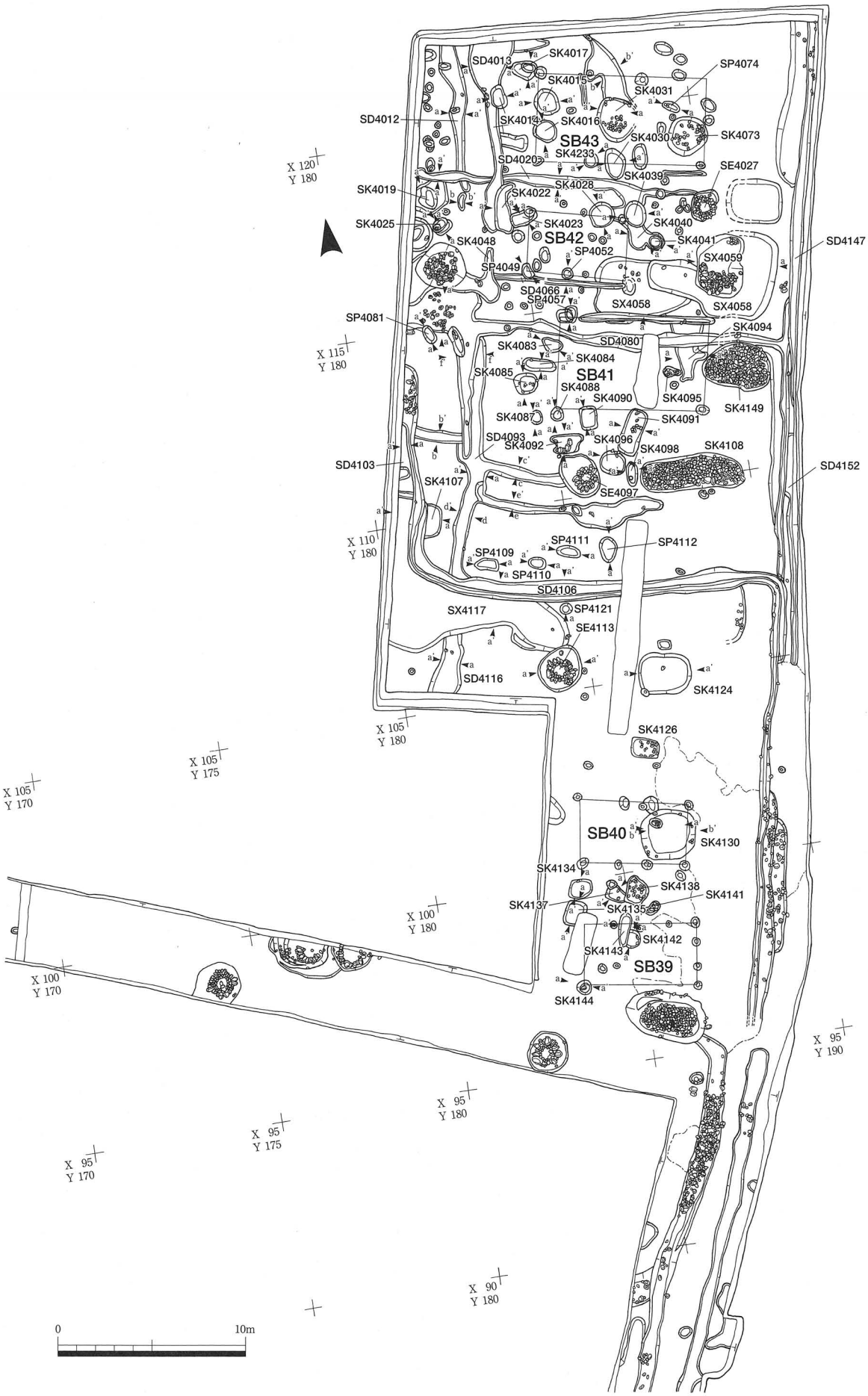
ＳＤ4147（第82図）：調査地の東壁沿いの北端付近で壁に沿って検出された溝で、東側の肩および南北の両端は調査地区外となる。このため規模などは不明。最大深0.15m前後。覆土は淡灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物には中世の土師器皿（1260）・珠洲の小片などがある。

ＳＤ4152（第82図）：ＳＤ4147南端の南側に位置する。一部をＳＤ4080に切り込まれる他、南端も撹乱で先端が消失する。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には珠洲擂鉢（1197）がある。

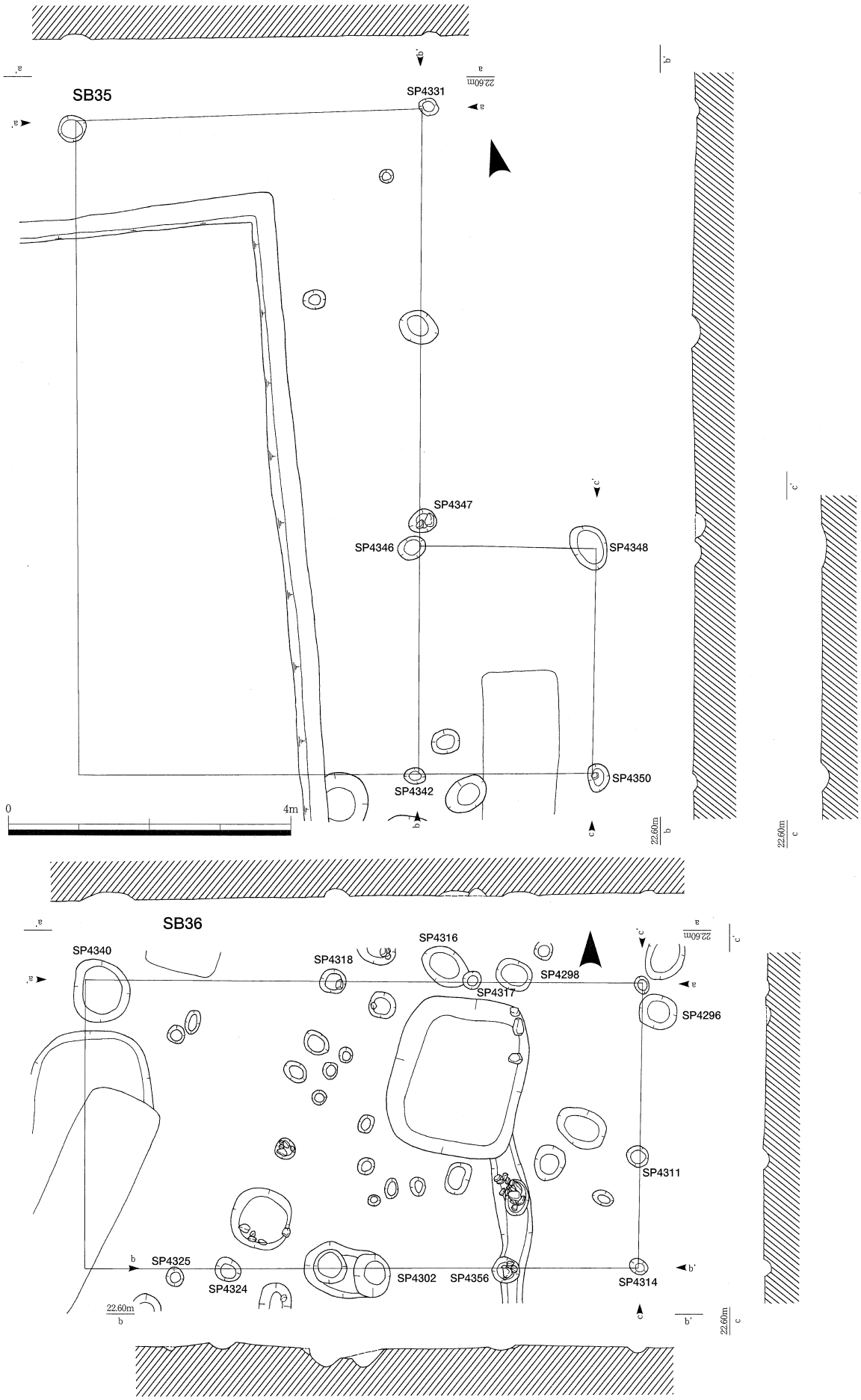
（森　隆）



第81図　B6地区中世下層遺構全体図

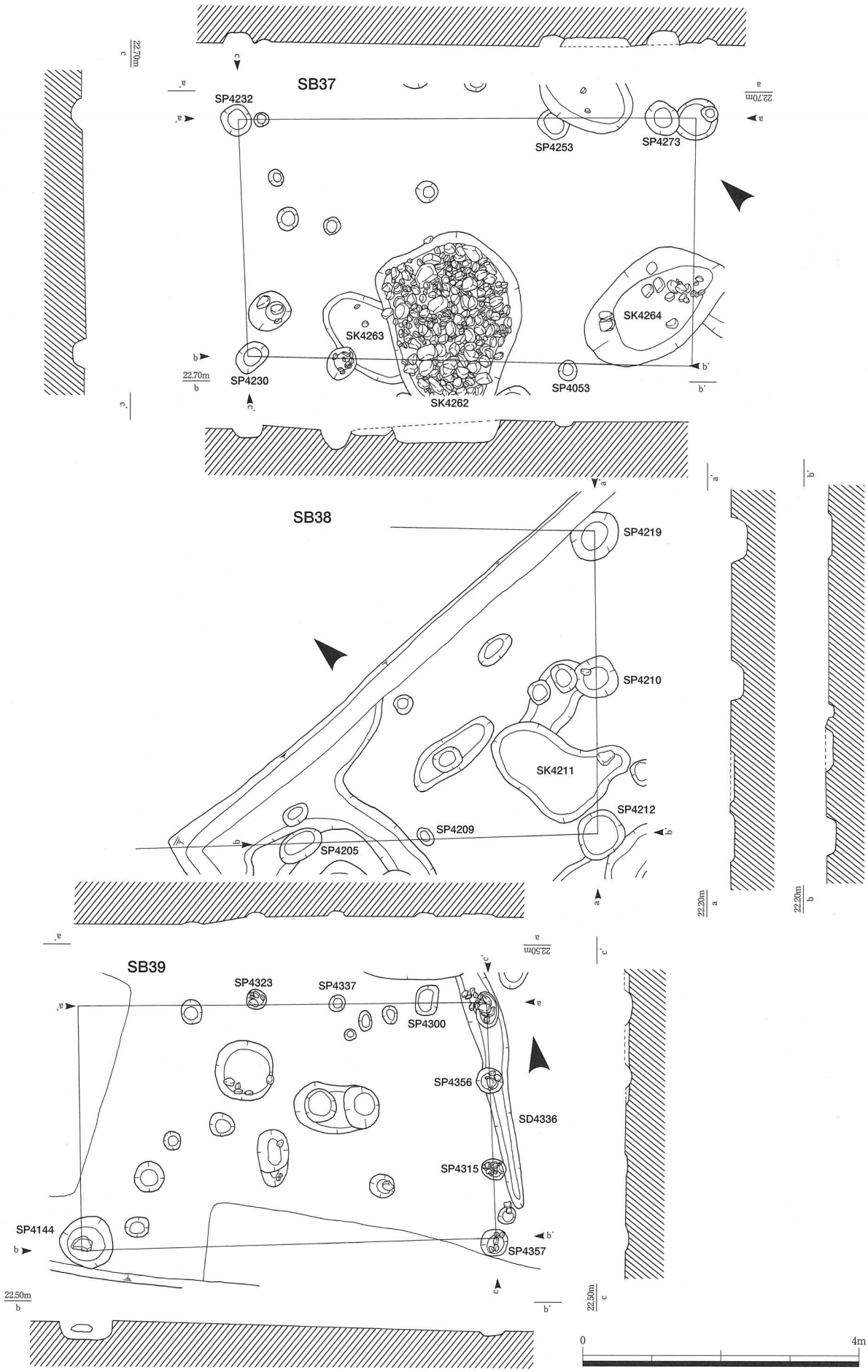


第82図　B6地区中世上層遺構全体図



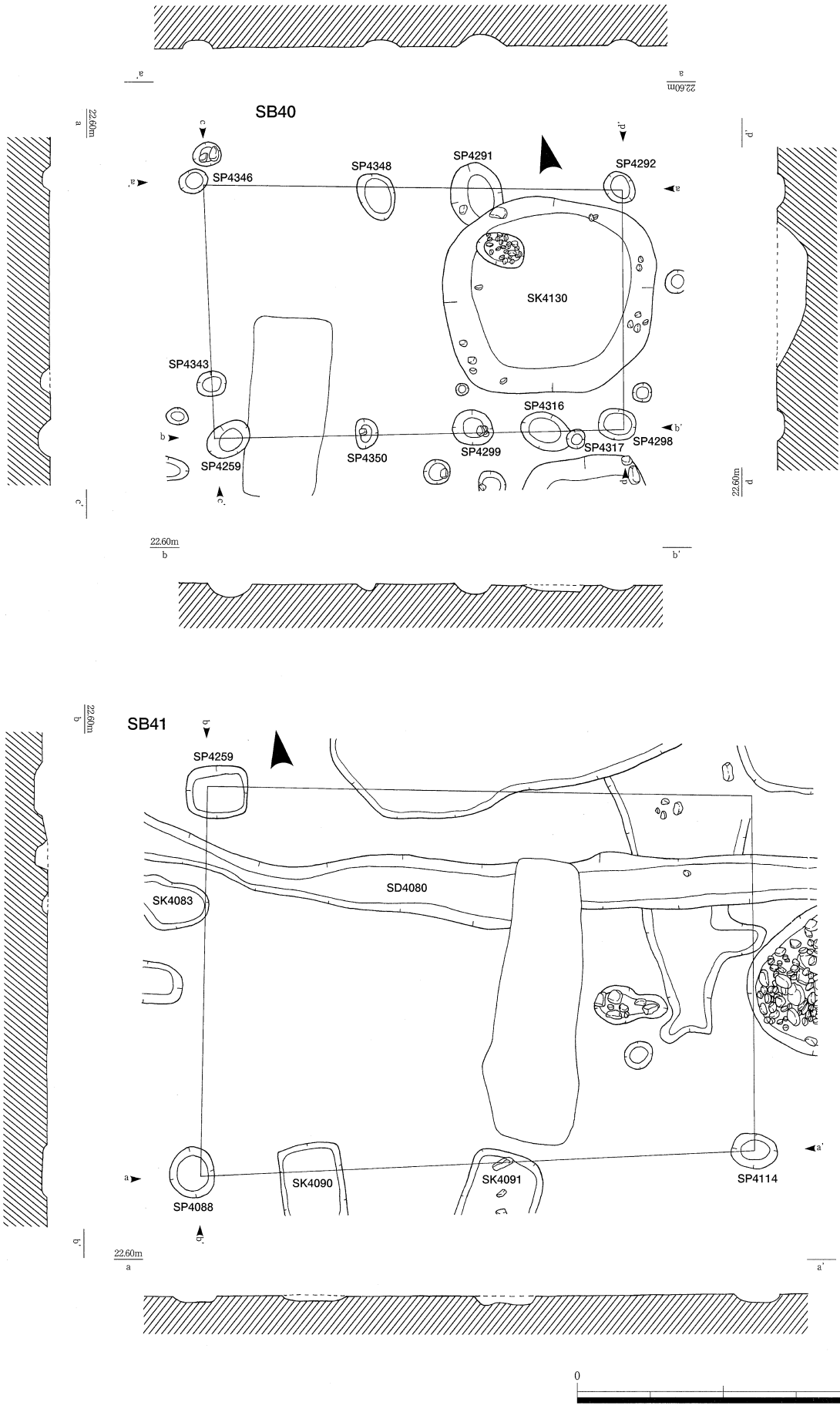
第83図　遺構実測図

SB35　SB36



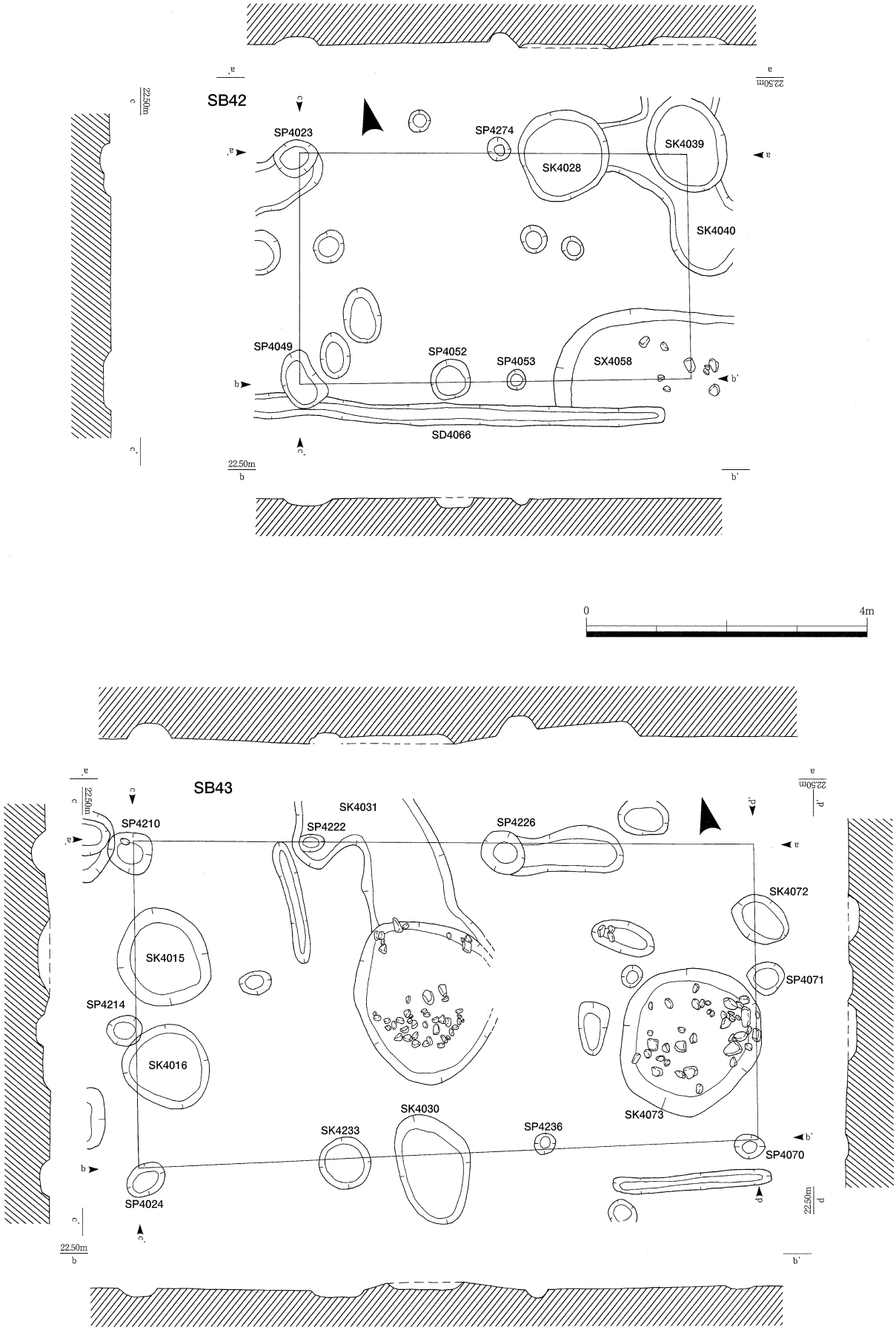
第84図　遺構実測図

SB37　SB38　SB39



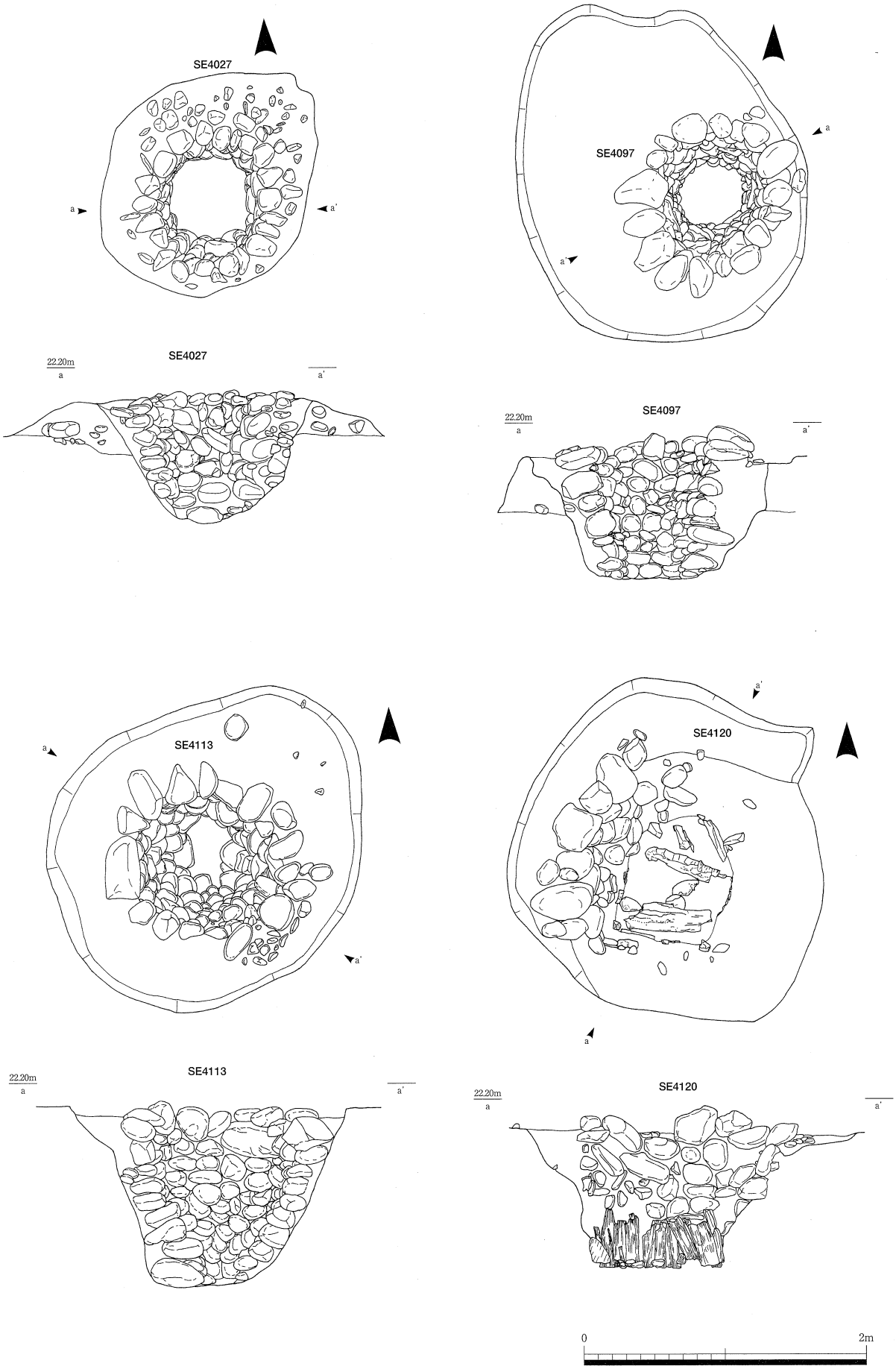
第85図　遺構実測図

SB40　SB41



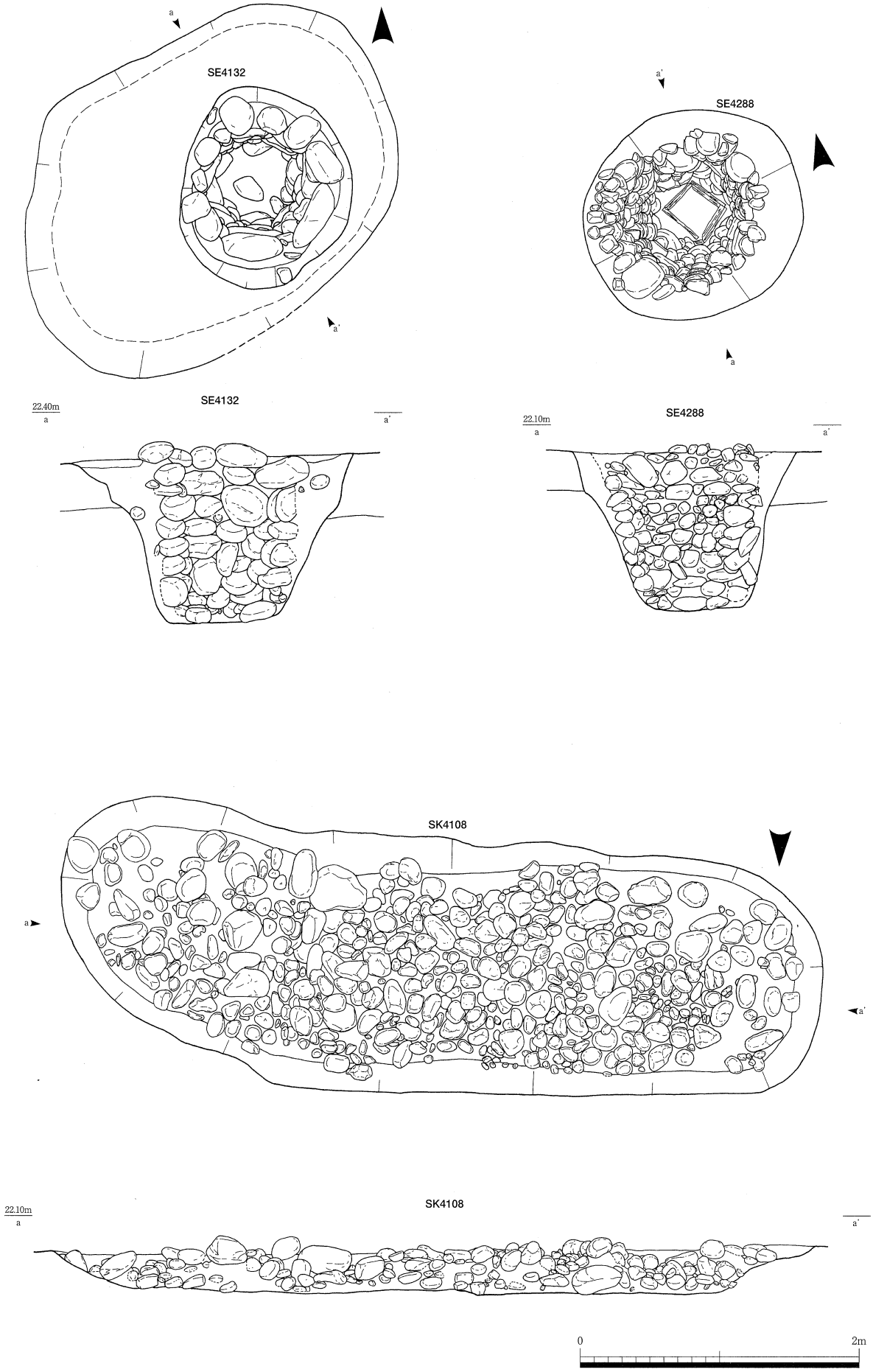
第86図　遺構実測図

SB42　SB43



第87図　遺構実測図

SE4027　SE4097　SE4113　SE4120



第88図　遺構実測図

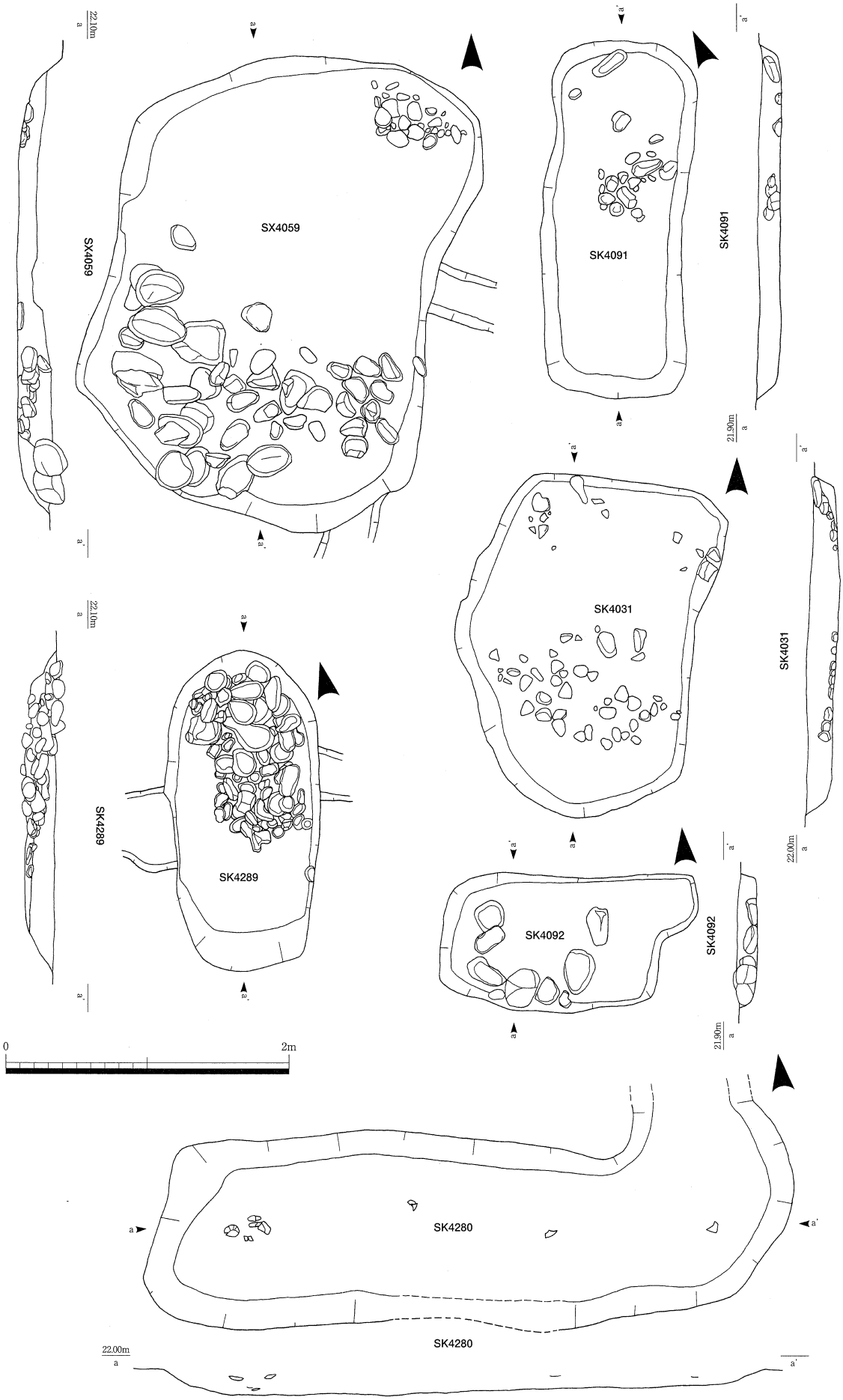
SE4132　SE4288　SK4108

第89図　遺構実測図

SK4149　SK4158　SK4262

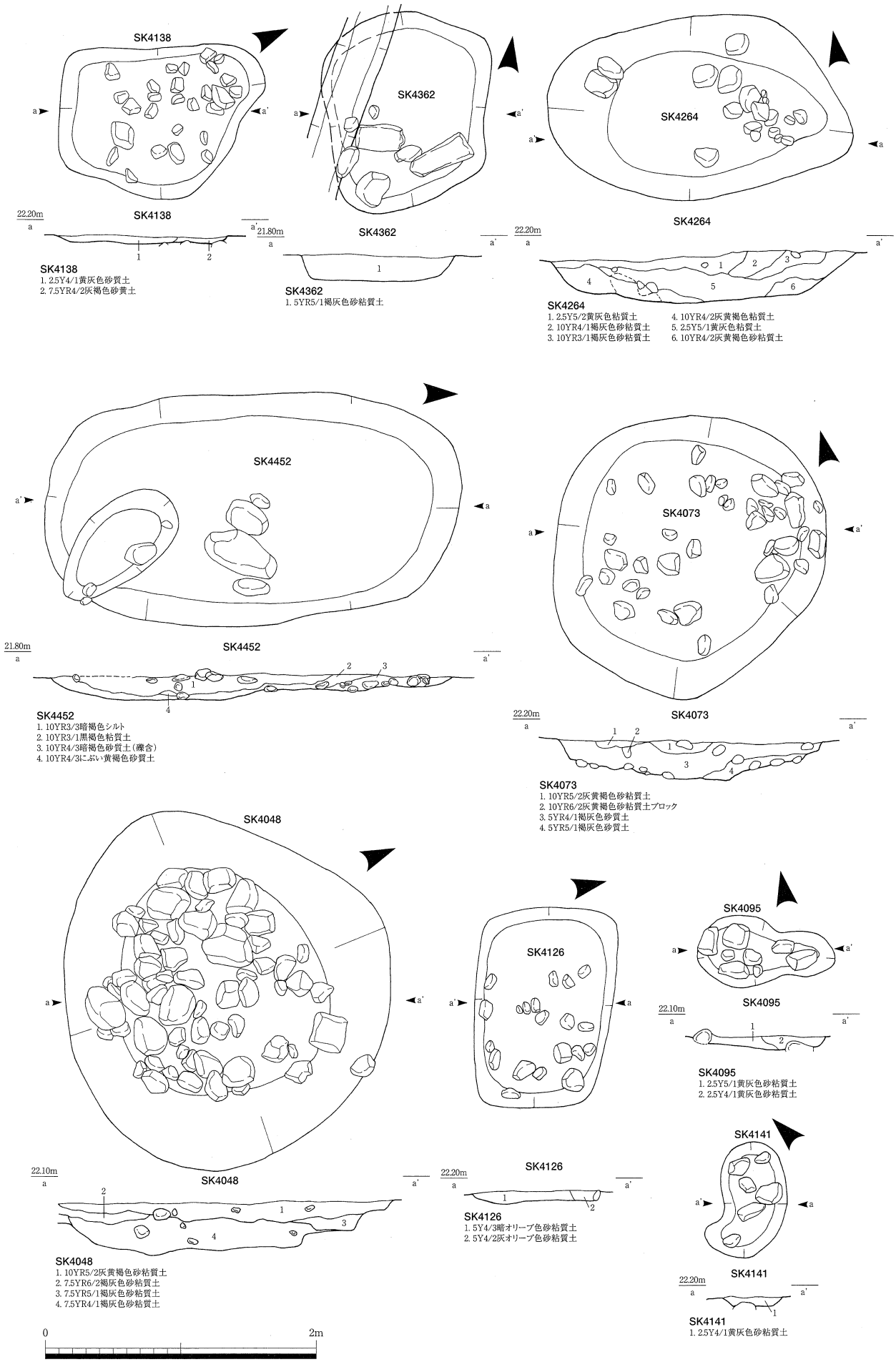
第90図　遺構実測図

SK4333　SK4361



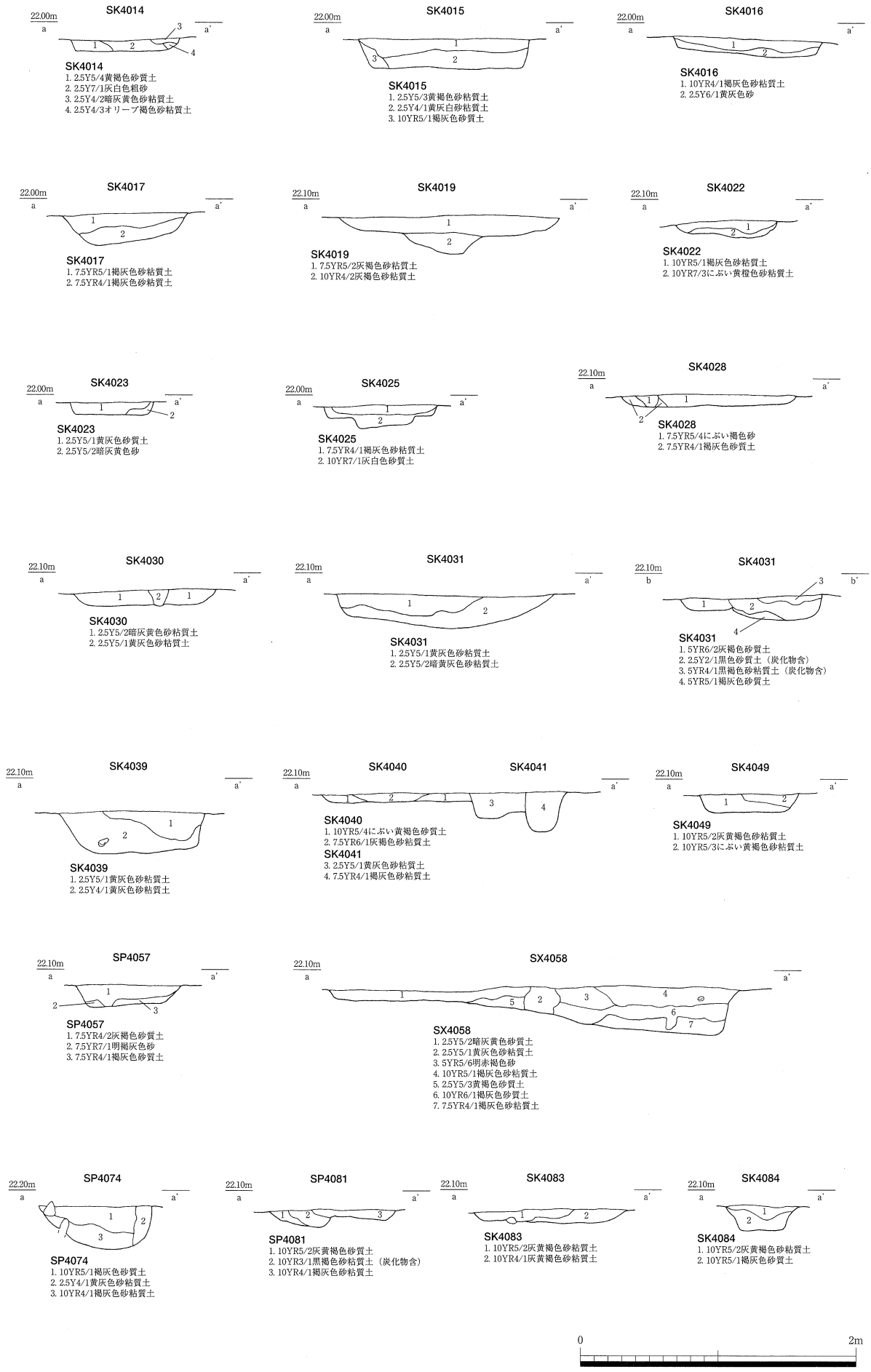
第91図　遺構実測図

SK4031　SK4091　SK4092　SK4280　SK4289　SX4059



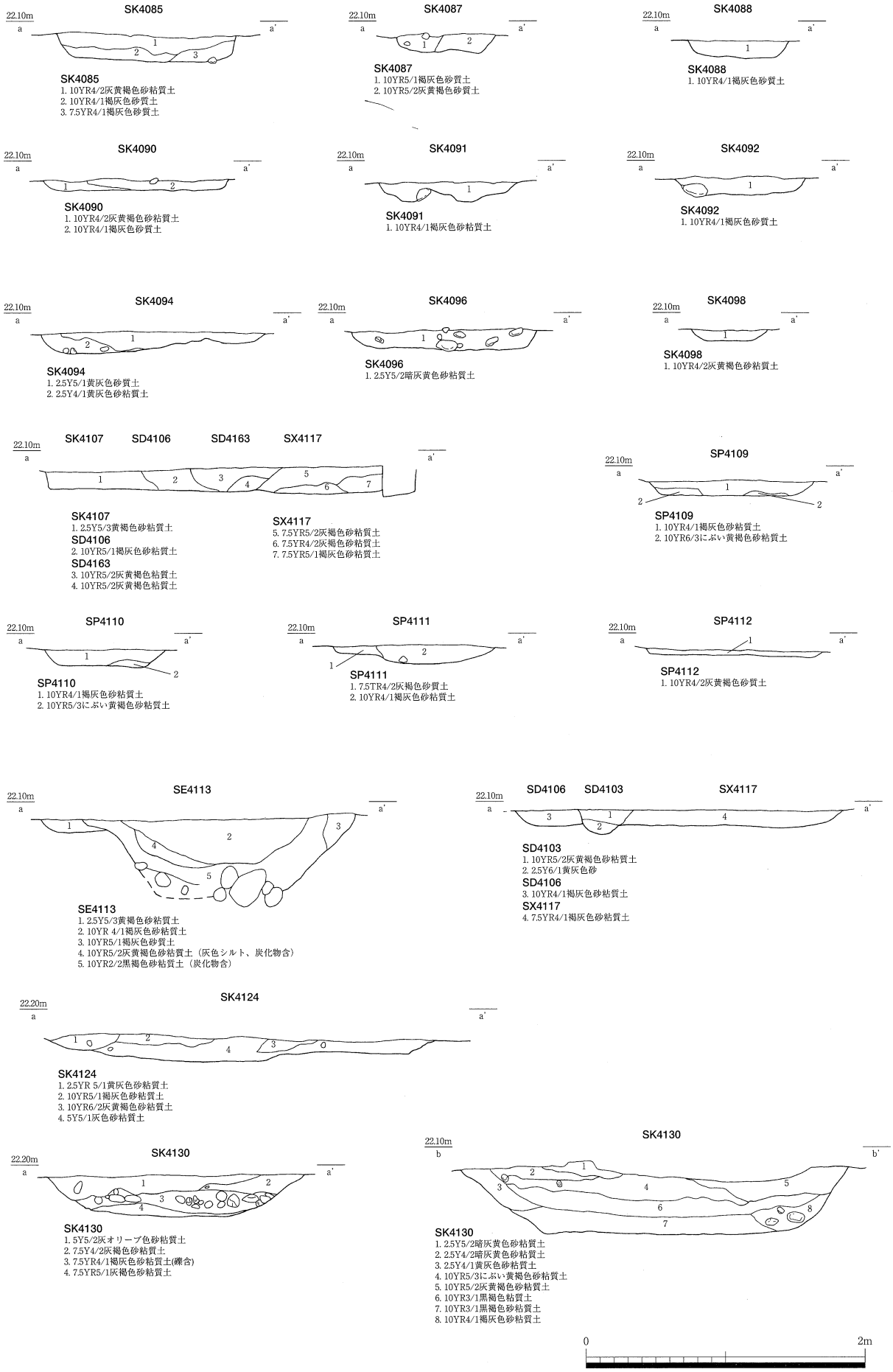
第92図　遺構実測図

SK4048　SK4073　SK4095　SK4126　SK4138　SK4141　SK4264　SK4362　SK4452



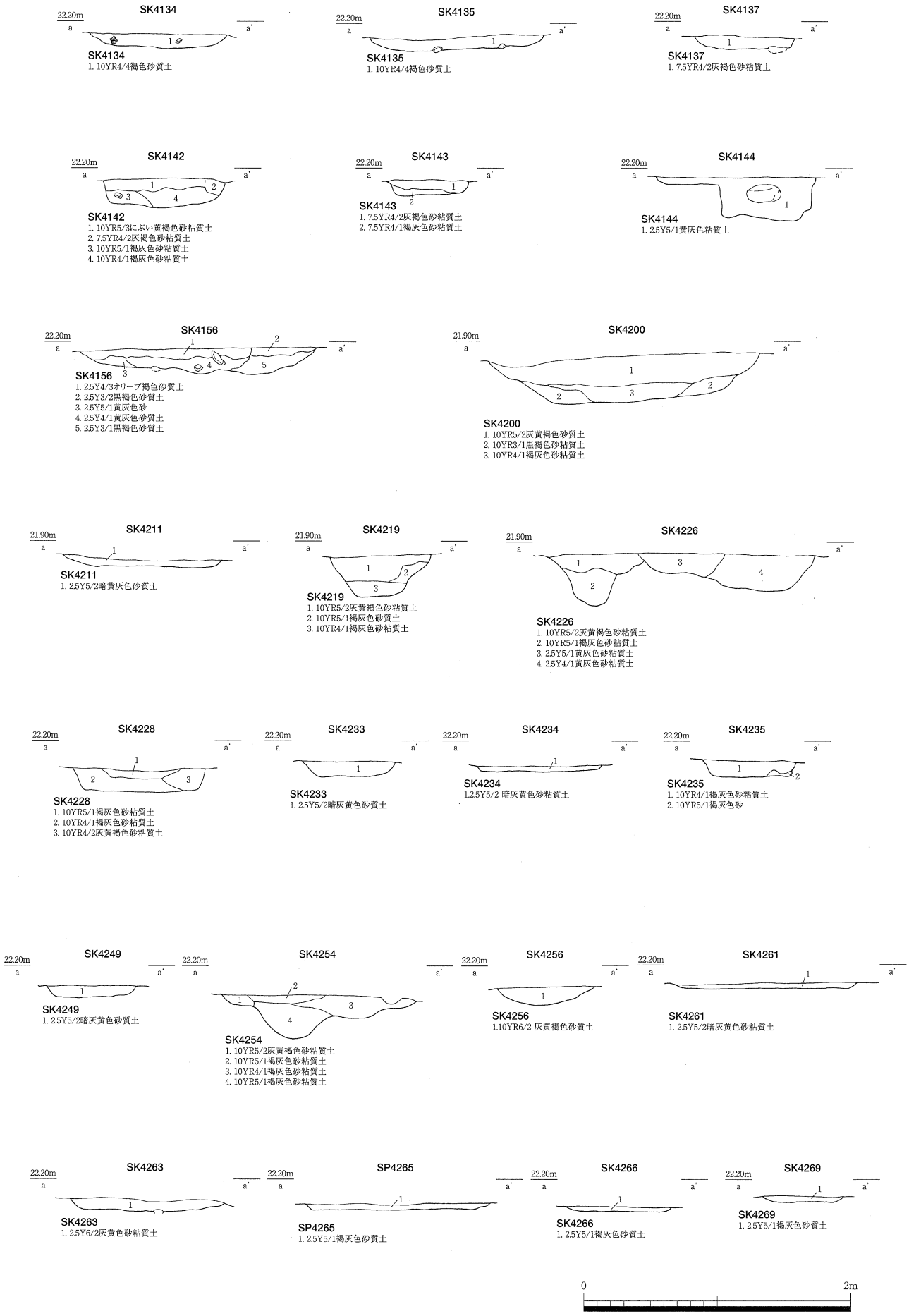
第93図　遺構実測図

SK4014・SK4015・SK4016・SK4017・SK4019・SK4022・SK4023・SK4025・SK4028・SK4030・SK4031・SK4039・SK4040・SK4041・SK4049・SP4057・SX4058・SP4074・SP4081・SK4083・SK4084



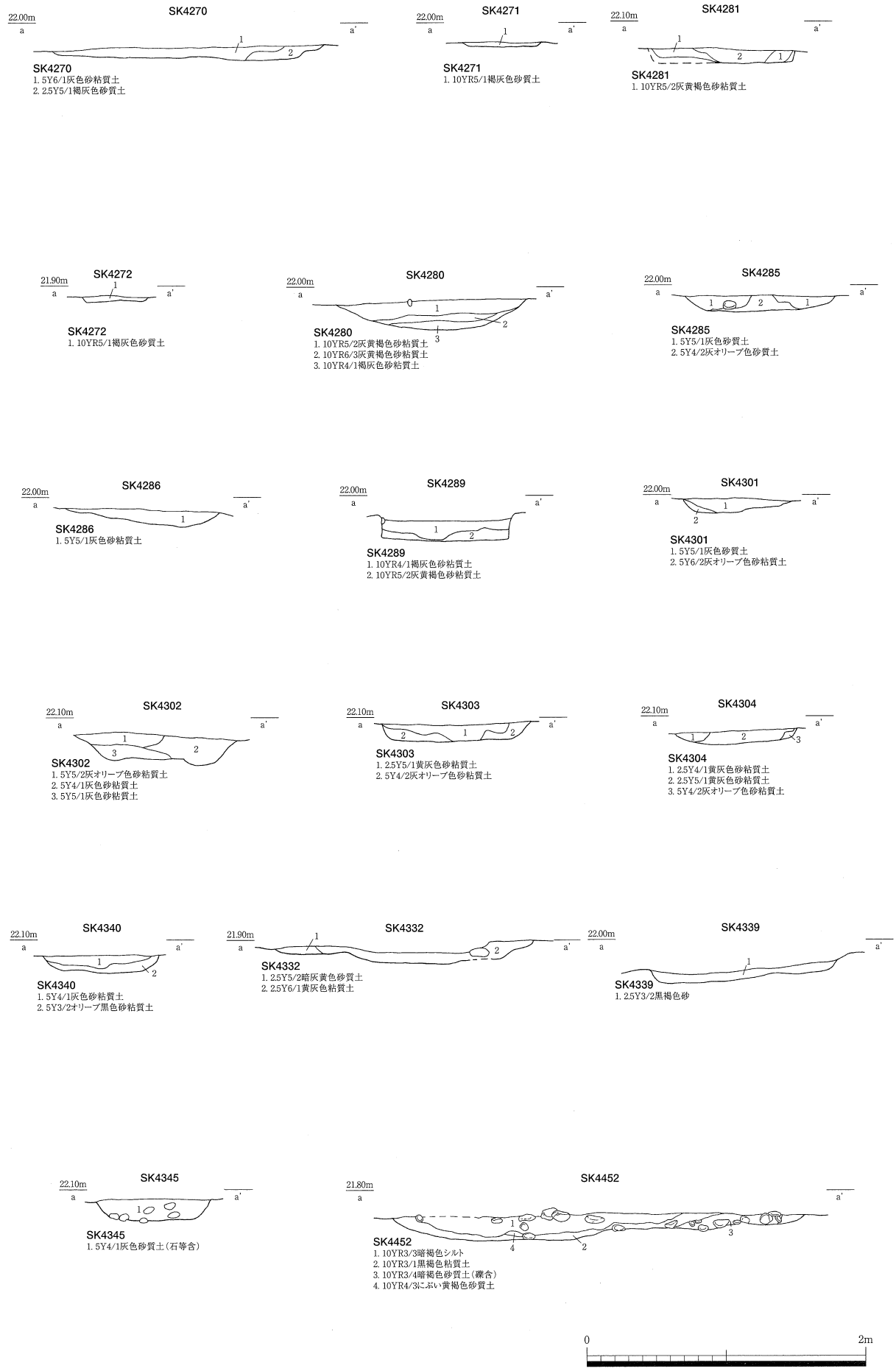
第94図　遺構実測図

SK4085・SK4087・SK4088・SK4090・SK4091・SK4092・SK4094・SK4096・SK4098・SK4107・SD4106・SD4163・SX4117・SP4109・SP4110・SP4111・SP4112・SE4113・SD4103・SK4124・SK4130



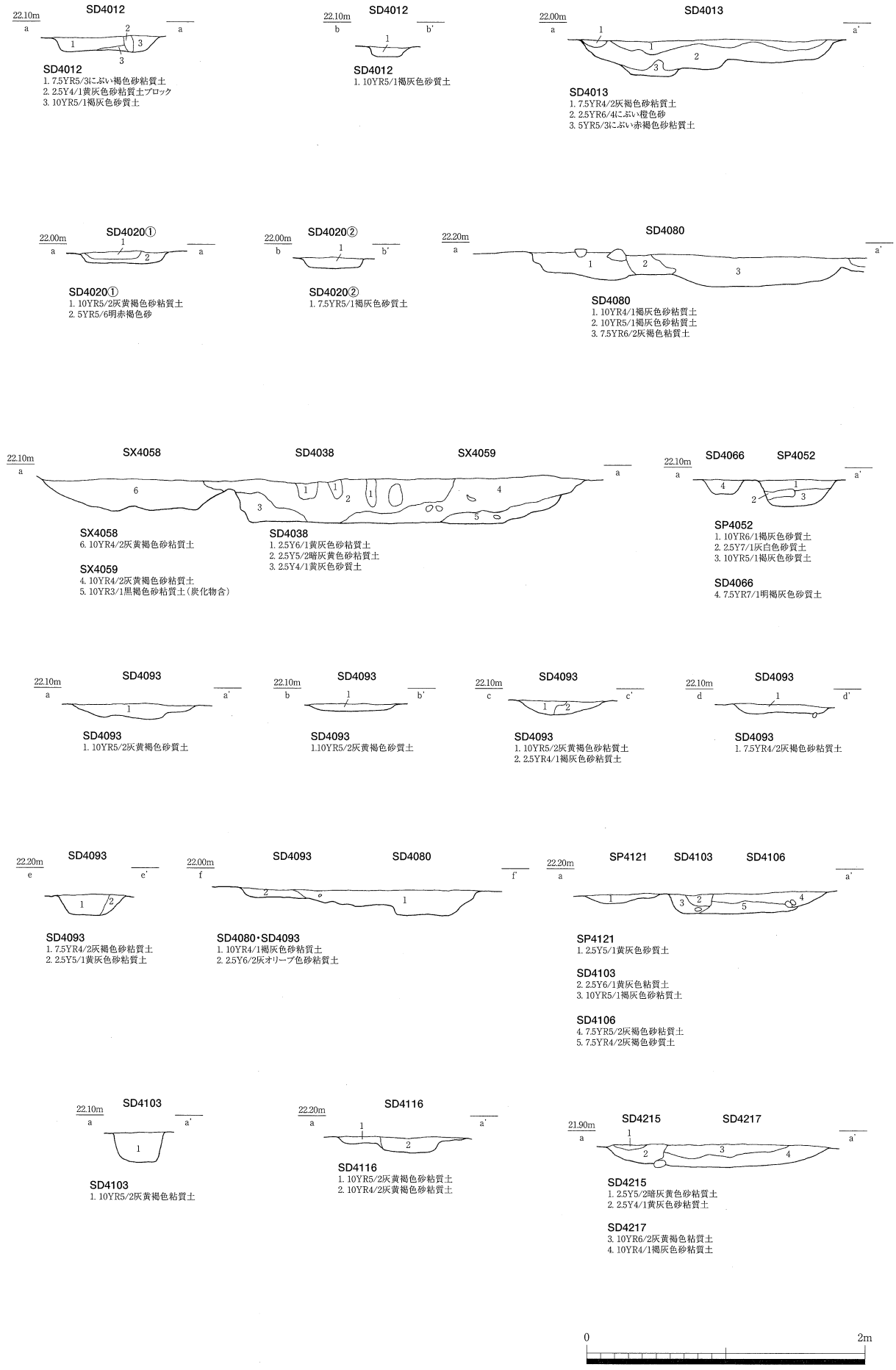
第95図　遺構実測図

SK4134・SK4135・SK4137・SK4142・SK4143・SK4144・SK4156・SK4200・SK4211・SP4219・SK4226・SK4228・SK4233・SK4234・SK4235・SK4249・SK4254・SK4256・SK4261・SK4263・SP4265・SK4266・SK4269



第96図　遺構実測図

SK4270・SK4271・SK4272・SK4280・SK4281・SK4285・SK4286・SK4289・SK4301・SK4302・SK4303・SK4304・SK4340・SK4332・SK4339・SK4345・SK4452



第97図　遺構実測図

SD4012・SD4013・SD4020・SD4080・SD4038・SP4052・SX4058・SX4059・SD4066・SD4093・SD4080・SD4103・SD4106・SP4121・SD4116・SD4215・SD4217

⑥Ａ２地区

Ａ２地区は溝、集石遺構、墓、土坑がみられ、建物などは確認されなかった。このことから居住区域ではなく、墓域としてのみ利用していたと考えられる。墓壙は３基確認された。このうち１基からは六道銭と思われる銭が出土している。３基とも浅い土坑であり、焼けた人骨が出土しているが、蔵骨器や墓石などはみられない。また、墓の北側に集石があるが、この下からは骨などは出土していない。そのため墓ではないと思われる。この集石が周辺の墓の墓石としての役割をしていたとも考えられる。

溝

ＳＤ4501（第98・112図、図版46）：東西方向に流れる溝。東側、西側とも調査区外へ延びる。時期は中世から近世で切り合いからＳＸ4502より古い。道ＳＦ4579と方向が同じことから、中世末から近世にかけては、道の側溝とされていたと思われる。幅2.2m、深さ0.61mである。覆土は灰色の粘質土やシルトで５層に分けられる。遺物は須恵器・中世土師器・珠洲・八尾・越前・瀬戸・越中瀬戸・バンドコ・砥石・五輪塔・漆器・桶・曲物が出土している。

ＳＤ4568（第98・112図）：東西方向に流れる溝で東側、西側とも調査区外へ延びる。時期は中世から近世で切り合いからＳＫ4554・4555・4556、ＳＸ4562・4563より古い。幅2.18m、深さ0.58mである。覆土はオリーブ黒色粘土質シルトや灰色シルトで５層に分けられる。遺物は中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・砥石・石臼・漆器・桶などが出土している。

ＳＤ4601（第98・99・112図）：南北方向に流れる溝。切り合いからＳＸ4615より古く、ＳＸ4616・4617より新しい。幅1.17m、深さ0.15m。覆土は灰色粘土質シルトで黄褐色粒と炭が混じる。遺物は中世土師器・銭・人の骨が出土している。銭は３枚出土しているが、明道元宝１枚・元豊通宝１枚・残り１枚は遺存状態が悪く、□□□宝としか読めない。墓壙はこの溝のなかにあるため、銭は墓壙に六道銭として納められたものが流れたものと思われる。

ＳＤ4606（第98・112図）：南北方向に流れる溝。切り合いからＳＤ4568より古く、ＳＤ4607より新しい。幅0.93m、深さ0.14m。覆土は灰色シルトに灰色砂質土と黄褐色粒と炭が混じる土と灰色砂質シルトに灰色砂と黄褐色砂と灰白色砂が混じる土とに分けられる。

ＳＤ4607（第98・112図）：東西方向に流れる溝。切り合いからＳＤ4606より古い。幅0.48m、深さ0.08m。覆土は灰色粘土質シルトに灰色砂と黄褐色粒が混じる土である。

ＳＤ4608（第98・112図）：南北方向に流れる溝。北側はＳＤ4501に合流する。幅1.22m、深さ0.1m。覆土は灰色粘土質シルトで２層に分けられる。遺物は切石と思われる砂岩が出土している。

ＳＤ4609（第98・112図）：南北方向に流れる溝でＳＤ4606・4608とほぼ同じ向きである。北側はＳＤ4501に、南側はＳＤ4568に合流する。幅1.44m、深さ0.08m。覆土は灰色粘土質シルトである。

集石遺構

ＳＸ4602（第98図、図版42）：ＳＤ4601北に位置する。南西側は調査区外へ延びており、確認できなかった。確認できる範囲での規模は長径3.20m、短径1.40mである。まず深さ約0.1mの穴を掘り、そこに石を並べている。骨や蔵骨器は出土していないため、墓ではなく、周辺の墓壙の墓石としての役割をしていたものかもしれない。遺物は珠洲が石の間から出土している。

墓壙

ＳＸ4615（第99図）：ＳＤ4601内に位置する。切り合いからＳＤ4601よりも新しい。楕円形を呈し、長径1.31m、短径1.2m、深さ0.11mである。覆土は上層の灰色粘土質シルトと下層の灰色粘質土に分

けられ、底部付近には炭がまとまってみられる。炭の層からは人骨が出土した。銭も出土しており、六道銭として副葬されたものであろう。淳化元寶１枚・咸平元寶２枚・明道元寶１枚・元豊通寶１枚の計５枚である。その他の遺物は中世土師器が出土している。

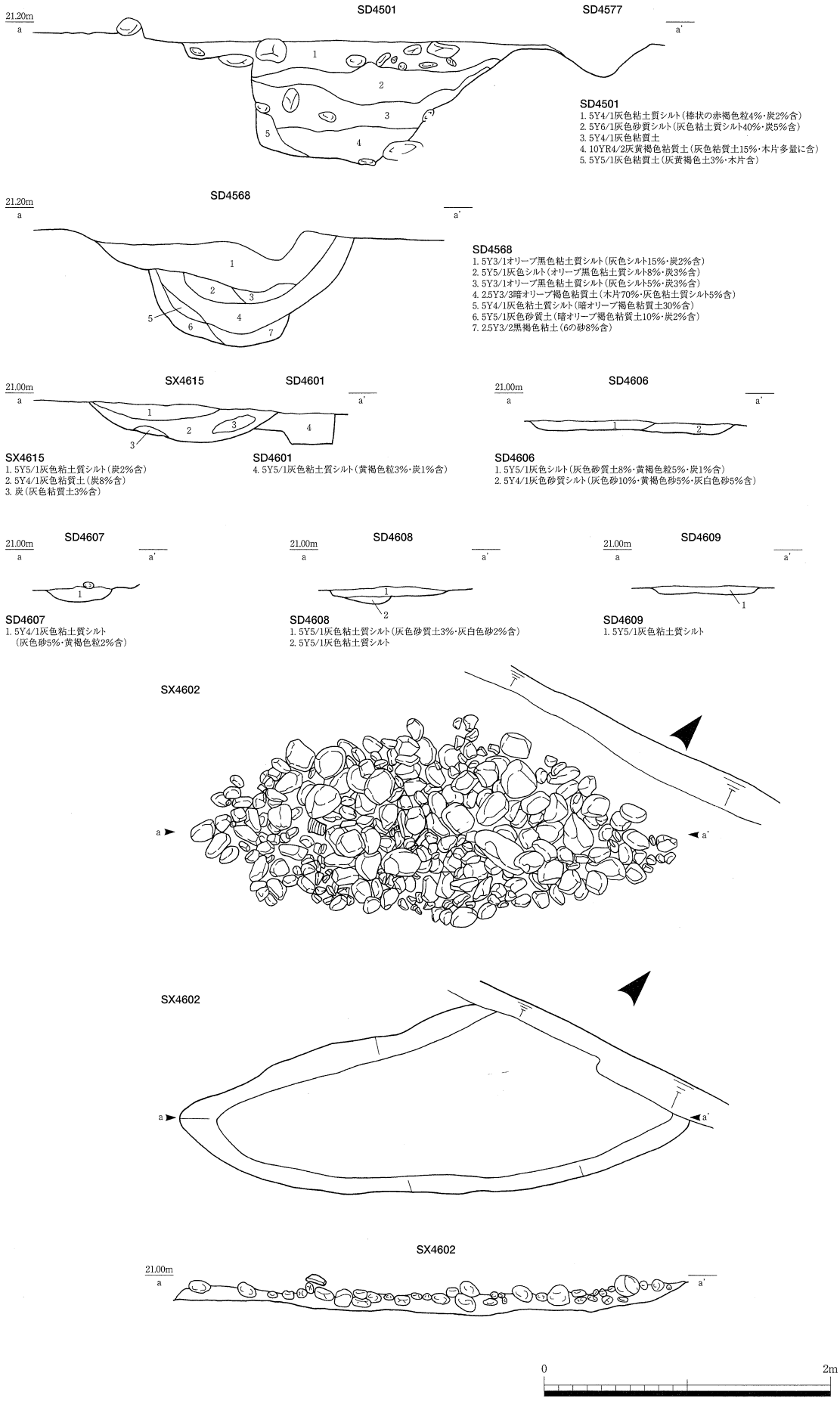
ＳＸ4616（第99図）：ＳＤ4601内に位置する。切り合いからＳＤ4601より古い。楕円形を呈し、長径1.42m、深さ0.07mである。覆土は単層で灰色粘土質シルトである。わずかではあるが骨の破片が出土している。

ＳＸ4617（第99図）：ＳＤ4601内に位置する。切り合いからＳＤ4601より古い。楕円形を呈し、規模は長径1.50m、短径0.79m、深さ0.11mである。覆土は灰色粘土質シルトで底部の一部分に炭のかたまりがあり、その中から人骨が出土している。その他の遺物は鹿の骨に模様を施した装飾具が出土している。副葬品であると考えられる。

土坑

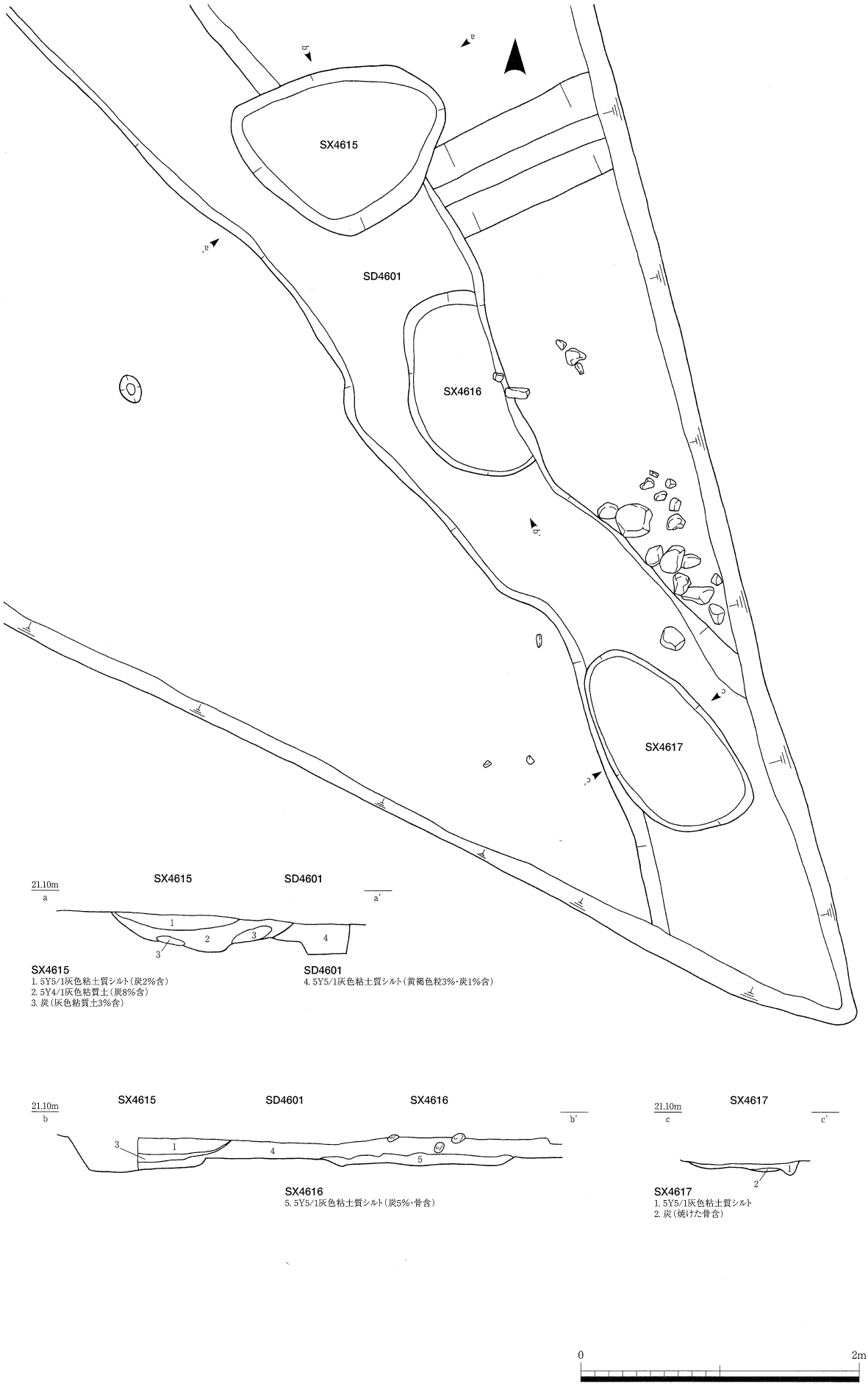
ＳＫ4574（第112図）：ＳＤ4501とＳＤ4568の間に位置する。北側はＳＫ4580に切られており、短径1.85m、深さ0.51mである。覆土は灰白色砂質土や灰色粘土質シルトなどで６層に分けられる。遺物は珠洲・越前・越中瀬戸が出土している。越前はＳＫ4509出土のものと接合する。

（青山　裕子）



第98図　遺構実測図

SD4501　SD4568　SD4601　SD4606　SD4607　SD4608　SD4609　SX4602　SX4615



第99図　遺構実測図

SX4615　SX4616　SX4617　SD4601

⑦Ｃ地区

Ｃ地区は中名Ⅰ・Ⅴ遺跡西側の縁辺にあたる。Ａ２地区から約13m北側、Ｂ４地区から約30m西側に位置している。調査区は３カ所に分かれているため、Ｃ１・Ｃ２・Ｃ３地区としている。検出された遺構は中世末～近世の所産のものが主体であり、各地区から検出されている。中世の遺構はＣ３地区で確認された石列のＳＸ5469がある。ＳＸ5469は中世末～近世の遺構群を検出した暗灰黄色砂質土を除去したのち、灰色砂質土層中で確認された。調査地区の地形や基本層序については、中世末～近世の遺構群とともに後述しているので参照されたい。

石列

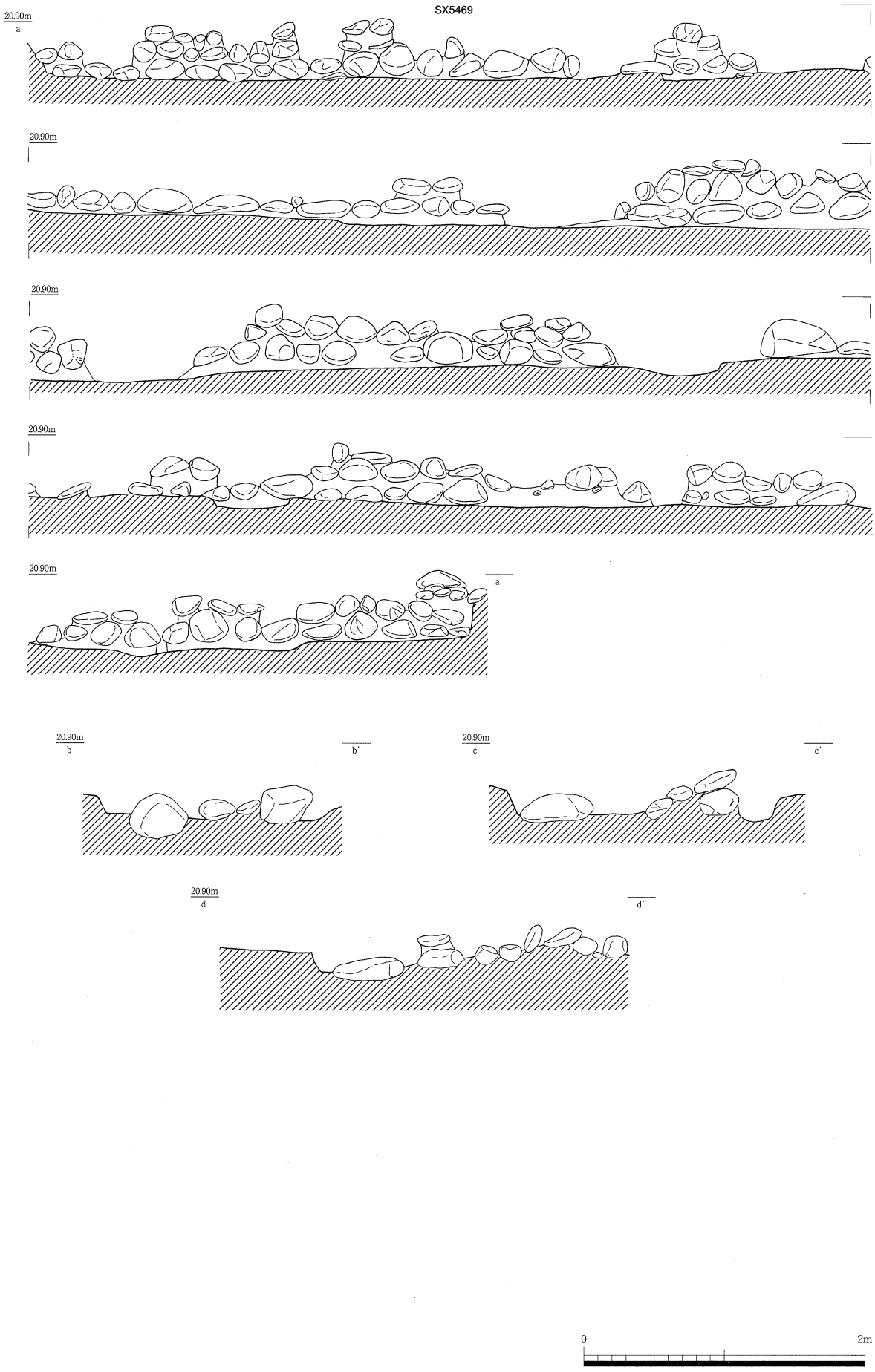
ＳＸ5469（第100・112図、図版48）：Ｃ３地区の中央に位置する石列である。石列の規模は幅1.0～1.2mを測る。石列の北側より南側の方が、やや幅広くなる。調査区内を南北に貫くため、全体の長さは不明である。確認された範囲での長さは27.3mで、方位はＮ－28°－Ｗであった。Ｃ３地区の南側にあるＡ２地区ではＳＸ5469の続きとなる石列は検出されていない。両地区の間で途切れるか、方向を変えていると思われる。石列は東面と西面を比較的大きな礫で石積みし、その間は小さな礫を不規則に充填している。東面の石積みでは長軸50cmの礫が２段、西面の石積みでは長軸30cmの礫が最高で３段まで遺存していることが確認された。また、東面では礫の長軸を南北方向に、西面では東西方向に合わせる傾向がある。石列を構成する礫はいずれも自然礫であった。また、Ｘ92Ｙ61付近では、上層の遺構であるＳＤ5302に壊されており、石列が途切れている。

ＳＸ5469の周辺には、他の石列・集石・礫の配置が認められる。ＳＸ5469の西側に沿って、長軸50cmの礫が約2.5mの間隔で７箇所に配置されている。ＳＸ5469の東側、Ｘ91Ｙ62付近では、径10～30cmの礫が散在している。ＳＸ5469の北端から東へ２m離れた位置で、石列を検出した。長軸40cm程の自然礫を最大で２段積み上げており、ＳＸ5469に平行する。調査区北に続くため、長さは不明である。確認された長さは２mであった。この石列から東へ1.8m離れた位置に、長軸40cm程の自然礫が乱雑に積まれていた集石がある。これらの一群は、その方向や配置がＳＸ5469を基準としたあり方をしており、何らかの関連があったものと思われる。出土遺物については、石列の中や周辺で確認されたものはない。

ＳＸ5469の石列には上層の遺構検出面まで露出している部分がある。ＳＫ5224内では、土坑の南部分で石列の一部が確認され、その周囲に礫や火輪がまとまって出土している。石列部分以外は丁寧に積まれた形跡はない。これらの内、いくつかはＳＸ5469の石列を構成していた礫が含まれると思われる。また、ＳＤ5357・5358は礫の露出はないものの、ＳＸ5469の真上の位置で検出された溝である。溝覆土の色調・土質は遺構検出面と際だった違いがないため、ＳＸ5469があるために色調が変化した部分を溝と誤認した可能性がある。そのため、ＳＤ5357・5358から出土した青銅製の花瓶（2094）やヒトの骨片も、本来はＳＸ5469に関連した遺物と考えた方がよいと思われる。

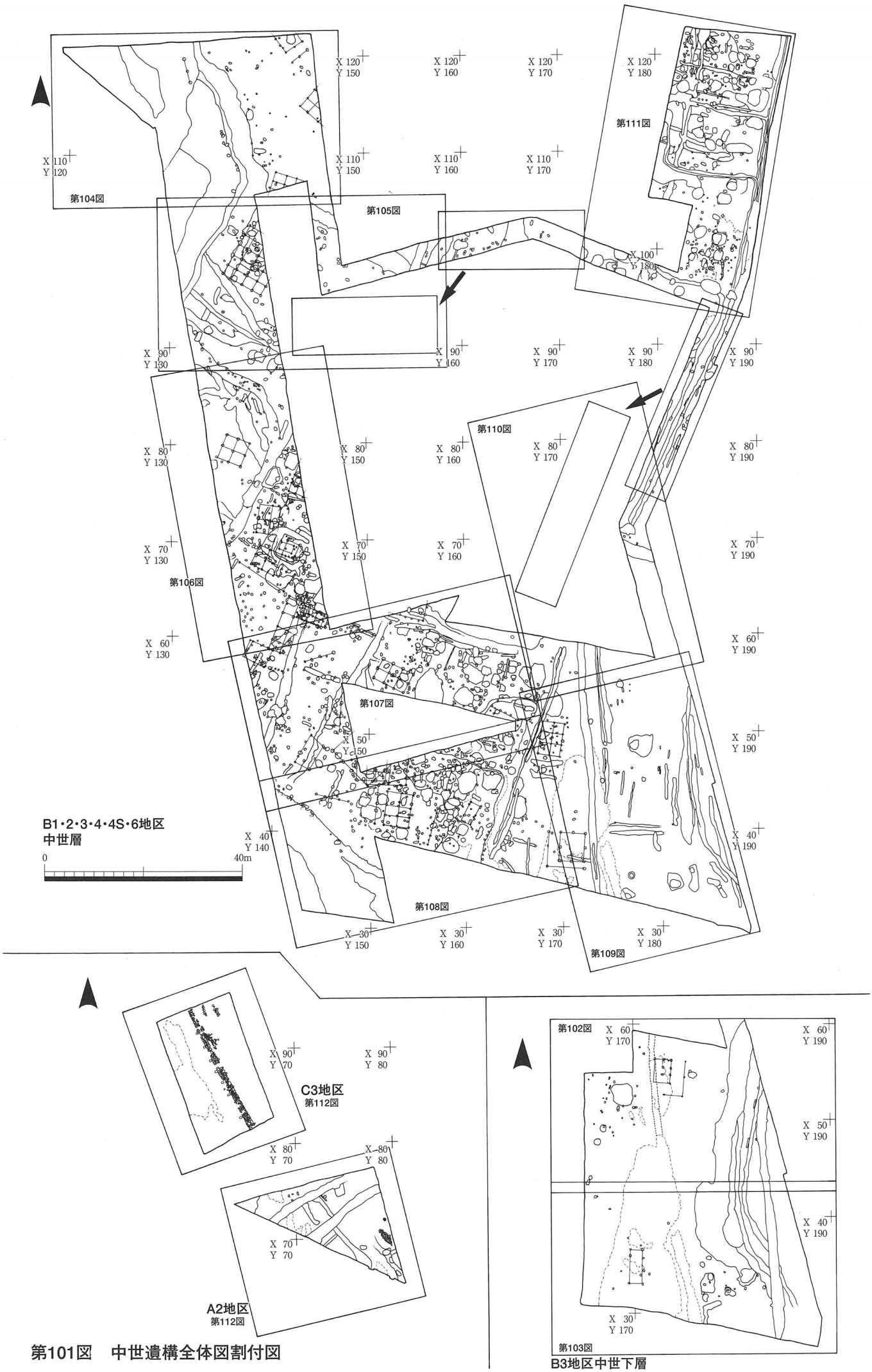
石列はある空間を区画するための役割を持っていたと考えられる。石列の東側もしくは西側に区画される対象となる空間や施設が存在したと思われるが、具体的な遺構としては検出されておらず、明らかでない。青銅製の花瓶や人骨の出土も認められ、仏教的な施設や墓域として利用されていた可能性が高い。

（青山　晃）

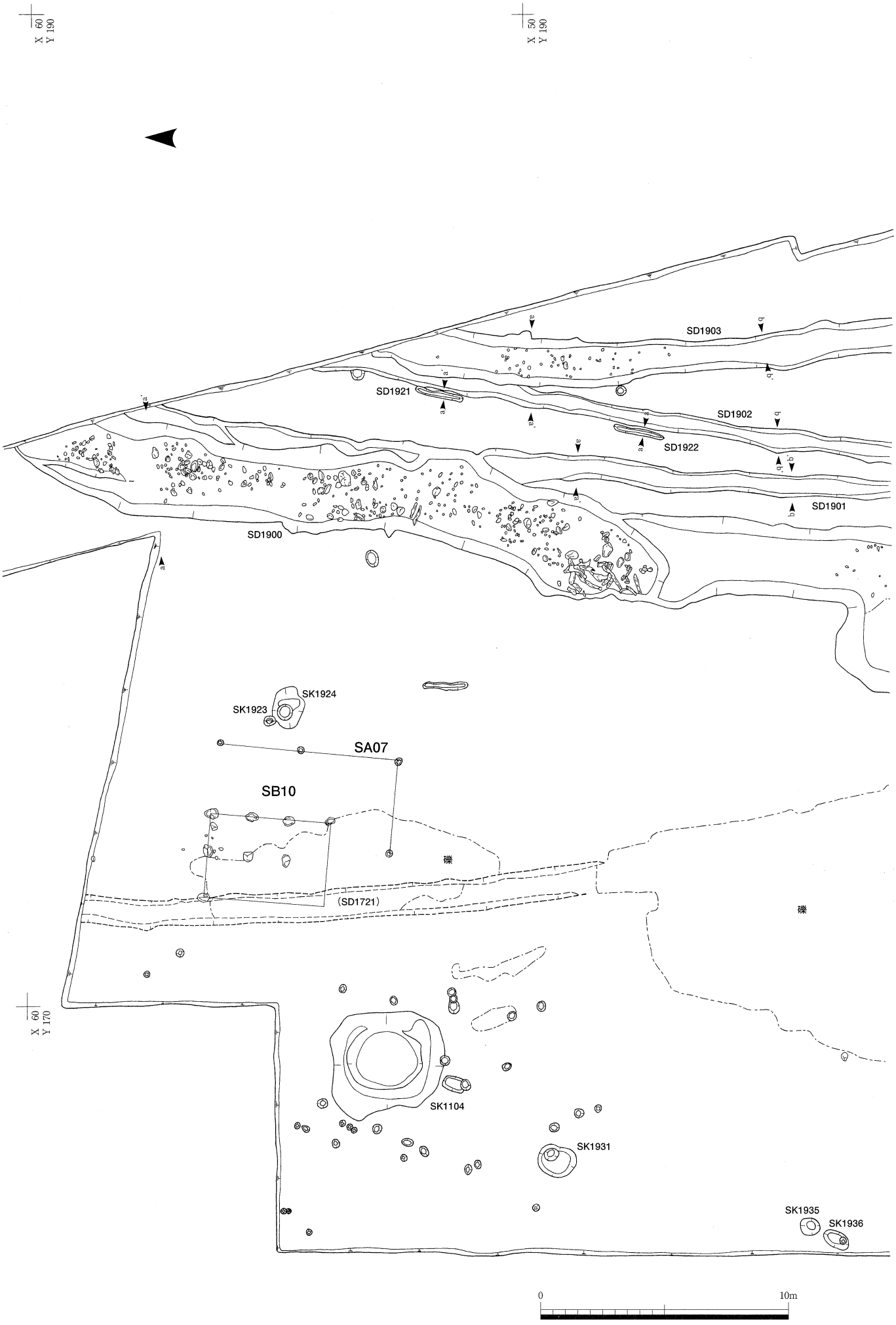


第100図　遺構実測図

SX5469

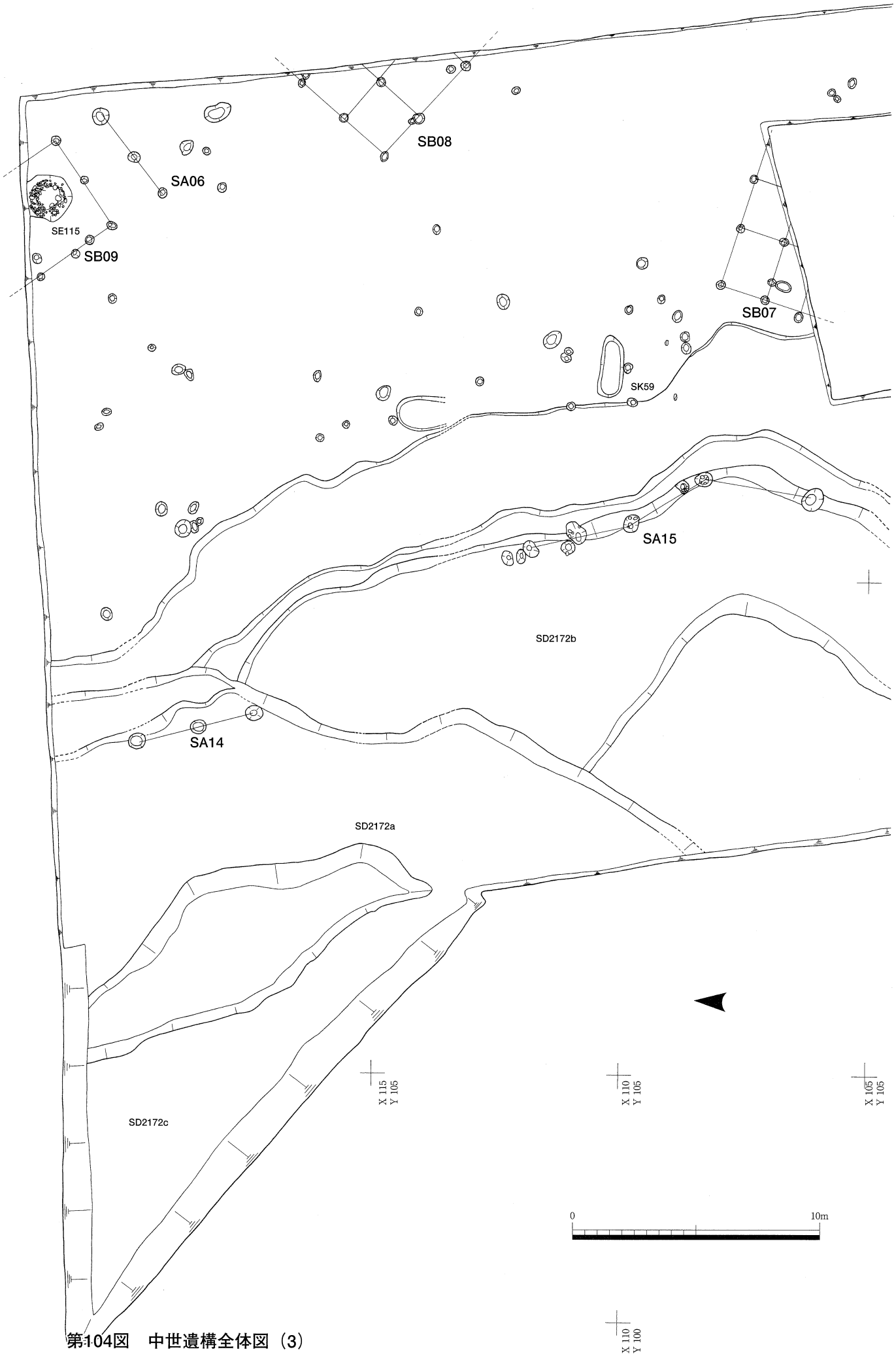


第101図　中世遺構全体図割付図

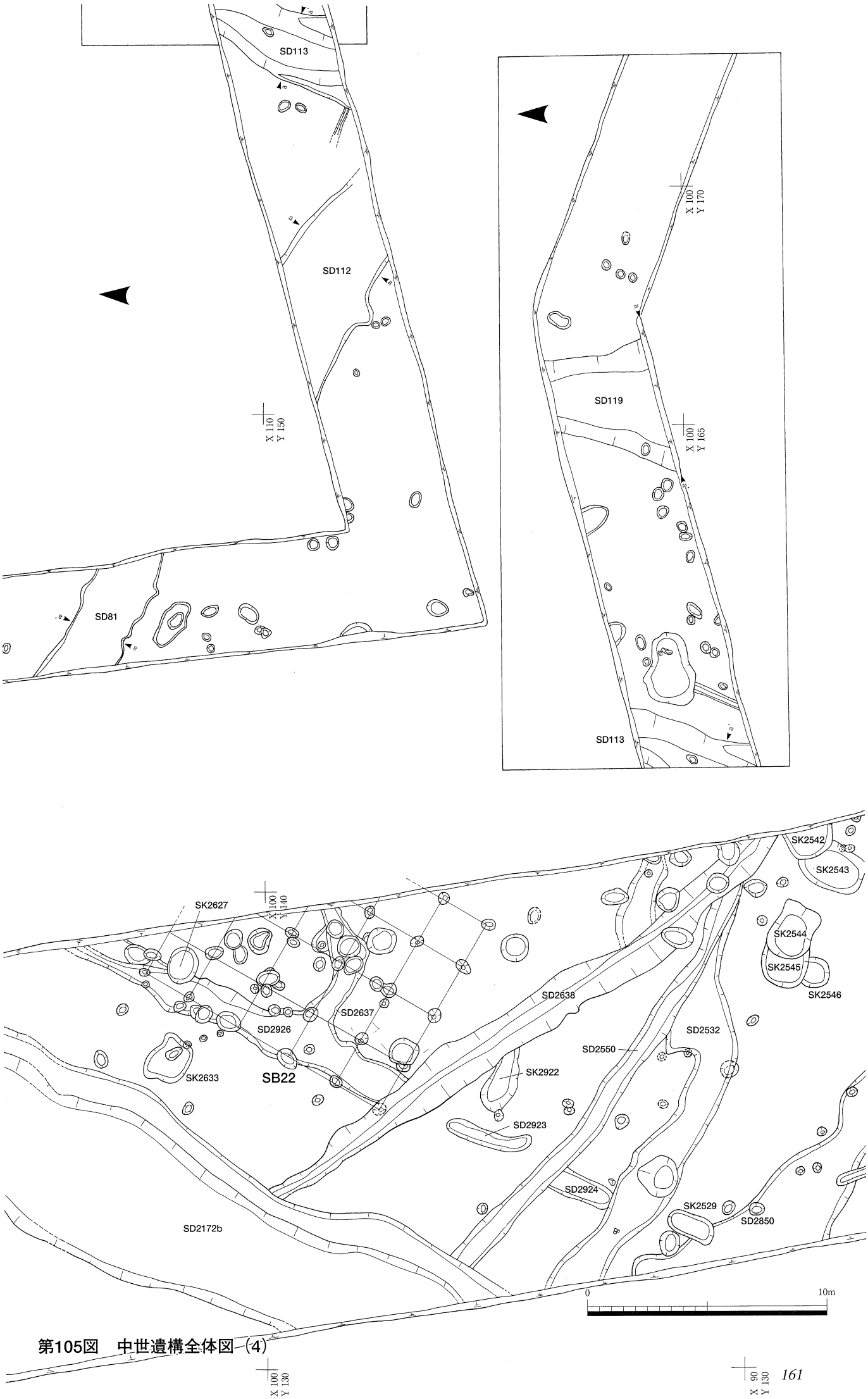


第102図　中世遺構全体図（1）

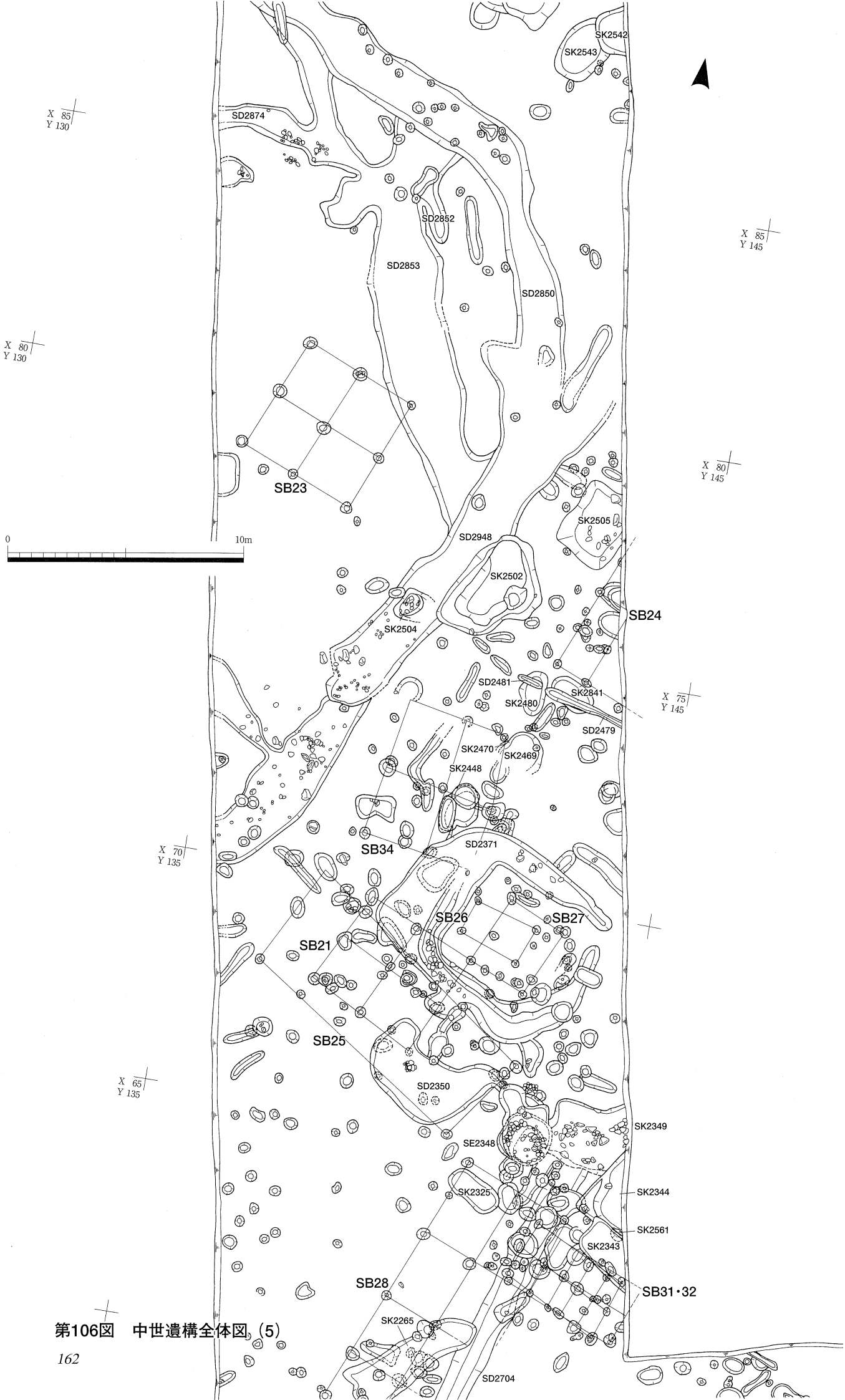
第103図　中世遺構全体図（2）



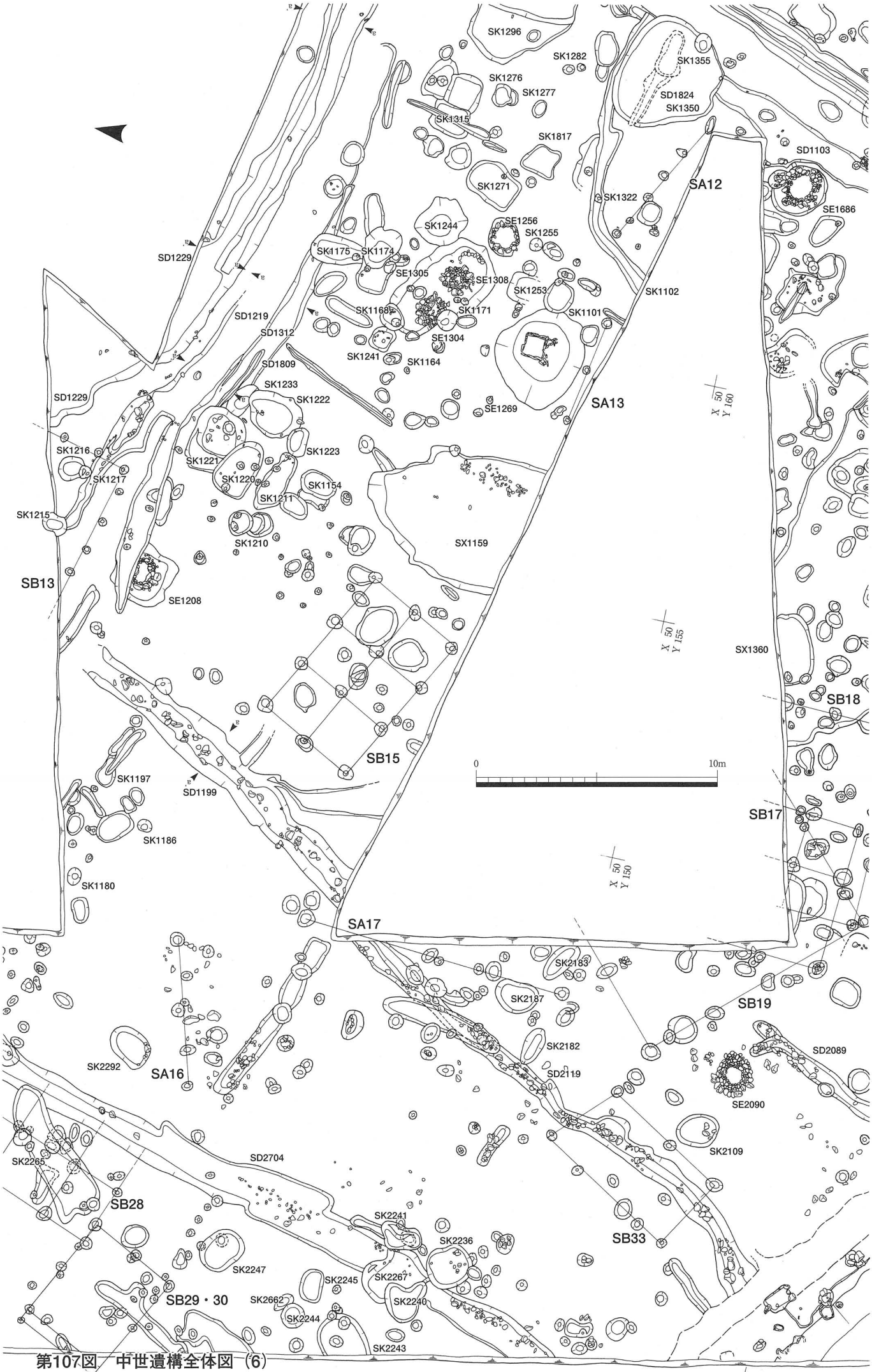
第104図　中世遺構全体図（3）



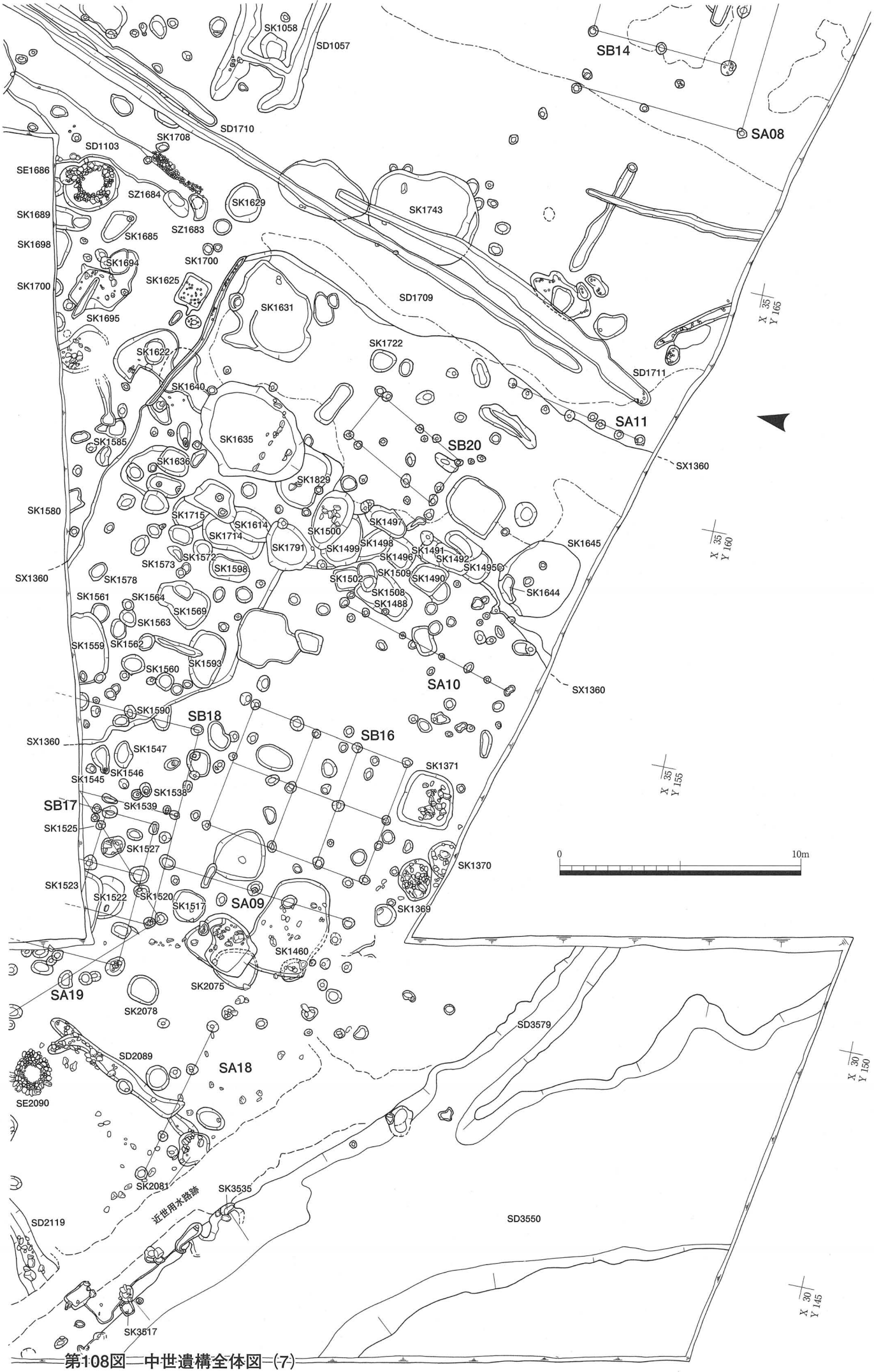
第105図　中世遺構全体図―(4)



第106図　中世遺構全体図 (5)

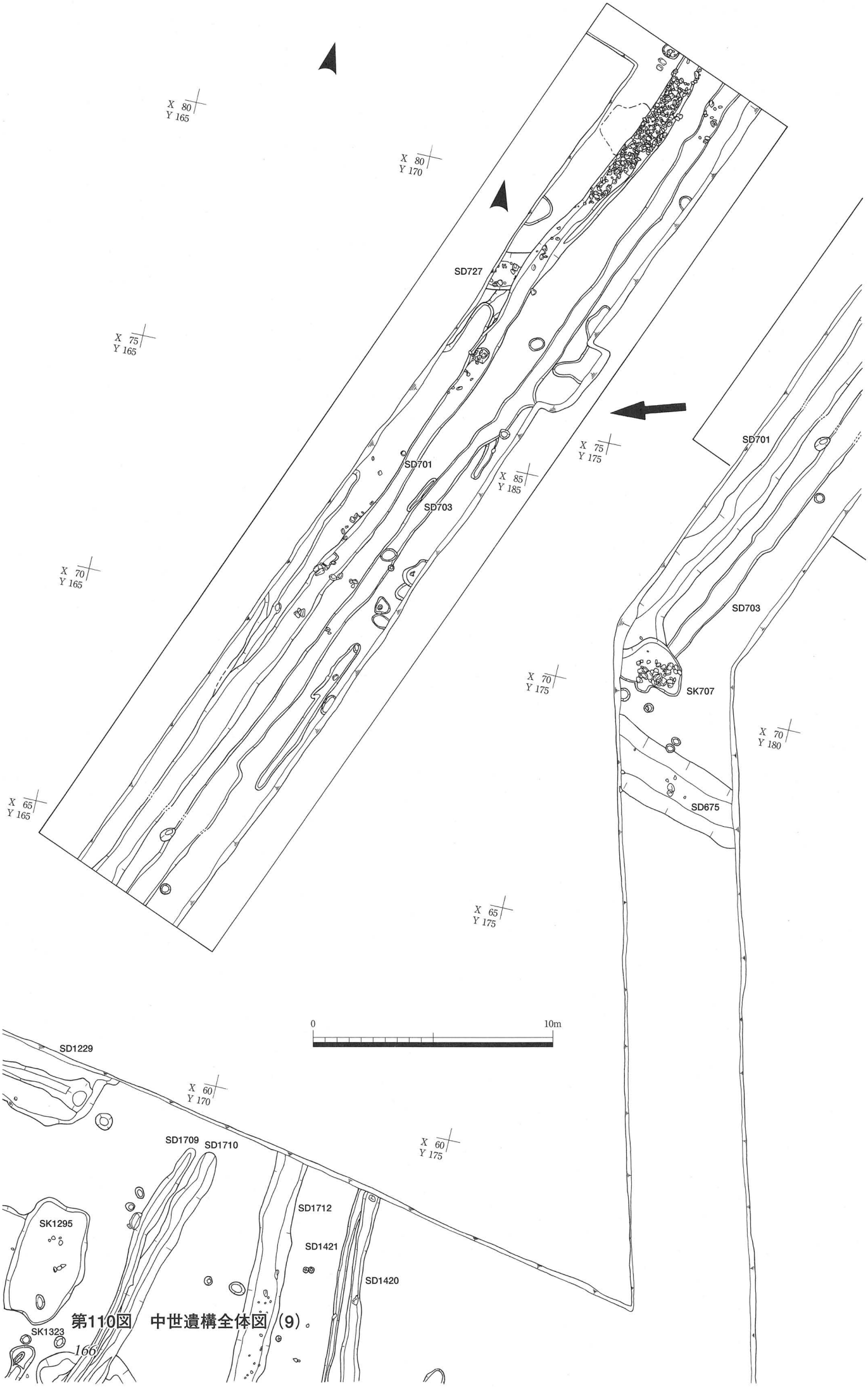


第107図　中世遺構全体図（6）



第108図—中世遺構全体図—(7)

第109図　中世遺構全体図（8）



第110図　中世遺構全体図（9）。